THE CENTRAL REVIEW

中央公論

近代思想界の趨勢　金子筑水

一燈録　綱島梁川

二百十日　夏目漱石

家畜　島崎藤村

三[illegible]文子角　山路愛山

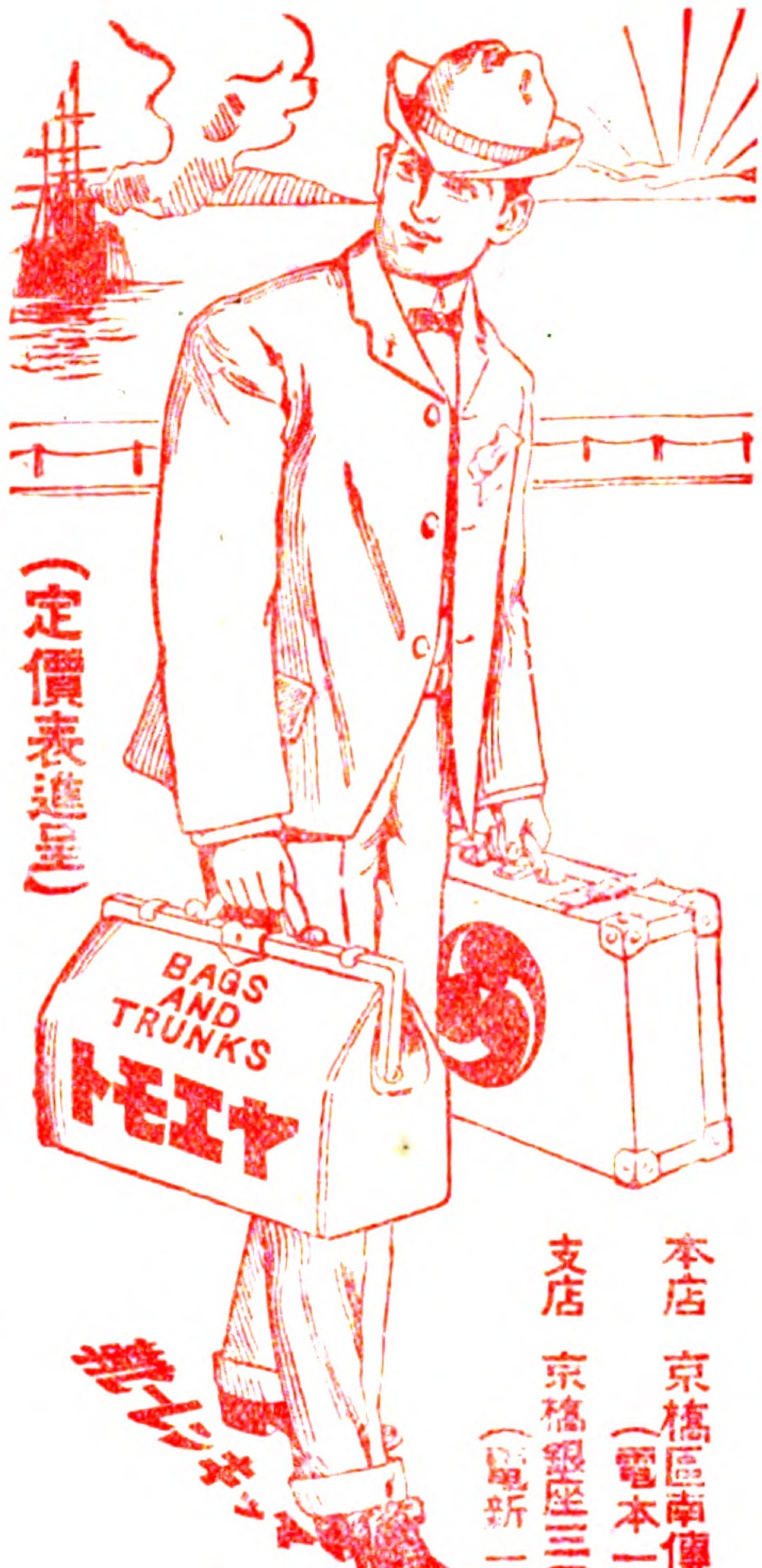
[illegible]

秋期大附録號

第廿一年　第十號

中央公論第二十一年第十號秋期大附録號目次

大附録



BAGS AND TRUNKS
トモヱ
（定價表進呈）
本店　京橋區南傳馬町
支店　京橋銀座三丁目

此廣告によりて御注文の方は**中央公論**に依る旨御附記を乞ふ

文學博士 男爵 末松謙澄 著

夏の夢日本の面影

（振替貯金番號三〇八九）

定價金貳圓五十錢
郵稅金拾五錢郵劵代用御斷
清韓臺灣送料三拾五錢
◉用紙 五百餘頁
◉裝釘 最新意匠極美洋裝總クロス夢模樣極彩色
◉挿畫 貴族、夫人、令孃、及巴里名所等アートタイプ印刷 皆船來光澤紙

日露戰役の劈頭 恰も仁川に旅順に敵艦擊破の捷報到達の眞の其日に郵船會社米國行最終船伊豫丸の舷頭に立ち微笑を滿へて滿洲に向ひし**末松男**の使命それ如何に重大なりしか？爾來捷報相踵ぎ名將良帥の奇勳偉績炳として人目を眩惑せしむるものありき而も日英同盟の効果を的確ならしめ又歐洲列强の同情を喚起し名將良帥をして後顧の憂なからしめたる**無形の勝利**は果して何人の靈腕に依りて贏ち獲たるか 其人は果して誰？實に男爵は歐洲の交際場裡に立ち、雄辯を振つて我國情を論じ健筆を馳せて「夏の夢日本の面影」幷に「昇天旭日」（共に英文）を著はし我が國俗を詳かならしめ當時歐洲に瀰漫せし**黃禍**論を打**破**し怪腕無比なる露國の策士をして乘ずるの間隙なからしめたり**此書の奏効**豈偉大なりしと云はざるべけんや

此書倫敦にて發行せらるゝや歐洲の新聞雜誌は筆を極めて稱揚し立どころにして**獨佛語に飜譯**せられ遂に全歐の紙價をして貴からしめたり其內容は博覽强記なる男爵が奇警なる觀察と明快なる議論を以て極東の形勢、日本の人情、風俗、言語、文章、敎育、經濟、美術、史傳、演劇、氣候、風土、其他凡百の問題をば輕妙なる美文を以て對話體に記述し日本固有の武士的精神を餘蘊なく披瀝したるものにて啻に歐人の蒙を啓くのみならず邦人も亦此書に依りて新に覺醒する所夥しかるべきなり**前文部大臣菊池男**が本書に寄せし評言中に興味津々讀み了るまで卷を措かざりしと云ひ又今日の青年は此書に依つて利益するところ大なるべしと云はれたるも誠に當然なり

末松男は此書を以て唯に歐洲に於てのみならず本邦に於ても亦讀まるべきものなりとし邦文の本書をば余の切に乞ふに任せて發行を允許せられたり是れ余が窃に光榮とし敢て之を同胞諸君の瀏覽に供せんことを冀ふや甚だ切なり、願くば一本を座右に供へて朝日に匂ふ大和民族特有の氣慨を振興するの一助となし給はんことを

發行者 坂上忠之介 敬白

發兌 東京日本橋區本石町十軒店 **育英舍**

◉賣捌 東京堂○東海堂○北隆館○良明堂
大坂吉岡寶文館其他全國各書店

此廣告によりて御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

中村春雨君著

人の母

穏健なる着想靈妙なる筆力、運命に掀飜せらるゝ人生の徑路を寫して、暗涙の中に赫灼たる光明を認むべき篤き信仰と温き同情に慰められんとする者は本書を讀め。一部の『人の母』は春雨先生米國留學の置土産也。

新刊 定價五十錢 郵稅六錢

酒井勝軍君著

教育と音樂

音樂者として世に知られたる著者は茲に始めて其の抱負の一端を公表せられたり先づ教育の本義につきては極めて痛快斬新なる說明を試み次に音樂の本義に及びては革命的の大定義を下し更に進んで教育を普通及特別に二分し又之を細別して一々音樂との關係を明示したる實に近來得難きの好著にして教育家、音樂家は勿論其の他苟も新智識によりて社會に活動せんとする人士は必ず一讀せざるべからざるのみならず巻末「婦人と音樂」なる附錄に到りては文明的婦人の正さに深慮すべきの大文字。

新刊 定價卅五錢 郵稅六錢

植村正久君編輯主任　田中達君譯　オーア博士著

神學叢書第二

基督教世界觀

オーア博士は蘇國グラスゴー大學組織神學教授にして英米神學界に雷名轟々たるは普く人の知る所而して本書は氏が傑作中の一に算すべき名著なるは初版以來已に七版を重ねしにても知らるべし基督教々義の全般に亘り引證該博論斷的確何事につけても曖昧模稜の點なし庶幾くは我宗教界に行はるゝ幾多の疑難之に依りて解釋せらるべし

新刊 定價金壹圓三十錢 小包料金十五錢

山路愛山君著

基督教評論

目次
現代日本教會史論
耶蘇傳管見

新刊 定價五十錢 郵稅六錢

第二十世期は基督教思想の革命時代にして日本に取りては獨立的に基督教を研究すべき最も緊要なる時機に際せり本書は即ち此思想界の問題に於ける著者の觀察を直に披瀝したる者に過ぎず巻末著者の奇拔なる耶蘇傳管見を添ゆ

發兌 東京市京橋區尾張町二丁目（振替貯金口座五五五三番）警醒社書店

此廣告により御注文の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

法學博士 岡田朝太郎君序
法學博士文學博士 小河滋次郎君序
辯護士 登張竹風君序
電報新聞記者 花井卓藏君閲並序
澤田撫松君編並序

空前の珍書

法廷叢書

男三郎自筆

獄中之告白

定價 四拾八錢
郵税 六錢
（郵券代用はお斷り申候）

お最寄りの書店に品切の節は此一劃お切取り定價四十八錢を添へて御送附被下度さすれば郵税は本社にて負擔仕るべく候

本書は武林（元野口）男三郎が獄中に於て自ら筆を執つて記述せし者にて彼の言ふ處の眞と僞とは固より判じ得べきに非ずと雖も兎も角も彼の自叙傳、彼自身の戀愛觀、彼自身の人生觀、彼自身の無罪辯明書にして且つ一には彼自身の懺悔錄とも見るを得べし

法學博士岡田朝太郎氏序文の一節に曰く

本書の如きは到底血氣定らざる青年男女をして其好奇心を滿足せしめんとする一時の玩弄品にあらず健全なる學者、實際家に惠與したる永久の研究資料として珍とせざるべからず而して彼等は必ず丁寧反覆熟讀玩味せざるべからず

以て本書出版の理由と眞價値とを知るべし

罪人も亦人なり 彼をして言はんと欲する處を言はしめよ 彼れの言はんと欲する事は仔細に考究するは法曹界は勿論苟くも倫理、宗教、人情の眞意義を闡明せんと欲する者の義務ならざるべからず

大賣捌 東京堂、東海堂、至誠堂、北隆館、良明堂、大阪盛文館

發兌元 東京市芝區櫻田本郷町 獨歩社（電話新橋二五一七番）

此廣告により御注文の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

毎月二回發行 定價一冊三錢 郵稅五厘

ABC雑誌

半年分(十二冊)郵稅共四十錢一年分(二十四冊)同七十八錢
毎號解答註釋を附錄とす

內藤明延執筆

中學二三年級程度の初學者の爲めの英語雑誌、記事は面白く挿畫は美、註解頗る詳密なれば容易に讀むことを得て樂みながらいつしか英語を學び得べし

九月十五日發行 第一號要目▲發行の理由(英和對照)▲太郎の爲せる英語の誤り(解答附)▲英語演說先生のウッカリ(通辯附)▲英國少年の手紙(寫眞版譯註附)▲英米少年の送れる繪はがき(寫眞版)▲智慧袋▲イブセン小傳(肖像入)▲探がし書▲實用單語單句集▲新聞雑誌に關するもの)及び應用問題(解答附)▲英語討論會▲懸賞問題▲ABC俱樂部▲附錄▲挿畫數多

十月一日發行 第二號要目▲猫の草紙(書入御伽話)▲太郎の受けし外交官試驗問題(解答附)▲英國少女の手紙(寫眞版)▲懸賞日記(寫眞版)▲外國名所圖解(寫眞版)▲書取俱樂部▲清國少年自筆の日清英文新聞▲英語研究▲外國遊戲▲懸賞問題▲ABC俱樂部▲挿畫數多▲附錄

毎月二回發行 定價一冊三錢 郵稅五厘

英學生

半年分(十二冊)郵稅共四十錢一年分(二十四冊)同七十八錢
▲毎號詳密なる註釋を附錄とす、故に獨學自修者に頗る便なり

斯波貞吉 山縣五十雄 執筆

中學四五年程度以上の學生に適す、初めの頁より終りの頁に至る迄興味と實益充實す、多數の英語雑誌中最好評あるものは本誌なり

九月十八日發行 第四卷第十號要目▲記者茶談(金剛石より得たる富、眞の飾り、無益に費されたる金)▲近事會話(五二共進會)▲泰西偉人の逸事(四則)▲左甚五郎氏の移動家屋(寄想天外より來る短篇小說)▲東郷大將の新逸話▲新聞▲重利法の不思議▲憐むべき富人▲世界一の奇なる郵便局▲學生寄稿(數篇)▲スチーファン王(譯詩)▲記者餘談(邦文)

毎月二回發行 定價一冊三錢 郵稅五厘

東西雑誌

半年分(十二冊)郵稅共四十錢一年分(二十四冊)同七十八錢
▲毎號詳密なる註釋を附錄とす頗る讀み易し

布施知足編輯

主として英米の新聞雑誌より我國人にとりて興味ある文を拔萃して掲載したる英文文藝雑誌にして常に英米の新聞雑誌に接する機會乏しき人々にとり最も便利なり

九月二十五日發行 第二卷第六號要目▲切拔帖(奇話珍聞集)▲按摩(英詩)▲按摩の笛(美文)▲十七世紀の日本(和蘭使節の將軍謁見記)▲新日本の文學▲外國文壇消息▲雑錄

見本を要せらるる方は「中央公論」にて廣告を見たる旨を記し往復はがきにて申込まれよ

發行所 東京市神田區表神保町十番地 東西社

此廣告によりお申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

近刊豫告

夏目漱石氏著

小説 鶉籠

橋口五葉氏畫

菊版大册美裝

發兌元 東京日本橋通 春陽堂

眞宗信徒生命保險株式會社

◉當會社の約款に從て保險契約を爲す者は最も多くの便宜を得べし
◉當會社にて引受くる一人の保險金最高額は壹萬圓なり
◉利益配當附保險の契約を爲す者は最も公平の方法に依り計算したる利益金を得べし
◉掛金割增（年增契約）の代りに保險金控除（或ル年限內ニ死亡セバ）の新法あり
◉當會社は本願寺保護の下に全國に涉り有力なる眞宗信徒の組織せしものなり
◉當會社は啻に眞宗信徒に限らず何宗旨の人にても保險契約を爲すに取扱上彼是の別なし
◉當會社は短期掛金拂込の便法あり又保險證劵を擔保に貸金の便法もあり

京都市下京區油小路御前通角（電話 七貳貳番）京都本店
東京市京橋區南傳馬町三丁目壹（電話本局五壹八番）東京支店
大阪市東區大川町御靈筋角（電話東壹貳五參番）大阪出張所
廣島市紙屋町（秦 忠兵衛方）（電話 六〇八番）廣島出張所



第廿一年第十號
（二百十一號）
秋期大附錄號

帝都の政界觀財界觀及び社會觀

一

唯だ一枚の一錢銅貨が動機となりて、我が帝都の政界、財界の眞相を暴露し來りたるは、實に興味あることなり。

東京市街に於ける三電車鐵道會社が合同を機として從來の乘車賃三錢を四錢に引上げんと欲し、而して内務大臣之を許可するや、帝都は殆んど蜂の巣の裂けたるが如くなりき、蜂の巣の裂けたるによりて、有造無造等捏返し雜返して紛々擾々、喧々囂々、竟に補助憲兵てふ騎兵隊をまで繰出すの騷動を持上げ、田舍者をして東京大騷動と稱して上京するを躊躇せしむるに至り、同時に政界、財界の奇々怪々なる現象を映射し來れる也、世の短見者流此の眞相を看取せず、力瘤を出して唯だ一錢を引上ぐるの當不當を辯難論戰す、寧ろ嗤ふべきのみ。

請ふ少しく吾人をして其の顛末を略敍せしめよ。

二

三電車の重役等は、今春先づ乘車賃引上を爲さんと欲し、其大株主又は昵懇の人々を介して頻りに伯爵井上馨氏に哀請せしめたりき、即ち近藤廉平、馬越恭平、益田孝の諸氏は電車乘賃を五錢に引上ぐべく密かに内山田邸に詣れること一再ならざりき、蓋し内務大臣原敬氏は井上氏の義女婿にして且つ其の乾兒たり、殊に井上伯が現内閣の最も尊重し畏憚する顧問役たるに於て、氏の一言は内務大臣をして即坐に乘車賃引上願を

認許せしむべしとは、會社重役等の豫想する所なりき

重役等は内務大臣に斯の如く退ッ引ならぬ壓力を加ふると同時に、手を東京市會に廻して、市會をして乗車賃引上を賛成せしめんと謀りたりき、東京電車の社長牟田口元學氏は舊改進黨たるの縁故を以て角田眞平氏其の他を透し、東京市街鐵道の重役利光鶴松、井上敬次郎の諸氏は政友會たる森久保作藏氏を參謀長とし、二十日會を透して盛んに市會議員を味方とするに努めたりき、去れば政友進歩の兩派に遠き市會議員等、多數新聞紙を後援とし、或は區會、或は市民の各團體の聲援を借りて、極力反對を唱へたりしに拘らず、竟に一票の差を以て値上論に打敗られたりき、去れど流石に會社最初の請願其のまゝを可決せず、四錢均一として之を可決したりき、想ふに是れ實に會社重役の豫め圖れる所にして、此の市會の四錢決議こそ、後に實行の最大且つ最有力なる口實となりしものなれ。

三

伯爵井上馨氏と内務大臣との關係に視、東京市會の決議に徴せるものは、皆四錢均一の實行さるべきとを豫期したりしが如し、吾人の聞ける所を以てすれば、東京府知事千家尊福氏も、警視總監安樂兼道氏も亦幾んど然か信せるものゝ如し。

然れども内務大臣の指令は實に意外なりき、理由不備の故を以て一先乗車賃引上の願書を却下したりき世は總て案外の思ひを爲したりき、然るも多數の新聞紙と多數の市民とは、内務大臣を喝采し、其の果斷の頗ふる痛快なるを謳歌したりき。

問題は實に斯の如くして一び段落を見たる也、然れも此の事の投機市場に利用せられたるは實に奇怪の極なりと謂ふべし、既に知られたる處のみを擧ぐるも、街鐵會社の重役利光鶴松、根津嘉一郎の諸氏は、其の願書を提出したる時、及び其の願書の却下せられたる瞬間に於て、少らざる電車株券を賣買して約三十萬圓を利し、利光氏一人のみにても、十萬圓を贏得たりといふ。

市會に於ける或る有力者も亦其の同志に背きて堂々

乘車賃引上の非なるを論じて、頗ぶる正論（？）を鼓吹したるに拘らず、密かに手を株式市場に出して巨萬の利を獲たりと聞く、去れば相場師にして貧を社會主義者に類似したる某々等に給して、反對の示威運動を爲し、以て以て市場の形勢を覆へさんと企てたるものもありしと評せらる。

四

少からざる運動費を浪費して乘車賃引上に失敗したる會社重役等は、株主に對し世間に對して面目なきまゝ、其の地位を去るを當然とすべきに、曾て其の事なきのみならず、更らに進んで三社合同を企てたりき。

合同の目的の乘車賃引上にあるや言を俟たず、三社分立して比較的短距離に於てすら三錢均一の到底收益なきを稱するもの、如何ぞ合同して長距離を三錢均一と爲すの理ある可けんや、然るに賢明なる諸新聞紙は、三社合同を物々しく報道しながら、曾て乘車賃引上問題の再生するに氣付かざるものゝ如く、僅かに某新聞のみ之を雜報の片隅に掲けたるも、曾て之を論評し攻擊して世上の注意を惹くをば爲さゞりき

內務大臣は果然八月上旬を以て三會社合同の上、四錢均一制を行ふとを認許したりき、而して世は再び愕然たりき。

吾人の記憶する所によれば、此の乘車賃引上を攻擊する火蓋を切れるものは、實に萬朝報と其の關係ある理想團なりしが如し、之に亞て起れるは市會、區會、及び辯護士等の各一部が聯合して自から市民大會と稱したるもの是れ也。

彼等（新聞紙及び市民大會等）の方針は力めてセンセーショナルなりしに似たり、而して其の筆鋒舌鋒の主として內務省に及ぶや、同省の官吏等は頗ぶる杜撰なる計算書を發表して乘車賃引上の理由と爲さんとしたりき、茲に於て彼等の筆鋒舌鋒は、暖簾に腕押たるよを免かれて、恰かも水流の岩石に觸るゝが如く、益々激勢を加へたりき

蓋し乘車賃引上認可の理由は、（第一）市民の輿論を合法的正式的に發表したる市會の決議に據り、（第二）

三會社合同して全線均一の賃錢となれるが故に一錢を引上ぐるを可としたりといふに止まる可かりし、內務省にして若し此の論法を以て彼等に臨まば、全然彼等を屈するに足らざるを素より論莫しと雖も、尙ほ電車の收支計算を爲すよりも有力にして且つ有利なりしなるべし、抑も世人の主として激せるは內務大臣が突如として乘車賃引上を認許して恰かも世上の意表外に出でたるにあり、勿論前の引上願書を却下したると同じく突然なりしに考へ、且三社合同の目的が主として乘車賃引上に在るの情理を察せば、此の認許必らずしも突然に非ずといはゞ言ひ得ざるに限らず、然れども會社も內務省も、勸めて引上の請願を秘密にする態度を執れるを見れば、其由らしむべく知らしむ可らざるの主義なりしや明白也。而して是れ實に世上多數者の心外に感じたる所ならざる可らず、而かも况んや不精確(寧ろ杜撰)なる計數を以て認可の理由と爲さんとするが如き淺墓なる態度に出でたるをや、何ぞ况んや新聞紙も演說も、百方挑發的煽動的筆法句調を用ひしをや。

五

吾人は玆に順序として內務大臣が乘車賃引上を認許したる秘密を覗かざる可らず。

三電車會社の合同を決するや、彼等は前回よりも更に幾段の大規模を以て其の目的貫成の計畫を立てたりき。

內務大臣原氏を壓するが爲めには、依然伯爵井上馨氏の勢力を利用したりき、此がため東京、否寧ろ日本の金穴たる三井三菱皆動けるの觀ありき、三菱系たる近藤廉平氏等は最も熱心に井上氏に縋りたりき。井上氏が三井系の棟梁たるは今や三尺の兒童も之を知る、而して三菱系の大立物たる伯爵大隈重信氏も亦牟田口氏との關係に由て四錢說に首肯したりき、大隈氏に亞で男爵前島密氏も亦然りき、之に加ふるに三井三菱系の外に超然として而かも財界の泰斗と稱せらるゝ男爵澁澤榮一氏も亦四錢案を提げて井上氏に說客たりし一人なりき

更らに富豪の淵藪たる日本橋區に看よ、此の區民は前回の乘車賃引上には極力反對し、內務大臣若し之を許せば、自今一切の寄附金に應ぜずとまて强言しながら、今や默々として一語を發せざりしは奇ならずや、否必らずしも奇なるに非ず、多數の富豪は乘車賃引上を贊成するものと見て可なるのみ、換言すれば、財界の大勢は引上を是認したるものと斷じて太過なし、否少くも三井三菱澁澤等の勢力のために、敢て斷々乎として反對を公表するに至らざりしのみ。

原氏を直接に說得したるものは、實に政友會の領袖にして街鐵の株主たる元田肇氏と、政友會の智囊にして、兼て原氏と齊しく銅山王古河家の顧問役たる岡崎邦輔氏となりき、而して街鐵の重役利光、井上(敬次郎)の諸氏は政友會員にして、根津嘉一郎氏は進步黨なり、東鐵の牟田口元學氏及び中野武營氏は共に進步黨と離る可らざる關係あり、此等のもの皆大隈、井上の兩氏を戴きて上下より迫るあり、而して財界の大勢斯の如しとせば、原氏の聰明を以てするも、如何ぞ之に從はざらんや、原氏よりいへば、乘車賃引上は政友會進步黨の齊しく贊成する所にして、素より他日政治問題となるの恐あらず、假令政治問題となるも、二大黨の同意する以上、寸毫も憂ふべきなし、而かも財界の大勢は全然引上を是認す、多數新聞紙や辯護士の一部や、市會區會の一部の說と相比して、其の取捨素より迷ふべき所以なかりしと做すべし、吾人は素より其の當否を知らず、唯だ原氏の意中を忖度して則ち然りとするのみ。

六

吾人は更に轉じて乘車賃引上に反對したるもの丶情誼を觀察すべし。

市會區會の一部及び辯護士の一部並びに市政記者(諸新聞の市政記事を擔當するもの)等の聯合會を精養軒に開くや、田川大吉郎氏(都新聞記者)の發議を以て『各新聞社を歷訪して其の贊助を求むる』の一項を決議したりき、當時辯護士の一人某氏は演說していはく『余は一辯護士のみ、由來政治又は社會のとに深く

關渉したるヿなし、今や乘車賃引上の如き、市民の利害に關するヿ極めて大なるが故に、各新聞紙の當さに宜しく大に辯難攻撃すべき筈のものなりと信ず、然るに多數新聞紙は電車會社に買收せられたりなどの風説傳はり、倶に本問題に熱中せざる形跡無きに非ず、是れ余が微力を顧みずして敢て諸君と共に奮勵して本問題に努力せんとする所以なり』と。

此の演説は勿論市政記者等に少からぬ不快を感ぜしめたる如く、現に報知新聞記者某氏は皮肉的に之を反駁し、少くも報知新聞には其の事なきを明言したり。然るも辯護士某氏は尙ほ巧妙なる論法を以て『記者諸君の同輩たる田川氏が殊に各新聞社を歴訪して其の贊助を求むるを發議し、而して記者諸君また異議なく之を可決したる所以は何ぞや』といひ、滿坐の喝采を博したりといふ。

且つ此の聯合會の發起人たる細野二郎氏は屢々『電車會社が各新聞記者の買收に鋭意し、現に各社の重もなる記者にして、少くも電車會社の影響を受けざるものは一人も無きを』口外したりと聞く、吾人は素より其の信僞を知らず、又知らんヿを欲するものに非ず、唯だ市民大會を開かんとする諸有志の間に於て、屢々斯の如き言說の流行したるヿを遺憾とし、且つ諸有志が斯の如き怪說を傳ふるの前、何故に其の眞僞を確かめざりしかを惜まざるべからず、何者記者果して電車會社に買收せられたるヿ事實ならん乎、是れ實に容易ならざる大問題也、少くも乘車賃引上よりも重大なる問題なれば也。

此の聯合會を開き、更らに進んで市民大會を開くまて、極力其の事に當れるものは實に細野二郎氏と溝淵正氣氏となりき、細野氏は人も知る如く法科大學出身の俊材にして、曾て鄉里群馬縣より撰出せられて代議士となれるヿあり、不思議にも二三新聞社の間に勢力あり。而して時に竊かに投機市場に手を出すヿありといふ、去年講和條約に反對したる國民同盟會にも氏亦有力者の一人なりき、溝淵氏は東京朝日新聞に於て第二流以下の記者たるも、永く麴町區會に據り、今や同

區選出の市會議員たり

此の二氏を助くるもの田川大吉郎、村松恒一郎（朝日新聞社員）、川崎仟司（辯護士）、鹽谷恒太郎（同上）櫻井熊太郎（同上）、高橋秀臣（雜誌大國民記者）の諸氏あり、露骨にいへば、此等の人々が世を動かさんとするか如きは寧ろ望むも得べからず、唯だ問題其のものたる、人氣に投じ、理順にして說宜しきがために、而して公々然之に反對するもの一人もなかりしがために（電車會社と内務省を除けば）則ち一時衝天の勢力を得たりしのみ、陳勝呉廣必らずしも偉材に非ずと雖も、人情暴秦を厭ひ、天下擧げて亂を好む秋に方つては、一び鋤を投じて起てば乃ち四方響應したりしのみ、人心の趨向を察するもの思はざる可らざる也。

七

乘車賃引上反對者は、互ひに或る勢力を利用せんと勤めたる形迹ありしに似たり、聯合會の有志等は、曾て講和條約に反對したる國民同盟會の勢力と混一せんと欲し、現に細野、櫻井、高橋、村松の四氏が國民同盟會の會員たりしがため、殆んど同盟會と差違なきものゝ如くならんとしたりき、而かも河野廣中、大竹貫一、山田喜之助、圓城寺淸の諸氏は此の市民大會に參加せず、乘車賃引上の如き一地方的問題に熱中することを好まざりしものゝ如し。

且つ聯合會委員等は、去年九月五日の國民大會紀念日を以て市民大會を開き「彼の燒打騷動てふ市民に取つて掃拭す可らざる記臆と恐怖及び好奇心とを利用して、一種のデモンストレーションに供せんとしたるが如し。而して堺利彥、森近運平氏等の社會黨員は、此の社會主義者に取て好個逸す可らざる乘車賃引上問題を捉へて大に呼號せんと欲し、細野溝淵派の大會に投じて以て大に其の勢力と運動とを張るに努め、且つ彼の神武社會主義といへる珍說を主張せる松本某氏等も亦國民同盟會及び細野溝淵派を利用して市民の注意を惹き、以て日比谷公園に市民大會を開かんとしたりき

デモンストレーションの效果は豫期の如くなりしが如し、否々、彼等の豫期以上に出てしなるべし、抑も

國民同盟會の勢力を利用し、且つ多數の市民が去年九月五日の燒打を聯想するに乘じて、熱烈なる示威運動を爲さんとするとは、政府當局も亦多少恐怖したるに似たり、現に國民同盟會の紀念會は、日比谷公園の一隅なる松本樓に開かれ、十數人會合して極めて質素なる宴を催ふせるに過ぎざりしに、例の探偵報告に誤られたる當局者は、絶えず此の紀念會に警戒を怠らざりしといへり。

茲に奇なるは、反對運動者の前回（即ち今春）と著るしく相違ある一事實なりとす

日本橋區民が本問題に就て默了したるとは既に記せり、市會議員にして前回は病を努めても極力反對したる坪谷善四郎氏及び城數馬氏關直彥氏等亦默して一語を發せず、前回は市會議長の地位を賭してまて反對者たりし大岡育造氏また杳として聲息だも漏さず。

若し吾人の聞ける所にして誤謬ならずんば、市會が委員を特設して調査せしめたる電車市營會議の多數は、大約六分利の外債を起し、今の電車を買收して市營とするも、三錢均一にては到底元利金を償却して市の好財源たらしむる見込なく、所詮四錢均一制を執らざるを得ずと決定したり、而して其の決定を發表せざるは、電車會社をして乘車賃引上に倔强なる口實を得せしめんとを恐れてなりといふ、

市會議員の前數氏が沈默したるは豈是等の事情あるがためならざる乎、溝淵氏が此の際形勢に變移ありと稱へ、熱心なる市會を開きて電車賃錢問題を討議せしめんとしたるも、中島行孝、角田眞平の諸氏が之を慰諭して實に志を得せしめざりしも、豈此の間の消息を窺ふに足らざる乎。

乘車賃引上に反對するもの丶內、市有說實行の便宜上より然かするもの素より之あり。以爲らく、電車會社が收益の少きに窮せるに乘じて巧みに之を市に買上ぐるに如かず、若し賃錢引上を認許して其の收益を確かならしめば、株式益々騰貴して、市の之を買收すると彌よ困難ならざるを得ずと、彼の市會に於て一市の

牛耳を執れる中島氏が、敢て公々然引上說に反對せずして、却つて竊かに細野溝淵派に資を給して、市民大會を開かしめたるも亦此等の方便に出でしなるべし（中島氏より細野溝淵派に給したるは二百圓にして、彼等は此の秘密の漏泄を憚かり、後に貸借證書を作成したりと聞く、一說によれば、中島氏の外、博文館主大橋新太郎氏も亦密かに其の資を寄附したりといへり）即ち反對者中には乘車賃其のものを眞に高しとするよりも、寧ろ方便として四錢均一制を非とするものゝ少からざるを知らざる可らず。

九

吾人をして遠慮なく批評せしめば、内務大臣及び反對派のもの共に甚だ智ならざりしが如し

電車會社の決算報告の虛僞なるとは、假令全然虛僞ならざるも無理に附會したる計數なるとは、其の幾んど商法違犯なるに拘らず、會社重役等の屢々公言を憚からざりし所にして、從つて此の決算報告を根據とする三錢四錢の當不當は、到底正確に判ず可きにあらず、或は株式市場に於ける電車株の賣買價格を以て其の收益の多少の標準とするものあるも、是れ亦怪物魔物の縱橫に手を伸し足を絡める現今の市場に於て、十二分に信を措くに足らざるや論を俟たずとす。

故に内務大臣は、三電車會社の合同を許すと共に、少くも合同後半季の決算をなすまでの間に、危險豫防の設備を爲さしむると同時に、歐米の電車に普通する割合の積立金をも爲さしめて其の收益の多寡を實驗し、然る後始めて乘車賃の引上許否を決定すべかりし也、假令井上大隈前島澁澤諸氏の言あるも、元田、岡崎其の他の助言あるも、理を推して之をいはゞ、彼等豈承服せざらんや、況んや三電車會社をや、事茲に出でざりしは智の到らざる也、否少くも輕擧たるを免かれず。

乘車賃反對者も亦眞に四錢均一制を打破せんと欲せば、有志相計りて三電車の株主たるに如かず。其の大株主たると素より不可能なりと雖も、一人にして一二株を有する決して難事ならず、思へ、細野、溝淵、櫻

井、川島、鹽谷、村松、田川、高橋、堺、森近の諸氏一株乃至二三株の株主となり、三電車會社の總會に出でゝ滔々汨々一瀉千里の能辯を揮はゞ、九月十一日の總會をして竟に當日に終らしめざること甚だ易し、或は紛擾を捲起して竟に支離滅裂ならしむること亦決して望まれざるにあらず、彼等其の雄辯、能辯、駄辯を鼓して、其の妙力を振ふの機は實に茲にあらずや、而して事茲に出でざりしは寧ろ智といふ可けんや。

若し夫れ電車會社の重役等が眞面目に其の會社事業を經營するの誠實なきや甚だし、市民が彼等を憎惡する實に天意なりといふべし、然り天意也。

十

前事實を總括して之を觀察するに、此の問題は元老、富豪、政黨に對する市民の或るもの及び新聞紙の多數との爭ひなり、全然富豪（資本主）と貧民（勞働者）との對抗には非ざるも、幾分か之に近き性質と色彩とを佩ぶ、想ふに今後此の類の社會問題簇出して、世間益々多事なるべし

吾人は此の問題のために市民が少からず驚擾し、爲めに公安を害し、竟に現在の警察官憲兵を足らずとして、補助憲兵と稱する騎兵隊まで繰出さるゝに至りしを嘆惜す、今後此の類の問題簇出し、示威運動ある毎に多少の暴行者を出すが如きあらば、良民は全く枕を高くして眠ること能はさるべし、治安保障の職にあるもの、人心を指導し教練すべき新聞記者及び有志の士深く鑑戒せざるべからず、去年九月の燒打以來、好奇、恐怖、血氣の惡風習當さに漸く市民の間に彌蔓せんとす。經世の志あるもの如何ぞ等閑に附す可んや。

彼の細野溝淵派には、其の主張を貫徹するため最後の暴力に訴ふるの意志あらず、又自から兇徒嘯聚罪の被告たる決心なかりしこと昭々たり、立憲的行動といはゞ言ひ得べきも、竟に熱烈なる意氣を缺けることは爭ふ可らず、隨つて市民の暴行するものも、また豫定の計畫ありしに非ず、單に暗中より木石を投じて以て電車を苦めんと欲し、延きて乘客に危害を及ぼし、物見高き市民をして數日の間徒らに紛々擾々たらしめしの

み、此の間之を利用して政府攻擊の資料に供せんとする野心家も亦飛出さゞりき。

然らば則ち此の事實の齎らす所のレッスンは何ぞ、曰く輕擧の事を謬る是れ也、曰く我が財界の現狀と元老及び政黨との關係是れ也、而して此の問題が他日貴族院議員の部分攻擊の資料たるとは之あらん、今の新聞紙にして此の事實の僅少なる一部分を記せるものは之あり、其の全豹に至つては未だ報道したるものすらあらず、是れ吾人が記して玆に至れる所以にして、又以て將來の鑑戒に供せんとする微志に外ならず。

中學校の徵兵猶豫を撤廢すべし

單に學籍を徵兵猶豫の特典を有する學校に於けるのみにして、以て兵役を免がれんとするものあり、單に利益のみを目的とする學校また知らざる爲ねして斯る學生を收容す、文部及び陸軍の當局其の弊を疾み、之を掃蕩するの策を講究しつゝあり。

吾人の見を以てすれば、最上の方策は中學校の徵兵猶豫制を全廢するにあり、少しく詳かに言へば、高等學校及び各種專門學校以上大學の學生々徒に限りて猶豫の特典を與へ、各中學校及び之と同一程度の學校にある生徒には、全く此の猶豫を與へざるに在り、夫れ八歲乃至九歲にして小學に入り、其の六ヶ年の課程を終りて中學に入るものも、中途に成績不良の故を以て蹉跌せざる限り、十九歲乃至二十歲にして中學校を卒業し得、即ち徵兵適齡(二十一歲)に達する以前に於て既に中學を終るが故に、中學生徒に徵兵猶豫の特典を與ふるは、殆んど有名無實のみ、僅かに成績不良にして永く中小學に彷徨せる少數の老生徒(二十歲以上)をして其の澤に浴せしむるのみ、語を激にしていへば、中學校に徵兵猶豫の特典を有せしむるは、偶々以て不成績なる學生を庇保するに過ぎざるのみ、斯の如きは寧ろ之を全廢するに如かずとす。

中學卒業後直ちに高等學校及び各種專門學校（文部省の特別認可を有する）に入るものは素より一二年にして適齡と爲るが故に、之には猶豫の特典を與ふるを當然とす、吾人は素より全然撰拔試驗を賛するものに非ず、又此の試驗に及第するものを以て悉皆學力優等なるものとも信ずる能はずと雖も、其の比較的に優秀なる學生にして、落第者の概して然らざることは即ち之を認めざる能はず、故に此等の落第者には氣の毒ながら猶豫の特典を與へざるを可とす、現行制に於ても、中學卒業後高等學校各種專門學校に入らざるものは卻ち猶豫の特典を失ふを例とす、必らずしも中學校に特典なきに至るを悲まざるべし

事實より之を視るに、單に學籍のみを置きて猶豫の特典を受くるものは、廿一歲以上にして尙ほ且つ中學校の學籍にあるもの也、實際不良の青年也、其の之あるは畢竟中學校に徵兵猶豫の特典あるが故のみ、換言すれば、中學校に無用の特典あるが故に、即ち不良少年乘じて以て徵兵を忌避するのみ。

文部及び陸軍の當局之を解せば、速かに中學校の特典を撤廢すべし、是れ徵兵忌避の不良學生を掃蕩すべき根本的方策也、而して是れ善良なる學生には何等の不利益を來さゞるもの也

本號に寄稿せられたる諸大家の論說數篇あれども、悉く之を掲載するは到底限ある紙數のよくする所にあらず。遺憾ながら割愛して之を次號に廻はすことゝなせり。切に寄稿せられたる諸先生及び讀者の諒恕を乞ふ。尙其詳細は卷中各欄の終りにある次號豫告を一讀せられたし。

死刑廢止論

法學博士 小河滋次郎

一

近世文明科學の發達は刑事制度の上にも亦た其影響を及ぼしたること最も著るしく先きには拷問を廢し後には肉刑を除き死刑の如きもまた一とたびベッカリヤ出て丶其著「犯罪及刑罰論」(一七六四年刊行)に於て國法原理の上より死刑廢止の必要を唱道したるより以來、曠世の學者と稱せられたるヲルテールの如きも亦た之れに贊同し其所說は忽ち内外各國に傳播し苟くも時代の識者を以て稱せらる丶所の者は殆んと舉げて之を歡迎せざるはなく少くも世人をして死刑の容易に適用若くは執行すへきものにあらざることを認識せしむるに至れり、斯くして死刑に對する今日に至るまでの各國立法の實例を顧みるに遠ふくは「トスカナ」(一七八六年)墺斯多利(一七八八年)の如き降つて十九世紀に入りては魯西亞(一八二六年)白耳義(一八二九年以來久しく事實の上に死刑を執行せす、後、多少の沿革ありと雖も法律上死刑の規定あるにも拘はらす一八六七年以來、今日に至るまで再び復た死刑の執行せられたる事例なし)獨乙聯邦諸國(一八四八年以來、「サクセンワイマー」外十六ヶ國に於ては一時死刑を全廢せり)伊太利(一八四七年)撒遜王國(一八六八年)瑞西諸州(一八四八年)葡萄牙(一八六七年)和蘭(一八七四年)「ルーメニャ」(一八六四年)北米合衆國諸邦即ち「ミチガン」(一八四七年)「ロードアイランド」(一八五二年)「ウヰスコンシン」(一八五三年)「メイン」(一八八七年)「イリノイス」、「オハイヲ」(年紀未詳)等、芬蘭(一八二六年)「サン、マリノ」(一八四八年)「コロンビヤ」(一八六三年)「ウエネヅイラ」(一八六四年)「コスタリカ」(一八八〇年)諸威(既往三十五年の間、曾て一回も死刑執行の事實なし、目下、調査中に係る刑法改正案の如きも斷して死刑を排除せり)「メキシコ」(一八六八年)等諸國の如きは前後、相踵て事實上若くは法律上に死刑の廢止を斷行するに至れり、之れに反し英國、佛國、普國等、文明先進の大國を以て自任する二三國にあつては今日に至るまで尙ほ未だ此惡刑を廢止するに至らざること頗ぶる怪むべきが如しと雖も然かも實際に就て之を見れば曾だに從前に比して死刑適用の犯罪種類を非常に制限したるのみならず年と共に著るしくまた死刑執行の件數を減少するに至りたるの事實なり、文明の進步、刑罰學理の發達に伴ひ到る所に死刑廢止說の益々其勢力範圍を擴張し假令ひ今

日、尙ほ之を維持するの國にあつても早晩、廢止せざるべからざる惡刑とは認めつゝも唯た因襲の久しき急に之を全廢するの勇氣なきが爲めに僅かに姑息的、一時の彌縫手段として之れが存在を認めつゝあるに過ぎざるの實况なりと云ふの適當なるを信ずシエーブル曰く今日の機運を以て之を推せば我が英國に於ても亦た近き未來に死刑の全廢を見るに至るべきを疑はずと、有力なる政治家ロルド、ラッセル（同氏は曾て死刑廢止説に對して極力、反對の意見を主張せり）をして終に死刑廢止の止む能はざる所以を宣言せしむるに至りたる所を以て之を見るも蓋しシエーブルの豫言の空しからざるを知るべきなり、慣例舊規の改廢に就ては頑冥不靈なりとまで稱せらるゝ保守的氣風の最も旺んなる英國に於てすら既に此くの如くなりとせば其他の各國に於ける死刑廢止の大勢は略ほ之を推知するに難からずと謂ふを得べく今復た事新らしく死刑に對する近世立法の方針如何と問ふまでもなく近く刑法の改正を斷行したるは和蘭（一八八六年）及び伊太利（一八八九年）にして二つながら共に死刑を除きまた現に刑法立法の模範法典とも稱すべき彼の有名なる瑞西刑法改正案の如きも斷然死刑を全廢したる所に就て見るも明らかなりと謂ふべし、

二

機既に熟し文明世紀も亦た進んで第二十を數ふる今日に及んで文明大國に仲間入りしたりと稱する我か帝國にあつては二三、此問題に對して熱血を灑くものなきに非すと雖も學者、政治家、宗教家等の多くは緘默し法律を以て衣食する徒の如きに至つてもまた多數は即ち冷然として痛痒毫も相關する所なきものゝ如くなるは遺憾と謂ふべし、我か現行刑法施行以來、今日に至る二十有餘年の間に於て死刑執行の多き年は二百三十二人（明治十七年）に達し少き時も亦た二十人（明治三十年）に下らず、實に一年の平均七十人の多きを見るの實况なり（明治三十五年の調査に據る）死刑執行の多數なること實に他の文明各國に絕て其類例を見ざる所にして若し歐米國民をして之を聞かしめば如何に死刑廢止を否認する所の者と雖も其慘虐の甚しきに一驚を喫するや蓋し疑

ひを容れざるなり、死刑にして若し廢止若くは大に制限を加ふるの方針を取るべきものに非ずとならば則ちまた何をか言はん、苟くも文明今日の學理及び時勢に鑑みて斷然、全廢若くは之れに向つて大に制限を加ふるの必要ありとならば現行刑法をば根本的に改正せんと欲する今日こそ之を斷行するに最も適當の好時機なるに非ずや、ワールベルヒ曰く個人の犯罪的勢力を恐るゝこと甚しく之を制縛し之を監禁して以て足れりとせず進んで尙ほ之を殺戮し了するに非ざれば則ち國安の保全を期し難しと言ふが如きは自ら國家存立の基礎の薄弱なるを表明するものと謂ふべく然らざれば則ち神經衰弱症に罹れる爲政家の病的杞憂たるに過ぎずと、ルーソーが死刑を必要とするは偶ま以て國家の基礎の薄弱散漫を證明するに過ぎずと云ふが如き又シライエルマッヘルが一犯罪者の生命を犧牲に供するに非ざれば以て國家の存在を保全せしむる能はずとならば此くの如き國家は政治的運命に於て旣に破産に傾くものなりと言ふが如きまた皆此意に外ならざるなり、試みに文明今日の戰爭に就て之を見るも其戰鬪力を失ひたる所の敵兵は曾て我れに向つて刃を加へたるものなるにも拘はらず之を寬容し之を保護するを以て戰捷者の義務となすに非ずや、一國の大を以て而かも平和の時代に於て渺たる犯罪的戰鬪力を失却せる個人に對し何の必要あつてかまた之を殺戮せざれば止む能はずと信ずるか、必要なきに殺戮を敢てするは蠻行なり、蠻行の存在を見ること豈に文明國家の恥辱に非ずして何んぞや、ベンサム曰く害用の恐れあるもの死刑より甚しきはなし宜しく平和の時代を利用して速かに之を廢滅に歸せしめよ、若し不幸にして其維持を要求するの時代到達せば其時に當つて之を復興すること決して至難に非ずと、聖明陛下の治めし給ふ今日の御代は國史、未だ曾て見ざる所の平和時代なるに非ずや、況んや民情風俗の淳美なる昔しより東洋の君子國を以て居るの名に背かず、事實に於ても亦た西洋肉食人種に通有なる酷薄慘虐の性情は犯罪の上にも刑罰の上にも曾て之を實現せざりし程の貴むべき歷史を有する所の我國に

於てをや。

三

謹んで我が國史を按するに死刑を全廢し若くは屢々赦免を下し給へたること古來其實例に乏しからず、聖武天皇神龜二年、死者不可生、刑者不可屬、死罪宜降從流、流罪宜從徒、徒以下並依刑部奏（續日本紀）と詔したまひ此後大辟の罪も大抵、流罪に處せられたりと云ひ（獄制沿革史）我が朝には嵯峨天皇の御時より死罪をばとゞめられけり（十訓抄）と云ひ嵯峨天皇ノ朝ニ藤原仲成ヲ誅シテヨリ以來三百四十餘年ノ間大辟ニ抵ルハナカリシヲ後白河天皇ノ保元元年藤原信西カ奏聞ニ由リ源平兩氏ノ人ヲ斬シヨリ死刑又起レリ云云（古事類苑）其他死刑執行の手續等に就て之を見るも王朝時代に於ては凡そ大辟を決する在京は行決の司、決前一日に一たび覆奏し決日に再び覆奏し在外は符下る時、初日に一たび覆奏し後日に再び覆奏すべしと命じ且つ立春より秋分までの間及び大祀齋日等には死刑を決することを得さらしむるが如き加之、凡死刑雖已奏報、猶訴寃枉、事有可疑、可推覆者、以狀奏聞、遣使馳驛檢校（令義解）と云ふが如き其の刑を愼む用意の周密鄭重なる眞に所謂、一成而不可變、故君子盡心（禮記註疏十三王制）の意に適ふものと謂ふべく國粹の醇美なる萬國に其類を見ざる所にして君子國の君子國たる所以は炳焉として歷史の之を證明するものあるに非ずや、死刑の我國に中興せられたるは實に保元平治の亂世にして亂世が死刑の中興を要求し餘義なくしたること蓋し偶然に非ざるなり、然かも當時、重盛をして「死刑ヲ被止シヨリ以來、二十五代ニ及シヲ少納言入道信西ガ執權ノ時ニ相當テ、絕テ久シキ例ヲ背キ、保元ノ亂ノ時、多クノ源氏平氏ノ頸ヲ切リ宇治ノ左府ノ墓ヲ掘リ死骸ヲ實驗セシ其酬ニヤ、中二年コソ有シカ、平治ニ事出來テ、田原ノ奥ニ被埋タリシ信西カ被掘起頸ヲ渡シ獄門ノ木ニ被懸キ、是ハサセル朝敵ニアラネ共、併保元ノ罪ノ報ト覺テ恐シクコソ侍シカ」と纓慼せしめ（源平盛衰記）又後世の史家をして自弘仁誅仲成、三百四十餘年、無一人抵大辟者、至是行之於諒闇、世以爲淫刑（大日本史）と警戒せしむ、亦た以て輿論は即ち死刑

の我が民情風俗に適せざるものなることを認めたるの證となすべきなり、モンテスキユー曰く武斷專制の時代に峻刑酷罰の行はるゝは古今歷史の證明する所の事實なりと、爾後我國は不幸にして兵亂相踵て起り源頼朝、覇府を鎌倉に開きてより以來、政刑の權、武門に歸し足利氏豊臣氏を經て終に德川氏に及んで全く武斷政治の時代を成すに至りしを以て古今東西の歷史の證明するが如く之れが固有の隨伴物たる峻刑酷罰のあらゆる種類のもの亦た相因襲して我が王政維新前凡そ七八百年間に於ける刑制の主體をなすに至りたること蓋し深く怪むに足らざるなり、所謂、死刑の一層慘虐なる縛首、獄門、磔（逆張付）串刺、鋸挽、牛裂、車裂、火焙、表殺、臥潰、投水等と稱するものゝ如き又多くの肉刑の如き悉く皆、後世、鎌倉幕府以來、武斷政治の下に創設發達せしめられたるものに非ざるはなく王朝時代に於ては殆んど絕て其の存在を見ざりし所なり、維新政變後の明治時代に於て屢々刑律を變更し相次いで拷問、肉刑其他諸々の峻刑酷罰を廢絕せしむるに至りしことを以て直ちに之を西洋文明國の事例に模倣せしものに過ぎずとは言ふべからず、其實、是れ我が王朝時代の古制にして縱令ひ外國に事例なしと雖も王政復古と共に當然、寛刑に復舊して以て我が醇美なる民情風俗に適合せしめざるべからざりしなり、寛刑は即ち我が國粹の制にして此點に就ては夙に萬國に一頭地を抽んでたる所たりしなり、余輩が今、死刑廢止を主張するに對し或は漫に學説に拘泥し外國の事例に心醉して國情の如何を顧慮せざる者なりとなすものありと雖も死刑廢止に反對する者こそ反つて我が民情風俗の萬國に卓絕したる所のものあるを知らず又此國粹の上に發達し健全にして且つ自然的なる王朝時代の刑制如何を詳らかにせず、徒らに西洋二三國の事例に垂涎して以て獨斷的妄想を固執せんとする者なりと斷言せざるを得ず、今や文明先進國を以て自ら居る英佛獨等の諸國に於て事實は兎も角、法律上尙ほ未だ死刑を全廢するに至らざるこそ幸なれ、文明大國の仲間入りしたりと稱する我國に於て而かも此の刑法改正の好時機に乘じ

卒先、死刑廢止を斷行して以て國粹の美を顯揚すると共に範を彼の諸國に垂るゝも亦た一大快事ならずや、法制の發達は根底ある文明の餘光にして法制の良否は以て文明の消長を表するの尺度たらしむるに適すと云ふ、將さに刑法を改正せんとする所の今日は實に中外に對して我が歷史的深き根底ある帝國文明の眞相を宣揚するに最も適當なる千載一遇の好時機なりと謂はざるを得ず、獨乙現行刑法の成らんとするや、議會は最大多數を以て二次會まで全然、死刑を否認せり然るに其の三次會に移るに及び議會にして若し死刑を全廢せば政府は刑法全體の改正案をば否認すべしてふ鐵血宰相ビスマルクの脅迫的大演說の下に終に憐れにも硬派百十九人に對する軟派百二十七人、即ち僅々八人の最少多數を以て死刑を存することゝなれり、我が政府當局者の死刑問題に對する決心の程度如何は之を詳らかにする能はざれども議會は須らく鐵血宰相の故智に倣ひ死刑廢止にして行はれずんば刑法改正案全體を否決すべしと云ふの覺悟を以て本案を迎ふる所あらんことを切望に堪へざるなり

四

因果應報は人生自然の天則にして刑罰の基礎も亦た此に存せざるべからず、故に重き犯罪を罰するに重き刑罰即ち死刑を以て論ずるは自然の天則に基く所謂、正理公道の主義に適する者なりと謂ふ者あり、假りに刑罰の基礎は應報的正理の要求を充たすにありとせんか、絕對的正理なるものゝ到底、此の不完全なる人爲的刑法の上に存在し能はざるを奈何せん、均しく犯罪なりと雖も其の輕重に至つては即ち無限の程度あり、財產に對するの罪は輕くして身體に對するの罪は重しと云ふ、其認めて以て輕重となす所のもの、果して絕對的、千古不滅の正理と云ふを得べきや、復讎の爲めに人を殺すことを以て士人の義務なりと認めたるの時代は今を距ること遠ふからず、今は則ち重き殺人罪を以て之を論ず。一方に國家、自ら富籤を經營若くは獎勵するものあるの他方には重き刑罰の制裁を加へて之を禁遏するものあるが如く所謂正理なるものは則ち國と

時とに依つて其見解を異にするものなるが故に畢竟、唯だ常に關係的、意義を有するものたるに過ぎずして成るべく國家の道德的常識に基て時の機宜に一致する上に於て比較的正理を求むるの外あらざるなり、彼の血を以て血に、目を以て目に報ふると云ふが如き絕對正理主義の要求を充たさしめざるべからずとせば輕重無限の程度ある百般の犯罪に對し一々之れに相當すべき無限の刑罰を設け同じく人を殺す(死刑)にも其間に種々の段階を置くべきは勿論、死刑と他の今日一般に採用せられつゝある所の刑との間に於ても其連鎖を結付くる所の刑罰即ち或は剔り或は刖き或は勢を絕ち或は手足を截り或は笞杖を加へ或は枷杻を施す等所謂肉刑なるものゝあらゆる種類をも採用せざるべからずとの論結に歸せざるを得ず、然るに斯くの如きは啻だに道德的國家の常識の許るさゞる所なるのみならず、また文明今日の國安を保全する所以の道に非ず、肉刑及び死刑に對する種々の加重法の廢滅せしめられたるは即ち之れが爲めなり、前に肉刑なく後に加重法なき所より之を見れば正理主義の上に立つ所の死刑其物は恰も宙に迷ふ所の幽靈の如し、殺人其他重大なる犯罪は死刑を以て之を罰すと云ふと雖も刑は單一にして犯罪は千差萬別なり、如何ぞ能く之を絕對正理主義の要求に適するものと謂ふを得べけんや、今の死刑なる所のもの既に所謂絕對正理主義の上より其根底を拔き去られたること是を以て見るも明らかなり

或は曰く國家は犯罪に由つて其の法的秩序を破壞せしめられたるが故に之を回復するが爲めには必要に應じて死刑を以て犯罪者を制裁する所なからざるべからずと、然るに法的秩序の回復なる所のもの、何んぞ必ずしも死刑を俟つて之を能くせんや、往時は知らず、刑事制度の發達進步せる今日に於ては他に能く適實に其の目的を達するに足るべき良方法のあつて存す、徒らに犯罪者を殺戮するが如きは獨り法的秩序の破壞を回復する能はざるのみならず、偶ま以て其の破壞を大ならしめ若くは更らに新たなる缺陷を誘發するの因たらしむるに過ぎず、國家が其の公安の保全を期するが

爲めに絶對的必要を認めたるの場合に於て或る種類の犯罪者を誅戮して以て破壞せられたる法的秩序の回復を計るの權利あるべきは余輩も亦た之を認めざるに非ず、兵亂の時代、若くは戰鬪地又は戒嚴令施行の場合等即ち是れなり、但し斯る場合に於て非常手段たる死刑の適用及び執行を必要とする所以のものは法的權能に基くものに非ずして寧ろ權力的關係に出づるものなりと謂ふの適當なるを信ず、恰も猶ほ個人に對して其の危急の場合に人を殺傷する所の權能(正當防衞權)を認むるが如し、必要の程度は以て權能の有無如何を知るの準とすべし、平和時代に於ける國家の基礎は決して一個人の犯罪に由つて動搖せらるべきものに非ず、犯罪殊に殺人等の如き危險なる行爲が公安に妨害あること勿論なりと雖も之を殺戮するに非ざれば以て公安の維持を全ふし能はずとは言ふべからず、之を制縛し之を監禁し而かも完全に組織せられたる監獄に在つて其罪業を報復せしむ、彼れは既に戰鬪力を喪失したる所の敗兵と一般なり、必要の程度は此に至つて其の段落を告げたるものなるに非ずや、然るに此の程度以外に尚ほ血を見るに非ざれば饜かずと云ふが如きは國家は唯だ徒らに其の優勢權を利用して復讐の蠻行を恣まにするものと謂ふべく道德的國家の常識を無視するものなりと斷言せざるを得ず、是に至つては即ち死刑なるものも其實、何ぞ尋常一般の犯人犯罪と異ならんや、死刑は即ち大なる國家の權力を以て無勢力なる一個人に加ふる所の無意義の虐殺行爲なりと謂ふを得べきなり何をか無意義と云ふ、曰く國家は人を罰するを得るも人を復讐するの權利なきを以てなり、個人の行爲を認めて之を重き犯罪となすの一方には國家は即ち之を敢てして以て憚らず、獨り法の威信を傷くるのみならず偶ま以て一國の風敎を害し個人の殘害心を挑發するの結果に陷らざるを得ず、モンテスキユーの所謂、刑罰の酷なるに從つて益々殘忍なる犯罪の增加を促がすの事實は歷々として古今刑罰史の證明する所なり、死刑なるものが破壞せられたる法的秩序の恢復手段たるに適せざるの理は是を以て見るも亦た明らかなりと謂ふ

べし

五

死刑の賴つて立つ所の唯一の生命とも云ふべきものは畏嚇是れなり、蓋し死は人生の最も恐れて且つ避くるを欲する所のものなるが故に是を以て民に臨む、民は即ち自ら相警めて犯罪より遠ふざかるべく所謂、一殺多生、國安を保全する所以のものも亦た始めて是を俟て其の目的を達し得べしとの理想は實に死刑を必要とする重もなる理由の一と謂ふべし、人生萬般の行爲、殆んど一として苦を避け樂に就かんと欲するの理性に基かざるはなし、苦痛を以て刑罰の要素たらしむる所以にして重き犯罪に苦痛の多大なる刑罰を以て之を待つべきの當然なるは言ふを俟たず、然るに死刑なるものの果して吾人の想像するか如くに最も多大の苦痛を感ぜしむるに足るべき刑罰と認むるを得るや否や、所謂犯罪人なるものゝ心情は實に吾人の常識を以て測り知る能はざるもの少からず、野蠻人種に屬する者が一般に死を畏るゝ觀念の意外に乏しきか如く死刑に處せらるべき犯罪を爲す者等の如きも死に對しては豫想以外に冷淡の感情を有する者の多數なるの事實は獨りベッカリヤ、ラッシグトン、ワールベルヒ、シエーブル、其他英國に於ける死刑調査會の報告等の之を證明する所あるのみならず、余輩行刑事業に從事する者の親しく自ら實驗する所にして現にロンブロゾーの如きは其の蒐集したる多數の材料を根據として死を恐れざること即ち感覺作用の變調を以て先天的殺人犯罪者の特徵の一なりと認めたり

事實、若し果して此くの如くなりとせば死刑なるものの決して以て最も多大の苦痛を感ぜしむべき極刑となすに足らず、寧ろ長期若くは無期の自由刑こそ反て眞正の惡漢をば畏嚇せしむるの價値ありと謂ふを得べし、假りに數歩を讓りて犯罪者の多くは死刑に對して一般に無上の恐怖心を有するものなりとせんか、然かも其恐怖心なるものは啻だに犯罪の前に彼れを警戒せしむるに足らざるのみならず、偶ま以て犯罪の後に起る恐怖の餘り彼れをして更に其の慘酷の行爲を逞ふせ

しめ若くは益々其罪迹を發見するに困難ならしむるの誘因となるを免かれず、畏怖の念は犯罪事後に於て始めて生出す、而かも始めは罪跡發覺に對するの畏怖にして次には逮捕の畏怖、裁判の畏怖、宣告の畏怖、順を追ひ終に上訴、再審等の道、全く杜絶するに至りたる時に於て始めて直接死刑に對する畏怖を生ずるの常なり、曾て英國の國會に於て組織したる死刑調査委員會が謀殺其他死刑に處せらるべき犯罪を爲したる數百の當該者に就て調査したるものゝ報告を見るに此內、一人として犯罪の當時に犯罪の結果、死刑に處せらるべきことあるべしと云ふか如き觀念を有したる者なきの事實なりしと云ふ、若し果して斯くの如く實際に於て彼れを犯罪の前に警戒せしむること能はずとせば死刑か目的とする所の畏嚇なるものが以て犯罪を未發に防ぐの用をなすに足らざること知るべきなり、其の之れあるも犯罪は即ち止まず、之れなきも亦た敢て犯罪を容易ならしむとは謂ふべからず、誰れか死刑に處せらるゝ恐れなしと云ふか如き單純の理由に依り濫りに人を殺傷するか如き者あらんや、死刑の要素は此に至つて既に其の大半の價値を沒了せられたるものと謂ふべし

　刑の目的は他戒にあり、死刑か犯罪者に對して犯罪の前に之を警戒せしむるに足るの効力なしとするも一般の良民を無事の時に警戒せしむるを得ば即ち死刑の目的を達し得たるものに非ずやと謂ふものあり、然るに所謂良民なるものが犯罪より遠ざかる所以のものは峻刑の以て之を畏嚇するものあるか爲めなるには非ずして縱令ひ峻刑なきも良民は即ち敢て好んで法網に觸るゝが如き行爲を犯さず、國家は無意義に良民を脅嚇し若くは其の道德的感情を迫害するの權能を有せざること今日に於ける文明各國共通の定論にして峻刑他戒主義の成立を許さゞるは即ち之れか爲めなり、若し強て他戒を加ふるの必要ありとならば其の必要あるものは犯罪の傾きある危險の者即ち所謂犯罪種族に屬する所の者にして良民は即ち之れに與らず、然るに犯罪種族なる者か實際に於て死刑に對し警戒するの念慮に

乏しきの事實は上來、既に開陳する所あるか如し、警戒せしむるの必要なき者に對しては警戒となり其の必要ある者に取りては警戒の用を爲さず、斯くても尙ほ他戒主義の爲めに死刑を存するの必要ありと云ふを得るや否や

六

昔し一八八四年伊太利の港「ゲヌア」に於て同時に數人の犯罪者を刑戮したることあり、然るに其の慘劇を演じつゝある目前なるにも拘はらず一人の若者あつて大膽にも警吏の懷中を探ぐらんとは試みぬ、直ちに捕へて之を縛し如何なればこそ斯かる場合にかゝる非行を犯せしかと訊問する所ありしに若者は即ち夷然として岸頭に繫留しつゝある船を指しつゝ答へて曰く彼の船を見ずや、海上覆沒の災禍あることは何人も能く之を知る、然かも覆沒を恐れて船に乘ることを厭はんには爭かで能く彼岸に達することを得べけんやと、犯罪種族の心情を穿ち得たる至言と謂ふべし、此くの如く犯罪の動機は苟免を冀ふに非ざれば則ち刑の制裁に對して毫も此に考慮する所なく偶ま考慮する所あるも其力は極めて薄弱なり、要するに死刑を以て是等の犯罪的動機に對抗せしめんと欲することは恰も是れ內科的疾病に對して外科的手術を施すものと一般にして治法、既に正鵠を過まる、徒らに苦痛を與へ創傷を貽し、其の結果は即ち病症を重くして生命を危ふするに至らしむるを免かれず、死刑の行はるゝこと愈々多くして益々殘忍酷薄なる犯罪の增加を來たすに至る所以なり、羅馬史を讀む者は之を知らん、共和時代若くはチタース、トラヤン等の治下にあつては刑を制すること極めて寛を尙び死刑の如きは殆んど一も之を行ひたることなきにも拘はらず、然かも國は榮へ、民皆其の堵に安んず、之れに反し帝政時代殊にチベリウス、カリグラ等の時代に及んでは盛んに峻刑酷罰を勵行することを以て爲政の要となせり、而して其の結果如何と云ふに風敎は益々衰へ騷亂は即ち從て制すれば從て起り民衆をして一日も其の生に安んずること能はざらしめ終に後の史家をして峻刑酷罰は羅馬亡國の近因を爲した

ものなりとまで斷定せしむるに至りたるに非ずや、丘濬の所謂、禍亂之作、往々以此、秦隋之亡、其明驗也、なるもの即ち是れなり、炮烙の虐刑を用ひたる桀紂の前途は如何、族滅の苛法を布きたる秦代の治績は如何、漢の文帝は肉刑を除て其の民を安んじ其の國を榮へしめたるに非ずや、孟子曰く人を殺すを嗜まざる者能く天下を一にせんと、趙蓋楊韓の徒あつて漫りに峻刑酷罰の要を鼓吹す、法を敗り正を亂し親を離れ道を塞ぐ刑罰の酷より深きは莫し、支那をして今日の運命あるに至らしめたる所以のものまた此に基くなきを得んや、東西古今の歷史の着々證明する所の事實なり、歐州に於ける中世以降、前世紀の初葉に至るまでの刑罰史は恰も我國鎌倉幕政より近く王政維新までの經過に同じく人智の以て想像し得らるゝ限りのあらゆる峻刑酷罰は悉く之を現實に實行し全紙殆んど血を以て充たされたるものに非ざるはなし、顯理八世の治下、大法官フヲルタスキウの裁判の下に僅かに窃盜犯罪者だけにても其の首べを刎ねたる者、七萬二千人の多きに及びたりと稱す、然かも窃盜の犯罪は啻だに其の跡を絕つに至らざるのみならず從て制すれば從て起り當時、人をして倫敦は犯罪の都、刑戮の巷なりとまで謳はしめたるに至りたるに非ずや、「此櫻花一枝も折取候はゞあたり八間、流罪死罪に仰付らるべき者仍如件」（關東上杉管領花の札）の故事は姑く擱き贓十兩以上に及ぶ者は即ち之を死罪に行ひしの時代は今を距ること僅かに四十年前後に過ぎず、英國等にあつても樹木の折截、一頭の馬牛若くは羊の窃盜、紙幣又は貨幣の僞造乃至はまた一二三「シルリング」に過ぎざる盜罪に對し容易に死刑を適用して以て之を制裁せんと試みたるの事實は實に前世紀の初葉まで尚ほ廢絕を見るに至らざりしなり、然るに實際、盜罪其他の輕罪に對する死刑を廢止したる結果如何と云ふに實施後、數年を經て政府は議會に對し窃盜罪の累年、遞減を見るの事實なることを報告したるのみならず、其の當時の「ヲーソリチー」たりしレナルドの如きも窃盜其他の輕罪に對する死刑の廢止以來、處刑件數の增加すると反對に犯罪は益々減少するの事實を

見るに至れりと證言せり、窃盜十兩以上の犯罪に對して死刑を勵行したる我が三四十年以前の時代に於ては果して今日に比し窃盜其他の犯罪の少數なりしと云ふの事實を證明し得るや否や、吾人が今日、犯罪に對し財產の保障を感ずる上に於て果して維新以前の時代より一層、不安心なりと謂ふを得るや否や、窃盜其他の犯罪に對して死刑の効力なきこと此くの如くなりとせば殺人反逆等の行爲に對してもまた同一の結果に終はらざるを得ざるは自然の理なり

今日、尙ほ死刑を維持する歐米各國の實况に就ては既に前段に開陳する所あるが如く啻だに死刑を宣告する場合の少きのみならず、之を宣告するも多くは即ち特赦に由つて一等若くは二等を輕減し實際に於て死刑の執行をなすの場合は寧ろ取除けの事に屬す、我國の如く死刑を宣告する場合の頻繁にして而かも宣告は盡く之れを執行するに非ざれば即ち止まず、其の特赦減等を上請することの極めて吝かにして舊規先例等の末事に拘泥執着するの甚しきは他の文明各國に其比を見ざる所の實際の事實なり、然らば歐米に著るしく犯罪多くして我國に少數なりやと云ふに是れまた一の據るべき證據事實あるに非ず、若し幸にして我國に少數なりとの事實あるを得ば是は我が萬國に卓絕せる美風良俗の然らしむる所にして刑罰は即ち之れに與らず、偶ま以て我國に死刑の必要なきを證明するに過ぎず、歐米諸國にあつても死刑を勵行したる當時と之を除外し若くは大に其の執行範圍を制限するに至りたる今日の時代とを比較して犯罪增減の關係如何を考ふるに反て昔しに多くして今に少きの事實を發見するを得べし、千八百五十一年發布の普國刑法は大に死刑に向つて制限を加へ殆んど全廢するまでに改正を加へたる所のものなり、然るに施行以來の經驗に依り政府は千八百六十九年刊行の刑事統計表に於て責任を以て明言して曰く死刑の減少は獨り犯罪の增加を致さゞるのみならず人口增加の割合より之を見れば犯罪は反て年々著るしく減少するに至りたりと斷言するを得べしと、白耳義の如きは八九十年間の久しき、事實の上に殆んど死刑

を全廢したりと云ふにも拘はらず敢て之れが爲めに殺人其他の危險なる犯罪の増加を見ざるの事實はヂュクペチオ、ヲー其他の學者實務家の證明する所にして曾て人口、八三、五七二人に對し殺人犯罪者一人の割合なりし所のもの、後には人口、九七、五三六人に對し一人に該當するの減少事實を見るに至れり、「トスカナ」の如きは他の各國に率先して死刑を廢止（一七八六年）したるの國なるが其の廢止後の成績の頗る顯著なるものありしが爲めにベンジャミン、フランクリンは之れに對して其の所感を述べて曰く「甚しい哉刑罰の一國の風教に及ぼす勢力の偉大なるや、其の人種、宗教、風俗、人情等を同ふする所の彼の羅馬と「トスカナ」とに就て之を見よ、羅馬にあつては僅々三ケ月間に六十人の殺人犯罪者を生じたりと云ふに「トスカナ」に於ては二十年間を通じて僅かに五人の殺人犯罪者を見るに過ぎず、而して彼れは頻りに峻刑酷罰を勵行し此れは即ち單純の死刑だに之を適用することを廢止せり、死刑の有無は直接に風教の消長と相關す、一日も早く死刑の廢止を斷行せざるべからず」と

七

刑を適用するは必ずしも難事に非ず、苟くも刑法の條文を解讀し得る能力ある者ならんには即ち之を能くす、然かも其の適用の基礎となるべき事實の眞相を看破審決するは容易の業に非ず、老練なる刑事專業の當局者を以てすら尚ほ往々にして正鵠を失するの事迹あるを免かれざる所以にして若し試みに裁判上の實際に就き如何に多くの事件が豫審、公判、二審、終審、再審等の各階級を經る毎に其の決定を變更せらるゝかを調査するときは何人と雖も同一事件にして斯くまで人に依て其見る所を異にするの甚しきやと驚嘆せざるはなかるべしと信ず、假りに若し我が三審制度を變じて四審若くば五審制度に改めたりとせんか、今の大審院に於て最終の判決を與へたる所のものも更らに四審に破れ五審に變更せらるゝもの、多きを見るべきは必然にして現に今日にあつても終審廳たる大審院自身に於て屢々其自ら下せる前の判決例を變更するの事實ある

に徹しても明らかなり、人事の不完全なるを免かれざる所以にして完全を裁判官に求むるは寧ろ求むる者の無理なりと謂ふべし、而して總べての犯罪が此くの如く其の眞相を看破するの困難にして從つて人に依て其の見る所を區々ならしむるに至るを免かれざる中に就き殊に最も其の事情の晦澁複雜を極はむるが爲めに之れが眞相を看破するに困難なること殺人犯罪者の如きはあらざるなり、何が故に殺人事件が通例、其の實相を審決するに困難なりやと言ふに啻だに事件其れ自身の性質として然るものあるが爲めのみならずまた前段、陳述する所あるが如く一方には犯罪者が巧みに其の犯迹を隱蔽するの目的より種々の手段方法を盡すと共に他方には又、無關係者に其の累を及ぼすの危險最も多きの事情あるを以てなり、斯くの如く實相を審決するに困難なるの結果として所謂誤判なるものの多きこともまた殺人犯罪より甚しきはなし、普通の犯罪は多く自由刑を以て之れに適用するが故に若し誤判あるも不完全ながらも之を救濟するの道なきに非ず、然るに誤判の最も多かるべき殺人犯罪等に就ては獨り之れに對して救濟回護の餘地なき死刑を以てす、不倫も亦た甚しからずや、誤判を發見したる場合に於て絕對に救濟回護の道なしと云ふことは死刑其物の一大缺點として何人も亦た異議なき所にして流石に死刑を維持せんと欲する所の者も此の缺點に就ては殆んど一言の辭なき所なり、如何に誤判の爲めに死刑の宣告を受け若くは執行せられたる者の多きやは各國に於ける多數の實例の證明する所にしてベッカリヤをして死刑廢止を絕叫せしめたる所以のものも實に其の當時に生じたる誤判の實例が深く彼れを感動せしむる所ありたればなり、誤判の爲めに一人を殺すも尙ほ恕すべからず、况んや之を屢々するに於てをや、少くも之を屢々すべき豫想の確實、疑ふべからざるものあるに於てをや、誤判の結果として人を殺すの行爲を指して之を法的殺人と稱す、其の惡むべき殺人犯罪たる實質に至つては何ぞ普通に所謂殺人罪なるものと異る所あらんや、死刑にして苟くも其の廢止を見るに至らざる以上は到底、

國家は法的殺人の罪惡を犯すの慘を免かれ能ふへからす、世人は古來幾多の仁人義士か此の慘禍の犧牲となつて空しく刑場一片の露と消へたる事實を聽くに當つては之に向つて同情一滴の涕を灑くことを禁ずる能はざるに非すや、吾人の同胞は今尙ほ常に此の慘禍に罹りつゝあるの事實なり、何ぞ速かに起つて吾人自らと吾人の同胞とを此の慘禍より救ふの道を講せさる

八

人は唯た一概に殺人の行爲、最も惡むへしと云ふと雖も同しく殺人の行爲の內にて輕重大小の程度あり、更らに其の行爲を犯すに至りたる心情に就て之を觀察するときは或は惡むへき者あり、或は憐れむへき者あり、其の憐れむへきもの丶極端に至つては寧ろ道德的行爲として嘆賞に價するものさへなきに非すして要するに千種万樣、到底、一律を以て之を論すること能はざるなり、單に事實を以て擬律の標準となすこと恰も病名を問ふて醫藥を給するか如き時代ならんには兎も角も、今や犯罪人格の研究の進步したると共に刑罰も亦た犯罪事實と犯罪人格とを併せ研究して之れに適應せしむる所あらんとする主義の實行せられつゝあるの時に方り尙ほ絕對事實主義に基きたる時代に行はれたる遺物即ち死刑を保存せんと欲するが如きは余輩は殆んど其の意のある所を知るに苦まざるを得ず、野口事件の罪惡及び其の人格は最も惡むべしと雖も天下、復た彼れに勝さる人格を有し尙ほ一層恐るべき罪惡を犯したるまた犯しつゝあるものなからんや、彼れに對するも死刑、此れに對するも亦た死刑、一の瞬間に於て其の生命を絕つの苦痛を感ぜしむるに至つては即ち此れも彼れも亦た同じきのみ、此くの如くにして如何ぞ能く個人及び個人の罪惡に適當の刑を賦課するものと謂ふことを得べけんや、人を殺し人を姦するの罪惡、固とより之を惡むべしとするも人を殺さすして殺すよりも尙ほ多くの殘虐を逐げ人を姦せずして姦するよりも尙ほ多くの恥辱と苦痛とを與ふる者、世間、其の例に乏しからず、單純に人を殺す者は死刑に處せられ殘虐に人を創傷し若くは凌辱する者は死刑より宥恕せら

る、没理も亦た甚しからずや、ラグース曰く殺人犯罪者の多くは所罪犯罪種族なる者より全く獨立したる所の者にして若し社會の民衆を別て犯罪種族と良民種族の二種とせば殺人犯罪者は寧ろ之を良民種族に算入するの適當なるを信ずと、彼の一時佛國の各地方に出沒して剽窃掠奪を逞ふしたる所の一團匪が各々其の懷に「コードペナル」を用意し置きたりと云ふか如く眞に所謂犯罪を常業として常に社會を危害する所の者は殺人犯罪に陷る者割合に少くして其の之れに陷る者は初心の犯罪者に非ざれば則ち他の犯罪と全く緣故なき動機に依り所謂一時の機會境遇に處して此に至りたる者を多しとす其の人格の上より之を言へば寧ろ危害の皆無なる若くは最も少き種類の者に屬するは實際に爭ふべからざるの事實にして此種類に屬する多くの犯罪者を拘禁する所の集治監の實況に就て見るも明らかなり、世人動もすれば殺人罪を犯すが如き所の者、其の性情の兇惡殘暴なること甚しく機會あれば即ち逃脫を試み逃脫の目的を達せんが爲めには如何なる殘忍の行爲も之を敢てすることを憚らざるべしと云ふ、然るに事實は即ち全く此の豫想に反し啻たに逃脫を試み若くは殘暴行爲を敢てし或は監獄の規律命令に反抗するが如き者の少きのみならず、能く規律に服し命令を守り且つ悛改の情の顯著なるが爲めに從てまた特赦、假出獄等の恩典に浴する者の如きも殊に最も此種類の者に多きの事實なり、且つ又此種類の犯罪者に就て之を見るに恰も驟雨、一とたび過ぎて一天、拭ふが如き快晴を見るが如く心中、忽ちまた眞如良心の光を放ち自ら其の罪惡を省みて痛恨の情に堪へず、或は進んで官に首白し甚しきは即ち刄を己れに加へて以て其の命を絕つに至る者少からず、試みに監獄に就て死刑囚の實況を見よ、其の多數は即ち痛く自ら其の罪惡を懺悔しつゝあるの事實なるを知るを得べし、既道極厥辜時乃不可殺、孔明の蜀を治むるや罪に服し情を輸す者は重しと雖も必ず釋したりと稱す、懺悔、必ずしも免刑の理由たらざるべしと雖も之を刑戮するにあらざれば堅く能はずと云ふに至つては抑も亦た人道の本旨に悖るの甚しき

ものなるに非ずや、殺人犯者が其實、反て社會に危險少き性質を有する者の多き事實は近來、法醫學、刑事心理學、刑事社會學、刑事人類學等の進歩に伴ひ益々確實に學者、實務家等に依て之を證明せらるゝに至れり、重きを犯罪事實に置くの點より之を云ふも人格主義の上より之を云ふも將た所謂刑罰除害主義若くは保安主義の上より之を見るも彼の殺人犯罪者なるものに對して死刑を維持するの事由若くは必要は殆んど一も之を發見すること能はざるなり、今や死刑の運命は一に繫つて殺人犯罪にありと云ふも可なるの時に當り其の殺人犯罪に對してすら既に此くの如くなりとせば死刑の運命は此に全く其の終局を告げたるものなりと斷言せざるを得ず

九

刑法學の泰斗ベルネルが其著刑法論（一八九五年第五版）の内に死刑廢止の必要を論述したる大綱に曰く（第一）死刑は刑罰に缺くべからざる要素の一をも具備せざる所のものなり、之れが執行を屢々するの結果は一國の風敎を殘害して民衆の道德的感情を惡化し冷却し偶ま其の殘忍暴惡の性情を挑發し且つ怨恨復仇の惡習を養成せしむるに至るを免がれず、死刑はまた刑罰に必要なる可分性の要素を缺く、故に個々の犯罪に對し能く其の輕重の程度に相當する適用をなす能はす、刑の影響は成るべく犯罪當該者の一身に限らるゝことを要す、然るに此點に於てもまた死刑は他の刑に比して最も廣く且つ深く其の影響を一身以外即ち親族子孫に及ぼすの弊あるを免がれず、死刑の最大缺點と認むべき所のものは誤判あるの場合に絶對に之を回復するの道なきこと即ち是れなり、人として誰れか過ちなからんや、如何なる時代に論なく苟くも死刑のある以上は到底、所謂法的殺人なるものゝ弊なきを望み得べきに非す、（第二）死刑は所謂正理主義なるものゝ上より之れか必要を認むへき性質のものに非す、血を以て血に濯き目を以て目に酬ふることを以て正理公道なりとせんか、モセスは奸淫に對し若くは安息日の勞働に對してもまた死刑を以て之を制裁すへしと命したるに非すや、基督の言

ふ所、必ずしも以て正理公道とは認むへからさるなり、況んや基督の言行に徴するも人を死刑の災厄より免かれしめんと努めたるとこそあれ、曾て死刑を容認したるか如きことあらさるに於てをや、人を殺す者また人に殺されざるべからずと云ふが如きは決して正理の要求する所には非ざるなり(第三)死刑は徒らに人の感情を滿足せしむるが爲めに之を必要とするものたるに過ぎず、滔々たる世俗、或は人を殺したる者を殺さずんば其の意を充たす能はずと要求すべしと雖も世俗の要求に盲從するは決して識見ある立法家の爲すべきことに非ず、立法家は宜しく國家百年の長計を案し刑罰終局の目的をは適實に貫徹せしめんことをば講ずべきなり、(第四)死刑は保全及び畏嚇の主義に適したるものなりとは謂ふべからず、保全の目的は正確に且つ適實に犯罪者を拘禁することに依て之を貫徹し得べきが故に必ずしも其の必要以外に出てゝ殺戮行爲を敢てするには及ばざるなり、死刑の人を畏嚇する力あるは固とより論なしと雖も畏嚇力の強きたけ又人をして之を避けしむるの場合、益々多きに至らざるを得す、死刑の不正確なるを免かれさる所以にして不正確の結果は反て畏嚇の効力を空ふするに至るを免れず、死刑なくも敢て犯罪の增加を來さず、死刑あるも亦た決して犯罪減少の事實を見る能はざる所以なり、(第五)死刑は絕對に改良主義の目的に適せざること固とより論を俟たず殺人犯罪者を目して一概に改良の望みなしとは言ふべからず、實際に於て反て最も改良の望みある者は即ち此種類の犯罪者に多く之を見るの例なり、物極まれば即ち轉ず、極罪を犯すの瞬間は反て是れ遷善に心を傾くる動機の生ずる時にあらざるなきを得んや云云と死刑の惡刑たり蠻刑たりまた無意義の刑罰たるを免かれざるの事由は是を以て見るもまた明らかなりと謂ふべし、何れの世か犯罪なからんや、世人或は死刑は惡刑なからも今の時は之を廢止するの機に非ずと謂ふものありと雖も此くの如きは即ち犯罪の全く其迹を社會に絕つに至るの時機を俟つべしと謂ふに同しく未來永劫に到底、かゝる理想鄉の現出せんこと思ひも寄らざ

るなり、拷問其他の酷刑を廢し若くは窃盜其他今日にあつては僅々一年內外の自由刑を以て處分するに過ぎざる諸々の輕罪に對する死刑の慣例を除きたる當時に於ても必らず幾多の尙早論は起りたることとなるべく其の論據とする所も亦た時機尙ほ熟せずと云ふにありしならん、死刑にして維持の必要ありとならば即ち止む、苟くも惡刑として當然之を廢止するの止むべからざるものなりとせば時機の熟せるや否やと云ふが如きは深く之を顧るに足らざるなり、況んや各國刑事統計表の一般に示す所あるが如く我國にあつてもまた比年、文明の進步と共に著るしく殺人其他重罪諸犯の著るしく其數を遞減するの傾向を見るの事實あるに於てをや、死刑廢止の時機は正さに今日に熟せりと云ふも決して過言に非ざるなり

十

理非の如何は姑く措き我國今日の時勢は到底また死刑廢止の斷行を見る能はざるの事情ありとせんか余は尙ほ益々不撓不屈の精神を鼓舞して天下同志の士と共に此正理の貫徹に熱注すべきこと勿論なりと雖も然かも唯た單に死刑の全廢を主張し全廢にして行はれずんば萬事休すと放言し去り其間幾分にても吾人が終局の目的とする所に向つて其の步武を進むるの手段方法あるをも悉く之を捨てゝ顧みざらんと欲するが如きは抑も亦た余が所信を貫くの道に忠なるものとは謂ふへからす、世、或は余を目して姑息の說をなす者なりと非難するものあるへしと雖も余は余の宿論を幾分にても之を實行するに至らしめんことを欲するに熱心なるが爲めに今此に本論を結はんとするの時に方り若し愈々死刑全廢の行はれさる場合に於て如何せは能く有害なる死刑の濫用を防くを得へきや又如何にして能く吾人の目的とする所に向つて幾分にても其の步武を進め得へきやの方法に就き一言を費して以て世論の參考に供し置くの必要あるを信す、此の場合に處する余が提案の概要は即ち左の如し

（第一）死刑は殺人犯の一種類に限りて之を維持すへし、內亂罪、外患罪、放火罪、溢水罪等に死刑を適

用する場合は斷然之を全廢するを要す

(第二)精神狀態の健否如何に拘はらず死刑を言渡すべき犯罪者に就ては其都度、必らず專門法醫學者をして犯罪能力の程度如何を審査鑑定せしむる所あるを要す

(第三)死刑を宣告すへき者に限り必らず立會裁判官の全員一致の贊同あるを要す、一人にても異議あるの場合に於ては死刑の宣告を爲すこと能はさらしむへし

(第四)死刑執行の命令を求むるの場合に於て其の特赦減刑の必要ありと認むるものと否とに拘はらず司法大臣は總へて其の意見を具して裁可を仰き特赦減刑を下し賜はる聖旨を畏みたる後に非されは即ち死刑の執行を命令すること能はざらしむるを要す

(第五)死刑の執行は裁判官をして自身に之れに當らしむることを要す裁判官にして若し不便の事情ありとならは檢察官をして之を執行せしむるも亦た不可とせす昔者王者自ら刀を執て罪人の首を刎ね中頃僧正に委ね更らに法官に移り終に降つて獄吏の掌る所となり一層墮落して一私人の請負賤業となるに至れり余は此歷史ある所に就て之を見るも死刑に對する民想の推移即ち倫理道德の觀念に背戾する行爲たるを認識するに至りたる文明民想の一斑を證明するに足るへしと信する者なりと雖も苟くも死刑は千古の理法に適する公明且つ神聖なる刑罰として之れが維持を必要とする以上は宜しく公明且つ神聖なる裁判官をして之れが執行の局に當らしむること蓋し合理的至當の措置なりと謂ふべきなり

(第六)裁判官又は檢察官にして自ら執行の局に當ること能はずとならば宜しく一私人の受負事業たらしむること我が幕政時代の如く又歐米死刑維持國の現況の如くならしむることを要す、何れの國か今日また獄吏をして死刑執行の局に當らしむるが如き所之れあらんや、裁判官にして自ら之れに任すること能はずとならば獄吏(押丁)も亦た之を峻拒せざるを得ず、余は寧ろ今日に於て社會が最も賤み且つ憎む處

の業務をば甘んじて之を執行する處の獄吏あるを怪む、少しく事理を解する者の必らず之を峻拒すべきは勿論にして早晩、終に一人の之れに應ずる者なきに至るべきは明らかなり、假りに之れに應ずる者ありとするも此種の者を吏員の一人として（たとへ最下級の者なるにせよ）使用するは監獄行政の汚辱にして又大不利益なりと謂はざるを得ず

（第七）絞殺を廢し斬殺とすべし、何となれば絞殺は獨り我が國風に適せざるのみならず（外國に於ても絞殺を用ふるは英國丁抹等に過ぎず）絞架場を監獄内に常設し置くが如きは經濟上に於ても體裁上に於ても將た監獄行政の目的を達する上に於ても少からざる不利あるを免かれざればなり

モンテスキュー曰く達識なる立法者は先づ如何せば能く犯罪を未前に豫防し得べきやを研究し而して後始めて如何にせば能く犯罪に刑罰を適用し得べきかと考察す、立法者たる者宜しく先づ刑罰を制定するの前に於て先つ如何せば能く一國の風敎を維持矯正し得べきかと審案する所あるを要すと昔者舜、先つ棄に命じ穀を播て以て民の身を養はしめ次に契に命し敎を敷て以て民の心を善にせしめ而して後皐陶に命じ刑を理して以て民の彝を桀けしめ又申るに明允の戒、立敎弼敎の箴を以てす、帝王の治、必ず次序あつて而して刑を用ふるの間、深く欽恤の意を致す所あるを見るに足るべし、所謂皐陶の刑は徒刑に非らずして乃德敎也もの是れなり、今日の立法家たるものまた徒らに刑罰の末に其心を專注するが如きことなく更らに大に其本に就て如何せば能く下愚の耳をして慓々乎として心を革め敎に從ひ以て其身を全ふせしめ得るかと考究一番する所あるに至るを得ば天下の幸、何ものか能く之れに如かんや

畢竟するに刑罰は他の宗敎、道德、敎育、政治、風俗等と相俟て僅かに其缺陷の萬一を補ふ所の治世の一具たるに過ぎず、今はまた刑罰萬能力を認めたる中古時代と其時勢を同ふせず、死刑に依るに非らざれば則ち一國の治安を保全せしむる能はずと謂ふが如きは抑

も亦た文明今日の風教道德を侮辱するの甚しき者に非らずして何んぞや、昔者子產、能く猛術を用いて鄭國柔懦の俗を化したりと言ふと雖も子產の鄭に相たること十八年其間に於て僅かに三人を刑し二人を殺したるに過ぎず、而かも桃李之垂于行者、莫之援也、錐刀之遺于道者、莫之擧也、の治を効したるに非らずや、太猛は恩を傷て殘酷の弊に陷らざるを得ず、古聖の戒むる所、今尙ほ耳に新たり、立法者宜しく以て坐右の銘とすべし（完）

次號豫告

次號の本欄に掲載せらるべき論說の內容は、卷尾に附せる豫告を見よ。



支那に於ける日英の貿易

『ゼ、ウエスターン、モーニング、ニュース』

極東商業に於ける日英兩國の關係に就いては人々の少からず憂慮しつゝあるところ、今やサー、エドワード、グレー氏は起ちて我商業者の爲に盡力すること丶なれり、世には、日本は外人に對して滿洲全土を閉鎖し、自己の位置の確立を圖る、而してそは日本の貨物に對して特種の保護を爲すものなりとか、或はより大なる、東西兩半球に誇る競爭なる問題の下に、講說者は頻に英米兩國の商業の危機に迫られつ丶あるをいふものあり、實は多量の誤解が戰後の事物の實際を通曉せざるより來れるなり、日本は滿洲を以て公開地となすことを確言したり、されど其地に於て開かれたる彼の如き大戰爭の後を整理し且つ又其地をして、軍事上の見地より全く無害の處たらしめんには幾多の日子を要せざるべから

ず、戰後の整理に多大の時間を要するは我が英國が南亞征服の際にも擧みらるべきところにして、日本の現狀は決して彼が不當に遷延しつゝありとは見るべからず、日本政府は現に曰ふ、大連港は設備未だ整はず、未だ外舶を容るゝ能はざるなり、然れども外國商品をまて峻拒するにあらず、外國商品は日本の船舶なり、或は同地方のジャンクなりにて隨意に輸入するを得るなりと、吾人はその寸時も早く英國商船に對する入港拒否の禁令が解かれんことを望むもの、想ふに、サー、エドワード、グレー氏は此問題を進捗せしむることならん、更に他の誤解は、北清商業の中心地たる牛莊が一たび自由港とせられたる後にその商業が閉鎖せられたりとなすことなり、外務大臣の言によれば曾て其地は自由港とはせられざるなりと、されど、そは兎もあれ、支那をして同港を公開せしむるには幾多當然の理由も存するもの、又且つそは商業を容易に發展せしむべきを信ず、日本が多年力爭せる地域に對し、其の勝利を得たる結果として、一見優勢の利權を占め、他をして多少憂意を抱かしむるに至ることあるも、そは當然なり、今更怪むを用ひず、日露戰爭は歐人の貿易に對して大なる衰頽を與へたり、されば我商人等は今尚ほ着手には及ばざれ、その大損害を償却すべく戰後には大規模の商業を營まんと期待しつゝありしなり、加ふるに、此一大非厄の頂點に於て支那商人が亞米利加の貨物、否徃々にして、全歐洲の貨物に對する拒否同盟は結ばれたり、そは亞米利加にて發布せる、支那移民排斥法案が與へたる侮蔑に對する復讐としてなり、之が船貨並に商業に對して多大の影響あり、諸港における商況不振は更に一層となれり。



　されど之は唯過渡期の問題に過ぎず、遠からず數月間には消滅し了るべし、更に永久に亘る、より大なる問題あり、より古き、より確固なる根底を有する泰西の製造國民と、勢力あり勤儉にして、且つ敏活なる日本國民との間に、公開市上に於て生ずべき商業上の優先權の爭奪にあり、蓋し事物當然の性質として如何なる場合にても競爭者あるは免るべからず、假令、戰爭、即ち日本が大なる消費の償却を要する左る大戰爭にして起らざりしとするも、猶ほ東西兩洋の商業者が支那の市場にて競爭をなすに至るべかりしなり、日本の内地の生

産物は以て彼等全國民を養ふに足らず、耕作に適する地は僅にその全土の十二分の一に過ぎず、されば食料は外國の輸入を待たざるべからず、從つてその輸入に拂ふべき金額をば、自國貨物の輸出によりて見出さゞるべからず、而して支那は實に彼が自然の得意市場なり、英獨兩國に學びて得たる商業取引における科學的知識を以て甲裝せられ、低廉なる勞力を以て利便を與へられたる日本は、實に支那全土より歐洲人を驅逐する絶好の機會を有するに似たり、吾人は當初に歐洲諸國の需用に對してのみ器物を製作し、その製作品の一部を僅に東洋に向て輸出するもの、多少その地方の要求を參酌する程に過ぎず、然るに日本にてはその同族人種の要求するところを詳知し、而してそれ以外の製作をば爲さゞるなり、然れど我が英國商人は既に過去に於て幾多の敵手に遭遇したる經驗あり、地方商業者の爲に容易に不覺の敗北を取ることはあらざるべ



ADRIFT.
—Browne in the Chicago *Tribune*.

く、隨分對立の勢を以て、成效の自信を有して商界の競爭場裡に入るを得べし、支那には猶ほ餘地あり、而して今や大活動の時代はその利益に潤ひ得べき吾人全世界民に向つて開かれたり、貨幣をして普く流通せしめよ、富をして普く分たれしめよ、而して商貨の需要は之と同速度を以て增進すべし、敎育ある支那人は今や漸々奢侈品、贅澤品、各種の食料品、及び金屬製の器什等、凡て英國文明が彼等に齎す者の價値を知りつゝあり、彼等が此等のものを見るにつれて、その需要は愈が上に增加すべし。概括して言へば、日本は重に支那の下層民に對して最も安直なる、且つ最も耐久性ある器物の輸入を勉むるが如く、金屬製品、及び凡て優良なる製作物、即ち綿の如きものすらも、背後に器機の無限なる資本を有する英國人に取つては、その市場を擴むるに何等の困難も有らざるべし、さはいへ吾人は怜悧にして模倣力ある國民と對抗することなれ

ば、過去に於て屢々奉じ來れる商略、即ち「取れ、然らされは捨てよ」なる商略は抛たざるべからず、常に侮るべからざる敵手を有することを胸に記し、さかしく彼等得意主の必需品を知り、その地方の要求に順應するを勉めさるべからす、又内地の諸商店は彼地在住の人々より諸般の報告及び標本を得て之によつて彼地の人民が買ふべしと思はるゝ品物に對して各自の考を改むるも有益なることとなるべし。

要するに文明的、商略的方面に於て極東に應酬するに當つて、我が商業家は決して日本、亞米利加、否、如何なる他の競爭者に對しても寸毫の恐るべきものあらず、唯商業に於てはその地方の狀況に精通するを旨とすべきを知れ。



HE CAME TO BLESS— AND REMAINED TO PREY.
—*Daily Chronicle* (London).

露西亞の飢饉

『聖彼得堡ヘロルド』

地方廳の公報は益窘迫せる飢饉の新報を齎らせり、曰はく、エカテリノスラフ及びポルタワ、其他の諸州に於ては、已に苅取りて未だ收藏せざる新穀が地上に於て漸く腐敗し初めたり、是れ連日の霖雨に依て收獲に從事するを得ざるが爲也。各州廳はかくと見るより大に驚き直に穀物を給して扶恤に資せんとせり、然るに天候の不順より各地に盜賊橫行し爲に飢饉の地域は更にその慘狀播布して、隣地迄附及せしめたり。罹災地の救濟に私財を抛たんとするものは帝國自由經濟協會及び國民衞生協會の例の如く行政官の掣肘甚しく、且つ資力の不足より万事意の如くならず。赤十字社は此窮厄救助に關して議する所ありしも、固、該社組織が性質上セムストウオの庇護を藉るに非ざれば自ら進んで事に當るを得ざるものあり。

地方の新聞紙は殆んど日每に農民の飢饉の慘狀を報じ、病床に在つて然る可き苦惱の内に斃るゝもの〻慘狀を報じ。帝國自由經濟協會カサン支社は穀廠を開放する許可を得んと欲せしも、ツワトサチイウセエクの通牒に依り、其希望を抛ちて更に天然物を以て民衆を救はん事に決せり。其法一人每月一留二十コペックを施給せんとするにあり。サマラ州の農民は前年の凶作に際しては常に隣州ウラル所轄區に移住し、玆に糊口の途を講ずるを常としたりき。然るに這回はウラル所轄區に於ても糊口を失ひ窮途に哭するもの漸々たるを以て、從つて賃銀の如きも著しく低落し、獨身者は之に仍て辛くも生計の資を得と雖、家族の維持は難きに至れり。

加ふるに家畜の秣禾に欠乏せるを以て、如何にして之を飼養す可きや、之が又刻下焦眉の問題となつて人心恂々、更に安き心もなし。



EUROPEAN PACIFISM.
—*Humoristische Listy* (*Prague*).

去る新聞社の通信員が該遭難地の農舍を訪問せしに、家には已に四日間何物をも喰はずといふ老翁婦人只二箇ありて、渠等は切に空腹の苦患を訴へ、而も此間に在つて死も得ざる窮地に陷れるを語てり。輙ち一塊の白麵麭を出して之を老翁に薦めたるも、老翁は此が果して白麵麭なるか否や、遂に自己の視覺を信ぜんともせざりき、又此白麵麭は喰ひ得らる可きかと疑ひて止まざりき。更に婦人に與へたるに、婦人は幾度か之を喰はんと欲せしも敗血症の爲に意の如くならざりき。彼等は共に累日の營苦の苛酷なりし爲に之を喰ふ事をすら得ざりき。而も物喰ひ度き念は殆んど狂氣の如く襲來つて、渠等は凝然として眼を食物より離さざりきといふ。ウオルガ河畔には見る影もなき襤褸に身を纏ひたる農民が三々伍々、職を求めて彷徨せり。

此種の農民の群ハシムビルスクより絡繹としてアストラハンに向つて

流れ込み、別途の出づる所なきまゝに再び落籍す可き場合には更に其額の金を償還すへき約を以て、廿留の金に代へて要を土地の廓に賣るものもあり。六年或は七年の後に至らば、初めて小學校の統計表に於て全校生徒の約四十プロセントが飢餓の兒童となるに至るべし。二十年後には此等酸苦を嘗めたる人々は補充兵となつて、互に當時の慘狀を語らう事ならむ。

英國諸新聞のブライアン氏の演説評

『リテラリー、ダイゼスト』

倫敦に於ける列國連合議院會議に於て、ブライアン氏が爲せる演説に對しては、英國各新聞孰れも執るも贊嘆の辭以外又一語を聞く能はず、倫敦のスタンダード紙は稱して唯「雄麗」といへり、マンチエスターのガーディアン紙は、氏の演説の精髓を爲せる堅實の點は、實に當會議における幾多の演説中、最も著しきもなりといへり、更にセント、ジエームス、ガゼツト紙は曰く、氏の演説は大なる感激を與へたりと、而して更に、其理由として擧けて曰く、そは啻に能辯によるのみには非ず、一の高き理想が暗示せらるればなり、演説にして如上の二特質あらんか、人々の感脳を高めん事は確保すべしと、今少しく同紙の文を引用せん。

高遇なる見地よりして各國民間の仲裁、裁判をなすの一段を演ぶるに當つて、氏は一層その流暢の辯を振ひたり、ブライアン氏は聽衆をして暫しは四海同胞の念、世界平和の案に痛くも心緒を激動せしめたり、そは全く氏が雄辯の結果なるを思ひて、吾人は、當日の聽衆が或る範圍に限られたるを以て憾みとす、蓋し右の如き提案は獨り左る鼓吹的雄辯の力を待つて効果を收むべきものなり、平和の鼓吹が人の情緒に深く觸るゝに至るまでは調停手段もその効果を妨げらるべきものなればなりと、

ロンドンのデーリー、ニユウース紙は、其世界における感化の著大なる、西部亞米利加よりの新來訪者とのみは見ず、更に氏を以て、全然亞米利加の南部地方、ミスシツピー、ヴアレーに發達したる新文明の左券なりと評せり、デーリー、ニユスー紙は氏の仲裁裁判の提議に對しては實に一語の酬ゆべきなしといへり。

唯、一のロンドン、デーリー、メール紙あり、亞米利加の諸新聞紙が氏の説に反對すると同一筆法を云て批評を試みたり、即ちメール紙は彼の流麗の辯を有せる演説者に對して疑惑を挿めり、曰く、

斯ゝる問題に對しては雄辯も容易なり、題目にして平和ならば、經驗ある長廣舌者に取りては、典雅の語句を用ひ純淨なる聽衆に訴へんこと、之より容易なるものはあらざるべし、又それが戰爭にありとするも要具を十分に備へたる辯舌者に取りては左迄の困難は有らざるべし、奔放の辯、莊重の辭、凡ては唯天與の辯才ある老功者の舌端より迸るのみ、斯くてその問題の彼此孰れにあるにせよ、如何なる場合にも聽衆は唯炎々たる情熱の歡喜地に誘はるゝなり、之を譬ふるに、熱誠なる辯士

の感動を人に與ふるは猶ほ人氣役者のそれと同じ、その感動たるや根本的に劇場にて與ふる感動なり、斯くてそれに要せらるゝ手段も亦全然同一なり、演説は屢々一場の演技に過ぎざることあり、而して之に對する感觸は、亦屢々或る場合における、巳むべからざる誘導に出づることあり、斯ゝる技術は今日の我國に在つては、あらゆる眞摯にして智慮ある當代の階級間には既に全く侮蔑を受くるに至れり、彼にして一大治政者にあらざらんか、吾人はその長廣舌に對して寧ろ羞恥の感なるなり、吾人はさる壇上の一演技者をば信ぜざるなり、公生涯における我國の領袖は雄辯家にはあらずして、實務家なり、事業家なり、彼等は自己の事業上に於て、胸に確乎たる成竹ある演説をばなすなり、而して單に投票を贏得する機能に過ぎざる演説をば唾棄するなりと、

デーリー、ニユース紙もその結論に至りては下の如くいへり。

ブライアン氏は美はしく平和の光榮を稱へたり、されどその技術の巧緻を賞讃する外何人もそれに對して一ペンニーをも拂ふの愚を爲さゞるべしと。

ゴルキー大に米國を痛罵す

マテリアリズムの生活、金錢の絶えざる追求は全米國人が嬉々として敵てなしつゝある情慾なり、何處に行くとしても勞働あり、百物は勞働の旋渦の中に捉へられつゝあり、あらゆる人は人間と自然とに對敵せる、一の神秘的覺力の意志に服從しつゝあり、機械——冷酷にして見る可らず、測る可らざる機械の中に、人間は唯だ一の意味なき螺旋として働きつゝあるに過ぎざるなり吾人は素よりエナーヂーを尊崇するものなれども、斯の如く巨大なる精力を、單に麵包の一片を得んが爲に浪費せんことは、實に斷腸悲なる慘事と云はざる可ら、ず高樓大厦や、三角帆や、直角なる家屋や、いづくに其の美なるものを求むべき、商家商店の窓戶には、一の花卉の植えらるゝなく、いづくに行くとして一人の兒童の目に觸るゝなしと、更に皮肉なる言を進めて曰く、同じく米國に於ても最も憐れむべきは無智なる紐育人なり、かの敷石の上を忙ぎ行く群集を見よ、渠等は眞に一の奴隸たるに過ぎず渠等の顏容は平和にして、其の心情には自ら其の奴隸たることを自覺せざるなり、渠等の眼中なる「獨立」の意味は、樵夫の手に於ける斧の自由、鍛工の手中にある金槌の自由の外ならざるなり、斯の如くにして抑も何の理由あるや、單に黃色鬼——黃金の掌中なる、一の器械たるに過ぎざるなり、斯の如くして抑も何の人生の意味ぞや、夫れ眞の人生とは何ぞや、精神の全力を以て、美的に、勇敢に生活すべきことこれなり、吾人の心情を以て、全世界を懷抱すべく、吾人の思想を存在の全秘密に融和すべく、一層美麗に、多趣に、自由に、光明ある生活をなさしむるやうに、出來る丈けの努力をなすを以て、眞の人生とは云ふ、就中米國に於て最も缺乏するは審美的趣味なり、心と情の唯一の快樂たる「美」に對する渴仰の缺乏なり、米國に一の美なるものなりしと。（日本人）



杜撰なる圖書

空外史

一

近年、印刷の術盛に行はれて、圖書の出版せらるゝもの頗る多く、隨て、粗漏杜撰なるもの、世を誤るものまた甚だ鮮少にあらず。これ、眞贋を辨ぜずして、かゝる書物を購讀する世人の罪か、抑又、これを供給する作者の罪か。今の世の人や、書を讀むものも、書を作るものも、共に濫なり。書を讀むもの必ずしも深く究めず、作るもの亦然り。昔の人の書を讀む、韋編三たび斷ちぬるもありきとかや。今の人は再讀することすら殆ど稀に、多くは一讀、轉讀、只僅かに數葉を繙いて、空しく書架に積みおくを常とす。作る者また生かぢりの書物を通譯纂譯もしくは剽窃して、おのれの作とし、編とし、只時好に投じて利を得んとす。讀むもの、作るもの、滔々として輕薄者流、讀むものは獲ることの博きを貪りて究むることの深きを欲はず、作るものは作ることの多きと早きとを誇りて利を得ることの少きを憂ふ。粗漏杜選の圖書の續出するも、げに宜ならずや。

頃者國民新聞を讀む。二人の學者先生あり。一日一堂に會して、談たま〱著作の事に及びぬ。一方なる先生の曰はく、貴下の著述はいつも世に歡迎せられ、小生の作は常に受けわろし。私に思ふに、學識といひ、文章といひ、小生決して貴下に劣れりとは信ぜず。然るに、貴下の著述の世に歡迎せられて、小生の作の受けわろきは、何故ぞや。貴下には必ず何等かの秘訣あるべしといへば、他の先生の曰はく、貴下は何を相手に著作せらるゝか。いふまでもなし、世の識者に問はんが爲なり。果して然るか、然らばそは拙者と異なる所

なり。拙者は人間を相手に著述は仕らず、狐狸の動物を相手に著述するなりといへりとかいふこと見えたり。今の著作者、世の人を熊や狐狸とおもひて著作するものあらば、なほ幾分か頼もしき所もあるべけれども、這般の見識だになきが多きが如し。然も、世の人は、みづから馬や鹿となつて、只書物を需めつゝあるなり。

二

われ、今夏、所要ありて、屢『國書解題』を繙きぬ。此の書は、誰も知れらんごとく、佐村八郎氏の著作にて、井上圓了、井上哲次郎、井上頼圀、今泉定介、上田萬年、遠藤利貞、岡倉覺三、尾崎德太郎、落合直文、河田羆、木村正辭、栗田寛、小杉榲邨、重野安繹、島田蕃根、白井光太郎、關根正直、高津鍬三郎、田中稻城、谷本富、坪井正五郎、鳥居忱、內藤耻叟、那珂通世、中村清二、西村茂樹、芳賀矢一、萩野由之、畠山健、服部宇之吉、平田盛胤、三上參次、三宅秀、三宅米吉、宮崎道三郎、物集高見、本居豊穎、渡邊又次郎、和田萬吉先生の校閲を經たるものなり。校閲者は當代屈指の學者先生にて、作者はまた八年の星霜を費して業を卒へぬといへり。而して又、わが繙きたるは增訂せるものなり。かゝる校閲者とかゝる經歷とある此の書の、惡しかるべき筈なきに、世評は兎角面白からずとも聞きしが、親しく檢するに至つて、甚だ粗漏なる所あるを見たり。試に、その二三の例をいはんか。西行法師の家集『山家集』に、刊本二卷の『山家集』と寫本一卷の『異本山家集』とあることは、大方の人の熟知することとなるが、『國書解題』には、

山家集、二卷、僧西行。著者の家集。著者嘗て自ら選して、禪僧周嗣（頓阿時代の人にして、其の歌『新千載和歌集』等に入れり）といへるものに與へたるを、法勝寺僧坊の火災に燒失したり、後周嗣舊の如く違へず書を成せる由にて、此の書今一卷に寫傳せり。同書には觀應二年辛卯（一〇一一）七月、周嗣の奧書あり、云々

とあり。西行が頓阿時代の周嗣に與へたりとは、旣に

錯誤も稍〻滑稽に類するまでに甚しきに、『異本山家集』と混同して解題せる、更に甚し。これ、蓋し、『群書一覽』に、『異本山家集』の奥書とて、「此集周嗣禪師不慮被レ相ニ傳西行上人自筆一之處、於ニ法勝寺僧房一燒失問尋ニ他本一書ニ寫之一」と載せたると稍〻これに類したる尾崎雅嘉の考按とを誤讀し、更に之を刊本の『山家集』の上に引用したるものなるべし。また、慈鎭和尙の家集『拾玉集』の解題下に、『異本拾玉集』の奥書とて、「右慈鎭和尙御詠等採ニ撫舊草一仰ニ慶運一令レ類レ之（中略）、于時嘉應三年（一八三一）五月二十一日難波津末流我立杣不才判記」とあるは如何。これ『群書一覽』にも載する所、原本果してかくの如くなるかを知らずといへども、嘉應は高倉帝の御代、こゝに嘉應とあることの誤謬なるは勿論なるに、一言のこれに及ぶことなくして、その誤謬を踏襲したるは、杜選なる譏を免れざるべし。その外、『稜威言別』を神代記の和歌を拔き出て、註釋せるものとしたる、『百錬鈔』を大治比より正元元年比に至る雜事を記したる記錄としたる、『奥儀抄』に、『詠歌大概抄』に、『常緣集』に、『連歌新式追加並新式今案等』に、『連歌新式抄』に、かれに、これに、事實の誤りあるもの殆ど枚擧すべからず。況や、記事の不完全にて意味の曖昧なる、或は取捨を誤りたるなどをや。

『國書解題』に收むる所、無慮二萬餘部、多少の誤謬は免れざるべし。されども、わが檢せしは全部にあらず、只僅に國文學に關する書物の一小部分數十種のみ。これ、或はわが檢せし部分にばかり偶然にも誤謬ありて、他の部分には些少の誤謬なしとするも、一部分について既に幾多の誤謬あるを見たるもの、他の部分には全く之なかるべしとて、安心して、信頼するを得んや而して、かくの如きもの、獨り『國書解題』にのみ限るにあらず。

三

われ、先年林諸鳥の編述せる『紀記歌集』について知らんとすることありて、『文學者年表』『國書解題』『國學者傳記集成』を見て、一驚を喫せしことありき。當時、わが知らんと欲ひしは、第一に『紀記歌集』の刊行

の年なりき。『文學者年表』に『紀記歌集』を記せるもの二ヶ所、而して、その刊行の年は、何れも天保八年と記したり。『國書解題』には天明八年と見ゆ。『文學者年表』は赤堀又次郎氏の選する所、赤堀氏は、博學にして謹厚、苟くせざる人なり。既に信憑するに足る。況や、記する所二ヶ所、共に天保八年といふ、十分に信ずべきなり。然れども、問題は事實の問題なり、その人單に信憑すべしとて、そのまゝ之を採るべきにあらず。われは、此に於てか、止むなく原本について之を檢しぬ。固より活字の誤植に過ぎざるべけれど、『國書解題』の正しくて、『文學者年表』の誤れるを知りぬ。やがて、わが所要は編者諸鳥の生存年月に及びぬ。『國書解題』に小傳あり、記して曰はく「林諸鳥は賀茂眞淵の門人なり、江戸の歌人にして、寛政六年甲寅(二四五六)、八月十九日歿す」と。偶々上田萬年芳賀矢一氏等の校閲に成れる『國學者傳記集成』の配達し來れるもの、机邊にあり。即ち繙いて之を見る。生歿を記して曰はく、「生、二四〇五、櫻町、延享二年。歿、二四五四、光格、寛政六年六、一九。年、五十」と。『解題』は享年を記さゞるに、之には享年を記したる、甚だうれしき心地せらるれど、歿去の月に、かれとこれとの相違あり。これ、はた、活字の誤植なるべけれど、何れを採らんに由なし。『傳記集成』の引用書、關根只誠の『名人忌辰錄』上(集成に下とあるは誤也)なるを見て、即ち溯りて、更に同書を見る。『傳記集成』は正しかりき。然れども、『傳記集成』もまた生年と享年とを記したるに誤あり。『忌辰錄』に曰はく、「寛政六寅年六月十九日歿す、年五十餘云々」と、餘の字別行の頭にあり。『傳記集成』の編者は、輕忽にも、年五十までを見て、餘の字あるに氣付かず、こゝに年五十と記し、更に念入りにも逆算して、生年をも記したるなりけり。『文學者年表』『國書解題』『國學者傳記集成』、皆何れも、無くて叶はぬ參考書ならずや。而して、只單に一『紀記歌集』の如何なるものなるかを知らんとして、之を檢すれば、かれに誤らざるものはこれに誤あり、これに誤らざるものはかれに誤ありて、つひに原本に溯つて之を檢

ざるを得ざらしむ。かくては、參考書たる價値、いづくにか存すべき。原本に溯つて檢出する暇あるもの、なほ或は可なり、二重の手數をかけて時間を浪費することを忍びうるもの、なほ或は可なり。これに據つて直に用を辨ぜざるべからざる徒は、安んじて、之に據るを得ず、もし、輕卒に之に據らば、或はおのれの知らざる間に、誤を世に取次ぐの愚と害とを敢てせざるべからざるなり。寒心すべきことならずや。然れども、これはこれ、此の三書についてのみ言ふにはあらざるなり。こは只一例のみ。日々世に出づる書について、一々仔細に之を檢せんには、粗漏杜撰のもの半に過ぐべきか。

四

世には、校閲者の名を假りて書を賣らんとするものあり、校閲者の名を假して些少の報酬を得んとするものあり。名を假すものと名を假るものと、只利あるのみ、おのれの責任の重大なるものあるを顧みざるなり。こゝに於てか、粗漏杜撰なるもの、世に弘められて害毒を流すに至る。かの『國書解題』の校閲者の如き、自ら省みて、果して其の責任を十分盡したりと信ずるもの幾人かある。多數の中なれば、五六の人、或は其の責任を重んじて、親しく校閲の勞を執りたるものもあらん、われは、現に、この有用なる著述の大成を助けんとて、無報酬にて校閲の勞を執りたるものあるべしと信じ、且つ信ぜんと欲す。然れども、此の種の書物は事實を記するものなれば、十分に校閲の責を負はんとせば、一々實地に調査して、殆ど同樣の書物を別に作り上ぐる覺悟あらざるべからず。然らずば、如何に專門の博學なる學者先達なりとて、これだけ多數の事實を悉く暗記して、些の誤なきを得んや。されば、かの『國書解題』の如き記實の書物には、如何に多く校閲者の名を掲ぐとも、所詮は有名無實、只これによつて書物を賣らんとする著者の陋劣を世に表するに止るのみ。校閲者としては、あまりに無責任にして、愼重の態度を缺くことを披露するが落なるべし。われは、勿論、『國書解題』の著者に此の陋劣あり、校閲者に此の無責

任不愼重ありと信ずるものにあらず。一例を擧げていへば、眞面目なる校閲も、浩瀚なる記實の書物に於いては、かくの如き結果に陷ることを言はんが爲のみ。まして、眞面目ならざるもの世に多ければなり。校閲者の名に信憑すべきものあらば、そは極めて小なる記實の書物か又た談理の書物に、眞面目なる校閲者を得たる時にあるのみ。かの序跋に、その書の効益を說いて、その書の價値如何を知らざるの徒は、所謂、借金の證文に、盲判を押して、保證に立つ大慈善家のみ。

五

書物には、その性質上有用なるものと、然らざるものとあり。無用なるもの丶誤謬多きは、さまでその誤謬を問ふを要せず、根本的に無用なる書物の、一日も早く、跡を絕たんことを望む。有用なるもの丶誤謬多きは、有名なるだけに、之を用ふる範圍廣ければ、その害を傳ふことも亦大なり。

書物には、容易く著作し得べきものと、容易く著作し得ざるものとあり。容易く著作し得べき性質の書には、類書數多續出すべければ、惡書漸次に陶汰せられて、害毒を流すこと久しからじ。容易く著作し得ざる書物は、之に反して、類書の出づること稀なれば、害毒を流すこと、隨て久しかるべし。

今の世や、有用なるべき書物の、容易く著作し得ざるものにて、一夜づくりの粗漏杜撰なるもの多し。輓近の流行なる辭書の出版の如き、その一か。有名なる學者の名を冠せるもの、殊に粗漏杜撰なるもの多しと聞く。學校に出で丶、學生に敎授などする片手間に、名もなき數人の下職を使つて、一ヶ年に幾種かの書物を濫造する書物製造業者（著作家とは言はず）の手に成りたるもの丶、良好なるべき筈なければなり。もし、新聞もしくば雜誌などにて、書物大製造家、書物大校閲者、書物大盲判人といへる如きものを擧げて、普く世人の投票を求めて、それ〲の先生達の高名を世に知らしめおかば、書物購讀者の參考ともなるべけれども、さしかゝりたる用にも立つまじければ、まづそれまでは、作者と校閲者との經歷と人格とを見て、十分

に吟味を遂げ、更に識者にも質して、のちに、之を購ふべきなり。『言海』といへる辭書は、幾多の誤謬あるにも拘はらず、語數の乏しきにも拘はらず、その後數多の類書出來たるにも拘はらず、今日もなほ世に歡迎せらるゝものは、『言海』ほどの辭書なきによるにあらずや。世の濫造せられたる辭書の價値なき、以て知るべきなり。新刊の書出でたりとて、深くもその内容を究めず、當座の用に足ればとて、もしも粗漏杜撰なる書物を購ふことあらば、粗漏杜撰の書物は、何時までも、跡を絶たざるべし。かくてはそれらの購讀者も、書物製造業者と共に、社會に害毒を流す罪の一半をば負擔せざるべからず。一老婆あり、御堂の側に住み、雀を捕へて賣るを業とす。御堂に詣づるもの、購ひて之を放ち、以て慈悲善根を施せりとなす。世の人亦これを見て、老婆の惡業をにくみ、參詣者の善根を稱す。知らず、捕へて賣ることの惡業にして、購ひて放つことの善根なるか。今の杜撰なる圖書を作るものと、購ふものと、大に之に類するものあらずや。

三大戰の發動點たりし宇品港

——外征戰士の忘る可からざる其地の來歷——

在廣島　丁　字　樓

三幡港を岡山港と云はぬが如く、宇品港も廣島港と呼ばぬ爲、三幡港の岡山に於けるとは、其便否同日の談にあらざるにも拘はらず、矢張りそれを二つの離れ物と視做して、世人は大抵宇品町の廣島市内であり、又宇品港の廣島市に關することを知らぬのである。しかも宇品港は廣島灣内に於ける、一碇泊場であつて、其地は正に廣島市の南關となつて居るのである。

鐵路廣島市に入る者は、東よりすれば廣島驛、西よりすれば己斐驛に下車するのであるが、廣島市は此外に、尙一つの車站を有つて居るのである。それは橫川驛で、その地は己斐と同じく、市の一部ではないけれども、また均しく接續市街である。此陸上の三方口に對して、海上に向つて開かれて居るのが、唯一の宇品港である。

旅客は今日、宇品港に到つて、其築港者が苦心經營の跡を訪ねるとは出來ても、しかも其處に、一つの紀念をも見出し得ぬに失望するであらう。其築港者は誰かと云へば時の廣島縣令であつた、千田貞曉氏其人である。廣島市は此築港者の苦心を諒として、築港紀念碑を建設する計畫はあるけれども、前後三大戰を經て、尙未だ其計畫は實行されないのである。此三大戰に於て、宇品港は、軍事の上に大用された爲、廣島市は至大の影響を被つて、土地の繁昌は其度每に、非常の進度を以て加はり來たにも拘はらず、まだ一つの築港紀念碑すら建設されぬのである。こは公義に於ても、私情に於ても、甚だ忍びない所であるが、ただ先年千

田氏が、宮崎縣知事として、在任中、病篤うして、殆んど館舍を捐てんとする場合に立到つたとき、廣島市が特に使を派して、見舞金壹千圓を贈つたのは、千田氏に取つて、せめてもの慰めであつた。

さて三大戰とは、何であるか、それは言ふ迄もなく、日清戰爭、北清事變、日露戰爭である。この三大戰は、日本が大陸的發展の發程として、有史以來曾て有らざりし大活動を、亞細亞大陸に試みたのであつて、此程の盛事、此程の偉業は、我々の祖先が曾て爲し得なかつた所である。殊に北清事變は、時間も人數も、共に少かつたけれども、事苟くも列强に關係して、我國が其主動者になつたのであるから、此位重大な、此位光輝ある事業はなかつた。之こそ、ほんとの人道的の働きであつた。

さて此三大戰に於て、宇品港はいつでも、其大事業の發動點となつて居た。大軍はいつでも、こゝを出發點として、上は總司令官より、下は一雜卒に至る迄も、或る感慨を、深く其心の底に刻んだのである。古來此位軍事に大用された所はないし、又此位、世界中いづれの國の人々にも、其波動が一種の音響を與へた所はあるまい。宇品港は、この三大戰、否、帝國の軍事、否、帝國の大陸的發展とは、いつまでも聯想を絶ち得ぬ所である。帝國に於ては、古今を通じて、此位の名所が、何處に在るであらうか。

言ふと勿れ、宇品港には、他に之ぞと云ふ事もないと。宇品港は唯、軍事の上に大用された事の一つで、已に充分である。この以外、いまだ何事にも大用されないのは、遺憾至極の事であるにもせよ、既に軍事の上に大用された丈で、充分千田氏の志は酬いられたと謂つて可い。若し同港が、軍事の上に大用されなかつたならば。廣島市民にすら、尙いまだ其眞價は認められないで、その埠頭の一部は、寧ろ草萊に委して居つたかも知れない。然るに幸ひにして、軍事の上に大用された爲、千田氏が折角の苦心も、その甲斐あつて、同氏も「宇品港の築港者」たる榮譽を、永久に其身に荷ふこととなつた。

しかし今から二十年前の、其築港の昔に遡つて、考へて見ると、同氏は迚も斯る榮譽を荷はうとは、夢にだに想ひ到らなかつたであらう。抑も同氏が、廣島縣令として、任に廣島の地に來たのは、明治十三年の事であつたが、當時の宇品は、潟上幾里白砂遠く連りて、滿潮を俟たなければ、艀舟も小船も、川口に進むとが出來ぬ爲、昔廣島潟内の宇品島(今、廣島市内に編入されて、元宇品町と稱するのは此島である、尤も今は已に宇品町と連接して、居るのである)に繫留して、空しく時を過したのである。それと云ふのも、年々上流(太田川)から土砂を流す爲、その川口を塡塞されるからの事で、有志者も其不便不利を歎いて、種々方案を運らしたけれども、其着手を難んじて、徒らに歳月を送つたのである。折から千田氏が來任して、鋭意築港を思ひ立つたのは、一大奮發であつた。

しかし之は、なかなかの大事業であつて、巨額の資金を要する爲、百万苦慮したのであつた。恰も好し是時、舊廣島藩主淺野侯爵から、士族授産資金を縣廳に委囑してあつたし、又政府でも士族授産金を貸付けると云ふので、此資金を以て新開墾地を築き、之を士族に附して、永く其裏に頼らしめやうと云ふ計畫を立てた。そこで士族授産所では、士族團體たる同進社に諮つて、右兩資金を流用して、工事を贊助したいとの事を上申したのである。一方に其事の有るため、大いに力を得て、築港の資金は、之を廣島市及附近町村の有志から募つて、事業を起さうとしたところ、有志はいづれも多年の希望が、こゝに成し遂げらるゝと云ふので、續々贊成して、貲を捐て事を助けやうと言ひ出たのであつた。

そこで築港の設計を立てゝ、工事は之を在東京の服部長七に托し、石材は其製造に係る人造石を用ゐる筈で、貲金も余程節約されて、概算

萬餘圓を要する豫定であつた。して明治十七年二月政府に稟申し、同年五月允許を得、漸々工事に着手したのは、同年九月五日であつた。

然るに事屢々豫期に違うて、工事進行中、豫想外の故障を生じたばかりか、

明治十八年二月には高潮の爲に堤防を破壞せられ、

翌十九年三月にも再び破壞の厄に遭ひ、

同年九月には又再三の暴風雨に遭ひ、中にも同月十七日の風潮は、既往數年間の實測點以上に達した爲、又堤防は破壞せられ、潮水は氾濫し、工事は一層困難を加へたのである。

しかも工事の因難は、猶忍ぶ可してあつたが、到底忍ばれないのは、豫算外の經費を要することであつた。即ち

　　最初八萬余圓の豫算は
　　　結局參拾萬四百四拾貳圓余の巨額

を算するに至つたのである。

斯て其築造した土地面積は、

　六十二萬八千百卄一坪

　内譯

　　宇品市街宅地　四萬六千七百五十九坪余
　　開墾畑地　五十壹萬三千三百坪余
　　道路堤防　六萬八千六十一坪余

であつた。而して其起工は、前記の如く明治十七年九月五日であつて、全部の工事竣成は明治二十二年十一月三十日であつたから、其間全五年と二ケ月余を費したのであつた。

此五年二ケ月の間に於ける、千田氏の苦心慘憺たりしとは、實に名狀す可からざるものであつたと聞いて居る。然うであらう、八萬余圓の豫算が、參拾萬余圓になつたのであるもの。市民が之に草臥れて、不平の聲の漸く高くなつたのも、已むを得ぬとてあつた。しかも爲しかけたる事業は、成し遂げればならぬから、氏は非常の熱心と男氣とを以て、その終極點まで猛進したのであつた。

當時氏が、遂に其私財を抛つて了つたと云ふとは、今も猶、市人の語り傳へて居る所である。シテそこに種々の面白い逸話を、遺して居るのであるが、その一つは斯てある。

廣島から四方二里半ばかり、瀬戸内海に面した沿岸の地に、草津と云ふ所がある。その地の素封家で、(先代の)小泉甚右衛門と云ふ人は、千田氏とも昵懇の間柄であつたが、或日千田氏が同家を音づれたので、小泉氏はいろ〳〵饗應したけれども、どうしても手を着けないで、「イヤ今日は、一つお願ひが有つて來た、それを聽いて貰はない間は、御馳走にもならぬ」との事なので。何かと聞けば、「是非共參萬圓の金が要る、それが無くては赤い着物を着ればならぬ」と云つて、如何にも苦心して居られるらしく見えた。そこで小泉氏は、「宜しい、それは一週間の内に、私が調へませう」と快諾して、さて其翌日、先づ廣島市内の素封家保田八十吉氏に車を飛ばし、順次他の有志者をも歴訪し、奔走最も勉めて、期を愆まらず、調達したとの事である。

斯樣に千田氏の苦心は、容易ならぬ事であつたが、明治二十七年十一月、野津道貫(時の第五師團長)、鍋島幹(時の廣島縣知事)、船越衛(廣島縣出身の先輩)など云ふお歴々か、發せられた宇品築港紀念碑建設の趣意書さへ、今に反古にもならず殘つて居て、僅に五千八百拾九圓なにがし(當時の豫算)の事業が、十二年後の今日迄も出來ずにあるのは、殆んど**不思議の一**ではないか。是に付ても、八萬余圓の豫算が、參拾萬余圓に上つたにも拘はらず、猶遣り通した千田氏の褒いとが、一層よく知ら

れるのである。

冀はくば、氏が折角の苦心經營の跡を、將來は啻軍用のみならず、通商貿易の爲にも大用して、(一)清韓兩國への輸出入、(二)遠洋漁業の發動點、(三)中國航運の中心たらしむるに於て、一層その力を盡して貰ひたい。之は余が、切に廣島市民に望む所であるが、今はたゞ、三大戰の發動點であつた、宇品港の略歷を記して、聊か世人の參考に供するばかりである。

エスペランド語の要領

藤田季莊

第八則〔働詞 Verb〕

働詞は人称 Person 數 Number 性 Gender を區別せんが爲めに變形することなし、唯樣法 Mood 時限 Tense を識別せんが爲めに變形するのみにして恰も日本語に於けるが如し

働詞の變形 Conjugation は其語根又は語基に一定の語尾を附加するものとす、而して其種類は即ち左に示すが如し

直說法 Indicative Mood 現在 Present Tense は as を語尾とす

Mi faras 我は爲す	Mi prenas 我は取る
Mi vidas 我は見る	Vi faras 汝は爲す
Vi prenas 汝は取る	Vi vidas 汝は見る
Li faras 彼は爲す	Li prenas 彼は取る
Li vidas 彼は見る	
Ni faras 我等は爲す	Ni prenas 我等は取る
Ni vidas 我等は見る	Vi faras 汝等は爲す
Vi prenas 汝等は取る	Vi vidas 汝等は見る
Ili faras 彼等は爲す	Ili prenas 彼等は取る
Ili vidas 彼等は見る	

直說法は主體 principal, independent の文章にあると副體 subordinate, dependent の文章にあるとを問はず凡て確定の事實を示すに使用するものとす

現在は凡て現在に屬する事實を示すに使用するものにして語勢を強からしめんが爲め過去又は未來に屬す

る事實を示すに代用することあり

直說法過去 Past Tense は is を語尾とす

Mi faris 我は爲せり　Vi prenis 汝は取れり
Li vidis 彼は見たり　Ni faris 我等は爲せり
Vi prenis 汝等は取れり　Ili vidis 彼等は見たり

過去に屬する事實の界限を明白ならしめんが爲め働詞 est-i（ある）の過去 estis に指定する働詞の行働態過去分詞を加へて之れを示すことあり、縱令 Kiam li eniris, mi estis fininta mian laboron（彼れ入來せる時我は我が作業を爲し終りたり）又は Mi jûs estis elirinta, kiam vi alvenis（汝が來着せるの時に當り我は外出したり）の如し。

多少の時日を經過したる事實の狀態を示さんが爲め働詞 est-i（ある）の現在 estas に指定する働詞の行働態過去分詞を加へて之れを用ゆることあり、但し狀態を示さんとする場合のみに限る、假令 Li estas alveninta jam de du horoj（彼れ來着してより既に二時間經過せり）又は Ho! jam de longe ili estas mortintaj（嗚呼彼等死してより時を經ることに既に久しきかな）の如し

直說法未來 Future Tense は os を語尾とす

Mi faros 我は爲すならん、Vi prenos 汝は取るならん、
Li vidos 彼は見るならん

未來に屬する事實が一定の界限を經過する時現在の事實に轉ずべき狀態を示さんが爲め働詞 est-i（ある）の過去 estis に指定する働詞の行動態未來分詞を加へて之れを用ひ猶ほ其前に副詞 tuj（直ちに）baldaŭ（速に）又は tre baldaŭ（甚だ速に）を附して狀勢を明かにすることあり、假令 Mi estis tuj peronta, kiam vi venis helpi min（汝が我を救はんとして來れる時我は直ちに死せんとせり）、Vi estis baldaŭ sukcesontaj, se vi estus-havintaj ankoraŭ iom da pacienco（汝等若し猶ほ忍耐を有したるべからんには汝等速に奏功せんとせしなり）の如し

未來に屬する界限に到達したる時第一定の事實發生せん事を示さんが爲め働詞 est-i（ある）の未來 estos

に指定する働詞の行動態過去分詞を加へて之れを用ゆることあり、假令 Mi estos farinta（我は爲したるならん）又は Tuj kiam mi estos ricevinta vian leteron, mi foriros（我は汝の書束を領したるに至らん時直ちに出發せん）の如し

條件法 Conditional Mood は us を語尾とす

Mi farus 我は爲すべきならん、Vi prenus 汝は取るべきならん、Li vidus 彼は見るべきならん

條件法は一定の條件又は狀態を具備すべき時に於て發生すべきものと想定する事實或は一定の事實を發生せしむべき未定の條件又は狀態を示すに使用するものとす、即ち接續詞 se（若し‥‥せば）、supozite（‥‥と想定せば）等を要する場合多きもの是れなり

過去に於て發生すべかりしものと想定する條件又は狀態を示さんが爲め働詞 est-i（ある）の條件法 estus に指定する働詞の行動態過去分詞を加へて之れを用ゆることあり、假令 Mi jurus ke li estus veninta sen tiu kontraŭaĵo（我は彼が此障害なくして來りたるべからんと斷言すべきならん）、cu estas Kredeble ke ili estus konsentintaj pri tio?（彼等が之れに同意したるべからんとは信じ得べきなるか）の如し

命令法 Imperative Mood は u を語尾とす

Faru 爲せ、Prenu 取れ、Vidu 見よ、Ni legu 我等をして讀ましむべし、Ili venu 彼等をして來らしむべし、

命令法は命令、强要、志望、冀願を示し亦接續詞 por ke（‥‥せしめんが爲め、‥‥ならんが爲め）を冒頭とする文章中に使用するものとす

既成の事實なるべきを要する場合には働詞 est-i（ある）の命令法 estu に指定する働詞の行動態過去分詞を加へて之れを示すことあり、假令 Estas necese ke mi estu fininta antaŭ lia reveno（彼の歸還前我が終了したるべきを要するなり）、Mi dezirus ke li estu alveninta, kiam vi foriros（我は汝が出發せん時彼の來着したるべきを冀ふべきならん）の如し

不定法 Infinitive は i を語尾とす

Esti 在る、Fari 爲す、Preni 取る、Vidi 見る、Legi

讀む、Veni 來る、Pensi 思ふ

過去に屬する場合には働詞 est-i（ある）に指定する働詞の行動態過去分詞を加へて之れを示すものとす、假令 Esti farinta（出來してある）、Esti fininta（終了してある）の如し

前置詞 por（爲め、爲めに）、anstataŭ（代りに）、antaŭ ol（前に）に限り不定法の前に置くことを得、縱令 Por kuri（走る爲めに）、Anstataŭ drinki（飲む代りに）Antaŭ ol manĝi（食ふ前に）の如し

分詞 Participle 行動態 Active Voice を示すものは nt を語尾とし受動態を示すものは t を語尾とす

現在を示すものは該語尾の前に母音 a を附し過去を示すものは i を附し未來を示すものは o を附するものとす

分詞は其作用の如何に據り更に各自に該當する語尾を加ふべきものとす、即ち、名詞の作用をなすときは更に語尾 o を要し形容詞の作用をなすときは更に語尾 a を要し副詞の作用をなすときは更に語尾 e を要するものなり

即ち左の表中に示すが如し、但し引例として働詞 pren-i（取る）を用ゆ

		（形容詞）	（副詞）	（名詞）
現在	行動態	prenanta	prenante	prenanto
	受動態	prenata	prenate	prenato
過去	行動態	preninta	preninte	preninto
	受動態	prenita	prenite	prenito
將來	行動態	prenonta	prenonte	prenonto
	受動態	prenota	prenote	prenoto

働詞の受動態を作るには働詞 est-i（ある）と指定する主働詞の受動態現在又は過去を結合するものとす、發動體たる語辭の前には前置詞 de（の、に、から、より、に、よりのため）を置くべし、縱令左の如し

La pordo estas fermata. 門戸は閉鎖せらる

Li estas estimata de ĉiuj 彼は衆人の敬慕する所となる

第九則【副詞 Adverb】

副詞はeを語尾とす

語辭中には本來副詞の性用を備ふるものあり、縱令 apenaŭ（漸く）、ĉiam（常に）、hieraŭ（此處に）、nun（今）、nur（僅に）、preskaŭ（殆んど）、tre（甚だ）等の如し、是等の單語は當然語尾eを要せず、但し品詞の語根又は語基より副詞を轉成せんとする時は語尾eを之れに附すべきものとす、縱令 varm-e（暖く）の如し語根は即ち varm にして之れを語尾oを附するときは名詞 varm-o（暖、温暖）となり語尾aを附するときは形容詞 varm-a（暖き）となり語尾iを附するときは動詞 varm-i（暖む、暖める）となることを得るものなり

數量を示す副詞縱令 iom（僅少、若干）、malmulte（少なく）、multe（多く）、kiom（幾何）、pli multe（猶ほ多く）、pli（更に多く）、malpli（更に少なく）、tro（餘りに、過ぎて）、sufiĉe（充分に）等が指定の名詞と結合するときは副詞の後ち即ち名詞の前に前置詞 da（の）を置くを要するものとす、即ち multe da vino（酒の多く、多量の酒）、kiom da homoj?（人の幾何か、幾何人か）等の如し

副詞の比較級を示すには指定する副詞の前に副詞 pli（更に多く、更に、猶ほ）を附し頂上級を示すには副詞 plej（最も多く、最も、甚だ）を附するものとす、縱令 pli frue（更に早く）、kiel eble plej frue（出來得る限り最も早く）等の如く形容詞に於けると同樣なり（中央公論第二十一年第九號第五十一丁を參看すべし）

第十則〔前置詞 preposition〕

前置詞の後にあるべき品詞は、其主格に於けるの形態を備ふべきものとす、但し一定の行動が同品詞に及ぶことを示す場合には其目的格に於けるの形態を備ふるを要す、即ち語尾nを附すべし、縱令 La kato estas sur la tablo（猫が机の上に居る）、La kato saltas sur la tablon（猫が机の上へ飛びあがる）、La infano kuras en la ĝardeno（兒童が庭園の内で走る）、La infano iras en la ĝardenon（兒童が庭園の内へ行く）の如し

第十一則　單語を結合して複語を作らんとするに當り前方に置くべき品詞は其語尾を除去し單に其語根又は語幹のみを後方に置くべき品詞に結合すべし、亦複語中の主腦となるべき語辭を後方に置べし、縱令vaporŝipo 蒸汽船（vapor蒸氣— ŝip 船— o 名詞の語尾）、eliri 外出する（el 外に— ir 行く— i 動詞不定法の語尾）の如きものにして其他附加する語尾の如何に據り轉成して他の品詞となすことを得べし

意義を明瞭にし又は語調を整美ならしむるの要ある時は前方に置くべし品詞の語尾を除去せずして直ちに之れを後方に置くべき品詞に結合すべし、縱令 dormoĉambro 寢室(dormo 就寢—ĉambro部室)、unuenaskita 初生の(unue 第一に—naskita 生れたる)の如し

第十二則　否定を示す文章中には否定副詞 ne（無く、……ぬ）を使用するものとす、但し既に他の否定語辭を使用する時は ne を除去すべし、縱令 Mi ne vidas（我は見ぬ）、Mi neniam vidis（我は嘗て見たることなし）、Ni aŭskultas neniau malbonau paroton(我等は凡て惡しき話を聞かぬ）、Nenin venis(何人も來らざりき）の如し

第十三則　行進して到達すべき場所又は地名を示す品詞は前置詞を使用することなくして唯目的格に於ける形態のみを備ふべきものとす、即ち之れに語尾 n を附すべし、拉丁語文法に所謂 Accusativus loci（場處の目的格）是れなり、縱令 Kien vi iras?（汝は何處へ往くか）、Mi iras domon（我は家へ往く）、ĉu vi iras Parizon?（汝は巴里へ往くか）、Mi iras tien 又は Mi tien iras（我は其處へ往く）、Ni iris Romon（我等は羅馬へ往けり）、Li baldaŭ iros Amerikon（彼は近々米國へ往くならん）の如し

「家へ」、domen,「住家へ」hejmen,（英語に於て home と謂ふとき）、「地へ」teren と謂ふ語句を示すには目的格に於ける形態を備ふる即ち語尾を附する副詞を使用するものとす、縱令 Mi revenas domen（我は我が家へ歸る）、Li Kuras hejmen（彼は家族と共ならんとして住家へ急く）、Ni falis teren（我等は地上へ倒れた

り）の如し

第十四則　凡てエスペラント語の前置詞は各自獨特の意義を有し且其使用を固定せり、然りと雖ども之れを使用すべき場合を明かにせず又は之れが選定に苦しむことある時は一定の意義を有することなき前置詞 je を使用するを得べし、但し場合に據り je 又は其他の前置詞を使用せざるも意義明瞭にして誤解を生ずるの憂なき時は之れを使用せずして品詞に目的格に於ける形態を備へしむべし、縱令 ĝoji je tio （それを喜ぶ）、ridi je tio（それを笑ふ）、enuo je la patrujo（憂國）、ridi lian malsaĝecon 又は ridi je lia malsaĝeco（彼が沒識を笑ふ）、helpi la homon 又は helpi al la homo （人を助ける）、plori la perdon 又は plori pro la perdo（喪失を悲むの如し

第十五則　歐洲諸國語中の大部分に存在する外國語にして一定の共同根源より出づるものはエスペラント語に於ても亦之れを變更せずして使用するものとす、但しエスペラント語の綴字法に據り且エスペラント語の語尾を附すべし、然りと雖ども是等外國語より轉成して他の語辭となさんとする時は基本語辭を變更せずして存留しエスペラント語の法則に從て轉成すべきものとす、縱令 teatr-o（演劇）、teatr-a（演劇の）、telegraf-o（電信）、telegraf-a（電信の）、telegraf-i（電報を發する）、tragedi-o（悲劇）、tragedi-a（悲劇の）、komedi-o（喜劇）、komedi-ist-o（喜劇演者又は作者）、filologi-o（言語學）、filologi-a（言語學の）等の如し

第十六則　冠詞及名詞の語尾は語調を整美ならしむるの要ある時之れを省略することを得、但し略符 Apostroph を之れに代用すべし、縱令 L'espero（冀望、エスペラント協會員唱歌の名題、瑞典國人アーデルスコエル Adelsköld 作曲）、Al la mond' eterne militanta（絕ゆる間なく攻め爭ふ世の中に）等の如し

附、文章の冒頭となる語辭（韻文各行の冒頭となるものを含む）及固有名詞 Proper Noun の初字は大文字にて認たむべきものとす

（五）造語

エスペランド語に於て一定の語辭より他の語辭を新たに建造せんとする時は語根又は語基に一定の前添Prefix又は後添suffixを加へて之れを編成し更に一定の品詞たらしむべき語を附するものとす

前添、bo, dis, ek, ge, mal, re 是れなり

後添、ad, aj, an, ar, ĉj, ebl, ec, edz, eg, ej, em, er, estr, et, id, ig, iĝ, il, in, ind, ing, ist, nj, uj, ul 是れなり

(長文に失せんことを慮り玆に一々説明を附することを止めたり)

貴人の敬稱を示すには名詞 Moŝto を使用すべし

第二人稱に使用する時	第三人稱に使用する時	
Via Reĝa Moŝto	Lia Reĝa Moŝto	皇帝陛下
„ Regina Moŝto	Ŝia Reĝina Moŝto	皇后陛下
„ Princa Moŝto	Lia Princa Moŝto	皇族殿下
„ Princina Moŝto	Princina Moŝto	皇族妃殿下
„ Grfaa Moŝto	Lia Grafa Moŝto	伯爵閣下
„ Grafina Moŝto	Sia Grafina Moŝto	伯爵夫人閣下
„ Generala Moŝto		大將(陸軍)閣下

等是れなり、但し單に Via Moŝto (第二人稱)、Lia Moŝto 後は Sia Moŝto(第三人稱)と謂ふ時は「殿下」、「猊下」、「閣下」の意義に共用することを得

以上掲げたるものはエスペランド語の要領寧ろ要領の一部即ちエスペラント語文法十六個則を擧げ之に多少の説明を附したるに過ぎず、即ち既に言ひたるが如く僅に其一班を窺ふに足るを期する者にして詳細の研究に至ては他に各個論題を分ちて更に記述する所あるべし、今や我國に於けるエスペランド語の研究は日々に倍々其盛なるを致さんとするに際し敢て蛇足を添へ愈々長足の進歩に著かんとを期して止まざるなり(終)



新聞紙の橋渡し（パウル、リンドウ）

大森冬夏譯

「酸多、オイ其所を通るなア酸多ぢや無いか。」

喚留められた男は、今しがた何某の事務所から出て來て、外套の鈕を懸けるやら、襟を立てるやら、得々然として廣小路を大跨に歩るいて居つたのだが、之に吃驚して歩を停め、烏鷺々々と四邊を見廻した。

喚んだ男が目に著くと酸多氏は歡極まつたといふ風に、筒抜けの胴魔聲をふりあげて、

「ヤアー、味馬か、是は、實に意外だ、眞箇に君たア夢にも思はなかつた。」

と云ひさま近寄つて。兩人は犇と握手をする。

酸多と名乘る男は早速對手の腕を己が腋下に搔込んで、威勢よく歩み續ける。

「全然だよ、貴樣と茲で遇はうなんて、乃公も夢にも思はんかつたよ。それで何かい東京で何を遣つて

るといふんだい。」

酸多君はグッと反身になつて、「ウム我輩か、我輩は衆議院議‥‥。」

「ヤア、左樣だつたな。失敬〳〵々々と。」對手の詞を皆まで聞かず、「左樣〳〵々々、酸多、辨當、棚一區選出の代議士殿だ。危い所で忘れッ了ふ所だつた。ハヽヽまア何でも耄碌士官なんて手合は碌に新聞も見んからなア。」

「フム、て君は此處て何をして居るのかな」

「我輩？我輩は暫時東京に藪入だ、左樣〳〵々々籠の內ばかりぢや全く遣り切れないからなア。適にや人間の面も見やうし、娑婆の風にも當らなくちや貴樣、營所の飯の一つも喰つた覺のある奴にやネ、馬鹿々々しくて何だよ、到底も田舍には居る氣はせんぜ。

西國筋の者が年に一度は京詣りと洒落出して、四條邊を逍遙いて、命の洗濯をせん日には、五六年は確かに壽命が縮まるといふが、全く我輩にも左樣だぜ、少くとも一年一度は東京住居だ。ヤレ歌舞伎、ヤレ明治座‥‥新柳二橋の‥‥チヽンツシャン‥‥と思ひ出し笑ひをして何やらの佐和理の文句を口の裡て唸つて居たが。取つて付けた樣に突然に。時に貴公子、昔茲いらでは隨分大騷をやらかしたもんだが、左樣、廿年もその上も以前の事だッたッけネ。オイ〳〵そんなに氣取つて見たつて駄目だぜ、いヽヽおさとは丁と知れてるよ。是て當時の驍將の隨一人だから驚く。」

オイ赤阪のあの晩は如何だつたい。ヨモヤ忘れは爲まいネエ。」

代議士は聊か面喰つたが、咳拂ひに紛らして、

「其、些位覺えて居るだらう、が先づ其樣な事より…」

少佐は透かさず、「オツト合點だ、此奴あ迂かりして居つた、此吹雪の中で昔譚もないもんだ。左樣だらう？よし、ぢや粗々右へだ。」

すると、小奇麗なビヤーホールの給仕は扉を矢庭に引明けて、酸多男爵は呆然して居る所を、此獨合點の親友から突然拉り込まれて了つた。

頓て、程よき所に座を占めると、早や賑はしく杯の觸れ合ふ音が起こる。

最初の杯を干して二番目のが入れ代り、之が二本の先輩よりは更に圖太い三番目の奴と並んだ。杯の觸合ふ響につれて昔の若かつた時代の嬉しい陽氣な回想、東都住居の其頃の、あの亂痴氣時代の甲事乙件が野分の空を飛ぶ雲のやうに胸中を徂徠する。相も變らずだらしの無い所作を見るにつけても、其一ト頃の記臆の痕が更に新にせらるゝので。暫く遇はなかつた昔の友が斯う差向ひに成つて見ると、倩銘々の自慢話に餘念の體もないのであつた。

「貴樣は乃公が清田をやッ付けた事はまだ忘れまいネ。三尺の秋水を眞箇の通り振翳して、一上一下と斫結ぶ、奴も中々の剛か者だが、對敵は此我蜚だらう、鋭き手練の太刀風には到頭參つて了つてネ。それからあの遠騎の御手並はどうだつたい。川崎までを一時間半でサ、古井の奴は馬から落馬、加之脛の骨をへし折りやがつたし、田内は途中でへこたれつ了ひ、平戸が騾は彈丸を負つた兎のやうに、跛

を牽く所は見られた態ぢや無かつたよ、そこへ行くと我輩だ、月桂冠は掌中のものだし、聯隊の歡迎だつても大したものだつたよ。アハヽヽヽ、昔は是で男山か、サア祝杯だ。お互の健康を祝すんだ。」

「オイ給仕モウ一杯。」

男爵はその袖を扣へて、「オイ〳〵、モウ澤山だよ、僕、明朝の七時にや起きにあならんのだ。宅へ歸つて、もう彼是二週間餘も空巣にして來たんだから、一ト先づ宅の大藏省の現況調査をせずばなるまいさうだ、あの淺の奴にもう一遍强意見をして見ん事には。」

「淺ちやんにかい。近頃は如何樣だい。」

「ナニ、十七八の娘兒にある型の奴さ、一人の男に惚れられて、何の因果か乃公は其奴が氣に喰はん。遠藤銳利といふ貧乏士官だ。」

「何、遠藤銳利？」

「君は知つてる男かな。」

「些は知らん事もない、近衛の四聯隊に屬して居る。」

とばかり、現在肉身の我甥たる事は欠にも出さなかつた。正直な處が、甥たるものが伯父故に云々の事があつては不可といふ肚である。

「貴樣は何故孃を渠奴に與らんのかい。」

「いや君、之には言はれん仔細があるんでな、軍人の君達には‥‥いや我が計校は判つちや居るだらう、

茲に又倉津といふ乃公らの地主殿があつてな、その男が酷く娘を執心して居るのだ、我の考では若しか双方の太い處の地面を一つものにしたなら、速い話が親の者は子の者、子のものは親のものと、まア言つた樣な譯のもんだから、此奴頗る佳い工面だと思ふんだ。併し此種な譚は君等には餘り面白くもあるまい、左樣だらう、だから一杯遣れといふのか、否もう明朝は七時には‥‥」

「何だよ七、七と緣起でもない、」と嵩にかゝつて少佐は、對手の言葉を引取つて先を言はせない。「それは何時でも勝手な時に出掛けるが佳い、が今晩はもウ霎時付き合はふぢやないか。綏然一つ面白く飮明してサ。在つた昔に若返つちやどうだらう。アア祝杯だ〳〵。ソレ永遠に老いざらむ事を祈るんだ、サア茲にもウ一杯あらア、此奴を明けて東西南北、行き度い所へ衝々と行くてい。何處へだつて、まア〳〵待つた〳〵、性急は効を奏せず、進軍の畫策收めて我輩が方寸裡に在矣だ。いやどうもナンともかンとも言はれぬ愉快だ、貴樣に茲て邂逅すなんて、實に奇遇だ。」

兩人は肩を組んで町筋を歩んでゐる。動ともすれば搖々と宙に浮かせる其歩調からして見ると、如何しても此奴は早やセメントで叩いた道路が大分凍付いてゐるに違ひない。但しはビールがさせる業かも知れん。

折ふし通り縋りの小奇麗な二臺の俥を少佐は早速喚びとめて、確乎したやうに見えてもその實正氣も餘程怪しくなつてゐる代議士を、辛との事で乘せて遣り、自分も次のへ飛乘りざま、「紅葉館まで急げ。」

「ナニ、紅‥紅葉‥カンまで？」呂律も正しからざる舌廻しして代議士が耳聰く聞咎める、

「左様だ、紅葉館だ、」
「な‥なにしに行くんだ。」
「氣晴しにさ。‥それに例の吾妻踊をさ。」
「あ‥あづ‥まお‥どりッ、如何な事！槓杆てこねても行く事ぢやないぞ、コラッ車夫ッ、止めい、かい、梶棒を卸せ、乃公下りるぞ、味馬ッ荷も衆議院議員たるものが、そそそんな怪しからん‥‥」
たゝきの上を勢込んで曳き出した車の轢に、哀男爵が泣言も掻消されて聞こえなかつた。
次の日の彼是午砲が鳴らうといふ頃、少佐は旅館の安樂椅子に寛々と身を凭せかけて居る。卓の上には本場の牡蠣の食剩しと、殘少なに成つた正宗が一瓶載せてある。
如何にも氣持の好いといふ風に、何遍となく伸々をして居る。今朝宿に皈着いたのは辛と六時か七時頃であつたのが、鍛ひに鍛つた軍人の鐵のやうな軀には、些の睡眠で充分足りて居る。
いま又昨晩の出來事を思出すと、口元に爽やかな微笑の波が漂ふて
「アハヽヽ酸多の奴‥‥彼樣ぢやないかと思つたら‥‥頭到本音を吹きやがつて、二十年前宛然だ。初の内こそ可い加減猫を被つて居たんだらうが、可愛相に、果は侍女を趕廻すやら、アハ‥‥まア可いお樂みを遣つたもんだ。フヽン氣まぐれ者奴が、今時分何をして居るかなア、追付けやつて來るだらうが、明治の丹次郎、春眠曉を覺えずの方だらうハヽヽ」
と、葉卷莨に火を點けて、横手の卓の上に積重ねてあつた新聞紙を取上げて讀始めた。是ぞといふ面白

い記事もないかして、只チョイ〳〵と葉を翻りながら目を通して居つた。不圖東京朝日の三面に眼が止まつた、それは例の吾妻踊の事を面白可笑しく評判記風の筆で書き立てたのであつた。

爾程に今時めける老若の一隊は昨夜紅葉館の大廣間に栖籠りぬ、席上には今日を晴れと咲溢れたる淑女の花は一團の雲を簇らせ、此滿開の花に雜つて、未だうら嫩き蕾ありとは誰しも怪み給はざるべし。交はす目遣ひ、牽き合ふ袂、幾そばくかの浮れ男や倘數多く浮かれ女の辷り落ちけむ滑かなる舞臺には、ト、ヽ、ントンと踏鳴らして絢れ合ふたる大脚小脚、開閉離合旋轉して、虛實を盡す舞の手踊の手。湧くが如き絃歌聲裡、滿場は只是一箇歡樂鄕!

といふ風に筆を舞はして書き立てた末、次の如く一篇を結んであつた。

此數多き參會者は實に異分子の集合より成れり。此方に國家の藩屏と仰がるゝ歷々あれば、彼方には社會の木鐸と稱せらるゝ面々あり。また操觚者としては辛山君あり苦河君あり、加之衆議院よりは酸多、辨當、棚一區選出の代議士を代表者として派遣せり。あはれ此等選界區の有權者諸君よ、諸君は議士が此等尻輕の辨財天の間に樽俎折衝して、自己の利害に汲々として怠らざる如く、議會の公席に臨むで諸君の利害に專らならば、是大に慶賀すべき事共なり。然るを吾人は同氏が館裏の侍婢の紫縮緬の改良服に、その嫋婷として風にも耐へぬ身を纏ひたる、黑眼克の愛嬌者に心底打込んで、人も知れる吾喜劇作者甘足氏と、劇烈なる鞘當の藝當を演じたる事實を目擊せり。吾人は恐る。此血腥からぬ血戰に於て詩神の寵を擅にせる甘足氏が脆くも敗北し　其代表者の勝利に向つて選擧區民諸君の

慶賀せむ事を。愛の女神は代議士にこそ慈眼をば垂れ給ひつれ。

少佐は興の益募るを覺えて、全文を一氣に讀了つたが、餘といへば餘りな筆附の忌憚なさ加減に癇癪玉を裂らせて、手中の新聞紙を礑と抛つた。が更に可笑しいと思つて見ると、最う耐らなく可笑しく成つて止め度を失ひ、獨り腹を抱へて笑ひ轉げるのであつた。

「まア可愛相に……」笑の裏は涙とやら、眼には一杯涙を湛へて沁々と、「此事が知れようものなら大變だぞ、瀧子夫人の額には又候例の角が生へ出して、犬も喰はぬ大立廻りが初まるだらう、あゝア、代議士などには成るまいものか。」

此事は偖、如何に成り行く事だらう。と少佐は頓てこの記事から起きる結果の一條を案じ出したのである。東京では、是て多少の不評判位は免れぬだらうが、新聞紙の此調子は都會の人の眼には最う馴れ切つて居るんだから、大した難もあるまいが、是が宅に知れようものなら事は頗る難いぞ、瀧子夫人といふ女が抑大の嫉妬家て、能く切つて廻す方の、動ともすると些し切れ過ぎて、亭主を尻に敷島の道て、天地を動かす方だから。が待てよ、コーッと恐らく此奴は……左樣、大に考へ物だ、ウム眞箇だ、よしか、若し如何にかして此紙面を淺子に持たせるとしたら偖如何だらう、多少は是て親爺なり、好かぬ隣の男なりに刄向ふ道具に使はれて、娘にも遠藤にも好い仕合に逢ふやうな機に成らんものとも限らん、一體女といふ奴は狡猾いものだ、弱味に付け込んで甘汁を汲ふやうな事に懸けては、中々拔目があらうか、淺子丈が左樣でないといふ譯はあるまい。フム、よし、此狂言頗妙だ。何の道今日は酸多には逢

って話したい件もある事たし、甥が事も些と措いて置くと可いが、偖、昨日も思はん事ちやないが、茲ては伯父の因果が甥に酬ふて來は爲まいか。サア如何して此紙面を淺子の手には渡して遣らうか、郵便で送らうか、それでは事の間に合はん、焦眉の急に迫つた今だ。サア奈何すれば可いかなア

「オット左様だ、」と少佐は躍り上つて握拳で机を礑と叩いた、「左様だ、此奴あ妙案だ。給仕、乃公はナ、今から鳥渡出かけて來るから、酸多男爵が見えたら、直に歸つて來ますから霎時待つて居て下さるやうに言ふんだぞ、可いか。」

と能々吩咐けて置いて、客氣に逸る青年といふ意氣込て、足を空にして少佐は其所を飛ばし出した。と、直ぐ其足で新聞賣捌店に飛込んで、今日の東京朝日を一部買求め、隣合せた菓子舗でポン〳〵の鑵入を一鑵誂へて、今の新聞に二三行鉛筆の走り書。件の記事へは紫の注意線を曳いて、其を鑵内に詰込んで上被を掛けさせた。

旅館に歸つた時には男爵が既に來て待つてゐる。

まづ挨拶が濟むと、兩人は互に顏見合せて目に物を言はせて居る。男爵は些しく鼻白みて、モヂ〳〵しながら苦笑を洩らして居ると、少佐は哈々と打笑ひ、相手の肩の邊を手酷く叩いて、

「オイ〳〵、モウ幾ら顛倒したつても駄目だよ、我輩丁と知つてるぞ、」

皮肉らしく唇を歪めながら、「オイ未だ朝飯前だらう、奈何だ、一ツ遣らうぢやないか、」言ひさま杯を差つけた。

「モウ〳〵それは御免だよ、」と男爵は首を左右に打揮つて、「眞平々々〳〵、オイ給仕ラムネを呉れい。」

大分弱つた樣子とは五音の調子に現はれて居る。道はその道の巧者だけに、這邊の繹に掛けては少佐は通なものである。男爵、

「僕、かうしては居られんわい、汽車は十二時半に出るんだから。」

「何なら御一緒に」

「さうか、ぢや」

兩人は旅館を立ち出てた、

停車場で男爵が車室に坐を占めた時、少佐は件のボン〳〵の鑵を手渡し乍ら、「これで奇襲をやるんだ、淺ちやんへ直に手渡して呉れ、喜ばして上げたい。……時にまだ新聞紙を買つて居ないネ、買ふんだらう。」

と賣子を喚止めて、「東京朝日を買つたらどうだ、面白い記事ならあれに限るよ。あれには必定面白い事があるぜ。」

「それでも……」

「大丈夫！心配するなよ。アレは眞箇兩人限の事サ。……では隨分御機嫌よう」

「左樣ならまた……」

と合圖の笛が鋭く鳴り響く、此方は劇しく握手する、煙を吐いて汽車は靜々と動き出した。

何某工業市の附近に建てられてある見事な一ト構の邸宅は、酸多男爵の住居である。時計は今漸と五時に成るか成らぬ位なのに、室内は早仄闇く成つて來て、外面には薄鼠のやうな夕煙が野面一面を立籠め銀色の霜は木々の梢に措き渡して居る。酸多男爵は一時間前に歸つて來たが、其不興な顔色は夫人も令嬢も直ちにそれと勘付いたのてあつた。一體此方で不機嫌にして居れば家族共迄が眞面目腐つた顔付をして來るものてあるが、事態が既にかうなつて來ると益々癪に觸るものである。然るに僥倖なる哉此時男爵は、恰ど家扶と一緒に乘馬の乘廻しをやるといふので、間もなく邸を立出づる事に成つたのてあつた。

夫人は寺詣の不在中、淺子孃は只ひとり、物淋しい閑室の窓側に身を凭せかけて、くよ〱と物案じ。思へば世の親といふ親は多いけれど、我家の父親ほど酷い方がまたとあるだらう?。あの遠藤樣が書面てもつて、この私を貰ひかけたのに、素ッ氣ない御返事をなすつたとは、餘りといへば餘りななされ方だわ。あの御手紙の模樣ては、若しかすると今晩あたり、御話の埓が明かないで斷はられたら大變だから遠藤樣が御自分で應か否かの返答を聞きに入らつしやるさうだが、若しや……と此樣な不吉な取越苦勞をはじめると、淺子はむしや〱と益々勢よく、ボン〱の罐から菓子を出しては喰べ、出しては喰べして居るのてある。と此時、思もかけず罐の裡からヒヨツコリと出たものがある。手早く執上げて見れば、奇麗に疊んだ新聞紙て、中に一ケ所紫鉛筆て曳散らした注意線。何の記事か判らぬながら讀んてみれば事件は父親に關した事て、母親には見せて成らぬものと分つて來た。更に鉛筆の走り書を何ぞ

と見れば、

可愛い男と添ひ遂げられる
道は女の猾智て知れ。

としてある。偖は少佐の伯父樣が粹を利かせた差がねだなといふ事が丁と讀めたので、莞爾して此手品の種を取直し、搖椅子に頽然と身を凭せかける。途端に父男爵がツカ〳〵と這入つて來た。劇しく馬を責めた故か、嚮の不機嫌も何處へやら。幾度となく室内を行きつ戻りつして居つたが、淺子の側を通る度に房々とした綠なす愛兒の黑髮を、チョイ〳〵と觸つて見て、舐犢の愛を示して居る。其間一語をも放たなかつた。多分肚の裏では家計上の事か、昨晩の事かを考へて居るか、さもなくばあの憎さも憎き新聞紙の記事で、胸を惡ろくして居るのであらう。

男爵は遂に口を切つて、「オイ、此暗い所で物を見て居ると眼を惡くしますよ、モウお止しなさい、てなきや灯を點けるか。」

「親爺樣マダ克く見える事よ。」

「何てす、そんなに熱心に讀んでるものは。」

「新聞てすわ。」

「小說てはない？新聞！ハテ新聞が何てそんなに面白い？」

「これは親爺樣東京の新聞てすよ。」

「アヽ然矣？、ぢや議事錄でも讀んでるんだな。」

「否、そんなものなんか、私些とも面白いとは思はないわ、今讀んでるのは眞個に面白いんですもの。」

「フム、ぢや何といふ新聞だへ、今日の時事ぢやないか。鳥渡お見せ、先刻配達つて來たんだらう。」

「否、時事ならその小さい方の机に載かつて居ますよ。私の讀んでるのはアノウ、東京朝日。」

男爵は色を失つて、狼狽へて熊蜂にでも螫された時のやうに騷ぎ出した。

「ナニ、東京朝日？」と口早に、聲も荒々しく、「どうして夫が茲には來たのだ？」

「親爺樣、全く偶然よ、多分ボン〳〵の鑵を包んで來たんでせう。」

いや是はモウ古い紙面に違ひない、と思ひ返して男爵はホッと一息、胸を撫で卸した。が念の爲に、

「では、何がそんなに面白い？」

「アノネ、私今面白い雜報を見てましたの、それはネ、あノウ踊の事が書いてありますの、待つてらつしやい、アレは、何だつたつけ、あづ……」

「……づま踊といふのかい。」と思はず口を滑らして男爵は、ハッと氣が付けばモウ遲い。舌を嚙んで徒らに自ら憤るばかりである。チヨッ忌々しい、此碌でなしの新聞紙奴は何處からうせ上つたんだらう。何といふ惡魔が人の家庭の平和を攪亂さうとするんだらう。若し配偶者の目にでも觸つたらそれが最後、アヽ鶴龜々々〳〵、苟且にも其樣な事があつては成らぬ。淺子奴にも讀ませない間に奪取る筈だつたんだが、正可夫は易々輕々出來る譯のもんでもなかつたらう。併し淺奴、何とか思つてるかしら、母親に告口す

るやうな事は無いかしら、否々、是は一杯喰はせて淺子を外させ、其暇に窃と新聞紙を掠奪るにこした事はないのだ。と電閃のやうに此妙案が念頭に浮んだので、手段の如何は問ふ所でない、隨分險呑業ではあるけれど、大丈夫是なら的の外れつこなしといふ手段が、男爵の肚裏にはモウ存つたのである。で、パチ／＼と勢よく爆つて燃えて居る暖爐の側に突立つた儘、平氣な貌をして吾兒に對ひ、

「ネー淺ちやん、遠藤中尉は此頃一體どうしてゐるのだえ、私の留守の間に一度位遣つて來はせんかつたかい。」

聞くと淺子は新聞を見て居る貌を電光のやうにふり上げて、親爺の方を屹と見た。

仕濟したりと肚には笑貌、是て行けばもう占めたぞ、朝日を我掌中のものにするのは、モウお茶の子サイ／＼だ。が待つた／＼、まづ娘に一つ氣休めを爲せて置いてからの事だ。

と淺子の方でも亦親爺の肚が悉皆底まで見透かされたので、容態には出さぬが是も心底大恐悅、口から半分手が出さうに成つて「イ、エ親爺樣、入らつしやらないんですよ、けれども、今日あたり入らつしやるかも知れませんわ。」

「さうか、貴樣は夫を如何して知つてるのだえ。」

「全く偶然よ。」

「アハヽヽさうか、全く偶然か、併し貴樣はそれて飛立つ樣にあるだらうなア。」

「親爺樣貴下はもう御存知てせう、あの私が……」

「ウム〳〵、さうとも、知つて居るとも、貴様の一番一番大切に思ふ人は此乃公だといふ繹は丁と知つて居るよ。」

こんな事て口を利いて居る間も男爵は苛焦しくて耐らない。淺子は座を立つ樣な氣色を微塵も見せぬ。のみならず新聞紙を攤げてチョイ〳〵と覗いて見るやうな容態を作つて、椅子と一緒に身を搖ぶり出す。」から成つて來てはとても叶はぬ。又術を換へてかゝらねばならぬ。て猫撫聲に眼を細うして、「ヨウ淺子や、貴樣は眞個に中尉樣が好きなのかい、それ程にも好いてるのかい。」と來たらば必定、何もかも拋棄つて、飛付いて來て、あの可愛らしい束髮頭を撲付けて「親爺の胸に縋るだらう。と思つて放つた狙ひの的は、見事外れて、娘は腰をムヅリともさせず。思に餘る哀傷の風情。側々として坐ろに哀を催ほさせるやうな、憐な聲で、

「ハイ、親爺樣、それはモウ好きなどころてはありません、」

と答ふるさへが口の內、

聞くと遉の男爵も大ぶ風向が變つて來た。固々這般な罪な眞似は此方から、願つてするのでも無かつたのだが、一家の主人としての威信が、如何やら此頃は種々な事から漸々と、土臺か死落付き初めて居るのだから、苦肉の奇策も窮地の遁路、盖し止むを得ざるに出てたのてある。

「だつて、彼奴は素裸の男ぢやないか、あの兵六玉は‥‥」

「親爺樣、私が丹精で左樣な者は拵へて御目にかけますわ、左樣な繹は男の疵ても何でもないんですも

の。」

「所が此方の歌人君は……」

「モウ〳〵、何卒、其歌人丈は止して下さいな、加之あの方は私を彼是言ふんぢやありませんわ、恩田の闌子様を大の御執心と申すんですもの。」

「そりや眞個かへ。」

「眞個ですとも。」と甘く誤魔化して、淺子は又もや新聞紙を爪繰り初める。

最う夫人が歸りはすまいか、今にも歸つて來るんではないか。と思ふと男爵今は氣が氣でない。若し今此が此場にても來合はせたらサア……と、夫から先は考へ續けるすらの勇氣が出ない。

兎に角此場は神速に幕にせぬ譯には行かん所だ。「それぢや中尉は何時來るといふのかへ。」

「私、何時なんて能くは知らないわ、私ね、私たゞ待つてゐますの。」

「待つて居る？」

「エヽ、待ち焦れて居ますわ。」

「オ、オ、そうか。」

「親爺様、さうですよ。」

「ではまア、私も能く〳〵考へて見ませう」

「親爺様、」と言ひさま娘は、歩み寄つて來る男爵にピタリと抱付いて、双手を以て親爺の頭の圍をキリ

〳〵と続いた。が未だ片方の手の新聞紙は堅く握つて離さうともしないのであつた。驚起、機、此時御参なれ、今取らなかつたら何時また取れようと思ひ機んだ男爵も此用心の爲體には、手を空しうして口あんぐり。

「ヤア母樣のお歸り、……オヽヤ遠藤樣も……」と腹の底では忍び音の勝鬨の聲。淺子は翻然と身を躍らした、が手中のものは倘靠と握り詰めて居る。

一か八か、今が運の定め時だ！

「サアオイ、お出迎をするんだよ、」と父爺はあたふた急き立つ聲。

「嫌ですよ、私は何とか聽かない内は。」

「眞箇にさ、サア出迎てなく、御迎だよ。」

「親爺樣それは眞箇なの、ではあの繹は御許し下さつて？」

「かうなつたらもう其迄だ、お前に……」

皆が皆まで聽かばこそ、娘は親爺をふり離して、韋駄天のやうに玄關口へ驅けてゆく。跡に殘つた男爵は、さも嬉しげに金切聲を振り立てゝ驅けゆく娘の聲を聽いた。

「母樣、あノウ遠藤さん。」

男爵は呆れ貌、エヽ早まつた事をした！かう迄事を拶らす氣は露ばかりもなかつたものを。只ほんの鳥渡、一幕の狂言を演る位に思つてゐたのが飛んでもない。乃伊木採が乃伊木に爲るとは此事だ。惜さも

憎つくい此新聞紙の畜生奴！と見れば放下つて、誰構ひ手のない新聞紙は、床の上に淋しく落散つて居る。腹立の餘り男爵は掴引んで寸々に牽斷り、炎々と燃立つて居る暖爐の中に礑と擲込んだ。此途端、唐紙が開いて、淺子と遠藤は鰯を釣つたる蛭子の樣に、莞爾して飛込んで來た。

「親爺樣、大事の大事の御親爺樣。」

「男爵閣下、御機嫌よろしう……」

「オイ靜になさい、お前達はもう知つてるだらう……」

といふ横合から

「へイ〳〵貴下が娘の仕合好かれと御心配なすつて入らつしやる繹は、それはモウ妾達はよつく存じて居りますの。」

と男爵夫人瀧子の前が引取つて、御褒美として更に心からなる切吻。

祝言の式は間もなく擧げられた。少佐は勿論招待せられた、午餐後、好い氣持に成つて——いやモウ大ぶ頭が熱く成つてゐたのだから——少佐は男爵に繹の經緯を物語つた。

男はあはや拳骨を揮揚げて撲つても懸らんず見脈であつたが、少佐はフヽンと許り鼻尖で笑ひながら杯を薦め、

「オイ〳〵ヂタバタするなよ。まだ〳〵あれは帳消には成つてないよ、瀧子御前が……」

「チヨツ畜生、仕樣がない。」

とばかり。兩人は杯を擧げた。

オルガンの音色

小川未明

空は一面に曇つてゐて、ひた〳〵と物干竿にかゝつてゐる衣物や、枯れた柳木などに吹く風のうす寒い秋の夕暮方であります。一人のみすぼらしい少年が、町端の寂しい路次を歩いてゐますと、支那人を泊める下宿屋があつて其の屋の裏手に、破れた二階建の家がありますが、其の二階で誰かゞオルガンを彈いてゐると見えて、ぶう〳〵鳴つてゐます。

少年の名は小太郎と云ひまして、生れは遠い〳〵田舍の者であります。三四ヶ月前に叔父さんに伴れられて東京へ參つて或る商家へ年季奉公に入つたのであります。叔父さんは小太郎を獨り殘して國へ歸りました。小太郎は其の當座は毎日のやうに晩方になると。自分の故郷の空を眺めて兄さんや妹のことなどを思ひ、母さんや、お婆さんのことを思ひ出して泣いてゐましたが、此頃はいそがしいので仕事にまぎれて、折にふれ、物を見るにつけて、故郷のことを思ひ出して、いろ〳〵と考へるばかりであります。」

「やーオルガン鳴らしてゐるわい』と思つて、小太郎は立留つて二階の上を見上げました。けれど障子

が閉つてゐて裡の樣子はわかりません。

雨の降りさうな空模樣ですし。それなりに急いで行きかけますと耳にぶう〱聞えたオルガンの音がどうしても耳から放れません。小太郎は田舍にゐて、小學校で女の先生から唱歌を習つた時。オルガンを聞いたことなどを胸に思ひ浮めて道を歩いてゐます。けれど、どうしても今聞いたオルガンの音色が耳について取れません。元來鳴物や音樂の大好きな小太郎は、さながら夢心地になつて道を歩いてゐますと、眼の前に種々な影法師が躍り出したのであります。

オルガンの音色が耳許に細くヒーーと響きます時には可愛らしい天使のやうなのが棒を持つて躍り上ります。またぶ、ぶーと太く響きますときには丈の低いポンチ書にあるやうな黒い小男が腕を振つて飛び出たかと思ふとオルガンの其の音色の消えると同時に其の影が見えなくなり、またふ――と輕い音が出ますと痩つこけてひよろ長い影法師がぬつ〱と前に立ちはだかるのです。其樣な具合にちやうど廻燈籠を横にねかしたやうに、だゞ白く光る動く、何でも絶えずちら〱と顫へてゐる夢の波のやうな間から、ひよつこりと小男が飛び出たかと思ふと、またひよつこりとひつこんで、また骸骨みたいな痩こけた黒い影法師が飛び出て、オルガンの音がぶう〱、ひい〱、ぼう〱と入亂れて、こんがらかつて鳴り出すと、其等の太つた小男や、優しい女の天使や、骸骨みたいな痩せた影法師が互に棒や、團扇やうなものを振廻して倒れたり、刎起たり組打をしたり、それかと思ふと手を引き合つて舞ふたり、また擲り合ひを始めますので、オルガンの音色がいつしか細く消えてしまふと其等の影法師も次第に靜まつて、

其の怪しいだゞ白い光る波の中へ隠れるやうに沈んてしまつて、たゞ波ばかりが目の前にとかん〲とうねりうねつてゐるのが、まざ〲として見えたのであります。

小太郎は面白いことだと思つて、何時間にやら五町も六町も歩いて今しも本郷の大學校の赤煉瓦の壁の下を通つてゐるのであります。此時、雨がしと〲と降つて來ました。

小太郎は人々の急ぎ足に歩いたり、驅け出すのを見て目の醒たやうに四邊を見廻しますと始めて、自分は夢を見てゐたやうな氣持がしたのであります。もはや目の前にちらついてゐた波も見えませんし、オルガンの音さへ、幾百里か遠くて誰かゞ鳴してゐるやうに思はれたばかりであります。

其時、目の前を一人の笠を被つて、籠を肩にかけて通る男がありました。其の小籠の中には、澤山に折つたまゝの梅擬の枝が入つてゐます。それに雨が掛つて黄色な莖に赤い實が熟み出てゐるのが嬉しく見えて氣持がすが〲しました。それは、やはり小太郎が故郷の小學校にゐる時分に、秋の日運動場の土手に匍ひ上つて、梅擬の枝を折つたことがあるのであります。そんなことを思ひ出して小太郎はまたもや忘れてゐた兄さんや、妹や、母さんや、お婆さんが戀しく、雨の降る中を、しく〲と泣きながら歩いてゐます。

（完）

歌

尾上柴舟選

○　渡邊孤帆

うすものゝとばりすかして夕雲はやさしき人の頬にはなやぎぬ

ほのしろき葦のさ波をこえ細う水鶏が渡る夕月夜かな

尼君が讀經の法衣(きぬ)のすそかげにこほろぎ啼くよつき夜山寺

おぼろ夜や精(たま)ぬけ出づと野の花のちさき一つにほのゆれのして

あけぼのゝくあはき裝はなてしこのこぼるゝ露に染むと思ひぬ

さびしさにこゝろ沈めば秋の森ちいさき花のゆらぎもきかる

ふたゝびは此世に見(み)じとたはむれしかの日この日を思ひて泣かる

森の夜はわがねぎごとのほのかにもかなへるさまにうすら明けにけり

○　大村流外

あさあめや油(ゆ)の香薫ずる新傘のふちを掠めてとぶ燕かな

夜の風はすゝり泣きする子をふきぬ世は老いたりと悲しむやうに

路次へだて溝ねずみ鳴く下町の壁とかべとにうすき月しぬ

たゞ一人胸しめらるゝおもひして磯の岩根に浪きく夜かな

手をとればたゞわりなくも泣かれぬる弱き心を嘲りたまへ

汝を忌むといふ子をさへも憎みえぬ身なりと獨り悲しみにけり

おん胸の花のみ園に灯となりて入らむと思ふたそがれどきよ

頬を染めて歌をまゐろと優し君を待つ子もあら

む夕べの舟に（吉岡君に）

君見ては母にすがりし日をおもひ毛虫に怖ぢし日をなつかしむ

とこしへに神を忘れて罪のうちに我が魂ははぐゝまれにし

○　小川眞清

夏柳や母にすがりて雛燕とびこころみる霧の朝かな

戀ひゆけば衫(えり)をすべりてはららかに楡の花ふる夕木原かな

咲く花をただうつくしと見てすぐる心なりせば世は安からむ

露ふかき桔梗が原の朝月夜送り來ましし人と別るる

村五戸の糧の米つき森かげにひねもすめぐる水車かな

かたらひしその夜に似たる花かげに袂二つをわびしとおもひぬ

大覺の聖者に似たるすがたして谷間に咲けり白百合の花

月夜よし人待ちなれし柴の戸に今宵も立たむ桔梗かさして

はかなかる運命(さだめ)に泣く身夢にだにうれしき一夜(ひとよ)たまへといのる

かをりみつ花の中にて相語る心地こそすれ君とある日は

おもひ成りぬ心の空はうるはしき小鳥きて舞ふさまにも似たる

わがためとみ胸の上に咲く花を禍(まが)鳥きては食むを恐れぬ

わがためにさびしき道を教へたるみ神うらめしたへがたき日は

薄き日の光にだにもしぼみゆく月よみ草をあはれとおもひぬ

手をひろげ冥途(よみぢ)に人をだき入れむさましてたてる闇の森かな

○

鐘にだに風にだになく身となりぬ我れやも母のまなごなりしを

風の搖るとほき巷のあかき灯に我れとさびしむ宵の秋かな

緋桃ちる頃と誓ひしかりそめの面影人よ朝の温泉の山

○　渡邊甚之助

秋姫は西海の鰐に鞍おきてしほざゐとほく乘りくるものか

眞夏日や紅のはなさく南國の熱砂に臥する毒蛇をおもふ

黄雲てる山のあなたのおん寺の鐘こそひゞけ悲しきゆふべ

あゝひと日牢屋のなかにあるこゝち高飛ぶ鳥の翼を見ては

とおもひぬ芙蓉にそゝぐ秋雨のかゝる夜をだに君は來ずやと

うすもやにゆふべ高鳴る牧笛をきゝぬ小松のめぐれる丘に

○　秋田華溪

雪の宵涙こらへて臨終に近づく母の言きく身かな

森の夏水色の衣風にうたせ詩書を枕にほゝ笑む君や

落つる日は森やき野やき罪人をのろひながらにしづみけるかな

月かげに亂松ゆらぐ砂山に今日もかくれて波きく子かな

○　若麻績長風

ちからある群馬の聲に朝霧は敗軍めきて霽れたり牧場。

夕雲は沖の白帆を桃色の鳥の浮くごとそめにけるかな

涼風やあかつき人は水色の衣して折りぬ白百合の花

夕立やひらめく銀の征矢あまた青すゝき野に射立てけるかな

秋風は劍ならべし百人の白衣の猛者と海より吹きぬ

わが胸そくれなゐもゆる大夏のあゝ野の花をしかと抱けど。

夕月に湯あめる君よ南歐の繪ぎぬ拔けにし人かのさまに

○　早苗田みどり女

鮒ずしや背みずうみは靜かにて彥根の城に雲かゝるかな

初夏の出湯の宿にほとゝぎす琥珀の玉をならし行くかな

わが悲しみ寒さうしほに乘りて來る氷山ひびき崩るゝこゝち

秋雨や信濃路なれば夜もすがら出水の鐘をきゝにけるかな

○　山下里子

あえかなる妹がうなし抱きつゝ涙流しぬ母の忌日を

たそがれや君と別れし窓によれば海さゆらくもの悲しげに

○　志田美襄

とことはにをさな昔を忍べとやみ堂の文字の消えもはてぬよ

○　加藤雨川

運命とは如何なる神の詩卷かたぐりたぐるにわが泣かれぬる

橄欖の森の香凝りし湖は太古ながらの夢もこもれる

○　秋山琴泉

きぬずれは萩の下葉のそよぎにて秋は女性の步みときたる。

○　佐野潮歌

現し身を魔も來て責めよさいなめと心おごりのわが强さかな

野にたちてうらぶれわぶる月の宵露の桔梗の花冷やけき

○　吉村葩人

濃緑の苔に露して土の香のひくうながるゝなつのあさ庭

あさの氣の我れに迫らふ山窓を輕う打ちたる榎(え)のひと葉かな

○　塚田擣衣子

世にすねて山に住みにし身ながらもおぞや夕は人戀しうて

故しらぬかよわき涙ふき散らせ木の葉を捲きて吾れ捲く風よ

わびしよひ花にちひさき輿もやと花瓶の菊の蕋くだきみる

○　吉岡夕舟

夜(よる)の汽車小窓に倚りて暗濫(くらがり)の霧すかし見る遠き村の灯

杜の家闇にほのめきまた消えて妖火のさまに灯ぞともりぬる

夜ぐるまの提灯ひとつ木の間縫ひて吸はるゝ如く闇に失せぬる

玉川や鮎つる人に五六歩の河原へたてゝ夕千鳥なく

桧木笠紐の白きが初めての藥賣かやあはれなるかな

野の家に君待ち居れば風の音戸にあたるかな衣づれのごと

朝雨は簾まく子の前髮に釵せよとて銀にふるかも

秋立つや鹿火屋(かびや)をいづる朝煙風ある空をゆるう昇りぬ

七月や閻魔詣でのひと〳〵はいつはり云はぬ面して行くよ

落月や桂ばやしを聲嗄れてほとゝぎす過ぐ死の影めきて

冬の村涙をかくす袖頭巾悲しさうなる人にもあ

ひぬ

夜の灯糸まく君が白き手と物よむわれにおもてらしぬ

——春藻會詠草——

○ 上村萩江

野菊さく山のふもとの里つゞき太古に似たる夜の淋びやうや

ともしびによる蟲多き秋小窓さとの姉への文かき更かす

野の庵やこほろぎなきて俳の座のたけなはなるに月かたぶきぬ

聖堂の鐘鳴りやみしゆふ月夜ゆきし白鳩またかへり來ず

をとめなれば秘めしおもひに涙するひと夜のほどもありとおぼせな

○ 曾根朧月

木犀のよきほどにちる夕月の戸にすまはせむ待つひとり人

大樫に鳥わたりきぬ大野原秋ぐさ黄なる小川の岸の

うしろより追ひくるやうに家々の砧はなりぬ月にあるけば

あしき夢さめしおもひに森いでゝすゞしき月を見るゆふべかな

○ 小宮山春子

雲の峯うまごやし咲く夕牧の羊のさまにくづれけるかな

夕ぞのはうすら霧してゆめのごと花と花とはさゝやきてねぬ

しら鳥ととぶ白雲と夏花のしろきと夏はよき故鄕よ

○ 淺野白汀

青薄笛ふく人はみえねども逢はじかたらむなつかしさかな

江の島や貝殼軒をつや／＼と夏の日さすよ潮かぜ吹きて

青桐や葉うらにひそみむかひゐぬ蛙は歌をよむかのやうに

夏花は稚兒の小さき白き手をひらくがやうに咲きてけるかな

○　　廣浦藻花

わび人のかごと聞く夜のわびしさや雨に竈蟲も老いてゆくらむ

神無月あさ〳〵山のおん寺の栗をぬすみし日をこそおもへ

彼岸の日君が島よりはる〳〵と來る雁まちてなづかしみゐぬ

向日葵の花かたぶきて八月はきのふとなりぬ風秋と吹く

ふりにける日記にもかゝぬ人故に草枯るゝ野は涙あふれぬ

案山子

漱石選

案山子立てゝ山田の秋を全くす　松濤樓
三輪の田に案山子立て去る翁かな　同
淋しくす一人行く野の案山子かな　同
島畑に案山子立つ日や鳥渡る　同
捨てゝある案山子の笠や草紅葉　同
黍刈つて案山子より高きものあらじ　同
案山子立つてそこら家なき山田かな　同
毛見の衆へ矢を向けて居る案山子哉　四綠
畑主の古着きせたる案山子かな　香枝
蟲除けの旗さし立てゝ案山子かな　義彥
豆引けば案山子の首の動くかな　薬村
いつまでも淋しく案山子のこりけり　綠水
背の低き案山子の笠や稻の波　石羊生
弓も矢も手も足も無き案山子かな　柳波
ササの火に案山子の笠を投じけり　菫哉
捨團扇案山子の腰にさゝれけり　梅瘦
兄弟の田と田に背く案山子かな　瓢乎生

大風に飛んで逍げたる案山子かな　同
神の田に御幣持ちたる案山子かな　鳳梧桐
岫出づる雲を餘所目に案山子哉　同
夕闇や案山子と見れば動くなり　桃村
隣田の鳴子我田の案山子かな　同
大根蒔く人を見て居る案山子哉　萍也
畠主の笠よく似合ふ案山子かな　同
已にして案山子に馴染む烏かな　方外
拔き取りて草に捨てたる案山子かな　同
いたづらの案山子に石をなげうちぬ　夕村
一門の案山子從兄弟もありぬべし　同
毛見の衆の虛勢案山子の威勢かな　工刀
秋も早や愚なる案山子の天下かな　同
鳴子引けば案山子にそるゝ雀かな　磨劔
案山子の田鳴子の畑や赤蜻蛉　同
淋しからんと案山子の妻も立てにけり　同
細道や人見るさまの破案山子　帆万千
大兵の案山子の弓や満を引く　同
今日案山子立つと稻作日記かな　同
雀すでに案山子になるゝ晩稻哉　同

隣り田に案山子を移し〳〵刈る　同
夜寒さの噓もあらん案山子かな　同

募集課題
野菊　十月十五日〆切
鷹　十一月十五日〆切

應募俳句は東京本郷區駒込曙町大谷正信宛の事

今回の應募句に對しては比較的に選句の標準を高めたるが爲め、窓雪、小草、歡呼朗、藻花、冷泉、識香、霞翠、天醉、重藤、せつ子、千城、無名子、上海叶、松亭諸氏の投稿はその一句をも採ること叶はざりしは選者の洵に遺憾とする處なり。

また前號掲載の「天の川」の應募句中

七夕もすぎて淋しや天の川

は類句あることを知りし故抹殺することゝす。

應募和歌ハ小石川區原町百三十三番地
尾上柴舟宛の事

評論

靈魂の滅、不を論ず

默笑子

煩しきは人生なるかな、人間生れて僅か五十年、蜉蝣に比すれば聊か長かれ、宇宙の無量壽よりしていへば劫風に飛ぶ芥子の一塵目にも止まらず、斯ゝる短生涯裡、旦暮には寒暄の交らひ、起居には衣食の營み、浮世の繋縛は之にして足れり、如何なれば更に難解の三大問題の吾人の頭を壓するぞ。

三大問題とは説かでも著し、我生何處より來り、此世如何にか處すべき、我死何處にか行く、之にして、耳には古りになれど惑は何時も新しき過現未三世の問題なり、問題の大とせらるゝも謂はれあり、人は明處に安んじ暗處に恐るゝもの、而かも此暗處の輪廓増大するに從ひ、明處も其明を滅じて其處に不安の陰影の生ずればなり、暗處と唆過去と未來となり、明處とは現在なり。

之を悟り易く一條の糸の染分と爲さしめよ、中央の最短部分は眞紅なり、之を夾める左右の最長部分は鈍色なり、一方の鈍色は過去を示す、過去の生活は如何なりしぞ、エデンの花園に果實を摘みし裸男なりしか、伊勢大廟の華表に巣ひし鼷鼠なりしか、他方の鈍色は未來を示す、未來の生活は如何なるべき、愛の化神に侍りて醍醐の泉を掬ぶべきか、劒山血河に驅り立てられて涕泗滂沱たるべきか、此兩ながら知れざる處が陰雲冪々、裡に幽濕の氣を藏むる魍魎の府にして、吾人は此鬼氣に襲はれ、機に觸れては胸壁の壓迫堪えやらぬなり、眞紅は現在を示す、眼前にして見易しとはいへ、如上の鈍色に左右より迫られ朧化せらるゝが爲に。此

處にも堪えず疑惑の濃霧は局すなり、疑惑の濃霧とは何ぞ、即ち人生問題の懐疑之なり、眞紅の色をして榮えしめんには、左右の鈍色を去らざるべからず、人生問題の懐疑を救はんには先づ過、未、兩世に透徹せる信念あらざるべからず、而して靈魂の研究こそ實に其要素を爲すものなれ、其糸の兩端を結んで、鈍色をして左右より列らしめよ、一系の鈍色、其處ぞ靈魂問題の伏すところと知らずや。

左れど此問題は何人も言ひ難むところなるが如し、近年自殺者の律頗る増加しつゝあるを見て、此問題は端なく一世の注意を鋭くしたるに拘らず、特にある雜誌にては態々諸龍象に高見を叩きたるに係らず、其齎するところの所論、餘りに明快を缺くものあるは何ぞや、何すれぞ今の世の學者は爾く謹愼なりや。何すれぞ今の世の學者は爾く怯懦なりや。何すれぞ今の世の學者は爾く無定見なりや。是れ予の言にあらず、誠に近時道路に聞こゆるの聲なるを悲む。

某博士の所論を、妻木氏著靈魂論の序文に於て見るを得たり、それによれば、靈魂問題は今日未了の問題なるが如く未來幾萬年至竟不了の問題ならんか、そは兎もあれ愚者揃なる現代に在つては三世因果の桎梏なくては倫常を説き難しとせらるゝに似たり、嗚呼斯界の大德とし一世の仰慕する博士にして猶ほ且つ此言を爲すか、斯ゝる布教者の奥底を叩き得たる衆生は當に如何の感をか爲すべき、宗教とは靈を救ふ道ならずや、宗教家とは靈の一切に不可動底の信念あるべき筈にあらずや。宗教を以て單に愚者を、時には威嚇し時には懐柔する方便に過ぎずと爲すか、宗教家を以て己れ信ぜずとも人を説くべきものなりとなすか、否己れ信ぜずして人を服せしむる力あるものなりとなすか、蓋し説あらん、兎まれ予は斯ゝる宗教を以て生命なき宗教と呼ぶに憚らざるなり、斯ゝる宗教家を以て生命なき宗教家と呼ぶに憚らざるなり、想へ、涙ならずや、十字架上に眠れるクリスト、尼連禪河畔に飢えたる釋迦牟尼、彼等よりも好奇心にては得なすまじ。

兎まれ靈魂の滅不は如何、抑も靈魂といふに二義あ

り、一は茶碗を物質といへば、そを形くる各物的原素をも物質といふが如く、自己意識なる現在の我を靈魂といへば、そを作る各心的原素をも靈魂と名くるにて、識者ならでは考へざるところなり、一は個性ある、自己意識なる現在の我をのみ稱して其他をば靈魂と認めざるにて普通一般に信じ居るところなり。

十有余の物的原素集りて此身を現ず、而して其各原素と相抱ける心的原素集りて此靈を現す、汎心論的見地より說けば、物あれば心あり、心あれば物あり、物と心と相卽不離、正に一體の兩面をなすなり、故に此所現の色身一空に歸すとも、十有余の原素は單に遊離するまでにて、曾て宇宙より消え去ることなく、從て靈魂も無邊際に亘りて常住の生命を有するなり、されば靈魂の義を如上の二義中、前者に取らば、その不滅なることは言ふまでもあらず、去れど義を後者に取らば如何なるべき、同じく汎心論的見地よりすれば、左る靈魂の常住ならんが爲には前と同一種同一量の原子が一團を爲して保存せられざるべからざる理なるに經驗の敎ふるところには然らず、三寸息斷えて此身一たび北邙一縷の烟と化すれば、炭素、窒素、燐素も、ナトリウムもカルシウムも、任意に四散して影をも止めず、何處にか又統一せられたる我の存在あらん、此點佛敎の業感緣起說は說いて曰く、我の存在は無明を因とす、無明が業を作り、三世因果の理法は其處に活現して、さてこそ六道輪回となるなれと、之をして眞ならしめんには、因果の理法は各原素を桎梏し、彼等が渙然一の體系より解けて他の體系を結ばんとするに當り、必ず前と異なる原素を容れず、前と同一定量を保たしめざるべからず、然らずして、我の炭素は彼處に石炭と現れ、我のカルシウムは此處に大理石と現れ、殘れる部分が更に他の種々の原素と抱合して、隣家の狗兒、對屋の猫奴と現れたりとせんか、我の善業は何處に報えられ、我の惡業は何處にて罪せらるゝぞ、然るに事實に於て、化學上の分拆化合は吾人の意のまゝなり、或は吾人の骨よりして直に燐寸の燐も取り得るものなるに於ては、必然にして有力なる因果の理法の

存するものとも思はれず、斯く考へ來れば勢、義を後者に取る靈魂說は否定せらるるなり。

此他猶ほ靈魂に就いて人の考ふるところのものに社會的にいふ靈魂あり、吾人の精神が社會の精神の中に沒入して永世に殘るをいふなり。生物學的にいふ靈魂あり、吾人の精神が子孫に遺傳して億刧に止まるをいふなり。此等は皆不滅を許すべし。

然れども去る不滅說は一般俗人の首肯すべき處なるか、否、聽かんと欲するところなるか、想ふに彼等の要求は、唯不滅なれば可なりといふにあらず、不滅なるが上に更に善因には善果を受け、惡緣には惡報を受け、親しく自己が泣きもし笑ひもしたしとするものならん。蓋し故あり、盜跖の壽、顏回の夭、現世の賞罰は明確ならざるものなり、少しく淺く解せんには、斯くして終るが浮世ならば、慈善時あつて斥くべし、偸盜時あつて尊ぶべし、細くて長きが一生ならば、太くて短きも一生ならずや、儘よ三升樽橫手に提げて、破れ冠れの頰冠りに何の會釋の要るべきぞとも思はれん、三世因果說は倫常を說くに必要なりといふものある偶ま之を愛へたる爲ならずや、然れども事理は誣ゆべからず、予は如上の如く信ずるものなり。

去れども如上の如き靈魂說は、佛理の究竟義より生まるゝに非ると同時に又無くては倫常の根據を危くするものにはあらざるなり、利己的動機の倫常は倫常の高尙なるものにはあらず、然るに果を恐れ報を望んで始めて動く道德は明かに利己的動機を語るものなり、倫常豈に此の如きものならんや、別に確乎不可動底の地盤の上に立脚するものなり、立脚せざるべからざるものなり、吾人說あり、實は之よりして人生觀に論及し、更に飜つて佛敎々理の幽玄にも觸れんと欲したれども紙數限りあり、暫く中斷して稿を他日に期す。

小說「行火」　佐藤紅綠

俳壇の紅綠氏は人皆之を知る、小說壇上の紅綠氏は果して如何、予輩深く氏が靈筆に信ずるあり、右の處女作一篇を次號誌上に於て讀者の机上に薦む。

新刊批評

▲青年の修養　占部百太郎著　内外出版協會發行

疎狂自ら豪とする往日の氣風や、便體獨り達とする近時の傾向やは、到底、二十世紀の舞臺に立ち、戰勝の後を能くすべき青年を作らない、今少しく着實なる眞摯なるものでなければならぬとして、修養心の發起し無學の自覺よりして、曰く傳記の感化、曰く必讀すべき古今の傑作、曰く歷史を學ぶの要、曰く詩歌の功德。藝術の趣味等、章を分つこと十、丁寧、親切、一々理解を與へ、興趣を誘ふたもの、青年に穩健なる頭腦を與ふる有益の書であると信ずる。(定價金卅五錢)

▲宗教と哲學　松本文三郎著　丙午出版社發行

釋尊の說法以下通篇十一章、一たび諸雜誌に著れたる著者の論文を集めたもので、曰く道德と宗教、曰く、硏究と信仰、曰く青年の煩悶、曰く自覺とは何ぞやといふが如き、盡く當今吃緊難解の大問題を捉へて、精明なる筆路に痛快なる論斷を下されたるもの、開卷第一、先づ次の如く叫ばれてある、「釋尊當時何等の法をか說き玉へる。我國從來の圓顱子自ら稱して佛弟子といふ、而して彼等は新舊の說を混同し、賓主の別を顚倒し、釋尊當時果して何等の法を說き玉へりしかを知らざるなり」と其衆俗を排して獨自一己の論步を進められたるの概は之でも明かである、此中閻魔王の話だけは稍異つたもので、先生平生の峻嚴なる、筆法ではなく餘程砕け處に感興の跡が現はれて居る、之は新小說にも見えたもので、閻魔に關する印度古傳說の硏究である。(定價金四十五錢)

▲倶舍哲學　舟橋水哉著　京華堂

曩に小乘佛教史論、原始佛教史を公にした著者が、更に毘曇一宗の要旨を約して著されたのである、倶舍といへば佛教の初階である、けれどもされぱといつて直に唯識天台と一足飛びにする譯には行かぬ、處が又昔より唯識三年倶舍八年といふが如く、唯一宗の教理を會得するにも古來光寶二記其他の頌疏を通じての硏

究て容易のものではない、今彼樣な簡明の著述の現れたのは喜ぶべきである。（定價金六十錢）

▲語學蓄音會話篇　加藤直士譯　東京堂發行

米國のインターナショナル、コレスポンデンス、スクールて、外國人に英語を教ふる爲に、蓄音器の蠟管内に吹き込ませた會話を、更に寫し取つて一部の書となし、之に和譯を付したもので、蓄音機によりて發音を知り、此書によつて譯解を知るべきもので、單に獨立しても、好個の會話書となるのである。（定價金五拾錢）

▲世界的青年第一號　有樂社發行

清秋九月を以て産聲を擧げた、高須梅溪氏主裁の青年雜誌である、其宣言書にも明かである通り、新世紀の要求に應ずべき、器局の濶大なる意思の豪健なる人物を養成せんと勉むるので、更に高雅なる趣味の皷吹と着實なる業務の奬勵とを怠らぬとの事である、本號收むるところ山路愛山、渡邊國武、加藤弘之、三宅雄次郎、松井柏軒、島村抱月、畔柳芥舟、夏目漱石、江見水陰等まだ他にも多くの人のものがある、打見たばかりでも名家揃ひ、目も眩く樣である、吾人は其發途を祝して前程の悠久ならんことを祈るものである。（一部定價金十錢）

▲紀行文集天下泰平　饗庭篁村著　日高有倫堂發行

流石は昔取つた杵柄、輕妙な筆廻しとはいやでも言はねばなるまいけれど、趣味は確かに一世紀後れた徳川時代の駝洒落もの、擬ぐつた樣な文字鎖りにハフ、ンと申しても腹の立つ方なり、「次の狂言駒狐を見るにつけ、コンクワイは舟に取殘された俊寛の先に立たず」大體が此樣な風である。（定價金四十五錢）

▲英文練習書　内藤明延編　東西社發行

著者の新案になる丁寧親切の學生自修用英作文書である、附錄に卅八年度各學校入學試驗問題がある。（定價金六十錢）

▲現世界鐵腕王獨逸皇帝　成功雜誌社發行

主として佛人アンリー、ヅ、ヌーサンヌの著「赤裸々のウイルヘルム二世」の大意を傳へんとしたるもの、現代主權者中の大立物にして兼ねて最も多而多趣の

帝を捉へて縱横に記述しあるは面白し。彼れの日常の生活は勿論、其人物、其政策等も略々此書によつて想像するに難からず。殊に第三章ビスマルクとの衝突を描けるあたり興多きを覺えたり。（定價四十五錢）

▲思想の日本　天涙居士著　警醒社發行

宗教殊に基督教の消長と國運の盛衰との關係を論述するが本書の目的なるが如し、文の冗長にして字句の生硬なるは慊らぬ氣もすれども、外國の例證を引きて我思想界の趨勢をトせるあたり多少の參考となるべし。（定價二十錢）

▲海國青年第一卷第一號　伊藤銀月主筆　佐久良書房發行

「日本の海國にして自己の海國民たるを自覺する青年」の好伴侶となり「現今流行せる神經衰弱性青年を或は醫し、或は殺すの劇藥たらんとの目的を以て發行せられたる雜誌也。伊藤銀行氏の主筆は其人を得たりといふべし。本號には銀月氏の「天風海濤」政子女史の「濱菊」等の讀物あり。吾人は一代の青年漸く柔弱に流れんとする際、かゝる雜誌の健全なる發達を祈るもの也、（定價十三錢）

▲寐覺草　高安月郊著　金尾文淵堂發行

此書に收むる所「嵯峨野の露」（脚本）「蝴蝶軍」（新體詩）の長篇を初め樂劇「後の羽衣」其他數篇の敍情詩等なり。孰れも未だ完璧を以て許すべからざるも筆路暢達、詞章豊麗、確かに著者の才情を窺ふに足るべし。之を著者の前著「夜濤集」「春雪集」等に比すれば遙かに圓熟に近きたるを見る。晦澁を以て高遠となし、朦朧を以て詩趣饒かなりとする詩家の多き今日、著者等の奮勵を望むこと切也。（定價六十錢）



◎大學教授理學博士 坪井正五郎先生序

◎宮崎縣師範學校長 遠藤正先生序

◎福岡縣中學修猷館教諭 大鳥居弃三君

◎宮崎縣師範學校教諭 澤田順次郎君 共著

是れ必讀の良著也

増補十版 男女之研究

附錄 性愛論

上製美本全一冊
精巧挿圖參拾餘
正價金五拾錢
郵稅金八錢

◎第十版の紀念として性愛論の一篇を加ふ。其の說く所は痛快適切而も着實よく滔滔たる時流を救ふに足る

◎『男女之研究』は男女の研究なり、然り人として男も女も必ず一讀すべき必要ある良著なり

◎其記述する所男女の起源・發達・生殖及び現象・衛生・發育等頗る精細懇篤を極めたり。

◎進んでは男女の地位關係より婦人問題・社會問題に及び最も痛快に其解決を與へたり。

◎而も著者が流麗なる筆は健全なる思想の下に最も着實穩健に其總てを研究せり。

◎見よ好評藉甚學界に教育界に將清新なる家庭に愛讀せられ第十版を發售するに至れり。

◎あゝ是れ既に父母たる物又將た父たり母たらんとする者が必ず讀まざる可からざる良書なり。

◎大學教授理學博士 坪井正五郎先生序

◎田寺寛二君著

是れ斬新の好著也

Man and Apes. 人と猿

再版 發賣

上製美本全壹冊
精巧挿圖五拾餘
正價金八拾錢
郵稅金拾錢

◎人とは如何なるものぞ何人は始めより人なりしや。人と猿とは如何にして分れしや。人は何故に尾を失ひしや。人は何故に體毛を失ひしや。其他千百の疑問に應へんとするものは即ち本書なり。◎

發行所 光風館書店
東京市神田區裏神保町
電話本局二千三十九番
振替貯金口座三二七番

山路愛山主筆

獨立評論

三十九年第九號

每月一回三日發行
定價郵税共金拾錢
半年分金五十五錢
外國は一部ニ付
別に郵税四錢

●近事評論

▲韓國の近事を論ず ◉是れ人情の自然のみ◉小國を立つるは難事なり◉日韓合併を希望するは不道德に非ず◉韓人の日本人を誤解するは當然なり◉日本見民の信仰◉韓國の進歩は外面の粧飾に過ぎず◉伊藤侯昨非を悟る◉伊藤侯よ更に一歩を轉ぜよ◉韓國の儒生を論ず◉

▲内務省と電車賃錢値上▲韓國の法典編纂▲政治家の商賣▲番頭と番頭▲市民若し勝たば▲電車問題の中心▼

●九十九里濱雜觀。

▲避暑▲片貝村の歷史▲魚の寡くなりし沙汰の事▲博奕論▲片貝村の自然▲小說の題目としての里見氏 ●緒言●日本の梁山伯●歷史上の里見氏――歷史と小說の調和●里見氏を詩題として書くべき小說の筋書 ▲眼前の小景▲樽酒相逢十歲前▲天下知己多し▼

●小說 大盜通信。

▲支那内部の生活狀態より、東亞の全局に亘れる問題を細密に研究せるものにして、今や正に佳境に入りつゝあり。作者烏有山人とは如何なる人ぞ、暫くこゝに名を秘すと雖も其誰なるかは讀者の意中に燦として閃めくべし▼

●寄書

▲吾母也。吾姉妹也。…………………高濱長江

發行所 東京府豐多摩郡中澁谷村九〇二 獨立評論社


CREME PEARL
煉香油
パール
貴婦人用
紳士用
東京濱町一
電浪一一〇
歐米化粧品輸入商
平尾分店
化粧香水ホワイト發賣元

秋期大附録

二百十日

夏目漱石

(一)

ぶらりと兩手を垂げた儘、圭さんがどこからか歸つて來る。

「何處へ行つたね」

「一寸、町を歩行いて來た」

「何か觀るものがあるかい」

「寺が一軒あつた」

「夫から」

「銀杏の樹が一本、門前にあつた」

「夫から」

「銀杏の樹から本堂迄、一丁半許り、石が敷き詰めてあつた。非常に細長い寺だつた」
「這入つて見たかい」
「やめて來た」
「其外に何もないかね」
「別段何もないな。一體、寺と云ふものは大概の村にはあるね、君」
「さうさ、人間の死ぬ所には必ずある筈ぢやないか」
「成程さうだね」と圭さん、首を捻る。圭さんは時々妙な事に感心する。しばらくして、捻ねつた首を眞直にして、圭さんがかう云つた。
「夫から鍛冶屋の前て、馬の沓を替へる所を見て來たが實に巧みなものだね」
「どうも寺丈にしては、ちと、時間が長過ぎると思つた。馬の沓がそんなに珍しいかい」
「珍らしくなくつても、見たのさ。君、あれに使ふ道具が幾通りあると思ふ」
「幾通りあるかな」
「あてゝ見給へ」
「あてなくつても好いから敎へるさ」
「何ても七つ許りある」
「そんなにあるかい、何と何だい」

「何と何だつて、僣かにあるんだよ。第一爪をはがす鑿と、鑿を敲く槌と、夫から爪を削る小刀と、爪を剔る妙なものと、夫から……」

「夫から何があるかい」

「夫から變なものが、まだ色々あるんだよ。第一馬の大人しいには驚ろいた。あんなに、削られても、剔られても平氣て居るぜ」

「爪だもの。人間だつて、平氣て爪を剪るぢやないか」

「人間はさうだが馬だぜ、君」

「馬だつて、人間だつて爪に變りはないやね。君は余ッ程呑氣だよ」

「呑氣だから見てゐたのさ。然し薄暗い所で赤い鐵を打つと奇麗だね。ぴち〳〵火花が出る」

「出るさ、東京の眞中でも出る」

「東京の眞中でも出る事は出るが、感じが違ふよ。かう云ふ山の中の鍛冶屋は第一、音から違ふ。そら、此處迄聞えるぜ」

初秋の日脚は、うす寒く、遠い國の方へ傾いて、淋しい山里の空氣が、心細い夕暮れを促がすなかに、かあん〳〵と鐵を打つ音がする。

「聞えるだらう」と圭さんが云ふ。

「うん」と碌さんは答へたぎり默然として居る。隣りの部屋で何だか二人しきりに話をしてゐる。

「そこで、その、相手が竹刀を落したんだあね。すると、その、ちよいと、小手を取つたんだあね」
「ふうん。とう〳〵小手を取られたのかい」
「とう〳〵小手を取られたんだあね。ちよいと小手を取つたんだが、そこがそら、竹刀を落したものだから、どうにも、かうにも仕樣がないやあね」
「ふうん。竹刀を落したのかい」
「竹刀は、そら、さつき、落して仕舞つたあね」
「竹刀を落して仕舞つて、小手を取られたら困るだらう」
「困らあゝね。竹刀も小手も取られたんだから」
二人の話しはどこ迄行つても竹刀と小手で持ち切つて居る。默然として、對座してゐた圭さんと碌さんは顏を見合はして、にやりと笑つた。
かあん〳〵と鐵を打つ音が靜かな村へ響き渡る。癇走つた上に何だか心細い。
「まだ馬の沓を打つてる。何だか寒いね、君」と圭さんは白い浴衣の下で堅くなる。碌さんも同じく白地の單衣の襟をかき合せて、だらしのない膝頭を行儀よく揃へる。やがて圭さんが云ふ。
「僕の小供の時住んでた町の眞中に、一軒の豆腐屋があつてね」
「豆腐屋があつて?」
「豆腐屋があつて、其豆腐屋の角から一丁計り爪先上がりに上がると寒磬寺と云ふ御寺があつてね」

「寒磬寺と云ふ御寺がある？」
「ある。今でもあるだらう。門前から見ると只大竹藪ばかり見えて、本堂も庫裏もない樣だ。其御寺で毎朝四時頃になると、誰だか鉦を敲く」
「誰だか鉦を敲くつて、坊主が敲くんだらう」
「坊主だか何だか分らない。只竹の中でかん／＼と幽かに敲くのさ。冬の朝なんぞ、霜が強く降つて、布團のなかで世の中の寒さを一二寸の厚さに遮ぎつて聞いてゐると、竹藪のなかから、かん／＼響いてくる。誰が敲くのだか分らない。僕の寺の前を通る度に、長い石甃と、倒れかゝつた山門と、山門を埋め盡くす程な大竹藪を見るのだが、一度も山門のなかを覗いた事がない。只竹藪のなかで敲く鉦の音丈を聞いては、夜具の裏で海老の樣になるのさ」
「海老の樣になる？」
「うん。海老の樣になつて、口のうちで、かん／＼、かん／＼と云ふのさ」
「妙だね」
「すると、門前の豆腐屋が屹度起きて、雨戸を明ける。ぎつぎつと豆を臼で挽く音がする。さあ／＼と豆腐の水を易へる音がする」
「君の家は全體どこにある譯だね」
「僕のうちは、つまり、そんな音が聞える所にあるのさ」

「だから、何處にある譯だね」

「すぐ傍さ」

「豆腐屋の向か、隣りかい」

「なに二階さ」

「どこの」

「豆腐屋の二階さ」

「へえゝ。そいつは……」と碌さん驚ろいた。

「僕は豆腐屋の子だよ」

「へえゝ。豆腐屋かい」と碌さんは再び驚ろいた。

「夫から垣根の朝顔が、茶色に枯れて、引つ張るとがらがら鳴る時分、白い靄が一面に降りて、町の外れの瓦斯燈に灯がちらちらすると思ふと又鉦が鳴る。かんかん竹の奥で冴えて鳴る。夫から門前の豆腐屋が此鉦を合圖に、腰障子をはめる」。

「門前の豆腐屋と云ふが、それが君のうちぢやないか」

「僕のうち、即ち門前の豆腐屋が腰障子をはめる。かんかんと云ふ聲を聞きながら僕は二階へ上がつて布團を敷いて寢る。—僕のうちの吉原揚は旨かつた。近所で評判だつた」。

降り座敷の小手と竹刀は双方とも大人しくなつて、向ふの椽側では、六十余りの肥つた爺さんが、丸

い脊を柱にもたして、胡座の儘、毛抜きで顋の鬚を一本々々に拔いてゐる。鬚の根をうんと抑へて、ぐいと拔くと毛拔は下へ彈ね返り、顋は上へ反り返る。丸で器械の樣に見える。

「あれは何日掛つたら拔けるだらう」と碌さんが圭さんに質問をかける。

「一生懸命にやつたら半日位で濟むだらう」

「さうは行くまい」と碌さんが反對する。

「さうかな。ぢや一日かな」

「一日や二日で奇麗に拔けるなら譯はない」

「さうさ、ことによると一週間もかゝるかね。見給へ、あの丁寧に顋を撫て廻しながら拔いてるのを」

「あれぢや。古いのを拔いちまはないうちに、新しいのが生えるかも知れないね」

「兎に角痛い事だらう」と圭さんは話頭を轉じた。

「痛いに違ひないね。忠告してやらうか」

「なんて」

「よせつてさ」

「余計な事だ。それより幾日掛つたら、みんな拔けるか聞いて見樣ぢやないか」

「うん、よからう。君が聞くんだよ」

「僕はいやだ、君が聞くのさ」

「聞いても好いが詰らないぢやないか」
「だから、まあ、よさうよ」と圭さんは自己の申し出しを惜氣もなく撤回した。
一度途切れた村鍛冶の音は、今日山里に立つ秋を、幾重の稻妻に碎く積りか、かあん〳〵と澄み切つた空の底に響き渡る。
「あの音を聞くと、どうしても豆腐屋の昔が思ひ出される」と圭さんが腕組をしながら云ふ。
「全體豆腐屋の子がどうして、そんなになつたもんだね」
「豆腐屋の子がどんなになつたのさ」
「だつて豆腐屋らしくないぢやないか」
「豆腐屋だつて、肴屋だつて―ならうと思へば、何にでもなれるさ」
「さうさな、つまり頭だからね」
「頭ばかりぢやない。世の中には頭のいゝ豆腐屋が何人ゐるか分らない。夫でも生涯豆腐屋さ。氣の毒なものだ」
「それぢや何だい」と碌さんが小供らしく質問する。
「何だつて君、矢つ張りならうと思ふのさ」
「ならうと思つたつて、世の中がしてくれないのが大分あるだらう」
「だから氣の毒だと云ふのさ、不公平な世の中に生れゝば仕方がないから、世の中がしてくれなくても

何でも、自分でならうと思ふのさ」。

「思つて、なれなければ?」

「なれなくつても何でも思ふんだ。思つてるうちに、世の中が、してくれる樣になるんだ」と圭さんは横着を云ふ。

「さう注文通りに行けば結構だ。ハ……」

「だつて僕は今日迄さうして來たんだもの」

「だから君は豆腐屋らしくないと云ふのだよ」

「是から先、又豆腐屋らしくなつて仕舞ふかも知れないかな。厄介だな。ハヽヽ」

「なつたら、どうする積りだい」

「なれば世の中がわるいのさ。不公平な世の中を公平にしてやらうと云ふのに、世の中が云ふ事をきかなければ、向の方が惡いのだらう」

「然し世の中も何だね、君、豆腐屋がえらくなる樣なら、自然えらい者が豆腐屋になる譯だね」

「えらい者た、どんな者だい」

「えらい者つて云ふのは、何さ。例へば華族とか金持とか云ふものさ。」と碌さんは、すぐ樣えらい者を說明して仕舞ふ。

「うん華族や金持か、ありや今でも豆腐屋ぢやないか、君」

「其豆腐屋連が馬車へ乗つたり、別莊を建てたりして、自分丈の世の中の樣な顏をしてゐるから駄目だよ」
「だから。そんなのは、本當の豆腐屋にして仕舞ふのさ」
「こつちがする氣でも向がならないやね」
「ならないのをさせるから世の中が公平になるんだよ」
「公平に出來れば結構だ。大いにやり玉へ」
「やり給へおやいけない。君もやらなくつちあ。—只、馬車へ乗つたり、別莊を建てたりする丈ならいゝが、無暗に人を壓逼するぜ、あゝ云ふ豆腐屋は。自分が豆腐屋の癖に」と圭さんはそろ〳〵慷慨し始める。
「君はそんな目に逢つた事があるのかい」
圭さんは腕組をした儘ふゝんと云つた。村鍛冶の音は不相變かあん〳〵と鳴る。
「まだ、かん〳〵遣つてる。—おい僕の腕は太いだらう」と圭さんは突然腕まくりをして、黒い奴を碌さんの前に壓し付けた。
「君の腕は昔から太いよ。さうして、いやに黒いね。豆を磨いた事があるのかい」
「豆も磨いた、水も汲んだ。—おい、君粗忽て人の足を蹈んだら、どつちが謝まるものだらう」
「踏んだ方が謝まるのが通則の樣だな」

「突然、人の頭を張り付けたら?」

「そりや氣違だらう」

「氣狂なら謝まらないでもいゝものかな」

「さうさな。謝まらさす事が出來れば、謝まらさす方がいゝだらう」

「それを氣違の方で謝まれつて云ふのは獵ろくぢやないか」

「そんな氣違があるのかい」

「今の豆腐屋連はみんな、さう云ふ氣違ばかりだよ。人を壓逼した上に、人に頭を下げさせ樣とするんだぜ。本來なら向が恐れ入るのが人間だらうぢやないか、君」

「無論それが人間さ。然し氣違の豆腐屋なら、うつちやつて置くより外に仕方があるまい」

圭さんは再びふゝんと云つた。しばらくして。

「そんな氣違を增長させる位なら、世の中に生れて來ない方がいゝ」と獨り言の樣につけた。

村鍛冶の音は、會話が切れる度に靜かな里の端から端迄かあん〱と響く。

「頻りにかん〱やるな。どうも、あの音は寒磬寺の鉦に似てゐる」

「妙に氣に掛るんだね。其寒磬寺の鉦の音と、氣違の豆腐屋とでも何か關係があるのかい。—全體君が豆腐屋の伜から、今日迄に變化した因緣はどう云ふ筋通なんだい。少し話して聞かせないか」

「聞かせてもいゝが、何だか寒いぢやないか。ちよいと夕飯前に湯泉に這入らう。君いやか」

「うん這入らう」

圭さんと碌さんは手拭をぶら下げて、庭へ降りる。棕梠緒の貸下駄には都らしく宿の焼印が押してある。

（二）

「此湯は何に利くんだらう」と豆腐屋の圭さんが湯槽のなかで、ざぶ〳〵やりながら聞く。

「何に利くかなあ。分析表を見ると、何にでも利く様だ。―君そんなに、臍ばかりざぶ〳〵洗つたつて、出臍は癒らないぜ」

「純透明だね」と出臍の先生は、兩手に温泉を掬んで、口へ入れて見る。やがて

「味も何もない」と云ひながら、流して吐き出した。

「飮んでもいゝんだよ」と碌さんはがぶ〳〵飮む。

圭さんは臍を洗ふのをやめて、湯槽の縁へ肘をかけて漫然と、硝子越しに外を眺めてゐる。碌さんは首丈湯に漬かつて、相手の臍から上を見上げた。

「どうも、いゝ體格だ。全く野生の儘だね」

「豆腐屋出身だからなあ。體格が惡るいと華族や金持ちと喧嘩は出來ない。こつちは一人向は大勢だから」

「さも喧嘩の相手がある樣な口振だね。當の敵は誰だい」

「誰でも構はないさ」

「ハヽヽ呑氣なもんだ。喧嘩にも強さうだが、足の強いのには驚いたよ。君と一所でなければ、きのう此處(こゝ)迄くる勇氣はなかつたよ。實は途中で御免蒙らうかと思つた」

「實際少し氣の毒だつたね。あれでも僕は余程加減して、歩行いた積りだ」

「本當かい？果して本當ならえらいものだ。―何だか怪しいな。すぐ付け上がるからいやだ」

「ハヽヽ付け上がるものか。付け上がるのは華族と金持ばかりだ」

「又華族と金持ちか。眼の敵(かたき)だね」

「金はなくつても、此方(こつち)は天下の豆腐屋だ」

「さうだ、苟も天下の豆腐屋だ。野生の腕力家だ」

「君、あの窓の外に咲いてゐる黄色い花は何だらう」

碌さんは湯の中で首を捩ぢ向ける。

「かぼちやさ」

「馬鹿あ云つてる。かぼちやは地の上を這つてるものだ。あれは竹へからまつて、風呂場の屋根へあがつてゐるぜ」

「屋根へ上がつちや、かぼちやになれないかな」

「だつて可笑しいぢやないか、今頃花が咲くのは」

「構ふものかね、可笑しいたつて、屋根にかぼちやの花が咲くさ」

「そりや唄かい」

「さうさな、前半は唄の積りでもなかつたんだが、後半に至つて、つい唄になつて仕舞つた樣だ」

「屋根にかぼちやが生る樣だから、豆腐屋が馬車なんかへ乘るんだ。不都合千萬だよ」

「又慷慨か、こんな山の中へ來て慷慨したつて始まらないさ。それより早く阿蘇へ登つて噴火口から、赤い岩が飛び出す所でも見るさ。—然し。飛び込んぢや困るぜ。—何だか少し心配だな」

「噴火口は實際猛烈なものだらうな、何でも、澤庵石の樣な岩が眞赤になつて、空の中へ吹き出すさうだぜ。夫が三四町四方一面に吹き出すのだから壯んに違ない。—あしたは早く起きなくつちや、いけないよ」

「うん、起きる事は起きるが山へかゝつてから、あんなに早く步行いちや、御免だ」と碌さんはすぐ豫防線を張つた。

「とも角も六時に起きて……」

「六時に起きる?」

「六時に起きて、七時半に湯から出て、八時に飯を食つて、八時半に便所から出て、さうして宿を出て、十一時に阿蘇神社へ參詣して、十二時から登るのだ」

「へえ、誰が」

「僕と君がさ」

「何だか君一人りで登る樣だぜ」

「なに構はない」

「難有い仕合せだ。丸で御供の樣だね」

「うふん。時に晝は何を食ふかな。矢っ張り饂飩にして置くか」と圭さんが、あすの晝飯の相談をする。

「饂飩はよすよ。こゝいらの饂飩は丸で杉箸を食ふ樣で腹が突張つてたまらない」

「では蕎麥か」

「蕎麥も御免だ。　は麵類ぢや、とても凌げない男だから」

「ぢや何を食ふ積だい」

「何でも御馳走が食ひたい」

「阿蘇の山の中に御馳走がある筈がないよ。だから此際、ともかくも饂飩で間に合せて置いて……」

「此際は少し變だぜ。此際た、どんな際なんだい」

「剛健な趣味を養成する爲めの旅行だから……」

「そんな旅行なのかい。ちつとも知らなかつたぜ。剛健はいゝが饂飩は平に不賛成だ。かう見えても僕は身分が好いんだからね」

「だから柔弱でいけない。僕なぞは學資に窮した時、一日に白米二合で間に合せた事がある」

「痩せたらう」と篠さんが氣の毒な事を聞く。
「そんなに痩せもしなかつたが只虱が湧いたには困つた。―君、虱が湧いた事があるかい」
「僕はないよ。身分が違はあ」
「まあ經驗して見給へ。そりや容易に獵り盡せるもんぢやないぜ」
「煮え湯で洗濯したらよからう」
「煮え湯？　煮え湯ならいゝかも知れない。然し洗濯するにしても只では出來ないからな」
「なある程、錢が一文もないんだね」
「一文もないのさ」
「君どうした」
「仕方がないから、襯衣を敷居の上へ乘せて、手頃な丸い石を拾つて來て、こつ〳〵叩いた。さうしたら虱が死なゝいうちに、襯衣が破れて仕舞つた」
「おや〳〵」
「しかも夫を宿のかみさんが見付けて、僕に退去を命じた」
「嘸困つたらうね」
「なあに困らんさ、そんな事で困つちや、今日迄生きて居られるものか。是から追ひ〳〵華族や金持ちを豆腐屋にするんだからな。滅多に困つちや仕方がない」

「すると僕なんぞも、今に、とおふい、油揚、がんもどきと怒鳴つて、あるかなくつちやならないかね」

「華族でもない癖に」

「まだ華族にはならないが、金は大分あるよ」

「あつても其位ぢや駄目だ」

「此位ぢや豆腐いと云ふ資格はないのかな。大に僕の財産を見縊つたね」

「時に君、脊中を流して呉れないか」

「僕のも流すかい」

「流してもいゝさ。隣りの部屋の男も流しくらをやつてたぜ、君」

「隣りの男の脊中は似たり寄つたりだから公平だが、君の脊中と、僕の脊中とは大分面積が違ふから損だ」

「そんな面倒な事を云ふなら一人で洗ふ許りだ」と圭さんは、兩足を湯壺の中にうんと踏ん張つて、ぎうと手拭をしごいたと思つたら、兩端を握つた儘、ぴしやりと、音を立てゝ斜に脊切つた脊中へ宛がつた。やがて二の腕へ力瘤が急に出來上がると、水を含んだ手拭は、岡の樣に肉づいた脊中をぎちぎち擦り始める。

手拭の運動につれて、圭さんの太い眉がくしやりと寄つて來る。鼻の穴が三角形に膨脹して、小鼻が勃として左右に展開する。口は腹を切る時の樣に堅く喰締つた儘、兩耳の方迄割けてくる。

「丸で仁王の樣だね。仁王の行水だ。そんな猛烈な顏がよく出來るね。こりや不思議だ。さう眼をぐり〳〵させなくつても、脊中は洗へさうなものだがね」

圭さんは何にも云はずに一生懸命にぐい〳〵擦る。擦つては時々、手拭を溫泉に漬けて、充分水を含ませる。含ませるたんびに、碌さんの顏へ、汗と膏と垢と溫泉の交つたものが十五六滴づゝ飛んで來る。

「こいつは降參だ。ちよつと失敬して、流しの方へ出るよ」と碌さんは湯槽を飛び出した。飛び出しはしたものゝ、感心の極、流しへ突っ立った儘、茫然として、仁王の行水を眺めてゐる。

「あの隣りの客は元來何者だらう」と圭さんが槽のなかゝら質問する。

「隣りの客どころぢやない。其顏は不思議だよ」

「もう濟んだ。あゝ好い心持だ」と圭さん、手拭の一端を放すや否や、ざぶんと溫泉の中へ、石の樣に大きな脊中を落す。滿槽の湯は一度に面喰つて、槽の底から大恐惶を持ち上げる。ざあつ〳〵と音がして、流しへ溢れだす。

「あゝ、いゝ心持ちだ」と圭さんは波のなかで云つた。

「成程さう遠慮なしに振舞つたら、好い心持ちに相違ない。君は豪傑だよ」

「あの隣りの客は竹刀と小手の事ばかり云つてるぢやないか。全體何物だい」と圭さんは呑氣なものだ。

「君が華族と金持ちの事を氣にする樣なものだらう」

「僕のは深い原因があるのだが、あの客のは何だか譯が分らない」

「なに自分ぢあ、あれて分ってるんだよ。―そこてその小手を取られたんだあね―」と碌さんが隣りの眞似をする。

「ハヽヽそこてそら竹刀を落したんだあねか。ハヽヽヽ。どうも氣樂なものだ」と圭さんも眞似して見る。

「なにあれでも、實は慷慨家かも知れない。そらよく草双紙にあるぢやないか。何とかの何々、實は海賊の張本毛剃九衞門て」

「海賊らしくもないぜ。さつき溫泉に這入りに來る時、覗いて見たら、二人共木枕をして、ぐう／＼寐て居たよ」

「木枕をして寐られる位の頭だから、そら、そこて、その、小手を取られるんだあね」と碌さんは、まだ眞似をする。

「竹刀も取られるんだあねか。ハヽヽヽ。何でも赤い表紙の本を胸の上へ載せたまんま寐て居たよ」

「其赤い本が、何てもその、竹刀を落したり、小手を取られるんだあね」と碌さんは、どこ迄も眞似をする。

「何だらう、あの本は」

「伊賀の水月さ」と碌さんは、躊躇なく答へた。

「伊賀の水月？伊賀の水月た何だい」

「伊賀の水月を知らないのかい」

「知らない。知らなければ恥かな」と圭さんは一寸首を捻つた。

「恥ぢやないが話せないよ」

「話せない？なぜ」

「なぜつて、君、荒木又右衛門を知らないか」

「うん、又右衛門か」

「知つてるのかい」と碌さん又湯の中へ這入る。圭さんは又槽のなかへ突立つた。

もう仁王の行水は御免だよ」

「もう大丈夫、脊中はあらはない。あまり這入つてると逆上（のぼせ）るから、時々から立つのさ」

「只立つ許りなら、安心だ。―それで、その、荒木又右衛門を知つてるかい」

「又右衛門？さうさ、どこかで聞いた様だね。豊臣秀吉の家來ぢやないか」と圭さん、飛んでもない事を云ふ。

「ハヽヽ、こいつはあきれた。華族や金持ちを豆腐屋にするんだなんて、えらい事を云ふが、どうも何も知らないね」

「ぢや待つた。少し考へるから。又右衛門だね。又右衛門、荒木又右衛門だね。待ち給へよ、荒木の又右衛門と。うん分つた」

「何だい」
「相撲取だ」
「ハヽヽ荒木、ハヽヽヽ荒木、又ハヽヽヽ又衛門が、相撲取り。愈、あきれて仕舞つた。實に無識だね。ハヽヽヽ」と碌さんは大恐悦である。
「そんなに可笑しいか」
「可笑しいつて、誰に聞かしたつて笑ふぜ」
「そんなに有名な男か」
「さうさ、荒木又右衛門ぢやないか」
「だから僕もどこかで聞いた様に思ふのさ」
「そら、落ち行く先きは九州相良つて云ふぢやないか」
「云ふかも知れんが、其句は聞いた事がない様だ」
「困つた男だな」
「ちつとも困りやしない。荒木又右衛門位知らなくつたつて、毫も僕の人格には關係はしまい。夫よりも五里の山路が苦になつて、矢鱈に不平を並べる様な人が困つた男なんだ」
「腕力や脚力を持ち出されちや駄目だね。到底叶ひつこない。そこへ行くと、どうしても豆腐屋出身の天下だ。僕も豆腐屋へ年期奉公に住み込んで置けばよかつた」

「君は第一平生から惰弱でいけない。ちつとも意志がない」

「是て余つ程有る積りなんだがな。唯饂飩に逢つた時ばかりは全く意志が薄弱だと、自分ながら思ふね」

「ハヽヽ、詰らん事を云つてゐらあ」

「然し豆腐屋にしちや、君のからだは奇麗過ぎるね」

「こんなに黒くつてもかい」

「黒い白いは別として、豆腐屋は大概割青（はりもの）があるぢやないか」

「なぜ」

「なぜか知らないが、割青（はりもの）があるもんだよ。君、なぜほらなかつた」

「馬鹿あ云つてらう。僕の様な高尚な男が、そんな恐な眞似をするものか。華族や金持がほれば似合ふかも知れないが、僕にはそんなものは向かない。荒木又右衛門だつて、ほつちや居まい」

「荒木又右衛門か。そいつは困つたな。まだそこ迄は調べが届いてゐないからね」

「そりやどうでもいゝが、兎も角もあしたは六時に起きるんだよ」

「さうして、兎も角も饂飩を食ふんだらう。僕の意志の薄弱なのにも困るかも知れないが、君の意志の強固なのにも辟易するよ。うちを出てから、僕の云ふ事は一つも通らないんだからな。全く唯唯諾々として命令に服してゐるんだ。豆腐屋主義はきびしいもんだね」

「なに此位強硬にしないと増長していけない」

「僕がかい」
「なあに世の中の奴等がさ。金持ちとか、華族とか、何とか蚊とか、生意氣に威張る奴等がさ」
「然しそりや見當違だぜ。そんなものゝ身代りに僕が豆腐屋主義に屈從するなたまらない。どうも驚ろいた。以來君と旅行するのは御免だ」
「なあに構はんさ」
「君は構はなくつてもこつちは大いに構ふんだよ。其上旅費は奇麗に折半されるんだから愚の極だ」
「然し僕の御蔭で天地の壯觀たる阿蘇の噴火口を見る事が出來るだらう」
「可愛想に。一人だつて阿蘇位登れるよ」
「然し華族や金持なんて存外意氣地がないもんで……」
「又身代りか、どうだい身代りはやめにして、本當の華族や金持ちの方へ持つて行つたら」
「いづれ、其内持つてく積りだがね。—意氣地がなくつて、理窟がわからなくつて、個人としちあ三文の價値もないもんだ」
「だから、どしく\豆腐屋にして仕舞ふさ」
「其內、してやらうと思つてるのさ」
「思つてる丈ぢや劍呑なものだ」
「なあに年が年中思つてゐりや、どうにかなるもんだ」

「隨分氣が長いね。尤も僕の知つたものにね。虎列拉になる〳〵と思つてゐたら、とう〳〵虎列拉になつたものがあるがね。君のもさう、うまく行くと好いけれども」

「時にあの髯を拔いてた爺さんが手拭をさげてやつて來たぜ」

「丁度好いから君一つ聞いて見給へ」

「僕はもう湯氣に上がりさうだから、出るよ」

「まあ、いゝさ、出ないでも。君がいやなら僕が聞いて見るから、もう少し這入つて居たまへ」

「おや、あとから竹刀と小手が一所に來たぜ」

「どれ。成程、揃つて來た。あとから、まだ來るぜ。やあ婆さんが來た。婆さんも、此湯槽へ這入るのかな」

「僕は兎も角も出るよ」

「婆さんが這入るなら、僕も兎も角も出やう」

風呂場を出ると、ひやりと吹く秋風が、袖口からすうと這入つて、素肌を臍のあたり迄吹き拔けた。出臍の圭さんは、はつくしようと大きな苦沙彌を無遠慮にやる。上がり口に白芙蓉が五六輪、夕暮の秋を淋しく咲いて居る。見上げる向では阿蘇の山がごう〳〵と遠くながら鳴つて居る。

「あすこへ登るんだね」と碌さんが云ふ。

「鳴つてるぜ。愉快だな」と圭さんが云ふ。

（三）

「姉さん、此人は肥つてるだらう」

「大分肥えて居なはります」

「肥えてるつて、おれは、これて豆腐屋だもの」

「ホヽヽヽ」

「豆腐屋ぢや可笑しいかい」

「豆腐屋の癖に西郷隆盛の様な顔をして居るから可笑しいんだよ。時にかう、精進料理ぢや、あした、御山へ登れさうもないな」

「又御馳走を食ひたがる」

「食ひたがるつて、是ぢや營養不良になる許りだ」

「なに是程御馳走があれば澤山だ。—湯葉に、椎茸に、芋に、豆腐、色々あるぢやないか」

「色々ある事はあるがね。ある事は君の商買道具迄あるんだが—困つたな。きのふは饂飩ばかり食はせられる。けふは湯葉に椎茸ばかりか。あゝあゝ」

「君此芋を食つて見給へ。堀りたてゞ頗る美味だ」

「頗る剛健な味がしやしないか—おい姉さん、肴は何もないのかい」

「生憎何も御座りまつせん」

「御座りまつせんは弱つたな。ぢや玉子があるだらう」
「玉子なら御座ります」
「其玉子を半熟にして來てくれ」
「何に致します」
「半熟にするんだ」
「煮て參じますか」
「まあ煮るんだが、半分煮るんだ。半熟を知らないか」
「いゝえ」
「知らない？」
「知りまつせん」
「どうも辟易だな」
「何て御座ります」
「何てもいゝから、玉子を持つて御出。それから、おい、ちよつと待つた。―君ビールを飲むか」
「飲んでもいゝ」と圭さんは泰然たる返事をした。
「飲んでもいゝか、夫ぢや飲まなくつてもいゝんだ。―よすかね」
「よさなくつても好い。兎も角も少し飲まう」

「兎も角もか、ハヽヽ。君程、兎も角もの好きな男はないね。それて、あしたになると、兎も角も饂飩を食はうと云ふんだらう。ー姉さん、ビールも序てに持つてくるんだ。玉子とビールだ。分つたらうね」
「ビールは御座りまつせん」
「ビールがない?ー君ビールはないとさ。何だか日本の領地てない樣な氣がする。情ない所だ」
「なければ、飲まなくつても、いゝさ」と圭さんは又泰然たる挨拶をする。
「ビールは御座りませんばつてん、惠比壽なら御座ります」
「ハヽヽヽ愈妙になつて來た。おい君ビールてない惠比壽があるつて云ふんだが、その惠比壽ても飲んて見るかね」
「うん、飲んてもいゝ。ーその惠比壽は矢つ張り罎に這入つてるんだらうね、姉さん」と圭さんは此時漸く下女に話しかけた。
「ねえ」と下女は肥後訛りの返事をする。
「ぢや、兎も角もその栓を拔いてね。罎ごと、こゝへ持つて御出」
「ねえ」
下女は心得貌に起つて行く。幅の狹い唐縮緬をちよつきり結びに御臀の上へ乘せて、絣の筒袖をつんつるてんに着てゐる。髮丈は一種異樣の束髮に、大分碌さんと圭さんの膽を寒からしめた樣だ。
「あの下女は異彩を放つてるね」と碌さんが云ふと、圭さんは平氣な顏をして。

「さうさ」と何の苦もなく答へたが。

「單純でいゝ女だ」とあとへ、持つて來て、木に竹を接いだ樣につけた。

「剛健な趣味がありやしないか」

「うん。實際田舍者の精神に、文明の教育を施すと、立派な人物が出來るんだがな。惜しい事だ」。

「そんなに惜しけりや、あれを東京へ連れて行つて、仕込んで見るがいゝ」

「うん、それも好からう。然しそれより前に文明の皮を剝かなくつちや、いけない」

「皮が厚いから中々骨が折れるだらう」と碌さんは水瓜の樣な事を云ふ。

「折れても何でも剝くのさ。奇麗な顏をして、下卑た事ばかりやつてる。それも金がない奴だと、自分丈て濟むのだが、身分がいゝと困る。下卑た根性を社會全體に蔓延させるからね。大變な害毒だ。しかも身分がよかつたり、金があつたりするものに、よくかう云ふ性根の惡い奴があるものだ」

「しかも、そんなのに限つて皮が愈厚いんだらう」

「體裁丈は頗る美事なものさ。然し内心はあの下女より餘つ程すれてゐるんだから、いやになつて仕舞ふ」

「さうかね。ぢや、僕も是から、ちと剛健黨の御仲間入りをやらうかな」

「無論の事さ。だから先づ第一着にあした六時に起きて……」

「御晝に饂飩を食つてか」

「阿蘇の噴火口を觀て……」
「瘋癲を起して飛び込まない樣に要心をしてか」
「尤も崇高なる天地間の活力現象に對して、雄大の氣象を養つて、齷齪たる塵事を超越するんだ」
「あんまり超越し過ぎるとあとで世の中が、いやになつて、却つて困るぜ。だからその所は好加減に超越して置く事にしやうぢやないか。僕の足ぢや到底さうえらく超越出來さうもないよ」
「弱い男だ」
筒袖の下女が、盆の上へ、麥酒を一本、洋盃を二つ、玉子を四個、並べつくして持つてくる。
「そら惠比壽が來た。此惠比壽がビールでないんだから面白い。さあ一杯飲むかい」と碌さんが、相手に洋盃を渡す。
「うん、序に其玉子を二つ貰はうか」と圭さんが云ふ。
「だつて玉子は僕が誂らへたんだぜ」
「然し四つとも食ふ氣かい」
「あしたの饂飩が氣になるから、此うち二個は携帶して行かうと思ふんだ」
「うん、そんなら、よさう」と圭さんはすぐ斷念する。
「よすとなると氣の毒だから、まあ上げやう。本來なら剛健黨が玉子なんぞを食ふのは、ちと贅澤の沙汰だが、可哀想でもあるから、――さあ食ふがいゝ。――姉さん、此惠比壽はどこで出來るんだね」

「大方熊本て御座りまつしよ」
「ふん、熊本製の惠比壽か、中々旨いや。君どうだ、熊本製の惠比壽は」
「うん。矢っ張り東京製と同じ樣だ。—おい、姉さん、惠比壽はいゝが、此玉子は生だぜ」と玉子を割つた圭さんは一寸眉をひそめた。
「ねえ」
「生だと云ふのに」
「ねえ」
「何だか要領を得ないな。君、半熟を命じたんぢやないか。君のも生か」と圭さんは下女を捨てゝ、碌さんに向つてくる。
「半熟を命じて不熟を得たりか。僕のを一つ割つて見やう。—おや是は駄目だ……」
「うで玉子か」と圭さんは首を延して相手の膳の上を見る。
「全熟だ。こつちのはどうだ。—うん、是も全熟だ。—姉さん、これは、うで玉子ぢやないか」と今度は碌さんが下女にむかふ。
「ねえ」
「さうなのか」
「ねえ」

「なんだか言葉の通じない國へ來た樣だな。—向ふの御客さんのが生玉子て、おれのは、うて玉子なのかい」
「ねえ」
「なぜ、そんな事をしたのだい」
「半分煮て參じました」
「なある程。こりや、よく出來てらあ。ハヽヽヽ、君、半熟のいはれが分つたか」と碌さん横手を打つ。
「ハヽヽ單純なものだ」
「丸て落し噺し見た樣だ」
「間違ひましたか。そちらのも煮て參じますか」
「なに是ていゝよ。—姉さん、こゝから、阿蘇迄何里あるかい」と圭さんが玉子に關係のない方面へ出て來た。
「こゝが阿蘇て御座りまつす」
「こゝが阿蘇なら、あした六時に起きるがものはない。もう二三日逗留して、すぐ熊本へ引き返さうぢやないか」と碌さんがすぐ云ふ。
「どうぞ、何時迄も御逗留なさいまつせ」

「折角、姉さんも、あゝ云つて勸めるものだから、どうだらう、いつそ、さうしたら」と碌さんが圭さんの方を向く。圭さんは相手にしない。

「こゝも阿蘇だつて、阿蘇郡なんだらう」と矢張り下女を追窮してゐる。

「ねえ」

「ぢや阿蘇の御宮迄はどの位あるかい」

「御宮迄は三里て御座りまつす」

「山の上迄は」

「御宮から二里て御座りますたい」

「山の上はえらいだらうね」と碌さんが突然飛び出してくる。

「ねえ」

「御前登つた事があるかい」

「いゝえ」

「ぢや知らないんだね」

「いゝえ、知りまつせん」

「知らなけりや、仕樣がない。折角話を聞かうと思つたのに」

「御山へ御登りなさいますか」

「うん、早く登りたくつて、仕方がないんだ」と圭さんが云ふと。
「僕は登りたくなくつて、仕方がないんだ」と碌さんが打ち壊はした。
「ホヽ、夫ぢや、あなた丈、こゝへ御逗留なさいまつせ」
「うん、こゝで寢轉んで、あのごう云ふ音を聞いてゐる方が樂な樣だ。ごう〳〵と云やあ、さつきより、大分烈しくなつた樣だぜ、君」
「さうさ、大分、強くなつた。夜の所爲だらう」
「御山が少し荒れて居りますたい」
「荒れると烈しく鳴るのかね」
「ねえ。さうしてよなが澤山に降つて參りますたい」
「よなた何だい」
「灰て御座りまつす」
下女は障子をあけて、椽側へ人指しゆびを擦りつけながら。
「御覽なさりまつせ」と黑い指先を出す。
「成程、始終降つてるんだ。きのふは、こんなぢやなかつたね」と圭さんが感心する。
「ねえ。少し御山が荒れて居りますたい」
「おい君、いくら荒れても登る氣かね。荒れ模樣なら少々延ばさうぢやないか」

「荒れゝば猶愉快だ。滅多に荒れた所なんぞが見られるものぢやない。荒れる時と、荒れない時は火の出具合が大變違ふんださうだ。ねえ、姉さん」

「ねえ。今夜は大變赤く見えます。ちよと出て御覧なさいまつせ」

どれと、圭さんはすぐ椽側へ飛び出す。

「いやあ、こいつは熾だ。おい君早く出て見給へ。大變だよ」

「大變だ？ 大變ぢや出て見るかな。どれ。――いやあ、こいつは――成程えらいものだね――あれぢあ到底駄目だ」

「何が」

「何がつて、――登る途中で燒き殺されちまふだらう」

「馬鹿を云つてゐらあ。夜だから、あゝ見えるんだ。實際晝間から、あの位やつてるんだよ。ねえ、姉さん」

「ねえ」

「ねえかも知れないが危險だぜ。こゝに斯うして居ても何だか顏が熱い樣だ」と碌さんは、自分の頰べたを撫て廻す。

「大袈裟な事ばかり云ふ男だ」

「だつて君の顏だつて、赤く見えるぜ。そらそこの垣の外に廣い稻田があるだらう。あの靑い葉が一面

一

に、から照らされて居るぢやないか」
「嘘ばかり、あれは星のひかりで見えるのだ」
「星のひかりと火のひかりとは趣が違ふさ」
「どうも、君も餘程無學だね。君、あの火は五六里先きにあるのだぜ」
「何里先きだつて、向ふの方の空が一面に眞赤になつてるぢやないか」と碌さんは向をゆびさして大きな輪を指の先で描いて見せる。
「よるだもの」
「夜だつて……」
「君は無學だよ。荒木又右衞門は知らなくつても好いが、此位な事が分らなくつちや耻だぜ」と圭さんは、横から相手の顔を見た。
「人格にかゝはるかね。人格にかゝはるのは我慢するが、命にかゝはつちや降參だ」
「まだあんな事を云つてゐる。―ぢや姉さんに聞いて見るがいゝ。ねえ姉さん。あの位火が出たつて、御山へは登れるんだらう」
「ねえい」
「大丈夫かい」―と碌さんは下女の顔を覗き込む。
「ねえい。女でも登りますたい」

「女でも登つちや、男は是非登る譯かな。飛んだ事になつたもんだ」

「兎も角も、あしたは六時に起きて……」

「もう分つたよ」

言ひ棄てゝ、部屋のなかに、ごろりと寢轉んだ、碌さんの去つたあとに、圭さんは、默然と、眉を軒げて、奈落から半空に向つて、眞直に立つ火の柱を見詰めてゐた。

（四）

「おい是から曲がつて愈登るんだらう」と圭さんが振り返る。

「こゝを曲がるかね」

「何でも突き當りに寺の石段が見えるから、門を這入らずに左へ廻れと教へたぜ」

「饂飩屋の爺さんがゝ」と碌さんはしきりに胸を撫て廻す。

「さうさ」

「あの爺さんが、何を云ふか分つたもんぢやない」

「何故（なぜ）」

「何故つて。世の中に商買もあらうに、饂飩屋になるなんて、第一夫からが不了簡だ」

「饂飩屋だつて正業だ。金を積んで、貧乏人を壓迫するのを道樂にする樣な人間より遙かに尊といさ」

「尊といかも知れないが、どうも饂飩屋は性に合はない。—然し、とう〳〵饂飩を食はせられた今とな

つて見ると、いくら饂飩屋の亭主を恨んでも後の祭りだから、まあ、我慢して、こゝから曲がつてやらう」

「石段は見えるが、あれが寺かなあ、本堂も何もないぜ」

「阿蘇の火で焼けちまつたんだらう。だから云はない事ぢやない。—おい天氣か少々剣呑になつて來たぜ」

「なに、大丈夫だ。天祐があるんだから」

「どこに」

「どこにでもあるさ。意思のある所には天祐がごろ〳〵してゐるものだ」

「どうも君は自信家だ。剛健黨になるかと思ふと、天祐派になる。此次ぎには天誅組にでもなつて筑波山へ立て籠る積りだらう」

「なに豆腐屋時代から天誅組さ。—貧乏人をいぢめる様な—豆腐屋だつて人間だ—いぢめるつて、何等の利害もないんだぜ、只道樂なんだから驚ろく—」

「いつそんな目に逢つたんだい」

「いつでもいゝさ。桀紂と云へば古來から惡人として通り者だが、二十世紀は此桀紂で充滿して居るんだぜ。しかも文明の皮を厚く被つてるから小憎らしい」

「皮ばかりで中味のない方がいゝ位なものかな。矢つ張り、金があり過ぎて、退屈だと、そんな眞似がしたくなるんだね。馬鹿に金を持たせると大概桀紂になりたがるんだらう。僕の様な有德の君子は貧乏

だし、彼等の様な愚劣な輩は、人を苦しめる爲めに金錢を使つてゐるし、困つた世の中だなあ。いつそ、どうだい、さう云ふ、もゝんがあを十把一とからげにして、阿蘇の噴火口から眞逆樣に地獄の下へ落しちまつたら」

「今に落としてやる」と圭さんは薄黒く渦巻く烟りを仰いて、草鞋足をうんと踏張つた。

「大變な權幕だね。君、大丈夫かい。十把一とからげを放り込まないうちに、君が飛び込んぢやいけないぜ」

「あの音は壯烈だな」

「足の下が、もう搖れて居る樣だ。——おい一寸、地面へ耳をつけて聞いて見給へ」

「どんなだい」

「非常な音だ。慥かに足の下がうなつてる」

「其割に烟りがこないな」

「風の所爲だ。北風だから、右へ吹きつけるんだ」

「樹が多いから、方角が分らない。もう少し登つたら見當がつくだらう」

しばらくは雜木林の間を行く。道幅は三尺に足らぬ。いくら仲が善くても並んで歩行く譯には行かぬ。圭さんは大きな足を悠々と振つて先へ行く。碌さんは小さな體軀（からだ）をすぼめて、小股に後から尾いて行く。尾いて行きながら、圭さんの足跡の大きいのに感心して居る。感心しながら歩行いて行くと、段々おく

れて仕舞ふ。

路は左右に曲折して爪先上りだから、三十分と立たぬうちに、圭さんの影を見失つた。樹と樹の間をすかして見ても何にも見えぬ。山を下りる人は一人もない。上るものにも全く出合はない。只所々に馬の足跡がある。たまに草鞋の切れが茨にかゝつてゐる。其外に人の氣色は更にない、饂飩腹の碌さんは少々心細くなつた、

きのふの澄み切つた空に引き易へて、今朝宿を立つ時からの霧模樣には少し掛念もあつたが、晴れさへすればと、好い加減な事を頼みにして、とう〳〵阿蘇の社迄は漕ぎ付けた。白木の宮に禰宜の鳴らす柏手が、森閑と立つ杉の梢に響いた時、見上げる空から、ぽつりと何やら額に落ちた。饂飩を煮る湯氣が障子の破れから、吹いて、白く右へ靡いた頃から、午過ぎは雨かなとも思はれた。

雜木林を小半里程來たら、怪しい空がとう〳〵持ち切れなくなつたと見えて、梢にしたゝる雨の音が、さあと北の方へ走る。あとから、すぐ新しい音が耳を掠めて、翻がへる木の葉と共に又北の方へ走る。碌さんは首を縮めて、えつと舌打ちをした。

一時間程て林は盡きる。盡きると云はんよりは、一度に消えると云ふ方が適當であらう。ふり返へる、後ろは知らず、貫ぬいて來た一筋道の外は、東も西も茫々たる青草が波を打つて幾段となく連なる後から、むく〳〵と黑い烟りが持ち上がつてくる。噴火口こそ見えないが、烟りの出るのは、つい鼻の先てある。

林が盡きて、青い原を半丁と行かぬ所に、大入道の圭さんが空を仰いで立つてゐる。蝙蝠傘は疊んだ儘、帽子さへ、被らずに毬栗頭をぬつくと草から上へ突き出して地形を見廻してゐる樣子だ。

「おうい。少し待つて呉れ」

「おうい。荒れて來たぞ。荒れて來たぞう丶。しつかりしろう」

「しつかりするから、少し待つてくれえ」と碌さんは一生懸命に草のなかを這ひ上がる。漸く追ひつく碌さんを待ち受けて、

「おい何を愚圖々々してゐるんだ」と圭さんが遣つつける。

「だから饂飩ぢや駄目だと云つたんだ。あゝ苦しい。――おい君の顏はどうしたんだ。眞黑だ」

「さうか、君のも眞黑だ」

圭さんは、無雜作に白地の浴衣の片袖で、頭から顏を撫て廻す。碌さんは腰から、ハンケチを出す。

「なる程、拭くと、着物がどす黑くなる」

「僕のハンケチも、こんなだ」

「ひどいものだな」と圭さんは雨のなかに坊主頭を曝しながら、空模樣を見廻す。

「よなだ。よなが雨に溶けて降つてくるんだ。そら、その薄の上を見給へ」と碌さんが指をさす。長い薄の葉は一面に灰を浴びて濡れながら、靡く。

「成程」

「困つたな、こりや」

「なあに大丈夫だ。ついそこだもの。あの烟りの出る所を目當にして行けば譯はない」

「譯はなさゝうだが、是ぢや路が分らないぜ」

「だから、さつきから、待つて居たのさ。こゝを左りへ行くか、右へ行くかと云ふ、丁度股の所なんだ」

「成程、兩方共路になつてるね。―然し烟りの見當から云ふと、左りへ曲がる方がよさゝうだ」

「君はさう思ふか。僕は右へ行く積りだ」

「どうして」

「どうしてつて、右の方には馬の足跡があるが、左の方には少しもない」

「さうかい」と碌さんは、身軀を前に曲げながら、蔽ひかゝる草を押し分けて、五六歩、左の方へ、進んだが、すぐに取つて返して。

「駄目の樣だ。足跡は一つも見當らない」と云つた。

「ないだらう」

「そつちにはあるかい」

「うん。たつた二つある」

「二つぎりかい」

「さうさ。たつた二つだ。そら、此所と此所に」と圭さんは繻子張の蝙蝠傘の先て、かぶさる薄の下に、

幽かに殘る馬の足跡を見せる。

「是丈かい心細いな」

「なに大丈夫だ」

「天祐ぢやないか、君の天祐はあてにならない事夥しいよ」

「なに是が天祐さ」と圭さんが云ひ了らぬうちに、雨を捲いて颯とおろす一陣の風が、碌さんの麥藁帽を遠慮なく、吹き込めて、五六間先迄飛ばして行く。眼に餘る青草は、風を受けて一度に向ふへ靡いて、見るうちに色が變ると思ふと、又靡き返して故の態に戻る。

「痛快だ。風の飛んで行く足跡が草の上に見える。あれを見給へ」と圭さんが幾重となく起伏する青い草の海を指す。

「痛快でもないぜ。帽子が飛んぢまつた」

「帽子が飛んだ? いゝぢやないか帽子が飛んだつて。取つてくるさ。取つて來てやらうか」

圭さんは、いきなり、自分の帽子の上へ蝙蝠傘を重しに置いて、颯と、薄の中に飛び込んだ。

「おい此見當か」

「もう少し左りだ」

圭さんの身軀は次第に青いものゝ中に、深くはまつて行く。仕舞には首丈になつた。あとに殘つた碌さんは又心配になる。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「おうい。大丈夫か」
「何だあ」と向ふの首から聲が出る。
「大丈夫かよう」
やがて圭さんの首が見えなくなつた。
「おうい」
鼻の先から出る黒烟りは鼠色の圓柱の各部が絶間なく蠕動を起しつゝある如く、むく／＼と捲き上がつて、半空から大氣の裡に溶け込んで碌さんの頭の上へ容赦なく雨と共に落ちてくる。碌さんは悄然として、首の消えた方角を見詰めて居る。
しばらくすると、丸で見當の違つた半丁程先きに、圭さんの首が忽然と現はれた。
「帽子はないぞう」
「帽子は入らないよう。早く歸つてこうい」
圭さんは坊主頭を振り立てながら、薄の中を泳いでくる。
「おい、何處へ飛ばしたんだい」
「何處だか、相談が纏らないうちに飛ばしちまつたんだ。帽子はいゝが、歩行くのは厭になつたよ」
「もういやになつたのか。まだあるかないぢやないか」
「あの烟と、この雨を見ると、何だか物凄くつて、あるく元氣がなくなるね

「今から駄々を捏ねちや仕方がないか。—壯快ぢやないか。あのむく〱烟の出てくる所は」
「そのむく〱が氣味が惡るいんだ」
「冗談云つちや、いけない。あの烟の傍へ行くんだよ。さうして、あの中を覗き込むんだよ」
「考へると全く餘計な事だね。さうして覗き込んだ上に飛び込めば世話はない」
「兎も角もあるかう」
「ハヽヽヽ兎も角もか。君が兎も角もと云ひ出すと、つい釣り込まれるよ。さつきも兎も角もで、とう〱饂飩を食つちまつた。是で赤痢にでも罹かれば全く兎も角もの御蔭だ」
「いゝさ、僕が責任を持つから」
「僕の病氣の責任を持つたつて、仕様がないぢやないか。僕の代理に病氣になれもしまい」
「まあ、いゝさ。僕が看病をして、僕が傳染して、本人の君は助ける樣にしてやるよ」
「さうか、それぢや安心だ。まあ、少々あるくかな」
「そら、天氣も大分よくなつて來たよ。矢つ張り天祐があるんだよ」
「難有い仕合せだ。あるく事はあるくが、今夜は御馳走を食はせなくつちや、いやだぜ」
「又御馳走か。あるきさいすれば屹度食はせるよ」
「それから……」
「まだ何か注文があるのかい」

「うん」

「何だい」

「君の經歷を聞かせるか」

「僕の經歷つて、君が知つてる通りさ」

「僕が知つてる前のさ。君が豆腐屋の小僧であつた時分から……」

「小僧ぢやないぜ、是でも豆腐屋の悴なんだ」

「其悴の時、寒磬寺の鉦の音を聞いて、急に金持がにくらしくなつた、因緣話しをさ」

「ハヽヽヽそんなに聞きたければ話すよ。其代り剛健黨にならなくちやいけないぜ。君なんざあ、金持ちの惡黨を相手にした事がないから、そんなに呑氣なんだ。君はヂッキンスの兩都物語りと云ふ本を讀んだ事があるかい」

「ないよ。伊賀の水月は讀んだが、ヂッキンスは讀まない」

「それだから猶貧民に同情が薄いんだ。―あの本のね仕舞の方に、御醫者さんの獄中でかいた日記があるがね。悲酸なものだよ」

「へえ、どんなものだい」

「そりや君、佛國の革命の起る前に、貴族が暴威を振つて細民を苦しめた事がかいてあるんだが―それも今夜僕が寐ながら話してやらう」

「うん」

「なあに佛國革命なんてえのも當然の現象さ。あんなに金持ちや貴族が亂暴をすりや、あゝなるのは自然の理窟だからね。ほら、あの轟々鳴つて吹き出すのと同じ事さ」と圭さんは立ち留まつて、黑い烟の方を見る。

濛々と天地を鎖す秋雨を突き拔いて、百里の底から沸き騰る濃いものが渦を捲き、渦を捲いて、幾百噸の量とも知れず立ち上がる。其幾百噸の烟りの一分子が悉く震動して爆發するかと思はるゝ程の音が、遠い遠い奧の方から、濃いものと共に頭の上へ踴り上がつて來る。

雨と風のなかに、毛虫の樣な眉を攅めて、餘念もなく眺めて居た、圭さんが、非常な落ち付いた調子で。

「雄大だらう、君」と云つた。

「全く雄大だ」と碌さんも眞面目で答へた。

「恐ろしい位だ」しばらく時をきつて、碌さんが付け加へた言葉は是である。

「僕の精神はあれだよ」と圭さんが云ふ。

「革命か」

「うん。文明の革命さ」

「文明の革命とは」

「血を流さないのさ」
「刀を使はなければ、何を使ふのだい」
圭さんは、何にも云はずに、平手で、自分の坊主頭をぴしや〳〵と二返叩いた。
「頭か」
「うん。相手も頭でくるから、こつちも頭で行くんだ」
「相手は誰だい」
「金力や威力で、たよりのない同胞を苦しめる奴等さ」
「うん」
「社會の惡徳を公然商買にして居る奴等さ」
「うん」
「商買なら、衣食の爲めと云ふ言ひ譯も立つ」
「うん」
「社會の惡德を公然道樂にして居る奴等は、どうしても叩きつけなければならん」
「うん」
「君もやれ」
「うん、やる」

圭さんは、のつそりと踵をめぐらした。碌さんは默然として尾いて行く。空にあるものは、烟りと、雨と、風と雲である。地にあるものは青い薄と、女郎花と、所々にわびしく交る桔梗のみである。二人は犖々として無人の境を行く。

薄の高さは、腰を沒する程に延びて、左右から、幅、尺足らずの路を蔽ふて居る。身を横にしても、草に觸れずに進む譯には行かぬ。觸れゝば雨に濡れた灰がつく。圭さんも碌さんも、白地の浴衣に、白の股引に、足袋と脚絆丈を紺にして、濡れた薄をがさつかせて行く。腰から下はどぶ鼠の樣に染まつた。腰から上と雖ども、降る雨に誘はれて着く、よなを、一面に浴びたから、始んど下水へ落ち込んだと同樣の始末である。

只さへ、うねり、くねつてゐる路だから、草がなくつても、何所へどう續いてゐるか見極めのつくのではない。草をかぶれば猶更である。地に殘る馬の足跡さへ、漸く見付けた位だから、あとの始末は無論天に任せて、あるいて居ると云はねばならぬ。

最初のうちこそ、立ち登る烟りを正面に見て進んだ路は、いつの間にやら、折れ曲つて、次第に横から、よなを受くる樣になつた。横に眺める噴火口が今度は自然に後ろの方に見えだした時、圭さんはぴたりと足を留めた。

「どうも路が違ふ樣だね」

「うん」と碌さんは恨めしい顏をして、同じく立ち留つた。

「何だか、情ない顔をしてゐるね。苦しいかい」
「實際情けないんだ」
「どこか痛むかい」
「豆が一面に出來て、たまらない」
「困つたな。餘つ程痛いかい。僕の肩へつらまつたら、どうだね。少しは歩行き好いかも知れない」
「うん」と碌さんは氣のない返事をした儘動かない。
「宿へついたら、僕が面白い話をするよ」
「全體いつ宿へつくんだい」
「五時には湯元へ着く豫定なんだが、どうも、あの烟りは妙だよ。右へ行つても、左りへ行つても、鼻の先にある許りで、遠くもならなければ、近くもならない」
「上りたてから鼻の先にあるぜ」
「さうさな。もう少し此路を行つて見樣ぢやないか」
「うん」
「それとも、少し休むか」
「うん」
「どうも急に元氣がなくなつたね」

「全く饂飩の御蔭だよ」

「ハヽヽヽ。其代り宿へ着くと僕が話しの御馳走をするよ」

「話しも聞きたくなくなつた」

「それぢや又ビールでない惠比壽でも飲むさ」

「ふゝん。此樣子ぢや、とても宿へ着けさうもないぜ」

「なに、大丈夫だよ」

「だつて、もう暗くなつて來たぜ」

「どれ」と圭さんは懷中時計を出す。「四時五分前だ。暗いのは天氣の所爲だ。然しから方角が變つて來ると少し困るな。山へ登つてから、もう二三里はあるいたね」

「豆の樣子ぢや、十里位あるいてるよ」

「ハヽヽヽ。あの烟りが前に見えたんだが、もうずつと、後ろになつて仕舞つた。すると我々は熊本の方へ二三里近付いた譯かね」

「つまり山から夫だけ遠ざかつた譯さ」

「さう云へばさうさ。―君、あの烟りの横の方から又新しい烟が見えだしたぜ。あれが多分、新しい噴火口なんだらう。あのむく〳〵出る所を見ると、つひ、そこにある樣だがな。どうして行かれないだらう。何でも此山のつい裏に違ひないんだが、路がないから困る」

「路があつたつて駄目だよ」
「どうも雲だか、烟りだか非常に濃く、頭の上へやつてくる。壯んなものだ。ねえ、君」
「うん」
「どうだい、こんな凄い景色はとても、かう云ふ時でなけりや見られないぜ。うん、非常に黒いものが降つて來る。君あたまが大變だ。僕の帽子を貸してやらう。―かう被つてね。それから手拭があるだらう。飛ぶといけないから、上から結はい付けるんだ。―僕がしばつてやらう。―傘は、疊むがいゝ。どうせ風に逆らうぎりだ。さうして杖につくさ。杖が出來ると、少しは歩行けるだらう」
「少しは歩行きよくなつた。―雨も風も段々强くなる樣だね」
「さうさ、さつきは少し晴れさうだつたがな。雨や風は大丈夫だが、足は痛むかね」
「痛いさ。登るときは豆が三つ許りだつたが、一面になつたんだもの」
「晩にね、僕が、烟草の吸殼を飯粒で練つて、膏藥を製つてやらう」
「宿へつけば、どうでもなるんだが……」
「あるいてるうちが難義か」
「うん」
「困つたな。―どこか高い所へ登ると、人の通る路が見えるんだがな。―うん、あすこに高い草山が見えるだらう」

「あの右の方かい」

「あゝ。あの上へ登つたら、噴火孔が一と眼に見えるに違ない。さうしたら、路が分るよ」

「分るつて、あすこへ行く迄に日が暮れて仕舞ふよ」

「待ち給へ一寸時計を見るから。四時八分だ。未だ暮れやしない。君こゝに待つて居給へ。僕が一寸物見をしてくるから」

「待つてるが、歸りに路が分らなくなると、夫こそ大變だぜ。二人離れ〳〵になつちまふよ」

「大丈夫だ。どうしたつて死ぬ氣遣はないんだ。どうかしたら大きな聲を出して呼ぶよ」

「うん。呼んで呉れ玉へ」

圭さんは雲と烟の這ひ廻るなかへ、猛然として進んで行く。碌さんは心細くも只一人海のなかに立つて、頼みにする友の後姿を見送つてゐる。しばらくするうちに圭さんの影は草のなかに消えた。

大きな山は五分に一度位宛時を限つて、普段よりは烈しく轟となる。其折は雨も烟りも一度に搖れて、餘勢が横なぐりに、悄然と立つ碌さんの體軀へ突き當る樣に思はれる。草は眼を走らす限りを盡くして悉く烟りのなかに靡く上を、さあ〳〵と雨が走つて行く。草と雨の間を大きな雲が遠慮もなく這ひ廻はる。碌さんは向ふの草山を見詰めながら、顫へてゐる。よなのしづくは、碌さんの下腹迄浸み透る。

毒々しい黒烟りが長い渦を七卷まいて、むくりと空を突く途端に、碌さんの踏む足の底が、地震の樣に撼いたと思つた。あとは、山鳴りが比較的靜まつた。すると地面の下の方で。

「おゝい」と呼ぶ聲がする。
碌さんは兩手を、耳の後ろに宛てた。
「おゝい」
慥かに呼んで居る。不思議な事に其聲が妙に足の下から湧いて出る。
「おゝい」
碌さんは思はず、聲をしるべに、飛び出した。
「おゝい」と癇の高い聲を、肺の縮む程絞り出すと、太い聲が、草の下から。
「おゝい」と應へる。圭さんに違ない。
碌さんは胸迄來る薄を無暗に押し分けて、づんく聲のする方に進んで行く。
「おゝい」
「おゝい。どこだ」
「おゝい。こゝだ」
「どこだあゝ」
「こゝだあゝ。無暗にくるとあぶないぞう。落ちるぞう」
「どこへ落ちたんだあゝ」
「こゝへ落ちたんだあゝ。氣を付けろう」

「氣は付けるが、どこへ落ちたんだあゝ」
「落ちると、足の豆が痛いぞうゝ」
「大丈夫だあゝ。どこへ落ちたんだあゝ」
「こゝだあ、もう夫から先へ出るんぢやないよう。おれがそつちへ行くから、そこで待つて居るんだよう」
圭さんの胴間聲は地面のなかを通つて、段々近づいて來る。
「おい、落ちたよ」
「どこへ落ちたんだい」
「見えないか」
「見えない」
「夫ぢや、もう少し前へ出た」
「おや、何だい、こりや」
「草のなかに、こんなものがあるから剣呑だ」
「どうして、こんな谷があるんだらう」
「火熔石の流れたあとだよ。見給へ、なかは茶色で草が一本も生えて居ない」
「なる程、厄介なものがあるんだね。君、上がれるかい」

「上がれるものか。高さが二間許りあるよ」
「弱つたな。どうしやう」
「僕の頭が見えるかい」
「毬栗の片割れが少し見える」
「君ね」
「えゝ」
「薄の上へ腹這になつて、顔丈谷の上へ乘り出して見給へ」
「よし、今顔を出すから待つて居給ひよ」
「うん、待つてる、此所だよ」と圭さんは蝙蝠傘で、崖の腹をとん／＼叩く。碌さんは見當を見計つて、ぐしやりと濡れ薄の上へ腹をつけて恐る／＼首丈を溝の上へ出して。
「おい」
「おい。どうだ。豆は痛むかね」
「豆なんざ、どうでもいゝから、早く上がつてくれ給へ」
「ハヽヽ、大丈夫だよ。下の方が風があたらなくつて、かへつて樂だぜ」
「樂だつて、もう日が暮れるよ、早く上がらないと」
「君」

「えゝ」

「ハンケチはないか」

「ある。何にするんだい」

「落ちる時に蹶爪づいて生爪を剝がした」

「生爪を？ 痛むかい」

「少し痛む」

「あるけるかい」

「あるけるとも。ハンケチがあるなら抛げて呉れ給へ」

「裂いてやらうか」

「なに、僕が裂くから丸めて抛げてくれ給へ。風で飛ぶと、いけないから、堅く丸めて落すんだよ」

「じく／＼濡れてるから、大丈夫だ。飛ぶ氣遣はない。いゝか、抛げるぜ、そら」

「大分暗くなつて來たね。烟は相變らず出てゐるかい」

「うん。空中一面の烟だ」

「いやに鳴るぢやないか」

「さつきより、烈しくなつた樣だ。――ハンケチは裂けるかい」

「うん、裂けたよ。繃帶はもう出來上がつた」

「大丈夫かい。血が出やしないか」
「足袋の上へ雨と一所に糞染んでる」
「痛さうだね」
「なあに、痛いたつて。痛いのは生きてる證據だ」
「僕は腹が痛くなつた」
「濡れた草の上に腹をつけてゐるからだ。もういゝから、立ち給へ」
「立つと君の顔か見えなくなる」
「困るな。君いつその事に、此所へ飛び込まないか」
「飛び込んで、どうするんだい」
「飛び込めないかい」
「飛び込めない事もないが——飛び込んで、どうするんだい」
「一所にあるくのさ」
「さうして何所へ行く積りだい」
「どうせ、噴火口から山の麓迄流れた岩のあとなんだから、此穴の中をあるいてゐたら、どこかへ出るだらう」
「だつて…………」

「だつて厭か。厭ぢや仕方がない」

「厭ぢやないが—夫より君が上がれると好いんだがな。君どうかして上がつて見ないか」

「それぢや、君は此穴の縁を傳つて歩行くさ。僕は穴の下をあるくから。さうしたら、上下で話が出來るからいゝだらう」

「縁にや路はありやしない」

「草ばかりかい」

「うん。草がね……」

「うん」

「胸位迄生えてゐる」

「とも角も僕は上がれないよ」

「上がれないつて、それぢや仕方がないな—おい。—おい。—おいつて云ふのにおい。何故默つてるんだ」

「えゝ」

「大丈夫かい」

「何が」

「口は利けるかい」

「利けるさ」

「それぢや、何故默つてるんだ」

「一寸考へて居た」

「何を」

「穴から出る工夫をさ」

「全體何だつて、そんな所へ落ちたんだい」

「早く君に安心させ樣と思つて、草山ばかり見詰めて居たもんだから、つい足元が御留守になつて、落ちて仕舞つた」

「それぢや、僕の爲めに落ちた樣なものだ。氣の毒だな、どうかして上がつて貰へないかな、君」

「さうさな。――なに僕は構はないよ。それよりか。君、早く立ち給へ。さう草で腹を冷やしちや毒だ」

「腹なんかどうでもいゝさ」

「痛むんだらう」

「痛む事は痛むさ」

「だから、兎も角も立ち給へ。そのうち僕がこゝて出る工夫を考へて置くから」

「考へたら呼ぶんだぜ。僕も考へるから」

「よし」

會話はしばらく途切れる。草の中に立つて碌さんが覺束なく四方を見渡すと、向ふの草山へぶつかつた黒雲が、峯の半腹で、どつと崩れて海の樣に濁つたものが頭を去る五六尺の所迄押し寄せてくる。時計はもう五時に近い。山のなかばは只さへ薄暗くなる時分だ。ひゆう〳〵と絶間なく吹き卸ろす風は、吹く度に、黒い夜を遠い國から持つてくる。刻々と逼る暮色のなかに、嵐は卍に吹きすさむ。噴火孔から吹き出す幾萬斛の烟りは卍のなかに萬遍なく捲き込まれて、嵐の世界を盡くして、どす黒く漲り渡る。

「おい。居るか」

「居る。何か考へ付いたかい」

「いゝや。山の模樣はどうだい」

「段々荒れる許りだよ」

「今日は何日だつけかね」

「今日は九月二日さ」

「ことによると二百十日かも知れないね」

會話は又切れる。二百十日の風と雨と烟りは滿目の草を埋め盡くして、一丁先は靡く姿さへ、判然と見えぬ樣になつた。

「もう日が暮れるよ。おい。居るかい」

谷の中の人は二百十日の風に吹き浚はれたものか、うんとも、すんとも返事がない。阿蘇の御山は割

れる許りにごうゝと鳴る。

碌さんは青くなつて、又草の上へ棒の樣に腹這になつた。

「おゝい。居らんのか」

「おゝい。こつちだ」

「薄暗い谷底を半町許り登つた所に、ぼんやりと白い者が動いて居る。手招きをして居るらしい。

「なぜ、そんな所へ行つたんだあゝ」

「こゝから上がるんだあゝ」

「上がれるのかあゝ」

「上がれるから、早く來おゝい」

碌さんは腹の痛いのも、足の豆も忘れて、脱兎の勢で飛び出した。

「おい。こゝいらか」

「そこだ。そこへ、一寸、首を出して見てくれ」

「かうか。—成程、こりや大變淺い。是なら、僕が蝙蝠傘を上から出したら、それへ、取つ捕らまつて上がれるだらう」

「傘だけぢや駄目だ。君、氣の毒だがね」

「うん。ちつとも氣の毒ぢやない。どうするんだ」

「兵兒帶を解いて、其先を傘の柄へ結びつけて—君の傘の柄は曲つてるだらう」
「曲つてるとも。大いに曲つてる」
「其曲つてる方へ結びつけてくれないか」
「結びつけるとも。すぐ結び付けてやる」
「結び付けたら、其帶の端を上からぶら下げてくれ給へ」
「ぶら下げるとも。譯はない。大丈夫だから待つてゐ玉へ。—そうら、長いのが天竺から、ぶら下がつたらう」
「君、しつかり傘を握つて居なくつちやいけないぜ。僕の身體は十七貫六百目あるんだから」
「何貫目あつたつて大丈夫だ、安心して上がり給へ」
「いゝかい」
「いゝとも」
「そら上がるぜ。—いや、いけない。さう、ずり下がつて來ては……」
「今度は大丈夫だ。今のは試して見た丈だ。さあ上がつた。大丈夫だよ」
「君か滑べると、二人共落ちて仕舞ふぜ」
「だから大丈夫だよ。今のは傘の持ち樣がわるかつたんだ」
「君、薄の根へ足をかけて持ち應へてゐ玉へ。—あんまり前の方て踏ん張ると、崖が崩れて、足が滑べ

るよ。

「よし、大丈夫。さあ上がつた」

「足を踏ん張つたかい。どうも今度もあぶない樣だな」

「おい」

「何だい」

「君は僕が力がないと思つて、大に心配するがね」

「うん」

「僕だつて一人前の人間だよ」

「無論さ」

「無論なら安心して、僕に信頼したらよからう。からだは小さいが、朋友を一人谷底から救ひ出す位の事は出來る積りだ」

「ぢや上がるよ。そらつ……」

「そらつ……もう少しだ」

豆て一面に腫れ上がつた兩足を、うんと薄の根に踏ん張つた碌さんは、素肌を二百十日の雨に曝した儘、海老の樣に腰を曲げて、一生懸命に、傘の柄にかぢり付いて居る。麥藁帽子を手拭で縛りつけた頭の下から、眞赤にいきんだ顏が、八分通り阿蘇卸ろしに吹きつけられて、喰い縮めた反つ齒の上には

よなが容赦なく降つてくる。

毛繻子張り八間の蝙蝠の柄には、幸ひ太い瘤だらけの頑丈な自然木が、付けてあるから、折れる氣遣は先づあるまい。其自然木の彎曲した一端に、鳴海絞りの兵兒帶が、薩摩の強弓に新しく張つた弦の如くぴんと薄を押し分けて、先は谷の中にかくれてゐる。其隱れて居るあたりから、しばらくすると大きな毬栗頭がぬつと現はれた。

「やつ」と云ふ掛聲と共に兩手が崖の緣にかゝるが早いか、大入道の腰から上は、斜めに尻に挿した蝙蝠傘と共に谷から上へ出た。同時に碌さんは、どさんと仰向きになつて、薄の底に倒れた。

（五）

「おい、もう飯だ、起きないか」

「うん。起きないよ」

「腹の痛いのは癒つたかい」

「まあ大抵癒つた樣なものだが、此樣子ぢや、いつ痛くなるかも知れないね。兎も角も饂飩が祟つたんだから、容易には癒りさうもない」

「その位口が利ければ慥かなものだ。どうだい是から出掛けやうぢやないか」

「どこへ」

「阿蘇へさ」

「阿蘇へまだ行く氣かい」
「無論さ、阿蘇へ行く積りで、出掛けたんだもの。行かない譯には行かない」
「そんなものかな。然し此豆ぢや殘念ながら致し方がない」
「豆は痛むかね」
「痛むの何のつて、かうして寐てゐても頭へずうん〳〵と響くよ」
「あんなに、吸殼をつけてやつたが、毫も利目がないかな」
「吸殼で利目があつちや大變だよ」
「だつて、付けてやる時は大いに有難さうだつたぜ」
「癒ると思つたからさ」
「時に君はきのふ怒つたね」
「いつ」
「裸で蝙蝠傘を引つ張るときさ」
「だつて、あんまり人を輕蔑するからさ」
「ハヽヽヽ然し御蔭で谷から出られたよ。君が怒らなければ僕は今頃谷底で往生して仕舞つたかも知れない所だ」
「豆を潰すのも構はずに引つ張つた上に、裸で溝の中へ倒れてさ。それで君は難有いとも何とも云はな

かつたぜ。君は人情のない男だ」
「其代り此宿迄擔いで來てやつたぢやないか」
「擔いてくるものか。僕は獨立して歩行いて來たんだ」
「それぢや此所はどこだか知つてるかい」
「大に人を愚弄したものだ。こゝはどこだつて、阿蘇町さ。然も兎も角もの饂飩を強ひられた三軒置いて隣りの馬車宿だあね。半日山のなかを馳けあるいて、漸く下りて見たら元の所だなんて、全體何てえ間抜だらう。是からもう君の天祐は信用しないよ」
「二　十日だつたから惡るかつた」
「さうして山の中で芝居染みた事を云つてさ」
「ハヽヽ、然しあの時は大に感服して、うん、うん、て云つた樣だぜ」
「あの時は感心もしたが、かうなつて見ると馬鹿氣てゐらあ。君ありや眞面目かい」
「ふゝん」
「冗談か」
「どつちだと思ふ」
「どつちでも好いが、眞面目なら忠告したいね」
「あの時僕の經歷談を聽かせろつて、泣いたのは誰だい」

「泣きあしないやね。足が痛くつて心細くなつたんだね」
「だつて、今日は朝から非常に元氣ぢやないか、昨日と別人の觀がある」
「足の痛いに關はらずか。ハヽヽヽ。實はあんまり馬鹿氣て居るから、少し腹を立てゝ見たのさ」
「僕に對してかい」
「だつて外に對するものがないから仕方がないさ」
「いゝ迷惑だ。時に君は粥を食ふなら誂らへてやらうか」
「粥もだがだね。第一、馬車は何時に出るか聞いて貰ひたい」
「馬車でどこへ行く氣だい」
「どこつて熊本さ」
「歸るのかい」
「歸らなくつてどうする。こんな所に馬車馬と同居して居ちや命が持たない。ゆふべ、あの枕元でぽん／＼羽目を蹴られたには實に弱つたぜ」
「さうか、僕はちつとも知らなかつた。そんなに音がしたかね」
「あの音が耳に入らなければ全く剛健黨に相違ない。どうも君は憎くらしい程善く寐る男だね。僕にあれ程堅い約束をして、經歷談をきかせるの、醫者の日記を話すのつて、いざとなると、丸で正體なしに寐ちまふんだ。――さうして、非常ないびきをかいて――」

「さうか、そりや失敬した。あんまり疲れ過ぎたんだよ」
「時に天氣はだうだい」
「上天氣だ」
「くだらない天氣だ、昨日晴れゝばいゝ事を。—さうして顏は洗つたのかい」
「顏はとうに洗つた。兎も角も起きないか」
「起きるつて、只は起きられないよ。裸で寐てゐるんだから」
「僕は裸で起きた」
「亂暴だね。いかに豆腐屋育ちだつて、あんまりだ」
「裏へ出て、冷水浴をしてゐたら、かみさんが着物を持つて來てくれた。乾いてるよ。只鼠色になつてる許りだ」
「乾いてるなら、取り寄せてやらう」と碌さんは、勢よく、手をぽん〳〵敲く。臺所の方で返事がある。男の聲だ。
「ありや御者かね」
「亭主かも知れないさ」
「さうかな、寢ながら占つてやらう」
「占つてどうするんだい」

「占つて君と賭をする」

「僕はそんな事はしないよ」

「まあ、御者か、亭主か」

「どつちかなあ」

「さあ、早く極めた。そら、來るからさ」

「ぢや、亭主にでもして置かう」

「ぢや君が亭主に、僕が御者だぜ。負けた方が今日(けふ)一日命令に服するんだぜ」

「そんな事は極めやしない」

「御早う……御呼びになりましたか」

「うん呼んだ。ちよつと僕の着物を持つて來てくれ。乾いてるだらうね」

「ねえ」

「夫から腹がわるいんだから、粥を焚いて貰ひたい」

「ねえ。御二人さんとも……」

「あれは只の飯(めし)で澤山だよ」

「では御一人さん丈」

「さうだ。夫から馬車は何時と何時に出るかね」

「熊本通ひは八時と一時に出ますたい」

「夫ぢや、その八時で立つ事にするからね」

「ねえ」

「君、いよ〳〵熊本へ歸るのかい。折角此所迄來て阿蘇へ上らないのは詰らないぢやないか」

「そりや、いけないよ」

「だつて折角來たのに」

「折角は君の命令に因つて、折角來たに相違ないんだがね。此豆ぢや、どうにも、かうにも、――天祐を空しくするより外に道はあるまいよ」

「足が痛めば仕方がないが、――惜しいなあ、折角思ひ立つて、――いゝ天氣だぜ、見給へ」

「だから、君も一所に歸り給へな。折角一所に來たものだから、一所に歸らないのは可笑しいよ」

「然し阿蘇へ登りに來たんだから、登らないで歸つちあ濟まない」

「誰に濟まないんだ」

「僕の主義に濟まない」

「又主義か。窮屈な主義だね。ぢや一度熊本へ歸つて又出直してくるさ」

「出直して來ちや氣が濟まない」

「色々なものに濟まないんだね。君は元來强情過ぎるよ」

「さうでもないさ」

「だつて、今迄只の一遍でも僕の云ふ事を聞いた事がないぜ」

「幾度もあるよ」

「なに一度もない」

「昨日も聞いてるぢやないか。谷から上がつてから、僕が登らうと主張したのを、君が何でも下りやうと云ふから、此所迄引き返したぢやないか」

「昨日は格別さ。二百十日だもの。其代り僕は饂飩を何遍も喰つてるぢやないか」

「ハヽヽ、兎も角も……」

「まあいゝよ。談判はあとにして、こゝに宿の人が待つてるから……」

「さうか」

「おい、君」

「えゝ」

「君ぢやない。君さ、おい宿の先生」

「ねえ」

「君は御者かい」

「いゝえ」

「ぢや御亭主かい」

「いゝえ」

「ぢや何だい」

「雇人て……」

「おや〳〵。夫ぢや何にもならない。君、此男は御者でも亭主でもないんだとさ」

「うん、夫がどうしたんだ」

「どうしたんだつてーまあ好いや、夫れぢや。いゝよ、君、あちらへ行つても好いよ」

「ねえ。では御二人さんとも馬車で御越しになりますか」

「そこが今問着中さ」

「へゝゝゝ。八時の馬車はもう直、支度が出來ます」

「うん、だから、八時前に問着を方付けて置かう。一と先づ引き取つて呉れ」

「へゝゝゝ御緩つくり」

「おい、行つて仕舞つた」

「行くのは當り前さ。君が行け〳〵と催促するからさ」

「ハゝゝありや御者でも亭主でもないんだとさ。弱つたな」

「何が弱つたんだい」

「何がつて。僕はかう思つてたのさ。あの男が御者ですと云ふだらう。すると僕が賭に勝つ譯になるから。君は何でも僕の命令に服さなければならなくなる」
「なるものか、そんな約束はしやしない」
「なに、したと見傚すんだね」
「勝手にかい」
「曖昧にさ。そこで君は僕と一所に熊本へ歸らなくつちあ、ならないと云ふ譯さ」
「そんな譯になるかね」
「なると思つて喜こんでたが、雇人だつて云ふから仕樣がない」
「そりや當人が雇人だと主張するんだから仕方がないだらう」
「もし御者ですと云つたら、僕はあいつに三十錢やる積だつたのに馬鹿な奴だ」
「何にも世話にならないのに、三十錢やる必要はない」
「だつて君は一昨夜、あの束髮の下女に二十錢やつたぢやないか」
「よく知つてるね。―あの下女は單純で氣に入つたんだもの。華族や金持ちより尊敬すべき資格がある」
「そら出た。華族や金持ちの出ない日はないね」
「いや、日に何遍云つても云ひ足りない位、毒々しくつて圖迂々々しいものだよ」
「君がかい」
「なあに、華族や金持ちがさ」
「さうかな」

「例へば今日わるい事をするぜ。それが成功しない」
「成功しないのは當り前だ」
「すると、同じ様なわるい事を明日やる。それでも成功しない。すると、明後日になつて、又同じ事をやる。成功する迄は毎日々々同じ事をやる。三百六十五日でも七百五十日でも、わるい事を同じ様に重ねて行く。重ねてさへ行けば、わるい事が、ひつくり返つて、いゝ事になると思つてる。言語道斷だ」
「言語道斷だ」
「そんなものを成功させたら、社會は滅茶苦茶だ。おいさうだらう」
「社會は滅茶苦茶だ」
「我々が世の中に生活してゐる第一の目的は、かう云ふ文明の怪獸を打ち殺して、金も力もない、平民に幾分でも安慰を與へるのにあるだらう」
「ある。うん。あるよ」
「あると思ふなら、僕と一所にやれ」
「うん。やる」
「乾度やるだらうね。いゝか」
「乾度やる」
「そこで兎も角も阿蘇へ登らう」
「うん、兎も角も阿蘇へ登るがよからう」
二人の頭の上では二百十一日の阿蘇が轟々と百年の不平を限りなき碧空に吐き出して居る。（完）

近代思想界の趨勢

金子筑水

第一 序

近代歐洲思想界の風雲は、眞に暗憺として瞑朦たり、二十世紀の天地は當に如何に成行くべきか、眞に目下の大疑問であらう。茲に論ぜんとする近代思想界とは、主として十九世紀末の歐洲思想界を指し、十九世紀末の歐洲思想界には、他の時代と異なつた特殊の傾向ありしや否や、それが本論の主題である。二十世紀の源頭に立てる吾人は、深く十九世紀末の空氣を呼吸し、十九世末の思想に薫化されたる者、十九世紀末の精神は、既に過ぎ去れる歷史上の事實にはあらずして、尙現に吾人が血管を通へる活きた生命である、隨つて十九世紀末特殊の風潮を檢することは、今日に於ては尙一段の難事に相違ない。加之、廣く十九世紀末の歐洲思想界といへば、其の中には千波萬波のあらゆる思想の脈が含まれる、十九世紀末に於ける歐洲思想界の全體の潮流を論ずるが如きは、到底一篇の論文の能くし得る所でない。故

に茲に論ぜんとする所は、主として十九世紀末に現れたる一種奇矯なる風潮に限る、必しも歐洲全體の思想界の波瀾を論ぜんとするのではない。一種奇矯なる風潮とは謂へど、我等の見る所によれば、實はこれが十九世紀末特殊の產物で、十九世紀末に於ては、必然起こらざるを得ざりし一種の風潮である、隨つて此の風潮は、其の外觀の頗る奇異なるに係らず、一たび此の主張が擧げられてこのかた、忽ち全歐の問題となり、忽ち歐洲思想界の一種顯著なる風潮となり、全歐の民心は、此の風潮をばさながら激烈なる電流の如くに感じたのであつた。斯くまで激烈に歐洲の民心を刺激した一種の風潮、一斑の思想界に一種顯著なる傾向を造り出だした此の風潮、これがたゞ一時の偶然の現象と見做さるべきであらうか。

二十世紀には新精神又は新生命と名づくべきものが勃興するであらうか、若し勃興すとせば、其の新精神新生命は果たして如何なるものであらうか。二十世紀の初頭に立てる我等は、尙斯かる大問題を解決する權利が無い、又さる解決が容易に行はるべき筈のものではない。さるにても二十世紀には、十九世紀若くは十八世紀とは異なれる一種の新思想新精神の勃興すべしとは、一斑の識者が不言不語の裡に默認する所ではあるまいか、十九世紀若くは十八世紀の時代精神とは異なれる、飽くまで二十世紀的新精神が產まるゝならんとは、識者の一斑に期待する所ではあるまいか。二十世紀に勃興すべき新思潮は、今や現に徐々其基礎を固め根底を深うして、まさに一大新生面を開展せんとしつゝあるにはあらざるか。若し果たして然りとすれば、茲に論ぜんとする十九世紀末の一大風潮は、まさに開展せんとする新思潮

と極めて親密なる關係がなければならぬ、二十世紀の新思潮は、十九世紀末の此の一大風潮と何等か親密な關係が無ければならぬ。若しさることと無しとすれば、十九世紀末の一大風潮は、何等の根底もなく、何等の意義もなく、忽焉勃興して當代の民心を風靡し、又忽焉消滅して何等の影響も殘さゞる、全然無意義な現象と見做さるべきもの、而して斯くの如きはむしろ不自然な解釋ではあるまいか。我等の觀る所によれば、十九世紀末の此の一大風潮は、むしろ二十世紀の新思潮の前兆と見做すべきもの、將に大に勃興し來たらんとする一大新生活の前驅と見做すべきものであらう、勿論いつ斯かる一大新生活が勃興すべきかは預言すべからざるも、兎も角將來に於て勃興すべき新生活の前驅と見做すべきものであらう。たゞ夫れ前驅たり前兆たるに止まる、十九世紀末の此の精神は、やがて二十世紀の新精神其のものではない。されど烟の在る所必ず火あり、十九世紀末の此の一大風潮は、將さに燃えあがらんとする新氣運の烟とも見るべきもの、二十世紀の文明に着眼する者の須べからく注意すべき一大事實であらう。

事實、十九世紀末に於ける一種の風潮は、將に勃興せんとする新氣運の前兆たるの資格を備へて居る。すなはち此の思潮は、其の本質に於て、在來の十九世紀文明に反抗して起これるもの、十九世紀の文明を破壞して全く新なる生活に入らんとしたる革命的風潮である。反動的並びに革命的といふが此の風潮の特質で、すべて十九世紀文明の通弊を達觀し、十九世紀文明の短所と暗黑面とを遺憾なく指摘して、猛然立つて之に反抗し、これを蹂躙し、之れを破壞せずんば止まざらんとするの革命的精神に滿ちた一大風潮である。故に此の風潮は猛烈にして動もすれば破壞的、噴火山的又はダイナマイト的のすさまじい

勢力を以て世に現はれた。全歐の民心が、此の革命の聲に打たれて、暫くは茫然、暫くは自失、悚然としてふるひをのゝいたのは、此の革命的風潮が如何に歐洲民の心の底に強く響いたかを證するものである。

そも〳〵十九世紀末の此の風潮とは何ぞ、此の風潮の特殊なる風格とは何ぞ、一言に盡すことは頗る難い、むしろ此の風潮の源となつた人々、又は此の風潮の中心となつた人々の名を揭げたらんには、讀者は容易に此の風潮の何ものなるかを理解するであらう。すなはちマックス、スチルナー、シヨペンハワー、ニイチエ、キヤールケゴールド、イブセン、ストラウス、フォイエルバッバ、ワグナー其の他尙トルストイなどをも加へることが出來やう。此等の人々によつて、代表されたる一種の風潮こそ、すなはち玆に十九世紀末特殊の一大風潮と名づけたる其れて、此等の人々が代表せる一種の風潮が、十九世紀末に於ける歐洲思想界の一種顯著なる傾向であつたことは、今は最早何人も異議を挿む者は無からう。我國に於ても此等の人々は盛に持囃され、且其のさま〳〵な其の主義主張まで比較的精細に紹介されたれば、今更此等諸家の意見を個別に羅列する必要は無い、むしろ此等諸家に一貫せる共通の精神を擧げて、十九世紀末に現れたる一大風潮の特點を概括し、而して其れが二十世紀の新思潮に何等の關係あるかを判斷するが本論の主意である。素より精密に此の風潮を論ぜんとするには、是非とも歷史に溯つて其の起源由來を尋ねざるべからず、されど斯くの如きは能く玆に盡し得る所でない、今は此等複雜なる歷史的關係を離れて、單に此の風潮の直接の起源を論ずることに留めよう。たゞし十九世紀末の此の風潮は、突

然初めて歐羅巴の世界に現れたるものにあらずして、其の淵源を尋ねれば、遠く十九世紀初頭のロマンチシズム、アイデアリズムに立脚し、こゝに胚胎せる精神が十九世紀後半期の現實的精神に感化され、更に新なる形を取つて、十九世紀の現實的精神に反抗するに至つたる、言はゞ最新のロマンチシズム又はアイデアリズムと名づくべきものである。讀者先づ此の點に注意せずば、十九世紀末の此の風潮を理解する上に、少なからざる困難を感ずるであらう。

便宜の爲め此の風潮を下の綱目のもとに其の全體を概括しやうと思ふ、各綱目は個別に分かれたれど、其の間には互に不離の關係あり、合一して全體を成すべきは無論である。其の綱目の主なるものは、第一個人主義附天才主義、第二非物質主義、第三主觀主義附意力主義、第四厭世主義附懷疑主義、第五解脫主義附神祕主義、以上。

第一 個人主義附天才主義

十九世紀末に現れたる個人主義は、從來の普通の個人主義とは異なり、一種熱烈にして一種ロマンチックな獨得の風格を備へて居る、十九世紀末に至つて、何故斯かる個人主義が忽焉起こり來たつたか、而して此の個人主義が、何故歐羅巴の思想界に顯著なる勢力を振ふに至つたか、これ頗る興味ある疑問である。此の疑問を解決するに先き立つて、吾人は先づ十九世紀末に於ける歐洲民心の一斑の性癖に注意する必要がある。玆に論ぜんとする個人主義も、畢竟此の一斑の性癖に根せざることは爭ふべからず。一

般の性癖とは外ならず、十九世紀末に於ける民心の著く主我的自識的又は我執的と成り來たつた一事である。近代民心の著く主我的又は自識的に成り來たつた一事は、近代の詩歌小說の上に、最も明らかに現はれて居る、近代の詩歌小說の上に現はれたる人物は、孰れも自意識の强い、剛情我慢な、昔氣質の老人の目から見れば、如何にも我儘勝手で、己れあるを知つて他あるを知らざる驕慢不遜の人物が多い。されば主我的又は我執的人物は、直ちに近代的と形容され、近代流行の人格といへば、直に剛情我慢な人物を聯想させる。殊更詩歌小說の上に例を求めるまでもない、ショペンハワーは、此の主我的人格の標本とも名づくべき者であらう。傳ふる所によれば、此の詩人的哲學者ほど、驕慢、不遜、我意、我慢な人格は世に多くはない、彼れは他に同情して他の苦樂を汲み取り、又は他の長を見取る一片やさしき情誼をば、殆ど全く缺いて居たらしい、彼れはたゞ自家の意見、自家の榮譽、自家の利益のみを着眼して、殆ど全く他を顧るの精神が無かつたらしい。ひとへに己一人を高しとして、天下公衆を盡く愚物視し、苟も意志ある人類とは事ごとに衝突し事ごとに爭を引起こした。大學の私敎授となつては其の同僚と衝突し、自身の著述を出版せんとしては其の出版書肆と衝突し、果ては罪もない賤しい一老婆を毆打したる件で、裁判所から永い間此の老婆に扶助料を贈ることをさへ命ぜられた。其等はまだしも彼れは實母とさへ衝突して、終生互に相見ざるの悲劇をさへ演じたてはないか。他と交れば必ず衝突が起こるので、ショペンハワーも遂に其の苦痛に堪へかね、一切交際を杜絶して、僅に隱遁的生活の裡に此の苦悶より脫するの巳むを得ざるに陷つたては無いか。我意我慢主我的傾向の强きことショペンハワーの如きは世間蓋し稀であ

らう、されど此の主我的傾向が近代就中十九世紀末に盛であつたことは爭はれない事實である。十九世紀末に於て主我的傾向が、何故斯くの如く强まつて來たか、細に論じたらばおもしろい題目であらう。極めておほまかに言へば、これも十九世紀の特產物に違ひない。十九世紀最大思潮の一は、言ふまでも無く平等自由の大精神であらう、佛蘭西革命に初まつた此の大精神は在來の俗習的階級制度を打破して、四民平等萬人均一の大自由を宣言した、此の大自由の精神に基いて、十九世紀の後半期に至つて、初めて普通敎育や國民敎育の旨意が實行された。一斑の民心は、文化の恩澤に浴して、初めて人類の尊嚴に想ひ至つた、久しく外權のもとに壓迫された民心は、一時に自我を意識し、個性の價値を認識して、愕然目ざめて正氣に返つたさまは、さながらイプセン劇中のノラが自覺に似たものでもあつたろう。若し此の自覺の精神が、すなほに養はれたらんには、必ずしも偏狹なる我意的傾向とならずして、むしろ貴むべき自重の精神と成つて現はれたろうに、やゝ曲りくねた主我的傾向と成つて現はれたるには、其の間に種々な源因が有つたに相違ない。就中十九世紀に於て、在來の社交上、道德上、政治上、宗敎上の一切の習慣や信仰が破壞されて、民心の放逸を適宜に制禦すべき絕對的權勢の地に落ちて、人々其の賴る所を失つたので、折角芽を出した自覺の精神が俄に極端なる主我的傾向に轉じたのは、自然の勢力とも謂ふべきか。

さて斯かる主我的傾向は、何を所緣として一種ロマンチックなる個人主義を產出するに至りしか、何に激して一種奇矯なる個人主義として現はれ來たりしか。そもそも十九世紀の最大思潮又は最大傾向と見做

すべきは、云ふまでもなく、彼の社會民主的傾向である、此の傾向は、優に十九世紀の最大特産物の一に數へらるべきものであらう。社會民主的傾向が社會の各方面に深大なる影響を及ぼせるの一事は云ふまでもないが、玆に論ぜんとする個人主義も、實は此の社會民主的傾向の影響を受けて、而して此の傾向に反抗して起こり來たつたるの一事は、吾人の最も留意すべき點であらう。蓋し社會民主々義は、社會を組織せる個人に重きを置くと言はんよりは、苟も社會の一員なるかぎりは、萬人を同一價値の者と見んとする傾を持つて居る、社會民主々義に取つては、個人は社會の一員として無差別平等、其の間に貴賤上下の別なし、貴賤上下の別を立つるは、社會民主々義の最も忌む所、萬人を無差別平等と見る所に、其の主張が存して居る。故に大體より云へば、社會民主的傾向は、個人の特殊性に何等重大なる意義を附せず、むしろ此の特殊性を沒却し滅絕して、ひとへに平等の一邊に重きを置かんとする傾を備へて居る。且や社會民主的傾向は、社會上、政治上、經濟上一切の權利を及ぶべきかぎり下層民にまで擴張せんと努め、更に風俗、習慣、道德、宗教、趣味、風尙、言語、其の他一切日常の動作に至るまで、其の間上下貴賤の別を徹して、一切平等の姿になさんと努める、すなはち一切を民主的となし、一切をデモクライズせずんば止まざらんとするの傾を備へて居る。一面美はしい理想は籠りながら、此の傾向の弊として、純粹なる文化の精髓を次第に野鄙陋劣なる姿に俗化せしむるは、與に避くべからざるの勢であらう。一切をデモクラライズするとは、一面よりみれば、一切を卑近にし、一切を俗化する所以て、一班の文化の進步の度合を平均し、其の進步の水平面を卑下する事に外ならぬのである。員數の上から言

へば、下層民が社會の大多數である、其の大多數の凡俗が社會の表面に橫行濶步して、自在に其の暴力を逞うするに至ては、小數識者は到底之れに抵抗すべからず、知らず識らず其の俗惡な風潮に化せらるべきは自然である。昔は上流社會に限りて使用された言語も、今は次第に下級民にまで濫用されると同じく、一切は到底均一俗化の運命を遁れないのである。

十九世紀の大勢力なる社會民主的傾向が斯くの如く個人の特殊性を沒却し、斯くの如く文化の精髓を俗化し去るの勢を見ては、少數天才は、果たして緘默を守りて、一切を世の成行きにまかせることが出來やうか、さらぬだに著く主我的に成來たれる十九世紀末の人士が、社會の此の趨勢を見て、我れ關せず焉として、冷然すまして居ることが出來やうか、むしろ天才の義憤を促し、民主的傾向に直反對なる激烈なる個人主義の勃興すべきは自然の勢力ではあるまいか。さればマックス、スチルナーは、夙に極端なる個人主義の聲を放つた。ショペンハワーは、無智盲目な下級民が天下に橫行せるさまを見て、人類は一切無智、盲目、賤劣、野鄙、忌むべく惡むべき動物と思込み、民主的傾向に反對して、夙に天才の貴むべきを號呼した。イブセンこそ其の解釋者と呼ばれたるデンマークの詩人的哲學者キャーケゴールドは、ひとへに個性の發揮を最高の道德となし、他を顧るは無益とまで絶呼した。更に近代の文藝の上には、最も明らかに此の個人主義の脈が寫出だされて居る、而して其の代表者は無論イブセンであらう。此の點に於て、イブセンとゾラとの間にはおもしろい對照がある。ゾラは社會民主的傾向を歌ひ、イブセンはまさに其の反對に立つて居る。ゾラに取ては、個人の特性品位と云ふが如きは、さして重大な事

てはない、彼れが寫出ださんと努めた所に、主として個性を沒したる社會、デモクラライズされたる渾一の社會であつた。イブセンはまさに其の反對の方針を取つて居る。無論イブセンは單に社會民主的傾向に反抗したのみでは無い、あらゆる痼疾となつた舊習慣、舊信仰、舊道德に反抗したのであるが、更に民主的傾向に助けられて、次第に淺薄、卑賤、虛僞、輕薄、あらゆる腐敗と罪惡とに充滿せる近世の暗黑面を見ては、彼れは慷慨、悲憤の情に堪へなかつたのである。無智、盲目、野鄙、陋劣の愚民が天下に横行し、奸佞邪惡忌むべく惡むべきの徒輩が社會に跋扈して、眞に氣宇の高い品性の貴い個人は、空しく擾々たる俗塵の渦中に捲き去られ、個人の尊嚴と人類の價値と、擧げて皆無ならんとする社會の趨勢見ては、イブセンはげに人道のため個人の特性の發揮を絶叫せざるを得なかつたのである。

ニイチエに至ては、最も激烈に社會民主的傾向に反抗し、最も高く個人主義の旗を飜せる者、其の主義主張は廣く世に知られたれば、殊更こゝに叙說するまでも無い。彼れは實に民主黨又は愚民本位黨の强敵にして、貴族黨又は天才本位黨の大なる味方であつた。彼れは民主的傾向に賴つて、社會の元氣、風尙が急轉直下の勢で墮落し行くさまを見て、從來の所謂文化も最早これまでと覺悟した。彼れは墮落腐敗せる此の多數愚劣な徒輩を犧牲に供して、むしろ少數天才の出現を社會進步の必然なる約束と考へた。彼れは少數天才者の力に賴つて、初めて社會は其の活動を遂げ得るものと考へたのであつた。ロマンチックなる個人主義は、ニイチエに至つて其の絶頂に達したと謂ふべきであらう。

第三 非物質主義及主觀主義附意力主義

ロマンチックなる個人主義が、十九世紀末の顯著なる風潮であつたと同時に、非物質主義及主觀主義は、此の個人主義と不離の關係を保つて、矢張十九世紀末の顯著なる一大風潮であつた。個人主義が十九世紀文明に反抗して起こつたものであると同じく、非物質主義及び主觀主義も、矢張十九世紀文明の通弊に反抗して起こつた現象である。十九世紀の文明は、一面から言へば、社會民主々義の文明及び物質主義又は唯物主義の文明である、民主的傾向と唯物的傾向とは、十九世紀末の最大特產物と名つけて差支なからう。唯物的傾向を社會民主的傾向の所產の如く見るは酷である、本來此の二の傾向は十九世紀一貫の現實的精神に胚胎せるもの、現實的精神の產み出した二姉妹とも見るべきものであらう。そは兎もあれ滔々たる唯物的傾向は十九世紀一體の大潮流であつた、げに古今未曾有の大潮流であつた、現實的生活の根底は、十九世紀に於て、充分堅められ强められて、如何なる空想を以てしても最はや動かすべからざる地盤となつた、將來如何なる理想的傾向が勃興すとも、現實生活の此の根底は最はや動かすべからず、物質文明は所詮一切の存在の根底である。故に廿世紀に於ても、將た一層遠き將來に於ても、物質文明はます〳〵其の地盤を强めるであらう、ます〳〵其の範圍を廣げるであらう。されど疑ふべし、假令物質文明は現實生活の根底なるにせよ、若し物質文明のみが唯一の文明と考へられ、唯物的傾向が、社會の最大傾向となりて、一切他の方面が忽緖に附せらるゝに至つては、果たして其れが眞の文化

の域に進んだものと見做さるべきてあらうか、むしろ其の偏頗なる發達に依りて、文化の眞の精髓は甚しく消磨され破壞され絶滅されるの悲境には陷らざるか。果然十九世紀に於ける物質的文明は、明らかに其の短所を暴露し來たつた、一切は物質化され俗化されて、文化の眞の精髓は甚しく磨滅され毀損された。すなはち極端な唯物的傾向は、人心をひとへに客觀の物質世界のみに着眼させて、一切主觀の內的生活を忘却させた、外界あるを知つて內界あるを忘れさせた、人類生活のたゞの條件なる物界のみに着眼させて、貴い目的を備へたる精神生活を失念させた。物欲の囚はれとなつた近代人士の精神は、甚しく淺薄な貧しい哀れな姿にやつれたのみならず、あらゆる虛僞、腐敗、罪惡が其の間に萠して內的精靈の光は次第に薄らぎ行くの傾向を示した。形勢斯くの如く非なるに至つては、流石にアイデアリズムは、再び其の頭を揚げ來たらざるを得ない、人類の尊嚴を意識せる天才は猛然決起して此の大勢に反抗せざるを得なかつた。されば玆に論じつゝあるニイチエ、イブセン等の超人派が、奮起して此の唯物的傾向と之れに附帶せる淺薄なヘドニズムと戰つたのみならず、他の比較的穩健なる學者、批評家、文藝家すら、極端な唯物的傾向は精神生活を腐蝕するものとして、現代文明を悲觀するの聲を放つたは、眞に十九世紀末の大勢とも謂ふべきてあらう。

非物質主義と相並んて、むしろ之れと不離の關係を保つて、而して又一面前の個人主義と脈を同じうして、主觀主義、又は主觀的傾向は十九世紀末の一大風潮てあつた。こゝに主觀的傾向といへるは、一には一切主觀を標準として物を律するの傾と、又一には客觀の物質世界よりは主觀の心靈界を重んずるの

傾とを指す。一切主觀を標準とするの傾向―極端な主觀的傾向は十九世紀末に於ける一斑の風潮であつた。主觀的傾向とは、必しも主義的又は我執的傾向では無い、すべて主觀の深い滿足を最後の標準とする傾、客觀的習慣に盲從せずして、むしろ其等を蔑視して、ひとへに自家主觀の世界を最高の標準とする傾である。斯かる主觀的傾向は眼を廣く外界又は世間にはくばらず、むしろ、一切客觀界には眼をつぶりて、ひとへに主觀の壺中の天地に來往し、すべて主觀の確信と主觀の滿足とに從つて動くの傾、別に自家中心的傾向と云ふも差支ない。斯かる傾向は、言ふまでもなく、一面より言へば、在來の淺薄な客觀的傾向―器械的に客觀的習慣に信頼するの傾向に對する反動にして、又他の一面より言へば、民心が自識自覺の境に進んだ結果であらう。玆に論じつゝあるショペンハワー、ニーチエ、キヤーケゴールド等は、孰れも極度に此の傾向を示せる者、就中キヤーケゴールドは、眞理の標準は客觀に存せずして主觀に存すと說き、主觀性即眞理と斷じ、更に一切の道德的行爲は、客觀の結果如何は問はず、たゞ主觀の善惡如何を以て判ずべきものと叫んだ。斯くの如く主觀的傾向が强まるにつれ、人心はおのづから外に向はずして、内に向ひ、隨つてまたおのづから瞑想的、空想的、自省的、抒情的となれる、これ將た自然の結果であらう。

主觀的傾向と連關して、主觀の生活即ち精神生活を重んずるの一事は、また十九世紀末の一大風潮であつた。十九世紀文明の大勢が客觀の現實世界、自然界、物質界のみに向かへるに反抗して、十九世紀末に於ては、主觀の心靈界に着眼するの傾向が次第に高まつた。唯物的傾向のために、ひとへに客觀世界

のみに向けられた人心が、十九世紀末に至りて、一轉して、内的生活に向けられ、内的生活なる精神現象が、人類生活の最高現象と認められ、此の最高現象の光を發揮するにあらずば、人類生活は何の甲斐もなしと氣づくに至つた。精神生活が重んぜられしにつれ、個人の高く美はしい人格の發揚が人類生活の最高義であるとは、これまた十八九世紀末に響いたる新らしい聲であつた。ニイチエやイブセンの超人や偉人も、畢竟此の要求の最も熱烈なもので、人格の尊嚴を重んずるアイデアリズムは、其の姿を新にして、再び十九世紀末に現れたのである。たゞし十九世紀末に於ける理想的人格と、前代の理想的人格との間におもしろい對照がある。十八九世紀の頃世人の理想と仰いだ人格は、知見に於てか又は情操に於てか、調和整正の姿を保てる圓滿なる人格であつた。主智派の理想と仰げる人物は、聰明叡智、主觀の小宇宙の裡に客觀の大宇宙を縮寫せるが如き徹底的人物で、此の傾向はヘーゲルに至つて其の頂上に達した。ロマンチシズム又はクラシズムは、シヤフツベリーやルッソーの跡を追うて、感情の要求を容れたれど、尙情操の圓滿に調和統一された靜な姿を其の理想と仰いだ。シルレルの所謂「美しい靈魂」は、其の當時の理想的人格で、其の「美しい靈魂」とは、知性と感性と圓滿に調和した、所謂古典式人格に過ぎなかつた。しかるに十九世紀末に近づくに從ひて、世人の理想とする人格は次第に變つて來た。時勢は著く現實的と成來たつて、昔人の掲げたる夢のやうな美しい人格は、現實的精神には最早ふさはしからぬ者と感ぜられた。然かのみならず、世間は次第に自省的反省的と成來たつて、精密に内的生活を觀測せる結果、古人の夢想せる如き何等の不調和も矛盾もない圓滿具足の姿は、決して現世に於て吾人の理

想とすべき人格にあらざるに想ひ至つた。すなはち十九世紀末に於て理想として揭げられた人格は、智情圓滿な精神にはあらずして、むしろ意力に於て秀でたる、詳しく言へば情意の方面に於て、現實世界に處して勇猛奮鬪の功を收め得る人格であつた。靜にして美はしい靈魂よりは、撞着矛盾を蹶倒して、理想を現實に成し得るパワフルな人格が、眞の理想的人格と仰がれた。理論の方面に於ても、昔の主智派は倒れて、情意を精神現象の根本と見るヴランタリズムが流行の學說となつた。さればショペンハワーは、自家の內助的生活を自省して、夙に意力これ世界の本體と喝破した。更に渾心意力の塊であつたビスマークは、事實の上に當代の理想的人格を示したのである。カント、フイヒテが Primat des Willens の思想は、十九世紀末に至つて、初めて實現された趣がある。

ニイチエが超人とは何ぞ、絕大な意力に滿てる神人てはないか。イブセンが畫ける人物は如何、革命的傾向を備へたる奮鬪的人格てはないか。十九世紀末に於て、一斑に理想とされた人格は、おほむね此の種類の意力的人物てある。顧て思ふに、十九世紀末に於て、斯くの如く意力的人格の貴まれしは、斯かる革命期に於て現實世界に處するには、强大なる意力を要するからでもあらうが、他の半面より言へば、明らかにこれ現代人士の弱點を暴露せるものと見ざるを得ず。現代人士が著しく多感となり纖弱と成り來たれるは爭ふべからざる事實にして、所謂海志弱行は十九世紀末人心の弱點たるに相違ない。自家の纖弱無力を感ずるの時は、すなはち强大なる意力の人たらんを願ふが、人情の自然てはあるまいか。ニイチエが超人說の由來は、明らかに此邊の消息を漏らせるものにあらずや。

第四　厭世主義附懷疑主義

主觀的傾向と個人的傾向とが、十九世紀末の一大風潮であつた如く、此等の傾向と密に相連關して、特に十九世紀末の一風潮と見做すべきは、彼の東洋趣味を帶べる厭世的傾向であらう。歐羅巴に於ても、其の古代に於ては、一種の厭世的傾向が無かつたては無い、されど近代十七八世紀並びに十九世紀の前半紀に至るまでは、主として樂世的傾向が民心を支配して、特に陰鬱な厭世的傾向は無かつたのである。然るに十九世紀末に至つては、俄に厭世の暗雲が歐羅巴の到る處に現れて、厭世的傾向はまさに天下の一大風潮とならんとした。そも〳〵斯かる厭世的傾向は如何にして俄に起こり來たり、又た如何なる影響を後世に及ぼせしか、其の起伏の波瀾を細かに觀察することは所詮こゝには不可能である、蓋し一概に厭世的傾向と云ふも、其の中には色々な種類がある、必しも其の起原並びに影響を一とすぢ繩に論斷すべきではない。たゞ極めておほまかに言へば、十九世紀末の厭世的傾向は、所詮在來の文明就中十九世紀文明に飽いた結果、在來の文明がつく〴〵いやに成つた結果、在來の文明を産出した世間を見はなした結果と見るの外はない。すなはち一言に盡せば、在來の生活（レーベンス）に倦（ミューデ）みつかれた結果である。

尙一段詳しく此の風潮の由來をさぐつて見やうか。前代の歐洲民は先入主、傳來の樂天觀に支配されて、容易に其の影響を脫することが出來なかつた。傳來の樂天觀とは、まだ單純な素朴な、近代の辛い苦い

複雑な經驗を嘗めざるうぶな世相の上に建てられた人生觀で、人世觀としては極めて皮相的な淺薄な幼稚なものであつた。されど舊習慣の人類社會に及ぼす力の大なるや、十九世紀の歐洲民は、件の兒戯に類する傳來の樂天觀に支配されて、たゞ何となく現世無上の樂土と心得、人生を常樂に滿ちた樂園と觀じたのであつた。されど斯かる幼稚な人生觀は、如何に歐洲民が子供めいたりとて、いつまでも其の權威を擅にすべきではない。現世は然かく花咲き鳥歌ふ常樂の園にあらずして、むしろ散る花に世のあはれを示し啼く鳥に人生の苦痛が訴へらるゝ、しんみりとした嚴かな世界である。浮きたる歡樂は人生の皮相にして、其の裏面には悲哀の涙、斷腸の血しほが流れて居る。東洋人は夙に人生の眞相を直觀した、近代歐洲民は永く其の物質文明に惑溺して、十九世妃末に至つて、其の弊に堪へずして、初めて此の眞相に想ひ至つたのである。思想の歴史より言へば、確に一段の進歩たるに相違ない。

十九世紀末に至つて、何故俄かに悲觀厭世の風潮が高まつて來たか、我等の見る所によれば、これが主なる原因ほゞ三を數へることが出來る、すなはち社會風潮の亂脈は其の一、民心の進歩は其の二、一代を統率すべき人生觀の缺乏は其の三である。社會風潮の亂脈と云ふ中には、十九世紀文明の一切の通弊が含まれる。十九世紀末は政治上强弱其の直接生存を爭ふて、陰鬱な濕つた空氣が歐洲一面に廣がつた時代、物欲上の生存競爭に、人類のあらゆる兇暴、邪惡、奸佞が擅にされた時代である。啻に政治上のみならず、一班社會の風潮は、十九世紀物質文明の極弊に達して、大動亂を極め、下流社會の暗黑面、上中流社會を通ぜる腐敗亂行、人類のあらゆる弱點汚毒が極めて無遠慮に白晝に暴露された。此の大動亂

此の大亂脈、畢竟何等の意義を宿せるぞ、人生はたゞ物欲の競爭場裡か、强者の腐敗亂行を見んがために我れは現世に生まれ來たりしか、萬斛の涙は時々刻々に此の競爭場裡より濺がれるてはないか、呻吟痛苦の叫びは、深く社會の地盤をさへ震ふてはないか。且夫れ大は一班の社會組織より、小は一小家庭若しくは個人の心裡に至るまて、世は無量無限の矛盾、衝突、偏頗、不公平、虚僞、譎詐に滿ちて居る。世に幸なる者、富める者、譽ある者、其等は必しも善者識者にあらずして、却て殘忍、酷薄、暴戾、不逞の徒輩其の多數を占め、眞の善者識者は、倒に不幸薄命の淵に苦悶呻吟して居る。美しい人情義理あひは日に冷却し去つて、世は冷酷な我利々々亡者の寄合となり、我れは常に欺かれ迷はされて、とこしへに我が願ひ叶はず、痛ましい苦るしい經驗に身も魂も疲れはてる。冷酷な社會は、針大の缺點あれば、いづこまでもと我れを追責し、又屢々罪なき我れをさへ不法に苛責して、我が存在をさへ危うせざれば已まない。

斯くの如くこせついて世智辛いが十九世紀文明の弊てあつた、苦悶こそあれ、誰か現代を地上の樂園と見ん。一班の風潮斯くの如くなるに加へて、十九世紀末の民心は、現代を地上の樂園と見るには餘りに進歩した、彼等の五官は著く敏捷となり、彼等の性情は著くデリケートとなり、昔人の疎豪にして萬事に無頓着なりしとは、甚しく趣が變つて來た。彼等は深く十九世紀文明の苦い々々經驗を味はつた、現代文明の弊は痛く彼等の精神を刺激した。嗚呼これが果たして眞の文明てあらうかと、彼等は先づ疑つた。今の所謂文明とは、唯これ陋劣な俗惡な物欲一邊の文明てはないか、俗氣と臭氣とに滿ちた微塵

氣品のない賤しい文明ではないか。俗人は醜に坐して醜を知らず、無意義に器械的に習慣に支配されて、無意義に器械的に現代文明を謳歌し、現代生活を得がたき樂土と念じて居る。されど現代生活の實相を見れば、いづくに人類の願望は成就され、いづくに人類の至樂は宿るぞ、たゞ物欲、たゞ虚僞、たゞ諂詐、むしろ絶望と悲嘆と涙と血と、其れが現代生活の實相ではないか、終生役々として得る所は、たゞ絶望と苦痛と死とのみではないか。斯かる人生畢竟何等の意義かある。たゞ苦しくたゞつらい、果敢ない夢幻生活ではないか。此の矛盾苦悶の生活を命あらしめ、此の絶望悲嘆の人生を生氣あらしむる人生觀はまだ見出だされない。人生を樂園と見たる傳來の樂天觀は、うぶな幼稚な人生觀で、我れは永く此の淺薄な樂天觀に惑はされたのである。

深く現代生活の實相を見れば、苦痛と悲哀と殺氣と物すごくも滿々として居る、我が精は疲れ根は挫けて、再び此の絶望世界に躍入る勇氣はない。世間は我れを優柔不斷と笑へ、意氣銷沈と嘲れ、薄志弱行と罵れ、我れは我が精神を鼓舞すべき靈火を缺いて居る、再び凡俗の潮流に身を投ずべき元氣はない、快々として現代文明を恨むの外はない。斯かる憂ふべく厭はしい人世に於て、他に交り事を處するは、たゞ物うく、面倒くさく、我れは生活其のものに疲れはてゝ、現世を果敢なむの外はないと。これが悲觀厭世の風潮であつた。

斯くの如くして十九世紀末に於ては、厭世的風潮は到る處に盛に吹きすさんだ、ひとりショペンハワー、ハルトマン、ニイチエ、ワグナー、イプセン、トルストイのみかは、思想界のあらゆる方面に陰鬱な風潮が

盛に漲つた。極めて穩健な人々さへ、假令絕對的厭世觀に陷らざるまでも、人類社會は古人の夢想せる如き平穩無事、調和整正、無限の幸福と悅樂とに滿てる世界にあらずして、むしろ限りなき波瀾、撞着、不調和、悲哀、苦痛に滿てる不思議な世界であることを認めた。在來の淺はかな樂天觀は、十九世紀末に於て、甚しく其の根底を搖られたのである。

旣に現代の文明に對して、斯くの如く悲觀厭世の風潮が盛であつた。しからば假令極端な悲觀厭世に傾かずとも、世人がすべて現代の文明に對して疑惑懷疑の態度を取るに至りしは自然の勢である。懷疑の風潮は厭世の風潮と相並んで、同じく十九世紀末の顯著なる現象であつた。一面から言へば、十九世紀末は、懷疑の時代と言つても差支ない。故に十九世紀末の懷疑的傾向は、前代人士が單に抽象的な哲學上又は宗敎上の問題に疑惑を懷いたとは甚しく異り、在來の文明の一切に對しての懷疑である、一斑の社會組織の當否も疑へば、政治機關の良否も疑ふ、社會の習慣道德の善惡をも疑へば、在來の學藝の良否をも疑つた。すべて全體の文明に甘んじて信賴するの氣風が無くなつて、萬事を不信任不信用の眼を以て見たのである。されば斯かる懷疑的傾向は次第につのりて、一斑人類の運命や人生の意義にまで及び、人類は果たして此の墮落的文明より解脫して、いづこにか新生命新生活の光に浴するの期あるべしやと疑ふに至つた。すべて斯かる陰鬱な不快な調子は、最近代文藝の孰れのページにも讀まれる。ひとりイプセン、トルストイ、ニイチエ其の他近代の露國文壇に於てのみならず、十九世紀末に於ては、斯かる濕つた空氣が歐羅巴の到る處に彌滿したのである。

第五　解脱主義附神秘主義

以上述べ來たつた如く、十九世紀末の新ロマンチシズムは、十九世紀文明の弊風に反抗して興つた風潮である、啻に其の弊風に反抗したのみならず、其の根底から現代文明の是非を疑ひ、之れを否認し、之れを破壞し、之れを厭離せんとするに至つた熱烈な風潮である。斯くの如く一切現代文明に對して懷疑悲觀の態度を取るに至れば、現代文明を作り、現代文明の精神を成し、且現代文明を統率した人生觀、即ち在來の宗教に對しても十九世紀末の此の風潮は、おのづから懷疑又は反抗の態度を取るに至つたは自然の勢である。現代文明を否認するとは、其の生命なる人生觀を否觀することとて、一たび現代文明を否認すれば、此の文明を造つた宗教をも併せて否認せざるを得なかつた。即ち從來の宗敎觀を離れ、別に一道の新光明を認めて、此の厭しい現代文明から解脱せんと試みたのが十九世紀末の新ロマンチシズムに共通な特風であつた。解脱々々、一切現代文明を解脱して、全然新なる光明世界に歩武を轉ぜんとしたが十九世紀末の特調であつた。

宗敎上の此の風潮を明らかにするには、別に宗敎の方面からも、此の風潮の由來に溯る必要がある。就中十九世紀末の新ロマンチシズムと密接な關係あるダギッド、ストラウスやフォイエルバッハの脈に注意する必要がある。一面から言へば、ストラウスやフォイエルバッハの脈は、十九世紀文明の一產物、十九世紀の現實的精神の特產物なれど、他の一面から言へば、從來の全體の宗敎觀、隨つて現に十九世紀を支

配しつゝあつた宗教觀に反抗したものと見ることが出來やう。其の意味に於てストラウスやフォイエルバッハの派は、一言に宗教上の主觀主義とも名づくべきか、從來の宗教上の客觀的權力主義、又は從來不變不動の客觀的眞理と盲信された宗教上のドグマに大打擊を加へたのであつた。基督教のドグマは、從來既に幾度か識者の疑問となつたに係らず、一斑には尙十九世紀に於て、不變不動の天啓として盲信された、永久の客觀的眞理として盲信された。ダギッド、ストラウスが有名な「耶蘇傳」は、先づ此の迷妄を破して、宗教もまたこれ人心に胚胎せるものなることを示した。即ちストラウスに賴れば、神の子として語りつたへられた基督が事蹟は、必しも文字通りの歷史的事實ではない、むしろ傳來の基督の事蹟は、宗教に熱心なる古代人士が其の宗教的意識を詩的に標象したものに過ぎない、永い時代の間に人類の宗教的意識が空想の形を藉りて有形にされたものに過ぎない、一種の尊むべきミソロジーに過ぎない、之れを一種のミソロジーと見、之れを一篇の宗教詩と見てこそ、そこに尊むべきミソロジー基督教の精神が活躍して居る、畢竟宗教上の教儀教典は、人類宗教的意識の標象で、必しも不動の天啓と信ずべきではないと。これがストラウスの耶蘇傳の主意で、其の耶蘇傳は當時疾風迅雷の勢にて本國獨逸は勿論、廣く他の歐羅巴諸國に傳播し、ストラウスは一時思想界の中心となつたと傳へられて居る。されど同一思想をストラウスよりは更に哲學的に更に深刻に、而して新代の人の將に言はんとして憚れる所を無遠慮に大膽に公言したはフォイエルバッハであつた、フォイエルバッハの激烈な火山的精神は、十九世紀末識者の頭腦を深く支配したと言つて差支なからう。フォイエルバッハによれば神も宗教も天啓的眞理として人生に現れ

たのではない、人心自然の要求が宗敎を作り又神を作つたのである、基督敎の神も、基督敎其れ自身も、人心自然の要求が、永い年代の間に結晶して成つたものに過ぎない、故に宗敎は客觀的眞理にあらずして、主觀的要求である、人心作用其のものである、心理其のものである、神も宗敎も皆人類が造出だしたものに過ぎずと。これがフォイエルバッハの精神である。即ちストラウスやフォイエルバッハに賴りて、從來無上の客觀的眞理と仰がれた基督敎のドグマは、人心の要求より現はれたる主觀性のものと宣言された、客觀的價値を備へたと信ぜられし信仰個條は、單に主觀的價値のものと斷定された、一切宗敎は神の客觀的眞理を敎ふるものにあらずして、單に主觀の要求其のものに過ぎずと喝破された。此に於てか、彼の宇宙人生の眞趣と神の本性とに、さながら明確に通達し得たりと夢想せる淺薄な客觀的宗敎は、其の根底地盤に容易ならざる大打擊を受けた。宗敎的にアスパイアーするには、必しも既成宗敎のドグマに縋る必要はない、主觀の眞の要求を土臺とし、自家の確信に從つて、其の進むべき所まで進むべきである、と言ふがフォイエルバッハの與へた一斑の風潮であつた。恰も前に述べた十九世紀末の主觀的傾向は、宗敎上の此の主觀的傾向を助けて、益〻此の風潮を强めた。從來の客觀的宗敎は、これがために甚しく其の權威を失つたのである。

客觀的宗敎の土臺が、斯くの如く搖らぎ出したと同時に、此の宗敎を土臺として立てる現代文明は、古今の歷史上曾て類を見ざりしほどな淺薄、腐敗、疾病、邪惡あらゆる罪惡を無遠慮に產み出した。原始的基督敎はいざ知らず、又眞の基督敎の精神はいざ知らず、少なくとも十九世紀の民心を支配せる基督

教は現代文明の精神生命で、現代文明の生命は、すなはち今の基督教と見做さゞるを得ない。然るに現代文明の精神を何ぞと問へ、今の基督教の精神を何ぞと問へ、淺薄な、浮薄な樂天觀ではないか、あらゆる腐敗邪惡を內に包んで、强ひて外面を飾らんとする見すぼらしい樂天觀ではないか。現代文明はたゞこれ淺膚浮薄な物質的文明ではないか、內的生活は如何に貧しとも、頻に口腹の慾をほしいまゝに爲し得れば、それにて人生を味へりと解する陋劣な文明ではないか、物欲のためには、あらゆる奸計邪惡を演じて憚らざる厭はしい文明ではないか、天下民衆を犧牲に供して、己れ一人の邪慾を擅にせんとする恐るべき文明ではないか。斯くの如き淺膚浮薄な文明を殊更虛僞的博愛の手段を以て緩和圓融せんとし、而して僅に外觀の美なるを見て神の天國は此の地上に現はれたりとする淺薄極まれる樂天觀が、今の基督教の旨意ではないか。何と言ふ淺ましい文明ぞ、何と云ふ浮薄な宗教ぞ。且夫れ深く現代文明の裏面を窺へば、氣も狂ひ心も亂るゝ如き、無數の矛盾、撞着、不調和、疾病、罪惡に滿ちて居る。廣くは一班の社會組織を初として、社交問題、家庭問題、婦人問題に至るまで、一として不調和疾病の毒に滿たざるはない。而して今の宗教には此等無數の矛盾不調和を救濟する力が缺けて居る。現代人士は、人類はいづこより生まれ來たり、何を目的として遂にいづこに行くべきものなるか、此等の問題に就いては、殆ど無我夢中の狀態に居る。而して今の宗教は、此等の重要問題に對して、殆ど何等の敎ふる所もないのである。

嗚呼悲むべき文明よ、あはれなる宗教よ、世人はいつまで斯かる宗教にまつはり、いつまで斯かる文明

に安ぜんとはするぞ、斯くの如き文明、斯くの如き宗教、到底吾人に眞の滿足と其の生命とを與へるものでない、此のまゝに進み行かば、人類はます〳〵腐敗汚毒の深淵に沈むに過ぎない、人生の進むべき眞の本道は、此の文明と此の宗教との外に在るに相違ない、從來の生活とは全然異なつた新世界が吾人の目的でなければならぬ。即ち現代文明を解脱して、吾人の生活を全く新にするが、世の覺者の進むべき方針であると。斯かる解脱の聲が、實に十九世紀末の一種の風潮であつた。懷疑厭世の風潮と共に現代文明の解脱が當時の特殊なる一風潮であつた。ショペンハワーは、ひたすら現代文明の弊に着眼して、人生はすなはち斯くの如きものと斷じ、無益なる苦痛と煩悶とに呻吟せんよりは、現世を解脱して涅槃の境に入るべしと叫んだ。キャーケゴールドは、現代文明と現代宗教とは、孰れも人生の眞趣に戻るものとなし、むしろ此等一切を解脱して、清淨涅槃の境に入り、原始的基督教の禁欲生活に返へるべしと唱へた。

トルストイも又現代文明を否認して、此の文明と此の宗教とより解脱して、原始的基督教の精神に返へるべしと叫んだ。ニイチエは一切現代文明を打破して、超然他の新世界に入るべきを布告した。リヒアード、ワグナーの如きも、現代文明よりの解脱を其の詩想の根底とせるは疑ひない。イブセンの如きも、此の風潮以外の詩人と見做すべきでは無からう。

現代文明を解脱して、其の將に入らんとせし新生活又は新世界とは如何なるものであらう。無論十九世紀末人士の空想には、まだ斯かる新生活は明確には書き出されなかつた、吾二十世紀の今日でも將來の

新生活の何たるかは極めて漠然たるを免れない。されどこゝにいふ新ロマンチシズムが畫いた新生活は、孰れも神秘的といふ一種の特風を備へて居る、曖昧模稜といふ好ましからぬ風もあれど、全體神秘的な衣に包まれて居る。ニイチエの超人論、ワグナーの新樂園、トルストイの原始基督敎的生活、乃至キヤーケゴールド、イブセンの新生活に至るまで、孰れも現代生活とは趣を異にせる一種神秘な風韻を備へて居る。文藝の上に神秘主義や標象主義の現れたも偶然ではない。

第六　結論

以上叙說し來たれる個人的、非物質的、精神的、主觀的、厭世的兼解脫的傾向は、十九世紀末に起これる一種顯著なる風潮であつた。而して全體に於て俗流を拔きんでた熱烈な、卓拔な、深刻なる觀察なることは爭はれない。此に於て吾人が須べからく沈思默想すべき問題は、此の一大風潮を如何やうに思量すべきかてある、此の一大風潮の本質を如何やうに考ふべきかてある。二十世紀の新文明は、直に十九世紀末の此の風潮より胚胎すべきてあらうか、十九世紀末の此の風潮は、直に二十世紀の新精神其のものと見做すべきてあらうか、たとしは又此の一大風潮は、將來の文明には何等の關係もなき一時の現象に過ぎざるものてあらうか。前に旣に記せし如く、此の風潮—一時歐洲思想界を震動した此の一大風潮を以て、直に二十世紀の新精神其のものと斷ずるは、やゝ輕卒な判斷たるを免れない。勿論二十世紀の新精神の何ものなるかは、今日はまだ何人にも不明瞭てあらうが、識者の暗默裡に期待しつゝある所は、

其の形式に於ても、一層精確な、莊嚴な、沈痛な、富贍なものでなければならぬ。十九世紀末の新ロマンチシズムは、其の形式に於ても内容に於ても、確に從來の俗見俗識以上に一種新なる生命を宿して居る、そこに一種新生命の曙光はひらめいて居る、されど之れを以て、直に二十世紀の新生命とするには、餘りに性急で、餘りに偏狹で、また餘りに纖弱に、茫漠たるを免れない。十九世紀末の新ロマンチシズムは、大體に於て、破壞性の一方に富んで建設性に缺けて居る、在來文明の攻擊に急にして、新光明の建設に缺くる所あるは爭はれない、事實、我等は新ロマンチシズムの精神に接して、痛快に、小氣味よく、さへ〴〵しく、何となく淸新な空氣を呼吸して、心靈頓に軒昂たるの感はあれど、更に沈思默想我が靈魂にむかつて、汝果たして之れによつて心機一轉、不朽の新世界に常住せる眞滿足を得たりやと問へば、如何にしても「否」と答へざるを得ない、我が心靈の奥底には、尙深い不安不滿の波が動いて居る、我れは新ロマンチシズムによつて、尙弘誓の船に乘つたと感ぜないのである。新ロマンチシズムの骨髓は、言ふまでも無く、其の解脫的傾向に在る、現代文明を解脫して、新世界に進み行かんとした傾に在る、そこに新生活の光はひらめいて居る、將來の新生活は、或意味に於て、必ず現代生活を解脫したものでなければならぬ、現代の俗習的生活を解脫したものでなければならぬ、解脫に賴らずんば、到底新生活に進み入ることは不可能であらう。されど現代文明を解脫して新生活に入るとは、必しも人類生活を滅却して、小乘佛敎的涅槃境に入るの意味ではない、矢張食ひ且寢ね、泣き且喜んで現世を送るので、唯其の食ひかた寢ねかた、泣きやう喜びやうに全く淸新な精氣が通ふのである。滅却

せんと欲して滅却する能はざる此の現實生活、無始無終に流れて息まざる此の壯大なる現實生活、之れに睛を點じて忽焉躍如たらしむるもの、それが我等の期待する新生命である。新ロマンチシズムは舊生活の破壞に急にして新生活の創造に缺けたるは爭ふべからず。二十世紀の新生命は、必や一層深奥な圓熟なものでなければならぬ。故に十九世紀末の新ロマンチシズムは、直に之れを二十世紀の新生命とは見がたいのである。

新ロマンチシズムは、二十世紀の新精神其のものにあらずして、十九世紀文明に對する反抗である、十九世紀文明の弊に對する反動的態度が其の本領で、要するに現代が將に新代に移らんとする過渡期の現象たるを免れない。新ロマンチシズムは、其の破壞的な、極端な、革命的な點に於て、すべて過渡期の特殊現象たる性質を備へて居る、之れを過渡期の現象以上と見て、二十世紀の新精神其のものと解するは、却つて此の風潮の本質を誤解するものでは、あるまいか。十九世紀文明に對する反動といふ事は、必しも新ロマンチシズムの價値を損する事にあらずして、又其れが二十世紀の新精神に何等の關係連絡も無いといふ意味ではない、むしろ在來文明に對する反動なるが故に、其の點に於て新ロマンチシズムは、將來の二十世紀文明の新精神に密接な關係ありと斷ぜざるを得ない、こゝに新ロマンチシズムの深い意義が潜めりと見ざるを得ない。此の點に於て我等は、新ロマンチシズムをたゞ偶然の一時の現象とは見ずして、將來の文明に深い關係ある重大な風潮と見ざるを得ない、將來の文明の新精神は、假令ば新ロマンチシズム其のものにはあらざるも、深く此の風潮の影響を蒙むつたものに相違ない。斯くの如き

新生活が果たして建立せらるゝてあらうか、いつ斯かる新生活が勃興するてあらうか。其れは何人に取りても大なる疑問てあらう。されど斯かる新生活は、要するに現代の人が造り出だすべきもの、又造り出さゝるを得ざるもの、現代人士の深く要求して已まざるもの、早晩勃興せざるを得ざるものてあらう。勿論其の新生活の何ものなるかは、容易に豫言すべからざるも、我等は尙其の大體の輪廓ほどは、斯くあるべしと豫想し、又は斯くあれかしと期待せざるを得ない。試に其の大體の輪廓を空想せんか、將來の新生活は、必や十九世紀文明の弊を解脫して、十九世紀文明とは頗る趣を異にせる沈痛莊嚴な生活ならざるべからず。十九世紀文明は新ロマンチシズムの絕叫せる如く、內的生活を忘ぜる物質的文明であつた、精神生活の光は著く薄らいて、あらゆる方面に淺膚浮薄な氣風のはびこつた文明てあつた、故に二十世紀の新精神は、內的生活を強め且深うするものてなければならぬ、精神生活の光を發揮せしむるものてなければならぬ。新ロマンチシズムの唱導せる如く、吾人の主觀的傾向は尙益〻進むてあらう、幼稚な淺薄な客觀的夢幻生活より醒めて、吾人は益〻主觀的又は自覺的生活の度を强めるてあらう、內的生活は之れによつて、益〻强められ、人類生活の意義は、之れによつてます〳〵深められるのてある。個人の尊嚴の意義の次第に明らかにされ且深めらるべきは言ふまでもない。正しい意味に於ける個人主義と社會主義とは、互に相補翼して人世を全うすべきてある。若し夫れ民心を統率すべき人生觀又は宗敎觀に至ては、從來とは著く面目を異にせるものにはあらざるか。從來の人生觀は餘りに淺薄に、餘りに幼稚に、餘りに諦め主義に偏した人類の小さな知情て、さながら神性の精髓に徹したかの如く思ひなせる

幼稚な人生觀に過ぎない。宇宙や神や、然かく見すかされるやうな單純なものではない、宇宙の精髓は永遠に神秘の衣につゝまれた大不可思議である、人生の一切の苦樂と矛盾とさながら大海の塵埃の如く、其の中にアブソルブさるべき大秘密である。人生は單に喜樂に滿てる世界にあらず、むしろ無量無限の矛盾撞着を切り開いて行く苦鬪の世界である、風軟に波靜な穩な日和もあらう、暴風怒濤はいつ寄せ來たるやも圖るべからざる不安な世界である。故に將來の新人生觀は、從來の淺薄な樂天主義―十九世紀の西歐文明に共通な見識に類せる快樂主義とは甚しく其の面目を異にし、著く沈痛莊嚴な精神を含み、深く心靈の悲調に逼るが如き趣が無ければならぬ。其の全體の內容が、從來の人生觀の餘りに單純透明なるに反して、複雜幽玄、著く神秘的性質を帶ぶべきは勿論であらう。東洋の民心が夙に直覺的に、捕へ得たる一種幽玄の意味が、從來の西洋式人生觀に加味さるゝのではあるまいか。我等は此の點に於て、露國の最近代思潮は或は二十世紀の新精神に重大な意義を附するものにあらずやと疑ふ。露國の最近代思潮は、須べからく吾人の注意すべき大疑問であらう。それは兎もあれ要するに淺薄の二字を以て蔽はるべき十九世紀文明を解脱して、內的生命の意義を深うするが二十世紀の新精神であらう。此の意味に於て、十九世紀末の新ロマンチシズムは、二十世紀的新精神の前驅者と見るべきもの也。

（完）

家畜

島崎藤村

短い鼠色の毛と、不恰好に垂下つた耳と、それから狐のやうな目付とを持つて、世に生れて來たのが、第一彼の不幸である。すべて家養と名のついた動物はそれ〳〵愛らしい性質を具へて居て、平和な感想を人に與へるものであるが、それが彼には見當らない。一點彼の相貌のうちには人に好かれさうなところが無い。家畜となるべき資格が全然彼には缺けて居るのである。自然の結果として、彼は捨てられた。

しかし、彼も犬だ。獨立の出來ない動物だ。飼養されるやうに傳はり傳はつて來た親讓りの習慣を離れて、遠い先祖の野性に逆戻りするといふことは出來ない。そこで彼は適當な人家を捜し始めたのである。

斯ういふ厄介な代物が植木屋の金さんの地内へ紛れ込んだ時は、丁度新しい板葺の借屋が出來上つたばかりのところであつた。そこは大久保の村路に添ふて建てられて、裏庭から直に表通りの方へ潜り抜けられるやうな位置に在る。床は高く、土も乾いて居た。加に斯借屋と隣の家との垣根際には狹く暗い空

地があつて、いざと言へば飛込んで身を隱すことも出來る。早速彼は斯床下を占領した。

差當り困難なのは食ひ物にありつくことである。この屋敷内には、まだ外に同じやうな借屋が二軒あつて、金さんの家族が住む農家風の母屋を一緒にすれば、都合四軒に成る。その家々が枝ぶりの好い樹木を隔てゝ互に相對になつて居た。鋭い鼻は先づ彼に勝手口の方角を敎へた。もとより饑じくて居る彼のこと。選擇なぞする暇は無い、剝捨てた果實の皮、冷く臭氣のある汁、腐敗した總菜の殘物——其他、食へるものは何でも食つた。まだ其でも足りない時には、庭の隅にある芥溜の中までも嗅ぎ尋ねて、漁れるかぎりを漁り盡した。井戸端には汚れた足袋なぞが水に漬け浸してある。彼は喜んで其盥から飮んだ。

新しい借屋の庭には大分年數の經つた木犀があつた。彼はその樹蔭を自分の休息の場處と定めて、葉越しに日のあたつた土の上へ前足を投出しては、息を吐いたり、痒いところを搔いたりした。夜になると、占領地へ還つて行つて、床下にある炭俵の上に寢た。大きな洗濯盥の中へも入つて見た。どうかすると勝手の下の方まで深く潛り込んで、暖い炭箱の炭の中に眠つた。

先づ斯ういふ調子で始めた。

金さんの家には茶と白の斑でポチといふ犬が飼養されて居たが、彼に好意を表したのは斯威勢の好いポチばかりであつた。ポチは客を喜ぶ方の性質と見えて、慇懃に彼の傍へ寄つて來て、尻を嗅いだり、土を搔いたりした。彼はまた其の返禮として汚れた尻尾を振つて見せた。

しかし、金さんを始め屋敷内に住む人々は、このポチのやうに彼を迎へない。『同じ畜生でも容姿の悪いものは損てすなあ』とか、『もう少許どうかいふ犬だと飼つて遣つても可いが』とか、意味の解らないことを言ひ合つて、誰が命けるともなく彼を『ちび犬』といふ名にして了つた。この四軒の家には一人づゝ叔母さんなる人があつて、それが主婦の呼名であるが、その叔母さん連ばかりてなく、小供等てすら彼を笑ひ憎んて、『ちび犬、ちび犬』と嘲弄の語氣を發するのてあつた。叔父さん達と來ては更に恐しい。彼に少許の油斷てもあると、直に叔父さん達は追駈けて來る。種々なものが彼の身の周圍へ飛んて來た。石も飛んて來た。土の塊も飛んて來た。鐵の火箸も飛んて來た。あるときは太い戸締りの棒が飛んて來て、いやと言ふほど左の後足の股を擲つた。

次第に彼は人々の心を了解したのてある。意味ありげな目付、物を拾ふやうな腰付、怒つた肩、噛〆めた口唇——すべて、彼に對して表れる人々の感情は、丁度獵師のそれと同じやうな、深い敵意を示したものてあつた。ある日なぞは金さんの勝手口へ追詰められて、『繩を持つて來い——繩、繩』と呼び騷ぐ人々の中を何處をどう抉開けたか無理やりに潜り抜けて了つたこともあつた。其時は彼も死物狂ひて、盆栽を置並べた庭から植木室の方へ行つて、小屋を廻つて、それから縁日向の花物を作る畠へ落ち延びた。

『とう〳〵逃しちやつた』。叔父さんの一人が忌々しさうに言つた。

『どうも彼畜生には困りましたなあ』。

と金さんも答へて、心の好さそうな聲を出して笑つた。

斯ういふ目に逢つたことは一度や二度では無かつた。しかし其樣なことで屈するやうな彼ではない。こゝは俺の領分だ、と言はぬばかりの顏付して、平氣で食ひ物を漁つて歩く。大膽な彼は新しい借家の臺所へ踏込み、土足でもつてどし〳〵椽側へも上り、日あたりの好い板の間に横になることもある。彼はまた履捨てゝある庭下駄の鼻緒を嚙切り、叔母さんが洗濯した物を泥塗れにして戯れた。彼は人間の小供などを何とも思つて居ない。そこの家の女の兒に孝ちやんといふのがあつて、よく大きな下駄を引摺り乍ら、庭へ出て遊ぶのを樂みにして居たが、彼は慰み半分に斯見を追ひ廻した。時とすると孝ちやんは甘さうなパンを持つて居て、『ちび犬――やい、やい』と見せびらかすことがある。それと見た彼は直に行つて『ワン』と飛付く。『あれ、ちび犬がいけません』。孝ちやんが救ひを求める言葉は毎時も是だ。すると叔母さんが飛んで出て來て、『孝ちやん、逃げてお出――早く。何故そんな大きな下駄を履くんですねえ』。斯う言つて呼ぶ頃は、もう孝ちやんは何にも持つて居ない。彼は泣叫ぶ孝ちやんの手からパンを奪取つて、そこで人間の食ふ菓子にありつく。斯ういふ時には、きまりて赤い舌を出して、ぺろりと鼻の端を舐めた。

とは言ふものゝ、彼の爲ることは善いも惡いも無かつた。それはこの屋敷内の叔父さんや叔母さんなどの言ふことゝて、全く彼の知らない話であつた。彼の眼中には賢い人間の製造した禮儀も無ければ作法も無い。彼はたゞ犬である。自分の爲ることが人々に對して無禮に當るかどうか、そんなことには一向頓

着なく、たゞ自然の命ずるが儘に振舞ふといふ一匹の憐むべき動物に過ぎないのである。寒い、食物の無い、悲酸な一冬は斯ういふ出て行けがしの待遇を受け乍ら過ぎた。よく彼は餓え死なゝかつたやうなものだ。毎朝大久保を通る乞食の僧侶も當節は容易に貰ひが無いと言ふ。子供を連れて來る賤しげな女などと來ては、『御無用』とか『出ませんよ』とか言つて多く斷られる。人間ですら斯通りであるのに、まして、無藝無能の動物、何處へ行つても持餘しものにされる彼のやうな犬に、誰が一抔の殘飯を振舞はう。彼は遠く雪の中を捜して歩いて、道に落ちて居るものは蜜柑の皮でも何でも拾つて食つた。

やがて春が來て、霜の溶ける頃には、急に彼も成長したやうに見えた。金さんのところのポチを始め、湯屋の黑、材木屋の赤、其他近所の植木屋に飼はれて居る恐しい大きな、犬までも、彼の周圍に集つて來た。彼の行くところへは、必と二匹や三匹の犬の隨いて來ないことはない。

さあ、例の木犀の蔭などは、私語くやうな、媚びるやうな、深い犬の呻吟でもつて溢れるばかりに成つた。

井戸端へ手桶を提げて來た叔母さんの一人が斯光景を眺めて、

『まあ、ちび犬は牝犬でしたかねえ。私は薩張氣が付きませんでしたよ』。

と言ふと、新しい借屋の叔母さんも丁度そこに居合せて、

『えゝ、私も』。

と二人で大笑ひをした。

彼を追出さなければ不可、といふ論が、それから引續いて金さんの屋敷内に持上つた。尤も四軒の家族のなかで、叔父さん達、叔母さん達、と斯う說が二派に別れた。叔母さん派の主張するところによると、あのちび犬が今迄のやうなら格別、懷妊にでもなららものなら可愛さうだと言ふ。さすがに經驗のある人達は、身に引比べて、思ひやるのであらう。其はまあ左樣かも知れないが、もしあの上に子供でも殖えたら、それこそ大變だ。斯う叔父さん派は主張する。全く彼の將來といふことに就いては、それを頭痛に病まないものは無かつたのである。

彼は何にも知らなかつた。

ある日、一臺の車が金さんの門前で停つた。その車には蓋の無い箱のやうなものが造り着けてあつて、穢い編蓆で覆ふてある。鋭い彼の鼻は直に斯車が何であるかを嗅ぎ知つた。制服を着た巡査の後に隨いて、烏散臭い男が門から入つて來た頃は、彼はもう其樣な危いところにまご〳〵して居なかつた。ポチや、黑や、其他の犬は一時に聲を揚げて騷ぎ始めた。さあ、叔父さん達も、叔母さん達も、村中のものは總出になつた。

『母さん、犬殺しよ』。

と孝ちやんは母親の背後に隱れた。

人々はあちこちと庭の內を馳け步いた。盆栽に灑ぐことを每日の稼業にして居る金さんの娘は、柄杓を持つた儘で表へ飛出して見る。水彩の寫生を學んで居た中學生は、三脚を振廻し乍ら、裏の方へ追つて

行く。それ彼方へ逃げた、それ是方へ逃げた――その混雑ばかりでも一通りでは無い。

「必と、ちび犬は殺されてよ」。

と復た孝ちやんは震へ乍ら言つて居た。

とう〳〵彼は逃げ了せたのである。太い樫の木の棒を提げた男は、連の者に手を振つて見せた。『駄目、駄目』と巡査も門を出て笑つた。二人の犬殺しは失望したやうな顔付をして、がら〳〵空車を引いて行つた。

兎も角も彼は生命を拾つた。それから次第に彼の乳房も大きくなつて來た。しかし彼の眼は一層不安の光を帶びるやうに成つた。今は一身を護るばかりでなく、胎内の子供をも護らなければならぬ。斯うなると樂しい木犀の樹蔭も決して安住の場處では無い。濕つて心地の好い庭土の上に横はり乍ら、暫時苦しさうな息を吐いて居る時でも、人の影を見れば、直に彼は立つ。一瞬たりとも彼は油斷をすることが出來なくなつた。不安な彼の眼には人間ほど殘酷に映ずるものは無かつたのである。

是程に懼れて居ながら、まだそれでも彼は『人家』といふものを離れることが出來ない。他の野獸と同じやうに、遠く森の方へ走つて行つて、青々とした草木の中かなんかで兒を産んだならば、嘸かし彼にとつては安心なことであらう。と斯う他目には思はれるものゝ、實際、彼は親譲りの持前を奈何することも出來ないのであつた。

牝犬としてのつとめを果したのは、丁度六月の初のことであつた。彼は金さんの植木室で四匹の兒犬を

産落した。そのうち、二匹はポチと同じ茶と白とのうつくしい斑で、一匹は全く黒かつた。他の一匹はまた彼に酷く似た曖昧な鼠色であつた。

嗚呼、生れて始めて彼が人の笑顔を眺めたのは、其出産の朝である。生れて始めて食物らしい食物にありついたのも、其出産の朝である。

「ちび犬――來い、來い、來い」。

と金さんのところの叔母さんは其日から勝手口の障子を開けて呼ぶやうになつた。



一燈錄

綱島梁川

覺者に對する信

大いなる覺者は、大河の百川を集めて海に朝宗するが如く、群生を率ゐて至高者に趨向す。是れ實に心靈界の一大事實にあらずや。

覺者を信ずるものは幸なるかな。覺者を信ずるものは覺者その人の偉大を己れの偉大となすことを得べければなり。彼等は基督の如く神を見ることを得ずとも悲しまず、彼等は基督を信ずることによりて、基督の神を己れの有となすことを得べければなり。彼等は釋迦の如く正覺を取ることを得ずとも傷まず。彼等は釋迦を信ずることによりて、釋迦の正覺を己れの有となすことを得べければなり。

信に二重の偉大あり。信ずるには非常の謙虚を要し、洞觀を要し、勇氣を要す。これ第一の偉大也。信

ずるものは、信その者によりて覺者を得、神を得、永生を得、これ第二の偉大也。人目枯れ〳〵なる蓬が宿にも、天上の月光限なくさし入り、眼に一丁字なき田夫野人にも、久遠の法輪、雷の如く轉ず。彼等は世の所謂聰明叡智を賴まず。さらば何をか恃む、彼等に唯だ一念覺者を信ずるの信あり、彼れ等はこの一信念を抱きて則ち神に之き、神子の自覺に之く。

それ信ずる者のいと小ひさきは、信せざる者のいと大いなるよりも大いなり。彼等は皆恩寵の子也、以て天地の間を濶步すべし。

ニュートンや、カントや、沙翁や、豐太閤や、彼等星の如き幾多の偉人は、あの〳〵その特有の天才、特有の偉大を挾んで、我等を壓し來たる。我等が地上寸を抽くの靑は、彼等が萬古參天の木陰に庇はれて、見る影もなく朽葉の底に埋もれ果てんとす。人生こゝに苦痛煩悶なきを得んや。然れども哲人は敎へて曰はく、

"If I feel overshadowed and outdone by great neighbours, I can yet love; I still receive; and he that loves makes his own the grandeur he loves."

何等高調の福音ぞや。俯してわが弱小を悲しまんよりは、仰いて他の高大を包容せよ。他が如何なる高大を擁して當面に我れを壓し來たるとも、我れは尙ほ彼れを愛することを得るなり、我れは尙ほ彼れを容るゝことを得るなり。人生こゝに涙なきにあらずといへども、是くの如くして他の偉大は、やがて我等が偉大となるなり。嗚呼何等廓然たる大公の心ぞ。

愛あり信ありて、人はまた空しく地上の塵たらず、愛あり信ありて我儕は克く自己を庸常なる自然生活、現實生活以上に挺きて、永生のしらべ高き一境に聯なるを得べし。世の智者學者は、動もすれば、われとわが驕慢なる心の入江に閉ぢ籠もりて、生命の潮路、あさましう枯れ果つるならひなれど、愛あり信あるものは、無私謙讓の心常に浩然として打開きたるが故に、神の恩の溫潮、千波萬波、洋々として拍ち寄せ、流れ來たり、咽び入る。己れをさゝげて歸命せよ、光明おのづから脚下に湧かん、我を法に投入せよ、我よく法の王たらん。

是くの如くして世の一切の偉人覺者は、亦實に吾が「靈魂の一斷片」たり。覺者を信じ、偉人を納るゝものは、やがて又覺者也、偉人也

靑天に向つて開く牡丹かな

一句誦し來たつて、高朗、淨潔、超邁、眞實の韻、錯落として心絃に落ち來たる。正に見る、花は直ちに滿心豐麗の思ひを囑き、空は徐ろに春容大雅の象を展べたるを。又思ふ、花に、巍々として彼蒼と語るの意氣あり、空に、俯して就き泛く應ずる引接攝護の慈光あるを。而して落々たる心事を打ち出だして天地の大靈と語る大丈夫の面目、またおのづから個中の景に映じ來たる。一句再誦して、空も徒らに高からず、花も空しく卑からず。

人格の不朽

名手入神の高調は、一々その手慣れの樂器に刻まれて、復た容易に消えじとぞ聞く。われら生まれて神子の權威に立てるもの、當におのが姿の一ふしを天地の大意識に刻むの意氣あるべき也。物質の器、尙ほ且つ感應の媒たり、ましても火よりも早く屈折し、水よりも軟かに流動し、電氣、磁氣、顯氣の一切をして、その萬一を髣髴せしむる能はざる無限の撓揉性、擴充性、融會性を有する心靈光流の世界に於いてをや。ストアの古哲人は以爲へらく、「賢者が一指頭の伸張は尙ほ能く全賢者を幸ひす」と。易に曰はく、「君子其の室に居つて其の言を出だす、善なれば則ち千里の外之れに應ず、況んや其の邇きものをや、其の室に居つて其の言を出だす、不善なれば則ち千里の外之れに違ふ、況んや其の邇きものをや、(略)言行は君子の天地を動かす所以也」と。吾人の一言一行は徑ちに感應の波紋を天地の人格に及ぼすと知らずや。

吾人の人格を天地の人地に刻む、之れを稱して神に連なるの生といふ。神に連なるとは神の中に我れを沒了するの謂ひにあらずして、わが獨自一己の面目を保持して、さながらに神子一體の靈交に入るの消息をいふ。吾人の人格は春雪の波上に落つるやがて一昧の實在海に歸入するが如きものにあらず。吾人の一死は、神そのものに解體し斷滅し去るの謂ひにあらずして、神の中に、神と偕に、神子としての本性を益々旺んに光揚するの謂ひなり。吾人獨自の人格は、永劫無意義に歸せず、神はわれらの人格を敬重し、擁護し、發展せしめ給ふ。神は吾等最微なる一人をだに常に最高の天使群もて護らせ給ふといふにあらずや。夫れ吾等の人格は神の大愛の產む所なり。

吾人の生命は神の大生命と錯はり、吾人の人格は神の大人格と即して、道交應化の微妙のしらべ永しへに盡きざるもの、やがて實相如實の風光にあらずや。されば吾人は永劫神にあらず、神とならず、又實に神たるを希はず、吾人衷心の願ひは、永劫神之子として、神の大生命の中に參差として生ひ茂り、永劫神と偕に天地人生の經綸に參せんと也。こゝに無限の活動と謙遜と光榮とあり。

河は流れて海に入る。千里萬里、蕩として跡なし。わが所謂神に連なる永劫の生は、これと異なり、若し大海(おほうみ)の懷に瀉ぎ出でて、その回抱の甘美を十二分に味ひながら、而かも尚ほおのが姿の詐らぬ一ふしを無窮に流れ〳〵て休まざるの河あらば、われは之れを眞個永生の河とたゝへんかな。

信仰即義の解

マルチン、ルーテルが、一代法門の要義となしたる信仰即義、言ひ換ふれば、吾人は信仰によりてのみ義とせらるてふ一提唱は、少しく宗教的經驗を有するものゝ、衷心唱和の聲を放つ不壞の眞理なるべし。吾等は德行や事業や外形の效績によりて神に喜ばるゝの價値あるなし。吾等が自是の一念は、神の最も嫌惡したまふ所なり。吾等が神に捧ぐるものは、人界の光譽とする德行若しくは事業にあらずして、唯だ濺ぎ盡くせぬわれらが罪障の涙のみ、悔悟のみ、懺悔のみ、感謝のみ、至心の信樂のみ、「碎けたるこゝろ」のみ。一切の智を去り、德を棄て、矜高自大の思ひを葬り盡くしたる赤子天眞の絕對的歸命の一念、是れ實に吾人が救を全うすべき唯一の生命(いのち)の綱なり。

さはれ「信仰即義」の謂ふ所信仰は、おのづから吾人の正意善業の新動力を含むの信仰たらざるべからず、語を切にして言へば、謂ふ所信仰そのものが、既に道德的新生を意味する底の信仰たらざるべからず。隨うて又如是信を獲得せる吾人は、おのづからこれ建德の人、愛他の人たらざるべからず。口舌三昧の稱名や、外形的贖罪の信仰は、信仰の化石もしくは皮殼にして、信仰そのものにあらず。活潑なる信仰は常に道德的高調を伴ふ、そは束の間に逝きゆく情感の空花にあらずして、必ずや恒久堅實なる德行の碩果を結ぶべきものたり。而して是くの如きは實に吾人の區々作爲を籍らざる神恩自然の流行也、氣化也、醞釀也。德行を兼ねざる信仰の言ふに足らざるは「雅各書」の著者、既にこれを道破せり。是故に知んぬ、ルーテルが從來の自力的德業主義に對して他力的信仰主義を掲げ出だしたるは、(初代基督敎の信仰に立ち還りて)一面よりいへば、一段高き意義に於ける純德業主義を提唱したるものに外ならざるを。彼れが信仰主義は、むしろ舊道德を更に內化し、淨化し、靈化したるものといふを當たれりとすべし。如是の信仰は、單に客觀的、形式的に基督の贖罪を信ずるの謂ひにあらずして、寧ろ深く自ら內に醒めて、神子無價の光明を發揮し、吾れみづから基督の道德的眞精神を體得して、活氣堂々、ルーテル彼れみづからの所謂「吾れは基督也」の深意識に觸れたるの謂ひならざるべからず。要之、ルーテルの所謂信仰主義は、直ちに吾人が正意善業の道德的活源頭に立ち還つて天下に叫びたるもの也。正解し來たれば、彼れが標榜したる信仰主義の位置や、斷じて低しといふべからず。天下の人心、一たびは惕然としてこの偉大なる新聲に目醒めたり。

ボーロは「義人なし、一人もあるなし、人皆既に罪を犯したれば神より榮を受くるに足らず、唯だキリスト、イエスの贖に頼りて神の恩を受け、功なくして義とせらるゝ也」といひ、『阿彌陀經』には一切定散の諸行を少善根福德因緣なりと訶し去つて、佛陀の名號を唱ふるをのみ絕對の大善、無限の功德なりとし、親鸞上人も亦「彌陀の本願には老少善惡の人をえらばれず、たゞ信心を要とすと知るべし」と、言へり。これらの語、動もすれば人の誤解を招くの虞れありといへども、少しく宗教的實驗に照らし來たれば、世にも是くの如く思ひ切つたる徹底親切の語はあらず、何となれば、こゝに謂ふ稱名や信心は、謂ふ所の世俗の道德と乖戾背馳するものにあらずして、寧ろ其の因りて出づる活源頭を指斥するものなれば也、一切の德行善業を活かし、高うする一大淨化力、一大靈化力を指すものなれば也。ボーロの所謂「功なくして義とせらるゝ」キリストの贖を信ずる信そのものが、取りも直さず吾人の衷情より湧き出づる偉大無私なる道德的活力にあらずして何ぞや。「惡人正機」を說くの淨土眞宗も、尙ほ其の惡人の中心よりの廻心歸入を以て救濟の根本條件とはする也。

さあれ、如是信仰主義にして、若し吾人の正意善業のおのづからなる活源頭たらざるに至らんか、かゝるは既に死形式に墮ちたるもの、信仰の累、これより太甚しきはなし。かくして羅馬舊教の自是主義若しくは外形的德業主義に反抗して、起つて內心の自由、主觀の獨立、個人の判斷を唱道せるルーテルの純信仰主義も、その徒らに經典の言文、信條をのみ膠守して、贖罪の一義を說かんとするに至りては、是れ取りも直さず他が形式主義、他律主義の舊套を反覆せるもの、乃ち人心要求の波瀾こゝに復び揚か

り、盪き、激して、新主觀主義、信仰主義の旗幟隨處に飜りぬ。曰はく理性の光に特殊の重さを措くソシニアン派、曰はく内心端的の直證を說く神秘說、曰はく實行體得これ唯一の宗敎也と叫ぶ敬虔派。ルーテルの「信仰即義」の標榜と東西同調の宗敎的精神をもて相照らせるわが法然親鸞の偉大純眞なる他力念佛主義も、そのやがて形式化、他律化して、口頭の稱名三昧よく安養淨土を贏ち得べしとする末流の頽唐に至りては、宗敎の眞生命旣に業に逝きたり。

信仰の人願はくは舊日の人となる勿れ。吾人をして常に因襲の舊夢を「振り落として」新人の新衣を著けしめよ、新生の人即ち信仰の人、而して信仰の人即ち德輝の人にあらずや。

祈れよされど求めざれ

われら毎事に祈るべし、謝すべし。さはれ何事をも神より必期せざれ。祈れよされど求めざれ、唯だ信じて一切を神に打ち任せよ。われらの祈りを聽くと聽かざると、一に繫りて神の意(こゝろ)にあり。吾等。パンを求めて神は、石を與へ給ふとあるべく、吾等卵を求めて神は蛇を與へ給ふとあるべし。快樂を希うて苦痛來たり、光明を望んで闇黑到る。神は屢々吾等が熱涙の願ひをも嘲りの風と散らし、吾等が生死の歎ぎをも忘却の水と流し給ふ。吾等は空しく嵐に向かつて索め、吾等は徒らに影を趁うて走る。見よ、神は屢々千萬仞の巖と壁立して、礫(つぶて)なすわれらがしげき祈りをも空しく寂寞たる反響と歸せしめ給ふにあらずや。嗚呼是れ吾等の堪へ得べき所なる乎。

打數くものよ。爾の小を以て漫りに神の大を測ると勿れ。神は吾等が祈り求むるものをば吾等よりも尙ほ深く明かに知り給ふ。あらず。吾等の祈りそのものが、既に大慈招喚の詔勅にあらずや、大悲本願の迴向にあらずや。されば思ひ累ふと勿れ、惑ひ疑ふと勿れ、心安かれ、雄々しかれ、爾の「萎えたる手を强うし、弱りたる膝を健かにせよ」。かゝる試みの場合こそ、吾等神之子たるものが、正に古人と共に「彼れ我れを殺すとも我れは彼れに依り賴まん」てふ浩々の一氣、徑ちに天地に充塞する大信念を搐揮一番すべき好機會にあらずや。

神若し吾れを殺し給はん乎、これ殺さるゝとがわか窮極の善たり祝福たり、又實に善たり祝福たらざるべからざる也。一事、炳として日星の如し。而して如是堅信の人にして、始めて能く神の奧に吾が祈りを聽き給はざりしは、其の眞に深く之れを聽き給ふ所以の理を心證默契すべき也。

信念と因果

一切に因果の法則行はるといふもこれ亦要するに一個の信念にして、嚴正にいふ經驗的事實にはあらず、されば、こゝに若し、我れ能く因果の鎖を破りて、絕對に事相の端を啓き、第一事實を剏建すべしと信ずるものあらんか、前者の信は以て後者の信を破するに足らざる也。

信念に含まれたる可能力は、一境深く神秘の非想天とつらなりて、吾人の經驗律を以てしては到底窺測すべからざるものあるなり。烈々たる信念の超發する所、基督の所謂山をも移して海に入らしむべし。

偉大なる信念の人は、眼に光耀の相を觀じ、耳に默示の聲を聽く。こゝに「理外の理」あり、「神的論理」(Divine logic)あり。かるが故に釋尊は生死因果の繫縛を踏斷して最勝法王の正覺に座し、基督は自己がアブラハムの在らざりし前より在りきてふ久遠神子の權威を宣したり。彼等は實に時空の形式を脚下に碎き、因果の範疇を眼中に空じたる靈智的大自在者也。

古ストアの學者等は、我れ能く吐納を窒して自殺するを得べしと信じて、實にしかなし得たりといふ。信念の可能力に制限を附すると勿れ、信念の充實發揮には不可測の容量あり。我れ仁を欲すれば仁こゝに臻ると信ずるものは、聖域彼れを去ると遠からざるべく、吾れは神之子也と信ずるものは、天父の慈眼不斷に彼れの光たり。大いなる信念を發揮するものは大人にして、小なる信念を發揮するものは小人也。吾人をして物質的因果の法則を以て漫りに信念の世界を律せしむると勿れ。因果は常に信念を左右すると能はず、信念屢々因果を左右す。

友をおもふ

過ぐる幾日のつれ〴〵を慰めたる枕頭の薔薇花、今は名殘なく凋謝したれど、花を贈れるあるじの友の情けの花は、凋まず朽ちず、芳烈のかをりいよ〳〵高う薫じたり。

人生友なきは最大なる不幸の一也。何等不思議なる恩寵ぞ、神は吾れに法の契りの淺からぬ友、幾個を送りたまうて、蕭條たるわが病骨に、いのちの綠を賦したまふ。暮れゆく秋の一室の中にして、我れを

して優々獨り春日の氣象あらしむるものは、友の與ふる溫情の賜物ならずや。壁上に、楣間に、枕頭に、床上に、はた書硯に、わが友愛の馨りは脉々として波うち動くなり。吾れは峯上(をのへ)の一本松(ひともとまつ)の、孤高の風を侘ぶる身にしあれど、恩寵の天日豐かに照らし、友愛の花野美くしう咲き遶りぬ。かくて感謝のひと日〳〵あり。

法友は作るべからず、作る能はず、唯だ人生の悲哀の、深奥無限なるものありて、彼此一氣相通ずる所あるや、則ち相慕ひ相照らして、與に偕に永生の首途に上入る。

懷かしさは未見の法の友にもあるかな。彼れ朝たにその思ひをわが枕頭に運べば、吾れ夕べにわが懷ひを彼れが坐間に致す。我等が感應相思の前には、時空の障壁も碎けたり。廓然たる無礙の世界也、空靈の國也。

われ一日(ひとひ)、枕頭凋落の花を見て、坐ろに友情の不朽を懷ふ。(あそ日のおもひ)



入郷記

正岡猶一

九月三十日

とかく我が航海は何時も僥倖のみ多し。今宵も亦た珍らしき和なり。船客皆眠に就き、我獨り醒む、いざ然ば此記を書かざる可からず。

先づ一昨日の事より大略を記し置んに、朝、友の二三に送られて新橋より乘車、薄暮名古屋に着し一泊す。此處にて道中見物記を認めて大島君に送りぬ。

昨朝名古屋を發して京都に下車。井上君を訪ひ久ぶりにて快談痛論す。彼、何が故に歸國するかと問ふ。

ありのまゝを語りぬ。彼も亦涙を流して、止めもせず、すゝめもせず、只だ「然るか」とのみ答へ、嘆息を洩しぬ、彼は何時ながら我に對して杞憂を懷き居るなり。それも可なり。

今日午前、大島君に一報す、要は井上と快談したる模樣のみ。井上の曰く、大阪河口まで送らんと、

我之れを辭しぬ。雨降り、さなきだに憂多き我心の、更に沈める樣を見て、强て今一日の滯在をすゝめたれどもこれ亦辭しぬ。離別にのぞみて、我例の壺を示したるに彼泣く。彼曰く、「君は悲哀の人として此世に出て來たりしが如し」、我曰く、「或は然らん」と。

京都より汽車の中にて、我井上の語を思ひ出し、樣々に考がへ始めぬ、母の事、祖母の事、而して、我が思想感情の傾向などを思ひつゞけて、げに井上の語は當れりと感じ、一度は甚く心屈し、氣沈みたれども、亦た靜かに前途の希望を想起し來り、僅かに愁雲を一掃し得たり。隣席の老人と語りて頗る發明する所ありたれども、そは他日詳しく記す可し。老人は長野の人、我は「長野の老人」てふ稱呼を以て記憶し置かん、渠は今、何處に在ることならん、懷しきかな。

* * * * *

夜はいよ〳〵更け、海は益々穩かなり、機關の響、遠きが如く近きが如く聞ゆ、水夫の欠呻の聲、彼方に聞ゆ、何人ぞ、甲板の上を靴曳づりて步むは、彼も眠り難き人の一個か、我心はさえ行くばかりなり。

* * * * *

此船に乘り込みしは今日午後一時なり、明日は又た此船中に暮すとかと思へば、甚だもどかしく感ず。されど明後日は我が故鄕に在る可し。嗚呼我が故鄕！二十年前一度、別れて今はじめて會んとする我が故鄕！明後日は其山河我が眼前に現はれ來るなり、祖母樣にお目にかゝるも明後日なり、すべてが明後

日なり、笑ふも泣くも。

嗚呼故鄉！來る可き幾歳月の間、我は爾の懷をかるべし、爾我に何を示し、何を語り、何を敎ゆるぞ。

いざ我も亦甲板に出て晴れわたる大空の星を仰がんか。

○○○○

十月一日

「お身は何處まで」

これ彼女が問ひかけし言葉なり。

「某町まで」と我は答へぬ

彼女は驚ける樣にて、自己も亦「某町に往く者なるを告げ且つ「某町」は則ち自己の故鄉にして今は歸路なる由を語りぬ、而して彼女は更に問ひぬ、

「某町にゆき玉ふは何の用事ぞ」

我は事もなげに「歸省するなり」と答へければ、彼女は俗に所謂る頭の毛の尖から足の爪の尖まで眺めつゝ、かゝる男は未だ嘗て某町には見當らざりしがと訝かるものゝ如し。聞けば此の老女生れ落ちてより五十幾年、某町以外には一步も踏み出したることなく、此度近隣の隱居連數人と、初めて京大阪の見物に出懸けて、今は其歸るさなりとぞ。故にこの老女は某町の事をば恰も吾家の內の如く委しく知りつ。何町には誰々が居て、何山には狐が幾匹棲むといふことまで承知せるが如し。我歸省するなりと聞きて、

斯くも驚きたるは無理もあらじ。

暫時諦視たる後

「お宅は何處ぞ」と訪ねぬ。

「二十年目に歸るなり、さればよくは樣子も知らねど、家は城山の麓、山際といふ處にありとか、君は上村といふ家を知らずや。」

彼女はこの答を聞て、愕然と驚きたるまゝ、愈々訝かしげに我を眺めつ、忍びやかに、

「然らば君は潔樣にては在さずや、」

との問に我も流石に驚きぬ。神に感謝す、神は我未だ我古郷に足を入れざる前に、既にこの愉快なる朋友を我に紹介したまひぬ。この老女名は村田きみ、某町の町外れに住む者なる由、年若き頃は、屢々吾家に往來せりとぞ。我生れて二年目、一家を擧げて上京したる其時の樣子をも彼女は知れり。彼女の曰く、其時親しく知人を招かれて、離別の宴を開かれし折は、我も亦席に連なるを得たり。實に憶へば既に二十年の古き昔なるよと老の脆き涙は我をして又暗涙を呑ましめぬ。

五年前祖母樣のみ歸國して、山際の舊宅に住みたまひし以來、村田老女は屢々訪問れて今昔を語り合ひなどせし由、吾母今春彼世に逝かれし事をも老女はとくに知り居たり、又吾身の事は祖母樣より委しく聞きて、幾度か噂せしともいふ。されど今秋我母の白骨を小さき壺に納めて、故山に歸り來るとは夢にも想はざりしと語りぬ。

上村といふ家を知らずやと問はれし刹那に君が顔の、君が母の面影に生寫しなるを感じぬ、其面影をのみ土産として古郷に歸り給ふとは如何なる御不運ぞや、祖母樣の御嘆きの程も想ひやらる、と語りて老女は泣きぬ。

彼女、歳は五十七といふ。さらば、亡き吾母より七歳老いて吾父より二歳若し。其天禀甚だ淡白なり、眞摯なり、正直なりと評するの外、未だ其特質を見出す能はず。

若し一夜、或は雨ふる夜、彼女と相對して、其懷舊談、其經歷談或は誰彼の身の上の樣々の物語りなど聞く事を得ば何等の幸福ぞ、冬の夜屋外の風雨を聽きつゝ、暖爐の前に安樂椅子を据えて、古き旅行記を讀むてふ逸樂とても、よもや我がこの幸福には優るまじと思ひぬ。

* * * * *

明日は故山に在るべし。

吾が故山果して如何の樣ぞ。彼女の曰く、甚だ狹き所なれば、東京に住み馴れたる御身にはいと窮屈なる可しと。彼女誤れり月の光、星の影、旭日輝き夕陽眩き所、人の住む所、社會の成立つ所、我に於て何の廣狹あらん。今日吾船ある島の沖を航する時、其島の小蔭に一個の茅屋を見たり、青松家の後に並び、白砂前に帶の如く、而して磯打つ波の音は此家に住む人の生活の變化なき調べと相和するものゝ如し。吾心怪しく踊りぬ。嗚呼天の一方、地の一角、人あらば我與に語らん、我與に住まん。

* * * * *

故山果して如何の様ぞ、彼女の曰く、町は古びて穢なく、路は細く、礫多し、京大阪に較ぶべくもあらず、況んや思ふに東京に住みたまひし御身に在りては……と。笑ふべし、彼女は京大阪に惚れこみたり、其所謂狹き穢き巷、其細くして礫多き路、我に在りて如何に様々の空想の種なるぞ。我に空想の翼を有す、恍惚の際、屢々靑煙霞の如き翼を搏つて、世界の各地を見舞ひぬ、嘗て月光に睡るテームス河畔の大都を下瞰したり、嘗て驛鈴を想ふてアラビヤの舊都に入りぬ、見馴れぬ生活の様、異様の衣服、言語、家屋、時としては其山河の光景の異趣、奇觀、而も等しく我々人間の戀、怨、悲、苦、唱歌、涕泣、夢想し來りて吾心の踊りし事幾度ぞ。

而して今吾が故山、吾が現の如き夢、夢は吾が現とならんとす、老女の所謂低き穢なき屋根の並びて、或は白堊の剝げ落ちたる倉に夕陽の眞向に射したる所、其處に老人、小兒、男と女と、犬と猫と鼠と捿むを思へば、これ實に吾が夢の現に化したるにあらずや。

明日は故山に在るべし。否、今日は故山に在るべし。今は十月二日の午前二時なればなり。

然れど母よ、孤兒今獨り故山に歸る、寧ろ悲痛の極みに候はずや、幽魂在しまさば我に伴ひ給へ。

○○○○

十月二日。

我今此處に坐す、然り東都に非らず、船中に非らず、吾家の一室に坐するなり、此室は嘗て吾父の書齋なりし、祖父の書齋なりし、而して實に祖父の祖父の書齋なりし、而して我今此處に坐す。

故郷は夢ならぬ誠となりて我を取り圍みぬ。

祖母は果して泣き、あらゆる繰り言を以て我に訴へ給ひぬ、我亦只泣くのみ、慰むる言葉を知らず。祖母曰く、汝既に父に別れ又母に別る、汝に兄弟あるか、無し。汝に頼りにする程の親戚あるか、無し。而して我斯の如く老いぬ、噫、哀れの孤兒よ、我若し逝かば汝は誰が縁を頼みとするぞ、あゝ、不運なる孤兒よと我只泣くのみ、然れど又祖母を慰めて云ひぬ、

父母に別れしは是非も候はず、今は只祖母樣をこそ頼りにす、今日よりは御傍に在りて、御介抱も出來る事故何事も御養生を第一となし給ひて、二人樂しく暮らし申すべし、吾が行く末を思ひ煩ひたまへども、我には親しき友もあり、吾心だに正しくば吾世總べて同胞の如くにも候と覺ゆる、頼りなしとてさのみ嘆き給ひそと、祖母は首肯き給ひたれども、猶老の涙は堰き止むる由も無かりき、想ふに祖母は我を見て嬉しとも悲しともあらゆる感懷の一時に溢れしならん。

* * * * *

今日正午、船某港に着す、實に寂寥たる港なり。港よりは市街見えず、二三個の問屋らしき家屋山の麓に在り、其外に家無し、二三の漁舟波止場の蔭に眠るか如く泛ぶを見たり、其外に船なし。陸地を見やれば山に山重なりて遠くして煙の如きものと、近くして鮮かなるものと、何れも秋の光充ち渉りて、時に其中腹より靑煙縷の如く立ち昇るを見る、あゝ吾が故山！ 谷の蔭、峰の麓、如何なる人や棲む、笑ふ者は誰ぞ、泣く者は誰ぞ、何故に泣くか、笑ふ所以も聞かまほしく、ありし事情をも委しく知りたし、我も今日よりは御身等の仲間に加はるなりと思ひし時、偏らに懷かしき心地せり。

然り我實に今日よりは御身等の仲間入りするなり、故郷の人々よこの心荒れ、思亂れ、疑惑に血荒る我をも容れよかし。

村田老女は吾が爲めに人力車二輛を世話して、親しく車夫に言ひ含めて我を此家に送りたるなり。車は一條坦道を走りぬ、我は左右を顧み行手を眺めつ、靜かに車上に在りたれども、初めて見る山、河のありふれたる形、初めて見る橋、家のありふれたる樣、總べて意味ありげに我を動かし吾心は例の如き詩の境に入り初めぬ。

* * * * *

嗚呼、怪しきは吾心かな、否、これ吾心の怪しきに非ず。棲み馴れたる土地に在りては、已に周圍の事物に馴れて人は容易に人生の意味を感獲し得るものにあらず、これ吾が經驗せる事實なり。我嘗て千葉地方に旅せる事あり、日暮れて雲も亦迷ふ時、疲れたる足を曳きて漸くに千葉街の街外れに到着して、忽然寂しき田園より人寰に入りたる時、重く家並の上を蔽ふ煙、彼方此方の街頭に明滅する燈火、小兒の叫ぶ聲、犬の吠ゆる聲、豆腐賣りの聲、空車を引きて薄暗き横道に入りし男、軒端に茫然と立つ女、見る物、聞く物總べて吾が旅行の心に觸れし時、これ等のありふれたる光景の如何に強く新らしく人間生活の形を我に示したるぞ。

* * * * *

車山を繞れば眼前に現はれ來りしものは、歷史癖の詩人、詩人的歷史家の夢想に依つて描かれしが如

き古城市なり。堤の上、一列に立ち並びたる老松の色黑く、風轟々と鳴れる樣、直ちに人をして古封建の名殘を感ぜしめたり。

一山の欝々と茂りたるあり、一見して其城山なるを知りぬ、車は馳せて其麓に近きこの家の前に止まりし時、門前に一人の老媼を見たり、即ち吾が祖母樣の待ち焦がれ居たまひしなり。(をはり)

「戀を戀ひする人」に就て

獨歩生

「戀を戀ひする人」といふ題で書く積りであつた。といはんよりは、自分の書いて中央公論にかゝげる積りの小説に題して、「戀を戀ひする人」とする事にまで決定て居たのが、遂に出來上がらないで了つた。此事は、自分の非常に遺憾とする處であるが、併し如何する事も出來ない。書く事の能はざるに非ず、書いても書いても遂に思ふやうに、物にならなかつたのである。言葉を添えて言へば、此雜誌の此刊行期日までには、出來上らなかつたのである。であるから、其内必ず此題の我が製作の成就を見て本誌讀者諸君の淸覽に供したいと思ふ。

今は只だ入鄕記の一小編をかゝげて、責をふさぐ。

平政子論

山路愛山

(一) 東洋婦人の性格は歴史にて分る

今の世に人類學とて、土の中より腐りたる骨、瓦のかけなどを掘出し、是は「コロボックル」のもの、是は「アイヌ」のもの、是は日本人種のものなど丶吟味する學問あり。成程面白きことにて、歴史以前の人類は土中の遺器腐骨にて其差別を批判する外はあるべからず。さりながら眞の人類學と云ふべきものは歴史なり。人間の記錄を丁寧に讀めば其癖は善く分り其素性も爭へぬものなり。たとへば今の佛蘭西人の昔は「ゴール」人と云ひたり。羅馬の歴史にて其頃の「ゴール」人の氣質を按ずるに全く今の佛人に似たり。鳶の子が鳶になり、雀の子が雀になるは進化論の原則にて國民とても此理にははづれぬものよ。されば支那人はどんな人種、日本人はどんな人種と云ふことが一番善く分るは歴史の詮義なり。先日も德富氏の話に湖南の風俗は今も慓悍にして氣早なり。是は左傳時代の楚人なればなるべし。楚人が氣早にして戰爭に強く、やゝもすれば敵陣に馳突し、うまく行かねば大將自ら劍を引て自殺するの風あ

りしは左傳に記したり。今の湖南人も之に似たり。血筋は爭へぬものなりとのことなり。我等も同感なり。腐骨や、土器のかけも人類を研究するには妙なるべけれども萬一左樣の詮義のみにて人間の癖を極め盡したりと思ふ人あらば笑止の事也。先日も我等日漢文明異同論と云ふを國民新聞に出したるとき或人類學者冷笑ひて山路も歴史の論ならば格別、人種の論などをするは身の程を知らぬ者なりと云ひたりとてわざ〳〵知らせくれたる人あり。我等の書棄し者を左樣に注意して批判を加へられし其學者の好意は感謝すべけれども愚案はいさゝか相違せり。我等は歴史を見ねば人種の癖は分らぬことゝ存ずるなり。歴史以前の人種ならば成程土中の遺物を詮義せねばならぬことなるべけれども、歴史以後の人種は左樣の詮義よりも歴史の詮義が大切なり。されば我等も物數ならぬ史學ながら猶ほ其專門の上より人種論に立入ることを得べしとは存ずるなり。是は餘談ながら史學と人種論の關係に就て申すなり。それにつきて我等の常に笑止に存ずるは西洋人の亞細亞婦人論なり。西洋人は亞細亞にては婦人は奴隷同樣の取扱を受く。亞細亞の婦人は無智、卑屈にして男の機嫌を取る計なりなどと云へり。西洋人が左樣に言ふは例の旅人の早合點と云ふものにて勘忍もなるべけれども、日本人の耶蘇坊主などが西洋人の口眞似をするは馬鹿馬鹿しきことなり。朝鮮も支那も其實はなか〳〵女の威張る國なり。女房に權のある國なり。五雜俎に女房を恐れし有名の人物を記したる其中には心學の祖、王陽明先生などもあり。さりながら是れは其人々に限らず。内を畏るゝは支那人の癖なり。女房と疊は新しきが善しなどゝ云ふ江戸兒流儀は支那人の夢にも知らぬことなり。朝鮮にて女房に權あることは我等一昨年京城にてくはしく聞きたれど

も此には述べず。先年死なれたる同國の王妃が王と共に政治に口を出し殆んど日月を雙べ懸けて乾坤を照すとも申すべき程の威力ありしも畢竟國風故とは存ずるなり。但し西洋人には耶蘇の教ありて男子の他淫を禁じ表面だけは一夫一婦の制を嚴守し、支那には妾を置くことを許す習なれば此段は亞細亞の女がいくぢの無きやうなれども、支那にても妾を置くものは少數の貴族のみにて平民は大抵一夫一婦なり。されば儒書にも庶人は一夫一婦たるべしとあり。其上妾多き貴族の家にても本妻は次妻以下に對して威力あり、主婦の權中々に強し、殊に士大夫の家に至りては主婦は主人と對等の品格を保ち、諸妾は其支配を受く。されば妻は齊なり、齊しきなり。夫と對等なりと字引にも記したり。左樣の詮義もせず。内幕に入らず。たゞ上面を一寸見たるのみにて亞細亞の女はどうの斯ふのと大膽なる批判をする西洋人の觀察は笑止の至りと云ふべし。くれ〳〵も人種の特質を知らまく思はゞ歷史を詮義せねば分らぬとなり我等が此文にて賴朝の妻女平政子の事を記すも、獨り昔話をして讀む人の頤を解かんとするには非ず。日本の女の癖とてもやはり日本の歷史を知らねば分らぬこと故、日本の女の中にて殊に目立たる一人物を捕へて横からも竪からも、其人と爲りを批判し、日本の女は如何なるものなりやと云ふ問題の一端を解釋せんが爲めなり。高き山も其根は平地に在り。日本の女が奮發すれば何處まで往けると云ふ詮義は日本の名高かりし女性を研究するに如くは無し。

（二）　政子の教育

賴朝の妻女平政子は伊豆の豪傑北條四郎時政の長女なり。歷史の詮義には地理の研究が大切の事にて、

我等も政子を論ぜんとするからは實は北條の古跡なりとも見物して、其後に筆を着けたきことゝ思ひたれども、多忙の身はそれもならねば書物の上の想像にてすますなり。伊豆の國三島の驛より南に折れ田方郡の內市ヶ谷村、中原、中島村、間宮、野中、茨木村など云ふ村を過ぐ。此道大凡二里餘なり。それより四日町村、寺家村、中條村の三ヶ村を土俗北條と呼ぶ。中條村の右の方に竹一叢あり。北條時政の住みし所なりと云ふ。我等の問題たる平政子の生れたるは此處なるべし。是れは德川時代の狀況なり。大抵今の三島より修善寺まで行く鐵道の線路に當れば何處かの停車場にて下りたらば近處に必ず其地あらん。好事の人は尋ねらるべし。政子は嘉祿元年六十九歲にて歿したりと吾妻鏡脫漏の卷に見へたるを眞なりとすれば後白河天皇保元二年の誕生なり。然らば父時政二十の時の初子にして此時未來の所天たる賴朝は九歲の少年なりき。扨斯樣の邊土に育ちたる女なれば必ず無敎育のものなるべしと頭から政子の人と爲りを下墨む例の高慢なる現代女學生諸君もあるべけれども、それは誤解なり。政子の父時政は伊豆にては屈指の豪族なり、莊園許多領して一方に雄視し系圖は桓武の御末、鎭守府將軍貞盛より時政に至りて七代の相傳を誇り、祖父時方は伊豆介たり、父時家は從五位に叙し、名家の聲高し。其女子たるもの全く無敎育の田夫野人たるべきや。左樣の道理なきこと固よりなり。或は時政固より伊豆の英雄には相違なけれども畢竟するに、今の世の大地主に過ぎず。德川時代の田舍にては相應の山持、田地持の息女にても目に一丁字なきが多かりき。まして鎌倉時代の昔なり。政子の無敎育のこと勿論なりと物知顏するものもあらん。是亦時世を知らぬ辯論なり。德川時代は大名各一方に割據し、江戶に參勤交代

する外、百姓などは互に境を隔てゝも相交はらざりし習なりしかば大百姓の娘なども井の中の蛙大海を知らざる譬の通り無學文盲のもの多かりしなり。然るに政子の生れたる時代は左樣なるものに非ず。日本國中隨分人の往來繁かりしなり。先づ番役とて田舍武士の時を定めて京都に祗候したることは諸書に記るせり。東國の住人畠山庄司重能。小山田別當有重。宇都宮左衞門朝綱大番役にて在京すと平家物語にもあれば伊豆の住人とて固より此數に漏るべき筈も無ければ時政なども必ず數は上京したることなるべき歟。是れは公けの事なれども私の往來は猶ほ多かりしと見へたり。仔細は其頃京家も武家も莊園と云ふもの諸國に持ちたれば乃貢など取集むる爲めに其筋の人の往來繁かりしならん。是一。台記には賴長が莊園の奥州に在りしに人を遣りて乃貢を催促せしめたることを記るせり。是れ其例なり。又熊野詣、巡禮も其頃は殊に多かりき。先頃九歲の少女、大阪より富士詣したりとて例の新聞紙などにて大騷ぎをしたれども、是れは汽車の便あれば何の造作も無きことなり。汽車もなき政子の時代にも上野國の住人大窪太郎が娘は十三の歲、熊野詣を志すと記されたり。斯樣に旅行の多かりし世には必ず文明の傳播と云ふことはあるものなり。是二つ。其頃は宿々に遊君と云ふもの多かりき。しばらく伊豆に近きもののみを擧ぐるも黃瀨川宿にもあり、足柄山の下なる關の下宿にもあり、大磯にも勿論ありき。海道の往來繁からざらんには斯樣の渡世はなるまじきなり。平家に加賀より京に上ぼりて白拍子をするものありと記したれば浮きたる稼業の女なども京田舍を廻り歩るきける歟。何さま人の往來相應に多かりしと見へ

たり。是れ三。頼朝石橋山に戰敗れしとき時政は相模より山臥の巡路を經て甲斐に赴き。其國の源氏を語らひたり。かく山臥など云ひて役の行者の流を斟むものは諸國の山々に分入りて自ら往來の途を開きたるもあるべし。或は陸奥の童巫の叡山八王寺の社に參人として祈請を凝したるもあり。東國、西國の修行を心掛くる雲水の僧もありし。是も亦自ら文明の普及を助くべきものなり。是れ四。其頃は船の通ひも隨分大膽にて、諸國に行交たり。伊豆の流人を伊勢國阿能ノ津より船にて下し、遠江國天龍灘にて大風に逢ひしと云ふこと盛衰記にも見へたれば日本第一の難所と聞へたる遠江灘も其頃既に舟は通ひけるなり。保元物語には商人船の伊豆大島に通ふ由記したり。されば是れ今の七島なども亦、全く知らぬ郷には非りけめ。殊に西國は船には善く調練し、九州の商人船は鬼界ヶ島に至り硫黄を買ひ、又四月五月には唐船の纜を解き貿易も行はれたり。吾妻鏡に範頼九州より頼朝に献したる品の目録を記したる内に唐錦、唐綾、唐疊、唐莚などあるを見るも時の情を察すべし。されば海路の往來も思の外疎からず。從つて京と田舍の心も早く相通ひける歟。是れ五。殊に驚くべきは其頃の世に馬の多かりしことなり。神社の奉幣に馬を献じ其外祝儀事に馬を贈りしは常の習にて日本紀要に永延二年攝政兼家新たに二條京極の第を造り、公卿以下を會して落成の賀宴を張りし時、源頼光馬三十匹を遣りて賓客に分けたりと記し、吾妻鏡に壽永元年若君誕生の時、源家の家人馬三百餘疋を献じたりと云へるを見るも馬の多かりし事を想ふべし。今も大刀馬代など云ふ詞の殘れるは其頃の世の餘波なり。馬は屈竟なる交通機關にして、極端に其馳驅の力を假りたらんには京より鎌倉に消息するに三日あらば足りなん。さらば馬の多きは是れ

則ち交通機關の完備せるなりとも謂つべし。交通機關の完備せる世になど文明の都にのみとゞこほることのあるべき。田舍も必ず其恩惠を蒙るべき筈なり。是れ六。此六ヶ條の道理に依りて我等は伊豆の北條に育ちたる女なる故政子はきつと無學文盲なりしなるべしと大束ねに極めてかゝるべき道理なしと存ずるものなり。加之我等嘗つて日蓮法師の立正安國論と云ふ書を讀みしに法然の徒、其師の言を模に彫り之を海内に弘め、之を鄕外に翫ぶと記るせり。其頃既に印刷の術あり、印刷物を諸國に廣むることの一端を知りし證據とすべきものなり。されば或は斯樣の板なども諸國に傳はりしか、是れも亦必ず無しと斷ずべからず。所詮政子を以て全く無學なりとするは謂なきことゝなるに似たり。尙ほ政子が敎育ありし女性なりしことの一證あり。即ち吾妻鏡に老湯山、伊豆權現の尼法音は政子の經師なりと記したるのみならず、政子が年老ひたる後麻訶止觀の講釋を聞きたる由をも載せたることなり。經師とは其名の如く經の師なり。政子に經誦むことを敎へたるなるべし。其頃は宗敎の盛んなる世にて、人々經を誦し或は之を寫すを功德としたり。賴朝さへ伊豆に居りし時は毎日勤行怠なしとありて日々經を誦したるのみならず平家を亡ぼすべき素願を立てゝ法華經千部を讀誦すべき由を誓ひたることもあり。(吾妻鏡)保元物語に六條禪門爲義の妻女が三人の幼子を失はるゝことを淸水觀音に向ひ泣きくどきたる文句あり。妾九つの時より月詣でも始め十五になるまでは十八日毎に三十卷の普門品を讀み奉り。其の年より毎月法華經三部を讀み奉りたり云々。其頃の女性が經讀む習ありしこと略ぼ察すべし。經師とは即ち女性の爲めに經讀むことを敎へしものにて、今ならば家庭敎師と云ふべきものならん。かゝるものゝ北條の屋敷

に出入したることを考ふる時は政子は無教育なりとは如何にしても思はれぬことなり。其上天台の止觀と云ふは隨分むづかしき哲學にて、今日の我等さへ讀めば頭のいたくなる程の書なり。其講釋を聞きて分る程の女ならば學問に掛けても心惡き女なり。案ずるに政子の子息鎌倉の右大臣は日本一の歌人にて金槐集の一篇は千古に光れり。是れも政子の庭訓に依れる歟。凡そは政子と云ふ女は其時代の教育に於ては人に劣らぬ程の素養ありしこと全く疑ふべからず。それのみには非ず、政子の育ちたる北條の里を以て無下の邊土なりと思ふも亦誤解なり。第一北條の里は伊豆の國府よりは僅に二里ばかりの處にて、而も其間は平地なり。國府には三島神社あり。神領も相應にある大社にて毎年八月十七日には神事あり、群參下向衢に滿つ。(吾妻鏡)其頃の坊主神主は智識の淵藪なれば本讀みなども多かりけん。さて三島より四里ばかり箱根山を上れば名高き箱根權現なり。此は住侶殊に多く別當と云ふものの威權を揮ひ大名同様の勢あり。東關紀行に朱樓紫殿の雲にかさなれる粧、唐家の驪山宮かと驚かれ、巖室石龕の波に臨める影は錢塘の水心寺と謂つべしとあるにて其時代の盛なりし様子は察すべし。住侶も多く、房舍も立並びけん。是亦學問の一中心とすべし。又伊豆權現と云ふは世俗に伊豆の御山、椰の御山など云ひ熱海の近處に在り。今の里程にて三島より熱海までは六里餘なれば北條よりも其位なるべし。最も其間には山あれども高山にあらず一里餘も步るけば絕頂に達する位なれば、天城山を越へて下田に行くが如き難所に非ず。女の足にても隨分步き兼まじき所なり。此伊豆權現も亦衆徒多き道場なれば是亦文明の一中心なり。されば伊豆の國にて若し文明の化を被るに都合善き所あらば北條の里は則ち其地なりと申すべし。

扨此等の事共を一束にして想像を廻らすに都の在番より歸りたる時政は、京女郎の學問盛んにして漢語を使ひて男をへこますものあり。(今の女性が佛蘭西語など鼻聲にて語り男を烟に卷くものあるが如く、昔の京女郎には漢語を使ひて高慢顏をしたるものあること源氏物語に出てたり。)女ながらも色々の物語作りて作者の名高きものあり。今の時勢にては女なりとて油斷すべからずと息女の政子を教訓したることもあるべく。或は又師壇の契に依り箱根權現、伊豆權現などの住侶、北條の家に往來し、學問の詮義もあり。政子も利口者なれば自然見慣れ聞慣れ學問手習に志し、經師の尼の教訓にて相應の本讀みにはなりしならんと思ふも丸て迹方なき空想なりとは云ふべからざる歟。是れは政子の幼時につきて我等の想像したる所なり。

(三) 初戀

是よりは政子の初戀を記すべし。其前に必ず政子の敎育ある婦人なりしことを讀者に承知してもらひたし。無學文盲の女の戀物語は趣味もなければ勿論詩題にならず。女も男を理解するの力あり。男も女を理解するの力あり。双方相應に智識上の同情ありての戀ならねば語るも物うし。然るに此點に於ては其頃の女は德川時代の女よりも却て近世式なるは面白し。書くにも張合なり。德川時代の女は町家は別問題として士人の家にては眞に三界に家なしと云ふべき氣の毒の境界なりき。則ち女は獨立の財產と云ふものなく、實家に居る時も、嫁に行きたる時も、何時もかゝりうどの姿なり。然るに政子時代の女は左樣のものに非ず。女も親の讓を受けて獨立の地主たることを得たり。或は夫死するときは後家分を貰ひ

て乏しからず暮すものもあり。承久記に後鳥羽院の寵女龜菊に攝州長江倉橋の兩莊を賜はりたること見へたるに依るも女性が獨立して地主たりし世の有樣を察すべし。此習は足利の末まで續きたり。女性に學問あり、獨立の氣象ありしは一は之が爲めなるべし。扨又婚禮の慣習も其頃は却て歐羅巴式なり。妻を娶ることは富くじを引く同樣にて見合の席に双方顏に紅葉をちらしたる計り。それにて直ぐ埒を明け千秋萬歲を契ると云ふやり方は德川時代の式にて政子時代の流儀に非ず。政子時代の式はそれよりは餘程自然の人情に合ふものなり。たとへば男若し見そめたる女房あれば、先づ歌を詠みて心の秘密をほのめかし、數々の玉章を送りて切なる思ひを述ぶ。それにて女の心よはくなれば此處に偕老同穴の契を結ぶ、源氏物語、平家物語の戀何れも同樣なり。四角四面の儒者などは之を見てけしからぬ淫亂の風なりとて歎息するものもありし樣子なれども、斯樣に男女自ら撰ぶからは男の方にも、女の方にも相應の分別をし、行末をも考へ浮とは人に契らず、却て情も深かるべき歟。其上男女斯く自ら撰ぶ時は進化論に云ふ雌雄淘汰の法則にて人に好かれぬ男女の癖は自ら止みやさしき優美の風をも長すべし。日本美文の絶好模範とも申すべき源氏物語も實はかゝる時代の產物なり。かの侍從と云へる宮女が「まつよひの更け行く鐘の聲聞けばかへるあしたのとりはものかは」と云ふ名吟を世に殘し、天下後世をあはれがらせたるも自由戀愛の結果なり。薩摩守忠度或る宮原の女房の許へ通はれけるが、或夜おはしたりけるに、此女房の局に、女客來居て歸らず。小夜もやう〳〵深け行きたり。薩摩守咳へ切れずなりて、軒場にたゝずみ扇を荒くつかはれければ彼女房、何氣なき樣して野もせにすだく蟲の音よと優に口ずさみたれば、

忠度扇を遣ひやめてかへりたり。斯樣なる風流は唯自由戀愛の結果なり。我等とても敢て自由戀愛の提灯を持たんとするには非ずと雖も、朱子學流の密閉主義が日本固有の風儀なりなど云ふエセ國粹家あらんことを恐るゝが爲めに日本にも自由戀愛の時代ありしことを斷り置くものなり。扨政子の時代は斯樣に男女の間の近かりしとして、其初戀の模樣を案ずるに、此處に前兵衛佐源賴朝と云ふものあり。去ぬる平治二年十四歲にて此國に配流せらる。平治物語には蛭小島に流さるゝとあり。箱根より三島に下るものは今も親切なる農夫の鋤を止めて左の方に蛭小島見ゆると告ぐるに逢ふこともあるべし。北條よりも餘程三島の方に近く、下田街道よりはやゝ東に寄りたり。賴朝配流の時は政子未だ六歲の娘なれば双方に戀物語の成立すべき時期に非ず。たゞ此處に一寸斷り置きたきことあり。則ち流人たる賴朝の位置なり。世には流人と云ふ時は德川時代に大島八丈島などに流されし流人の如く思ふものあり。かの關ヶ原の役に西軍の大將たりし宇喜多中納言秀家が八丈島へ流され、あさまし氣なる蜑の苫屋に身を寄せて後は山、前は海、磯に松風、波の音より外は問ふものなく「藻鹽たき、うきめかる身は浦風のとふばかりにやわぶと答へん」と柱に書付けたりなど云ふ後の世の流人と賴朝時代の流人と同樣なりと思ふは歷史を知らぬ人の早合點なり。左樣に懲役人同樣の境界ならば賴朝如何ほどの色男にてもまさかに政子に惚れられまじきなり。吾妻鏡を按ずるに賴朝勅勘を蒙りて流人の身とはなりたれども勿論源家の正統にて累代の家人と稱して竊かに志を通ずるものなきに非ず。門下祗侯の徒も少からず。工藤介光。土肥次郎實平、岡崎四郎義實。同與一義忠。宇佐義三郎助茂。天野遠内遠景加藤次景廉など云ふ伊豆相模の住

人ども經廻の士と稱してしば〳〵安否を訪問したり。就中近江國の住人佐々木源三秀義は平治の時義朝の味方として戰場に兵略を盡くせしが賴朝伊豆に流されし後も舊好を忘れず、平家の權勢に諛はざりし故、相傳の地佐々木の庄を奪はれ、子息を相率ひ姨母の夫秀衡を恃まんとて奧州に赴く途中、相模國に到りしに、澁谷庄司重國と云ふもの秀義の義氣に感じ留置きし間、當國に住する二十年に及び子息定綱、盛綱は常に賴朝の屋敷に伺候せり。又賴朝の乳母比企尼も夫掃部允と共に武藏國比企郡に歸り廿年の間訪問怠りなく。三浦、千葉なども時々消息を通じ、殊に乳母の妹の子散位康信は其身京都に在りながら每度飛脚を飛ばして洛中の仔細を報じたり。此等の記事に依りて按ずるに流人にも似合はぬ贅澤の暮にて屋敷なども威かめしく作りなして住ひたるものと見へたり。賴朝大庭三郎に追はれて土肥の杉山に遁れしとき家義と云ふもの賴朝の念珠を拾ひたり。吾妻鏡に此念珠は武衛日頃持經たまふの間、狩倉邊に於て相模國の輩、多く以て之を見奉りしものなりと記したるに依るも流人ながら狩などにも出て伊豆、相摸を步るき廻はりたるものと思はる。一概に流人と云ふ語に泥みて懲役人同樣のものと思はゞ事の眞相を見誤るべし。賴朝と同じ頃に伊豆國山木の鄕に散位平兼隆と云ふものありき。吾妻鏡に平兼隆は伊豆の國の流人なり。父和泉守信兼の訴に依りて當國に配せらる。漸く年序を經るの後平相國禪門の權を假りて威を郡鄕に輝かす。是れ本自ら平家一流氏族たるに依りてなりとあり。流人と云ふものゝ如何なるものなりしか是にも察すべし。我等は是より愈政子の戀物語に移らん。賴朝は隨分好色の男にて密通の女も多かりし故政子と契りしが彼れの初戀なるべきや否やは疑問なり。源平盛衰記、曾我物語などには賴

朝始め伊東祐親の家に居て其女に通じ子を生ませけるを祐親平家の聞へを憚り、其子を水に沈め、女を江間小二郎に嫁し、あまつさへ頼朝を殺さんとしたりしかば頼朝伊東に居たゝまれず。北條に遁れて時政を恃みたり。政子の頼朝と契りたるは其後の事なりと記したり。二書ともに小說野乘の類にて深く信ずるには足らぬ書ながら吾妻鏡にも安元元年伊東祐親法師、武衞を誅し奉らんと欲しけるに、祐親の子九郎此事を聞き竊に告げ申す間走湯山に遁れ玉ふと記したり。此時頼朝二十七歲、女さはぎの有りそうなる年頃なれば伊東の女の事、或は事實なるやも知るべからず。舊幕時代には伊豆の東海岸、和田村、新井村、湯川村、松原村、鎌田村、竹內村、岡村などの總名を伊東と云ふ。天城山の山脈西より迫り、狹長き海岸の地にして熱海より五里ばかり南なり。鎌田村白坂と云ふ山の麓に祐親の屋敷あとてあり。溫泉場は和田村に近し。溫泉場より南に日暮しの森、音無の杜とあり。杜の後の小川をナラズノ瀨と云ふ。頼朝卿伊東祐親の女に通ひし處なりと土人は今も語るなり。せいの低き大きな頭の色男が戀に身をやつして妹がり通ひし風情を想像じたらば誰れか抱腹絕倒せざらんや。英雄と雖も左樣の弱點を考ふる時は並の人間なり。伊東にての騷ぎを頼朝二十七歲、政子十九歲の時の事とし頼朝と政子と契りたるは其事ありし後とすれば曾我物語などに兩人戀の關係は頼朝二十九歲、政子二十一歲の時に始まりたりと記したるは時日も合ふやうなり。さらば双方共に蕾の花などゝ云ふ年齡に非ず。戀には寧ろ熟し過ぎたる位の年なり。さりながら或はそうでも無く、もつと早き戀中なりしも知るべからず。仔細は頼朝の長女大姬と云ふが木曾義仲の子義高の妻となり。義高頼朝に殺されしとき大姬愁傷して病を得、政子も大

きに心配したること吾妻鏡元暦元年の條に在り。其文を虚心にて讀めば大姫はどうしても政子の實子としか思はれぬなり。政子果して大姫の實母ならば頼朝政子兩人の契はもつと若き時であるべき道理なり。即ち假に大姫愁傷の年を以て十三歳とする時は其誕生は承安四年にして政子十六歳の時なり。即ち何程遲く考へても頼朝政子の初契は頼朝二十三歳、政子十五歳の時としか思はれぬなり。其頃は上流社會の早婚時代にて女も早くなま心つきたる樣子なれば（平家物語、源平盛衰記に其證多し）大姫が十三歳にて婿を戀ひて精神的情死を遂げたるも、政子が十五歳にて頼朝と契りたるも怪むに足らず。さらば盛衰記、曾我物語の記事は全く根も無き小説にして安元元年、伊東が頼朝を殺さんとしたるは別の仔細あることなるべしとも思はる。尤も我等は此所に左樣なる面倒なる考證を爲さんとするに非れば、兩説のどちらにても宜しきことながら浮か／＼書を讀む人を驚かして斯樣なる處から面白き事實も發見するものなりと云ふことの證據を示したるまでなり。そこで頼朝政子兩人の戀中は男二十三歳、女十五歳にて双方共に恥かしき初戀なりしとするも、或は男二十九歳、女二十一歳、思慮分別の相應につきたる時の契なりとするも、そは讀者の判斷に任すべけれども我等はどちらかと云へば頼朝も初戀政子も勿論顏に紅葉の初戀なりとする方が事實に近かるべしと想像するなり。そは頼朝の亭が始終蛭小島に在りたりとすれば伊東は中々路遠く、而も往來甚だ難儀なり。蛭ヶ小島より熱海まで山越六里、熱海より伊東まで海岸傳ひ五里半とすれば合計十一里半の道のりなり。或は蛭ヶ小島より北條まで一里半それより今の大仁八幡に掛り、是れも嶮岨の山越して伊東に出づる道はあれどもそれも十里に近し。其頃は男より女の方

へ通ひたる世の中なり。惚れて通へば千里も一里と云ふ俗諺あれどもさりとては餘り草臥れる戀路のやうなり。小說の作者は時間と空間の論は無用にて何事も面白、可笑しく、人の心を動かす樣に書けば善い譯故それにても不都合ならざるべけれども、すこし常識にはづれたる沙汰とは存ずるなり。それ故に我等は男二十三、女十五、水の出ばなの初戀なるべしとして置くが善しと存ずるなり。此戀が其頃の風俗にて自由の契なりしは勿論なり。吾妻鏡に政子自身の惚氣を記して「君(賴朝を指す)流人となり。豆州におはし給ひし頃、吾に於て芳契ありと雖も、北條殿(時政を指す)時宜を怖れ潜かに引き籠められしを、猶ほ君に和順し、暗夜に迷ひ、深雨を凌ぎ君の所に至る」とあり。隨分御安くない戀中と申すべし。其頃普通の手つゞきより察するに先づ賴朝より艶書などを送り、それより政子の心解け初めたるならん。かくて兩人の戀漸く募りし時時政も覺り、世が世ならば勿論、親が取持ちても善きほどの婿なれども平家世盛りの今日なり。それを流人の源氏と緣結びたりとありては祟も恐しとて親の威光にて生木をさかんとし政子を取籠めて賴朝に會はせまじとしたるなるべし。時政とて始めより賴朝を奇貨として天下の執權たらんなどゝ云ふ野心ありしに非るべければ左樣に思ひしも尤なり。然るに政子は親の威光に恐れず。此人ならでは一生を託すべからずと決心し、暗夜に迷ひ、深雨を凌ぎ欠落して賴朝の屋敷ににげ込み、どうしても夫婦にならねば死ぬとても云ひて强情を張りしものと見へたり。是れが其儘にて平家の天下も永く續き、賴朝も一生流人にて終りたらば政子はいたづら娘の標本なり。然るに此色男、一旦風雲に際會して運命を開き六十六國總追捕使、總地頭となり、將軍政治の創業者となりたれば、さ

ては政子は風塵中に英雄を監識したる閨秀中の豪傑なりと云ふことにはなつたりけり。最も英雄と云ふものは女に惚れられそうなものなり。女にても男にても、えらき奴は自然に監識の才あり。恰も犬の鼻にて主人の足跡をかぎ分るが如く英雄を監識するものなり。左樣なる分別ある女ならば英雄に惚れるは當然なり。木下藤吉郎も未だ微祿なりし時淺野の娘にほれられたり。大雅堂も貧書生なりしとき善き妻を得たり。女の中には隨分かはり者ありて眼光早く英雄の心髓を射るものなきに非ず。無學文盲の町家の浮氣娘ならば役者に惚れることもあるべし。眞に思慮分別ある女ならば秀吉、賴朝などの人物はたしかに其戀を献ぐるに足るべきものなり。畢竟誰れにも惚れられず、誰れにも好かれぬ奴は氣にはたらきのなき愚物鈍才ならん歟。我等はそれ故に英雄は艶福多き道理なりと思ふ。紫は園にありても隱なし。賴朝は躶體にしても賴朝なれば何處かに貫目もありしならん。それを見拔て一生連添うべしと決心したる政子も恐ろしき女なり。賴朝もかゝる小女の深情に對しては蓋し感謝の念に堪へざりしなるべし。故田口鼎軒君義經は鎌倉殿の前、大名小名の並居る眞中にて靜御前に惚氣を歌はせたる程の艶福家なりと云ひたるが艶福の程度は兄の賴朝も弟の九郎に讓らぬ樣なり。抑も人間を動かすものは戀と功名と慾なり。其中殊に戀は罪のなきものなり。政子のやうな、えらき女に惚られたらば男子の本懷之に過ぎずと云ふべし。左樣なる女に惚られんとせば馬鹿では出來ぬことなり。此點より云へば戀は向上の道なり。感激鼓舞の動機なり。歷史の波も戀より動き始めたるが多し。さりながら當節の戀の如く襟元につく戀。浮氣の戀。露骨の戀、現金の戀は埓も無きものなり。

（四）嫉妬の辯。

頼朝は密通の女少からず。吾妻鏡に記したるもののみを擧ぐるも（一）良橋太郎入道の息女龜の前は顏貌濃かなるのみに非ず心操殊に柔和なるものなり。頼朝未だ豆州に在りし時より昵近したりしが養和元年の春より密通す。頼朝時に年三十三、女は勿論十代の處女なりしなるべし。（二）次には常陸介藤ノ時長の息女。是れは鎌倉に移りたる後殿中に祗候したるを頼朝例の色好みの癖にて密通に及びたるものにて文治元年二月二十六日男子を生みたり。頼朝時に年三十七。（三）丹後内侍。文治二年甘繩の家にて彼女病惱の時頼朝内々訪問すとあれば是れも戀の中なりしは言ふまでもなし。（四）伊達入道念西息女。是れは 大進局とて幕府の官女なり。頼朝之にも密通して子を生ませたり。其頃の頼朝は既に四十を越へたる後と思はるれば若氣の無分別とも云ひ難し。その外吾妻鏡の記者はそれと明かには言はねど怪しき關係のもの猶ほ少からず。即ち（五）葛西三郎清重の妻。是れは治承四年十一月十日頼朝武藏國丸子庄を以て清重に賜ふ。其夜清重の宅に止宿したるに清重妻女をして頼朝の膳を備へしむ。但し妻女なる由を言はず。御給構の爲めに他所より青女を招くの由申したり云々と記したり。猫に鰹節なり。此夜頼朝手を出さずに置きたるや否やは疑問なり。（六）比企藤内朝宗息女。姫の前とて幕府の官女なり。殊に頼朝の意に叶ひ、容顏甚だ美麗なり。權威無双の女房と稱せられき是も何だか知れたもの非ず。其外頼朝の遂げんと欲して遂ざりし戀にて單に意中人だけにて終りしものもあり。則ち（七）新田冠者義重の息女なり。是れは頼朝の兄惡源太義平の後室なり。頼朝數ば艶書を通じたりと雖も承諾せず。天下の總追捕使も此戀だけは心に任か

せざりき。吾妻鏡をざつと見渡したる所にても頼朝のいたづらは此の如し。書物に傳はらぬ戀話は何程ありしや知れず。中々多情の人物なりと申すべし。さりながら此に一事の注意せねばならぬことあり。他なし、此戀が悉く文字通りの密通にして今の藝者狂、妾騒ぎの如く天下晴れての免許ならぬことなり。是亦吾妻鏡の證文歴然たり。則ち龜の前の事につきては頼朝、彼女を伏見冠者廣綱（此男頼朝の幇間にて數ば戀の取持をしたる善くない奴なり）の家に住まはせ時々通ひて樂みたりしを露顯して大騷ぎとなりたりと記し、丹後内侍の所へも潜かに通ひたるなりと記し、時長息女との戀も秘密なりしを事露顯して政子の憤る所となれりと記るせり。歴史を讀むもの之を見て是れは政子の嫉妬甚しく、頼朝も閉口し、色好みながら成るべく内々に立廻はり諸事穩便にしたる故なり。即ち政子の燒餅やきたることを記したるものなりと云ふもの多し。大日本史にも「政子性妬忌、頼朝之を畏憚す」とあれば水戸の史家も同感なるべし。抑も女には燒餅やき少からず。徳川第二世將軍の室崇源院殿の如きも名高き燒餅やきなりと聞へたれば政子が燒餅やきなりとて敢て怪しむに足らず。吾妻鏡の記す所に依れば成程政子のやき方は隨分念の入つたるものなり。しばらく龜の前の事だけを以て例とするも、今ならば必ず新聞紙の三面種なり。則ち政子は頼朝が龜の前を廣綱の宅に隱し置くことを嗅ぎつけ嗔恚を焚し牧三郎宗親と云ふものに命じ、廣綱の宅を破却させたり。今の世に燒餅やきは多けれども亭主の隱くし置く女房の宅を打毀すと云ふ高手的手段に出づるものは少かるべし。而もそれが日本一の武將鎌倉殿の妻女の業なりとすればいやはや沙汰の限とも申すべし。幇間の廣綱も此亂暴なる處置に驚き、辛くしてかの美人を伴ひ大多和

五郎義久の鐙摺の宅に遁れたり。是れは壽永元年十一月十日の事なり。翌十一日は何事もなし。同十二日は頼朝遊輿に事寄せ、わざ〳〵鐙摺まで出掛け（鎌倉逗子の間に鐙摺と云ふ處ありと記臆す。其處ならん）。義久の亭に行き龜の前に逢ふ。多分龜の前より色々の愁歎話あり。所謂梨花一枝春雨を帶ぶる美人の愁容は益す頼朝の心を惱ましたる事ならん。此時頼朝は牧三郎に伴をさせたり。三郎の迷惑察すべし。扨鐙摺に着きて廣綱を召し。三郎と廣綱の兩人を一所に集めて面を合はせさせ、一昨日の騷ぎは全體どうしたものじやと對決に及ばれたり。三郎も此に至りては大に困却せざるを得ず。陳謝舌を卷き、面を泥沙に垂れ、誠にはや恐入て候とてさま〳〵怠狀に及ぶ。さりながら寵女に恥辱を被らせたる當人なれば其位の詫言にては頼朝の鬱憤容易に晴れず。手づから三郎の髻を切りたり。しかし其時も頼朝は政子の燒餅をやきたることを惡口せず。三郎に向ひ汝が御臺所の事を重んじ奉るは最も神妙なり。それを惡しと云ふには非ず。但し常は何事も御臺所の仰に從ふべき筈なれども、かゝる事は内々吾に告げてくれても善さうなものなるに、忽ちに耻辱を與へたるは甚だ奇怪なりと云ひたるのみなり。則ち政子の燒餅をやくは尤なり。汝が政子の命を守りたるも尤なり。しかし斯樣の事は内々知らせてくれても善いじやないかと怨みたる迄なり。然るに三郎は何とも面目なく思ひけるにや其儘逃亡したり。頼朝は其夜鐙摺の家に止宿す。冬の夜長美人の怨語、嬌語を聞きたるならん。此騷動是にて靜まらず。三郎は御臺所の仰を重んじて勤める所を勤めたるのみなるに、それを御勘發ありしは聞えぬことなりとて今度は政子の父時政がおこり出し、俄に豆州に進發したり。諺に云ふ子供の喧嘩に親が出てたるものにて騷は中

々大きくなりたり。されど流石に頼朝なり。妻女に手をついて詫るやうなのろき事はせず。故らに何の構ふものかと云ふ態度を示し、御臺所の御氣色の恐ろしく候へば日頃の御契も是迄と思召し切らせ玉へとて龜の前の辭退するも聞かず。小中太光家の小坪の宅にかこひ置き寵愛日を追つて興盛なりしが、それても餘り政子の機嫌を損じてはならぬこともありと見へ、例の幇間の廣綱を遠江國に配流し、漸く政子の憤を散じ、事落着したり。是は頼朝女騷ぎの一例なれども政子の燒き方の手きびしかりしこと是にても明白なり。さりながら此に一條の疑問あり。吾妻鏡は北條時代に出來たるものにて、作者の心、必しも時世に佞するとにはあらねど自ら北條氏の爲めに忌むこともありしは曲亭馬琴なども論じたり。(質屋の庫と雜著を見よ)。然るに政子の燒餅は隨分ひどきものなるに、吾妻鏡の作者が更に筆に加減を加へず。無遠慮に書き立てたるには仔細あるべし。我等太平記を讀みし時關東の女は一途に男を思込みて嫉妬深しと云ふ文ありしと記臆せり。若しは其頃東國の女は悉く男の愛に執着すること厚く燒餅をやくことは常の習なりしには非る歟。されば政子の嫉妬も吾妻鏡の作者の眼より見るときは東國女の常の習にて、其頃にては敢て恥づべきことに非ず。妻女は必ず相應に燒もちをやくべき筈のものなりとしたることとなれば政子の嫉妬事件をも無遠慮に記したるには非るか。史を論ずるものは史家が心ありて書きたる褒貶よりも無心にて書きたる作者時代の習を察するが大切の事なり。抑も女は嫉妬すべからず。夫が何程多くの情婦を作りても、或は何程多數の妾を持ちても、それは男の働きなりとて美しく、默つて濟ますべし。夫が遊女町に通ふとて出行くときは妻女はいそ〳〵として後から羽織を着せ、巾着には小判を

澤山入れ、につこり笑つて出すべし、それが貞女と申すものなりなどゝ云ふ敎訓は果して日本古代よりの流儀なりや否や、甚だ疑はし。我等などは斯樣なる非嫉妬論は日本にては德川時代以後の產物にて昔は左樣のものに非ず。男女の愛情濃かなれば相應の程度まで嫉妬は許すべきものなりとしたるが、實は日本古代の流義なるべしと信ずるものなり。天正の頃まで行はれし後妻打(ウハナリウチ)などは殺風景のものなれども其頃の人情を知るに足れり。五雜俎に老て後妬婦の功を知ると云へり。女の燒餅は惡るきことのやうなれども、愛情の濃かなるものが男の心の定まらぬを心配するは當然にして、此愛情より出る防禦あればこそ男も身に過つことは少きなり。それは燒餅をやくことは必しも惡事とは云難きことにて我等などは日本の女に今少し燒餅をやかせたく存(ゾン)ずる位なり。東國の女は情濃(ナサケコマヤ)かにして夫の身を思ふこと厚く、燒餅をやく代りに行儀も正しかりしかば從つて男の風俗も宜(ヨロ)しく、さてこそ田舍より京都を制したるなるべけれ。それに戀と云ふものゝ味は露骨ならざる所に在るべし。我等は不粹者にて戀の講釋を爲すべき資格なきものなれども、窃かに戀の興味は「忍ぶれど色に出づる」に在り。「人の知らぬに袖をうるほす」に在りと思へり。妾も天下晴れての妾、情婦も天下晴れての情婦、藝者狂も天下晴れての藝者狂にては犬猫の戀も同樣にて全く獸的なり。人にかくし、世に忍び密かに通ずるならば稍人間らしき所もあり。密通を善しと云ふには非ず。公然にても、秘密にても女狂は宜しきことならねども密通ならば猶ほ妻女の權威も立つことなり。何(イヅ)れにしても政子を嫉妬深き女なりとて譏るは德川時代を以て鎌倉時代を、批判する時代相違の杓子定規と云ふものなり。嫉妬は必しも惡德に非ず。

（五）武士道と敢子。

東國の人氣は昔より格別にて神護景雲三年朝廷警衛の爲め東人を召させ給ひし時の詔にも東人は常に額に箭は立つとも背に箭は立てじといひて君を一心をもて護るものぞとあり。是れは東國は蝦夷との境にて人種の生存競爭激しく戰爭なども多かりし故、自ら健氣の風をも養成したるならん。蝦夷の叛亂聞へずなりし後も天慶には平將門の事あり。元暦には坂丸の事あり。長元には平忠常の事あり、永承康平の間には前九年の役あり。寛治には後三年の役あり。承久には武藏國横山黨の亂あり。其外遠國故王化も及ばざる所多く大名小名の私鬪少からず。人氣自ら上國に殊なり、武士道と云ふものも生じたり。武士道と云ふものは如何なるものぞや。一定の釋義を下すはむづかしきことなれども先づは武士の間に自ら生じたる面目律とも云ふべきものなり。先づ武士道にて第一に禁句とする所は臆病なり。賴朝は石橋山の厄難の時日頃髻の中に隱し置きたる觀音の像を取出し、我首若し大庭等の手に渡らん時、髻中に此本尊あるを見ば。源氏の大將の所爲に似ずとて嘲らるべし。それが口惜しければ斯くは取出し奉るものなりと云へり。（吾妻鏡）、崇德上皇、爲義を白河殿に召させ玉ひし時爲義、昨夜の凶夢を陳べて御味方たるべき仰をいなまんとしたるに使の殿上人、武將の身として夢見、物忌などは餘りに後れたる沙汰に候と云はれしかば爲義實にもとて參殿に及びたり。（保元物語）宗旨も信仰も武士に取りては常の事なり。一旦非常に臨んでは唯何事も避けず、突進するが武士道の極意なり。されば保元の亂に重盛は勅命を蒙つて罷り向ひたるものが敵陣强しとて引き返すべき樣やあるといきまき（保元物語）平治の亂に義朝は義

平の敗軍を見て義平が河より西へ引きつるは家の疵と覺ゆるぞ今は何をか期すべき討死せんのみと云ひて敵陣に馳突したり。(平治物語)臆病は弓箭の疵となるものなれば寧ろ死すとも卑怯の振舞すべからずとは武士道の第一義にして神護景雲の詔に額に箭は立つとも背に箭は立てじと云ふものと同意なり。如何なる場合にも逃げたりなど云はれんは口惜し。侍程の者、一度申さじと思ひ切りしことをたとへば拷問せられたればとて申すべきやふなしと云ふが如く何事も思切つて惡るびれぬを武士の魂とす。(平家物語)。次に其頃の武士道にて宗と重んじたるは志の專一なることなり。尤も大名は草の靡きと云ふ諺は其頃よりあり。(承久綸物語)。强よそうなる方に加擔して所領を安堵するは一般の習なりしかども、さりとて輿論は左樣なる意氣地なきを善しとせしには非ず。主從の義を重んじ志を主人の家に盡すを以て眞の武士の面目とし、殊に主人の盛衰に從つて向背の態度を變ずるを以て醜事としたり。されば源氏に從ふ武士は「源氏は二人の主とることなければ宣旨なりとて得こそ內裏へは參るまじけれ」と云ひしものもあり。「源氏の習ひ、心かはりやあるべき」とて肩を怒らせしものあり。「凡そ武士は二心を耻とす。殊に源氏の習は左樣に候」と力みしものもあり。(平家物語)平家に從ふ武士も忠盛の家の子には主君を辱めらるゝ時は、至尊の御座近くなりとて遠慮すべからず、必ず殿上までも切入らんと決心したるものもあり。(平家物語)平宗淸は賴朝の恩人にて賴朝より關東に來らば善く扶持せんと云送りけれども平家零落の後、賴朝に參向するの條、尤も耻ぢ存じ候と云ひ、直ちに屋島の內府に參り、運命を主家と共にし、(吾妻鏡)齋藤別當實盛は吉につひてあなたへ參り、こなたへ參らんは見苦し。今は源氏の世盛りとなり

たりとも我は平家の味方となりて打死せんとて黒く染めたる白髪首を木曾義仲の士に取らせたり。（平家物語）斯く臆病を惡み、主人に忠志の專一ならんことを宗としたる武士道が其結果として死生を度外に置きたるは當然なり。東國武士が平家を西海に伐ちし時、病身ながら天下の重事なり。座視すべきに非ず。とても死す身ならば戰場に死なんとて出陣したることは吾妻鏡にも見へたり。事あらば最先かけて命を主君に奉らん、弓矢取る身は死すべき處を遁れぬれば中々最期の耻あるなりとて腹掻き切つて死にたるは其頃の武士の習なれば義朝も合戰の場に罷出てゝ何ぞ生命を存ぜんと云へり。（保元物語）されば頼朝が十四歳にして父撃たると聞きながら自害をもせず池の禪尼にすがりてかひなき生命を助かりしを時の人は善くも言はざりしなり。此外其頃の武士道にて殊に著るしき一個條は人々互に功名を競ひたることにて爲朝が白河殿にて我れは親にも連れまじ、兄にも具すまじ、功名不覺も紛れぬ樣に唯一人いかにも强からん方へ差向け給へ、敵たとひ千騎もあり、萬騎もありとも一方は射拂はんずるなりと廣告したるは（保元物語）最も善く武士の氣習を言現はしたるものにして佐々木、梶原の宇治川先陣なども其一例なり。但し弓矢の道と云ひ、武士の道と云ふもの畢竟自然に生じたる武士の面目律にて多くは無意識の間に發達したるものなれば此處までが武士道、此處までが武士道に非ずと、棒抗を立て得べきものに非ず。勿論井上哲次郎の言ひしやうに山家甚五左衛門の著書は武士道の經典なり、それを讀まねば武士道は分らぬものなりと云ふが如き究屈なるものに非ず。先はぱつとしたるものなるが、さりとて其面目律の制裁は政子時代にても中々嚴重にして武士道に外れたるものは武士の間には生きて居られぬ程な

りき。たとへば平治の亂に源氏の士、藤原信賴を見限り、此殿は人に頰を打たれて返事をだにしたまはねば侍の主には叶ひ難しと云ひしが如く（平治物語）大將若し武士道の心得なければ士卒つかず。侍若し名を惜まず卑怯の振舞あれば士林に齒せられざりき。此武士道東國に盛んにして都に流行らず。都は柔弱者の寄合となりし故、天下の勢つひに上輕く、下重くなりて日本未曾有の大改革とはなりたるなり、保元物語に坂東武者の習ひ大將軍の前にては親死に子擊たるゝとも顧みず、彌が上に重つて戰ふとぞ聞くとあり。平家物語に齋藤實盛の詞とて實盛の弓は纔かに十三束を射候。實盛程射候ものは八個國にていくらも候ふ。大矢と申す定の者の十五束に劣りて引くは候はず。弓の强さもしたゝかなる者の五六人して張り候。かやうの精兵等が射候へば鎧の二三領は容易うかけず射透し候とあるも關東の武道盛なるを云ひたるなり。さりながら東國の武士が天下の主人となりたるは獨り武士道の盛んなりしが爲めには非ず。保元以來都に兵革多く京洛の客。往々四方に散じ天下經營の智識、東國の武力と合併したるが故なり。近き世の薩摩の事も之に似たり。薩藩は武道の盛んなる所にして百二都城の健兒は勇氣に於ては天下無比なりしかども、それだけにては天下に功を立つることも成らざりしに、島津齊彬の祖父重豪、隱居して榮翁と稱せし人、薩摩の邊土にて武士の片意氣なるを憂ひ、天下の形勢をも知らしめんとし勉めて上國の風を移せしより、薩藩固有の武士形氣と、上國の知識とは此に相合して薩人始めて眼を天下の形勢に開くに至れり。東國の强さのみにては未だ天下を圖り難し。賴朝も北條、三浦、千葉、小山など云ふ東國武士の力を假りたると共に大江廣元、三好善信など云ふ京洛の客を愛し其經綸の知識を用ひ

たり。武士道も開化せざれば唯强きのみなり。天下の形勢を辨へ知る智慧と武士道との二味が調合して始めて武士道も役に立ちしなり。我等つら〲政子の傳記を按するに此人、女ながらもたしかに時代の絕頂に立ちたるものにて開化したる武士道の標本なり。吾妻鏡を見るに建保六年政子鎌倉より京都に廻はり熊野詣したることを記す。此時政子は六十三歲の高齡なり。先頃日本婦人矯風會會頭矢島カヂ子は七十餘歲にて太平洋を越へ亞米利加に赴きたりとて荆妻などは其元氣の盛んなるに舌を捲き居れども、政子時代に鎌倉よりの熊野詣はそれよりも難儀なる大旅行なり。それを日本に二となき貴女の身にて輕々と出て立ちたること流石は東國育ちの身體强健なるを察するに足れり。それも其筈なり。政子の父時政は七十八まで生きたる頑骨なり。其子なれば左樣あるべき筈なり。さりながら、それよりも猶ほ膽をつぶすべきは其の旅行の目的なり。其頃都には法皇、主上關東の專橫を憤らせ玉ひ內々御謀叛の企てありなど早くも聞へたり。實朝もそれをうき事に思ひ

山はさけ海はあせなん世なりとも
君にふたこゝろわかあらめやも

と讀まれしとぞ。後に承久の役と云ひし大騷ぎは此頃より旣に其兆ありしなり。されば政子の熊野詣も唯信心の爲には非ず。實は都の人心を靜めん爲めの示威運動とも見るべし。六十三の老尼、敵地にひとしき都に入りて關東の爲めに示威運動を試む。賴朝の妻女にして此人あり。鬼の女房に鬼神とも云ふべし。扨京都に立寄りて從三位に叙せられしも參內して恩を謝しまいらせんにもあらず。仙洞より御對面

あるべきの由仰せ下されしと雖も、邊鄙の老尼、龍顏に咫尺すること其益なし、然るべからざるの旨、申し切り、諸寺禮佛の志を抛ち即時下向したり。(吾妻鏡)是れ實に示威運動の大上乘、公家の膽を冷すに餘ありと謂つべし。其後承久の亂になりても一刻も猶豫せず直ちに東兵を西上せしめ、我より先んじて敵の計を敗るべき大計を決せしものは政子にして關東將軍の威嚴を保ちしものは實に尼御臺の御前にて決したる議に依れり。此段は諸書に詳なれば此には云はず。政子の如きは開化せる武士道の化身にして賴朝の事業を大成したる女政治家とも云ふべき歟。關東武士の渴仰尊敬したるも宜なり。日本の女は政治的能力なしなど云ふものは此人あることを知りて其說の過てることを白狀せざるべからず。

(六)佳人成長の地果して如何。

富士の白雪。三島に落ち。三島女郎衆の化粧の水となるとは我等が駿河に住みし時、土人の子と共に歌ひし所なり。政子時代の北條の里は三島に近く風情多き所なりしなるべし。前には箱根眉端に迫り、右には日金いと高く、左の方には遙かに富士の裾野を見る。其頃の富士は煙立ちて風になびき、今とは趣を異にせん。此あたり東北つ風を山にて防ぎ、西は駿河灣の暖流を受けたれば氣候もいと暖かなるべき歟。我等未だ實地を履まねば唯佳人生長の地果して如何と想像するのみなり。狩野川の水は淸く、城山の月は白し。故人見るべからず。人をして哀ましむ。

(完)

次號豫告

本號締切までに確定したる次號の要目左の如し。尙續々依賴中につき、發行の上は蓋し誌界の偉觀たらん。

自殺問題　ドクトル　富士川游
世界語の將來　理學博士　丘淺治郎
非武士道論　戶川秋骨
『見神』及び『自稱神佛』の精神病學觀　醫學博士　吳秀三
獨逸皇帝と社會民主黨　マスター、オブ、アーツ　千葉鑛藏
細長主義と太短主義　法學博士　和田垣謙三
小說「行火」　佐藤紅綠
瞥見佇想錄　村山烏逕
文藝雜考　佐々醒雪

附錄　現時の新體詩の價値（野口米次郎、林田春潮、阪井勝軍、千葉鑛藏、永井一孝、小松玉巖、小島烏水、後藤寅外、吉野臥城、佐々醒雪、大槻文彥、の諸氏、）

中央公論定價表

一冊	金拾五錢
六冊	金八拾五錢
十二冊	金壹圓六十五錢

外に郵税一部一錢宛

●但海外（清國は本邦郵便局所在地を除く）は一部郵税六錢を要す

送金注意

一郵便爲替は受取人指定欄へ必ず弊社町名幷に社名を記し拂渡局所を**東京駒込**と指定せられたし

一弊社は**振替貯金三十四番**（麻田駒之助名義）に加入いたし居り候此規則により御送金の方は登記料貳錢を必ず加えられたく候

一郵券代用の場合は必す壹割増のこと

一前金切の節は帶封に朱書いたすべきに付早速拂込まれたし然らされは其號限にて發送を止むべし

一雜誌の發送を以て領收の證といたすべきに付別に領收證を望まるゝ向は返信料を添えられたし

明治三十九年九月廿七日印刷
明治三十九年十月一日發行　（禁轉載）

發行兼編輯人　武田福松
印刷人　清水金右衛門

發行所（電話下谷九一九）　東京市本郷區駒込西片町十番地　反省社

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

銀製洋盃及木盃



紀念御贈與品若くは御懸賞用洋盃も亦誠實を旨とし御高需に應じ申すべく尚ほ木盃の儀は多年四方の御用達し居り品質の良好なると代價の低廉なるとは御愛顧各位の御確認遊ばさせられ候處に御座候是亦多少とも御注文被下度候

一七圓五十錢也	同徑三寸丸 同目方正味二十五匁付
一金拾圓九拾錢也	同徑三寸五分丸 同目方正味四十匁付
一金拾參圓貳拾錢也	同徑四寸丸 同目方正味五十匁付
一金拾六圓五拾錢也	同徑四寸五分丸 同目方正味六十五匁付
一金貳拾壹圓八拾錢也	同徑五寸丸 同目方九十匁付

三ッ組ノ部

一金拾貳圓六拾錢也	純銀製徑二寸五分丸盃三ッ組無地盃 上等桐箱及袱紗付目方正味卅八匁付
一金拾七圓貳拾錢也	同徑三寸丸同 同目方正味五十五匁付
一金貳拾壹圓八拾錢也	同徑三寸五分丸同 同目方正味八十匁付
一金參拾壹圓也	同徑四寸丸同 同目方正味百卅匁付
一金四拾圓八拾錢也	同徑四寸五分丸同 同目方正味百八十匁付
一金五拾壹圓九拾錢也	同徑五寸丸同 同目方正味二百卅匁付

（定紋彫刻　一個　金壹圓五拾錢）
（文字彫刻　一字　金拾錢
　大字彫刻　一字　金七拾錢）

其他御好に依り彫刻類迅速製作貴命に應じ可申候

貴金屬美術袋物類同裝飾品
貴金屬美術婦人小間物類同裝飾品
金銀時計類同附屬品類

東京市下谷區池之端仲町二十九番地

商玉寶堂

（電話本局 特九六五 一二四四）